

大栄栗源干潟線埋蔵文化財 調査報告書

1 9 9 0

千 葉 県 土 木 部
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

千葉県東総地域は、利根川に流入する幾筋もの小河川と太平洋に流入する栗山川の小支流とによって刻まれた台地が広がっています。この地域は、昔から自然環境に恵まれた地域で小河川沿いの台地上には多くの遺跡が所在しております。

千葉県では道路網の整備の一環として、大栄町所地区から山田町大角を通り、干潟町清和乙地区に至る延長17.2kmの一般県道大栄栗源干潟線（東総有料道路）の建設を計画しました。

そこで、千葉県教育委員会は工事予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、県道路建設課をはじめ関係諸機関と慎重な協議を重ねた結果、やむを得ず事前に発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることになり、昭和59年4月から姉千葉県文化財センターが発掘調査を実施してまいりました。

計10か所の遺跡の調査は昭和62年4月に終了し、清和乙遺跡では旧石器時代から歴史時代までの多くの遺構・遺物が調査され、伊地山金杉遺跡では古墳及び弥生時代の住居跡、伊地山石塔前遺跡では旧石器時代の石器群など多くの貴重な資料をえることができました。ことに、清和乙遺跡では、古墳時代の住居群と石製模造品を多量に含む包含層、歴史時代の住居群と土器などが注目を集めています。これらの調査成果は、当時の人々の生活を復元するうえで貴重な資料になるものと思われまます。

このたび、その調査成果を報告書として刊行する運びとなりました。本書が学術資料としてはもとより、文化財の保護・普及のために広く一般の方々に活用されることを願ってやみません。

終わりに、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、種々御指導いただいた千葉県教育庁文化課をはじめ、県道路建設課、佐原市教育委員会、栗源町教育委員会、山田町教育委員会、干潟町教育委員会、地元関係諸機関各位の御協力に厚くお礼申し上げるとともに、酷暑の中、調査に協力された多くの調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

平成2年3月

財団法人 千葉県文化財センター
理事長 岩 瀬 良 三

凡 例

1. 本書は、千葉県道路建設課による一般県道大栄栗源干満線県単道路改良事業（幹線）に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書で、清和乙遺跡他 9 遺跡を収録している。
2. 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県の委託を受け、千葉県教育委員会の指導のもとに財団法人千葉県文化財センターが行なった。
3. 発掘調査は、昭和59年度から62年度にわたり、調査部長鈴木道之助(59～61年度)、堀部昭夫(62年度)、部長補佐根本弘(59年度)、岡川宏道(60年度)、古内茂(61・62)、班長高橋賢一(59～61年度)、矢戸三男(62年度)の指導のもとに主任技師(主任調査研究員)雨宮龍太郎他の職員が当たった(各担当職員は本文中に明記した)。
4. 整理作業及び報告書の作成作業は、昭和62年度から平成元年度にわたり、調査部長堀部昭夫、部長補佐古内茂(62・63年度)、阪田正一(元年度)、班長矢戸三男(62・63年度)、藤崎芳樹(元年度)の指導のもとに主任技師(調査研究員)雨宮龍太郎(62年度)、太田文雄(63・元年度)が当たった。
5. 本書の執筆は、先土器時代を新田が、伊地山金杉遺跡の古墳出土の鉄器を栗田が担当し、その他の執筆及び編集は太田が行なった。
また、伊地山金杉遺跡出土の人骨については国立科学博物館馬場悠男氏より玉稿をいただいた。記して謝意を表する次第です。
6. 発掘調査から報告書刊行にいたるまで、下記諸機関の御指導、御協力をいただき深く謝意を表する次第です。
千葉県教育庁文化課、千葉県道路建設課、同香取土木事務所、八日市場土木事務所、佐原市教育委員会、栗源町教育委員会、八匠教育委員会

目 次

序文	
凡 例	
序 章	
1 調査に至る経緯	1
2 各遺跡の地理的環境	2
3 調査の概要と調査方法	4
第1章	
第1節 福田藤之沢遺跡	
I 旧石器時代の遺構と遺物	12
II 縄文時代の遺構と遺物	17
III 奈良・平安時代の遺構と遺物	17
IV その他の遺構と遺物	21
第2節 伊地山藤之台遺跡	
I 旧石器時代の遺構と遺物	23
II 縄文時代の遺構と遺物	26
III 古墳時代の遺構と遺物	30
IV 奈良・平安時代の遺構と遺物	32
V 塚・その他の遺構と遺物	36
第3節 伊地山金杉遺跡	
I 旧石器時代の遺構と遺物	41
II 縄文時代の遺構と遺物	42
III 弥生時代の遺構と遺物	46
IV 古墳時代の遺構と遺物	51
V 奈良・平安時代の遺構と遺物	58
VI その他の遺構と遺物	59
第4節 伊地山石塔前遺跡	
I 旧石器時代の遺構と遺物	62
II 縄文時代の遺構と遺物	81
III その他の遺構と遺物	83
第2章	
第1節 助沢遺跡	92

第2節	油田牧跡	94
第3節	はらV遺跡	
I	縄文時代の遺構と遺物	96
II	その他の遺構と遺物	98
第4節	かにはらI遺跡	
I	縄文時代の遺構と遺物	98
II	その他の遺構と遺物	101
第5節	かにはらII遺跡	
I	縄文時代の遺構と遺物	102
II	焼土遺構	103
第3章		
第1節	清和乙遺跡	
I	旧石器時代の遺構と遺物	108
II	縄文時代の遺構と遺物	112
III	古墳時代の遺構と遺物	114
IV	奈良・平安時代の遺構と遺物	150
V	その他の遺構と遺物	178
第2節	まとめ	188
付章	伊地山金杉遺跡1号墳出土の人骨について	191

挿図目次

第1図	遺跡位置図 (1/100,000)	1
第2図	グリッド配置図	6
第3図	遺跡位置・地形・遺構配置図 (1/10,000)	7
第4図	福田藤之沢遺跡遺構配置図 (1/1,000)	8
第5図	伊地山藤之台遺跡遺構配置図 (1/1,000)	9
第6図	伊地山金杉遺跡遺構配置図 (1/1,000)	10
第7図	伊地山石塔前遺跡遺構配置図 (1/1,000)	11
第8図	各遺跡基本層序図	11
第9図	第1ブロック器種別分布図 (1/80)	13
第10図	第1ブロック固体別資料分布図 (1/80)	14
第11図	第1ブロック出土石器実測図 (2/3)	15

第12図	背面構成類型図	15
第13図	グリッド出土縄文土器拓影図 (1/3)	18
第14図	001平面・土器実測図 (1/80・1/4)	19
第15図	003・004平面・土器実測図 (1/80・1/4)	20
第16図	002・005・006平面図 (1/80)	22
第17図	第1ブロック土器出土状況図 (1/80)	24
第18図	第1ブロック (1~4)・グリッド出土土器実測図 (2/3)	25
第19図	006・010平面図 (1/80)	26
第20図	グリッド出土縄文土器拓影図 その1 (2/3)	28
第21図	グリッド出土縄文土器拓影図 その2 (2/3)	29
第22図	009平面・出土状況・土器実測図 (1/80・1/4)	31
第23図	005平面・カマド実測図 (1/80/1・40)	32
第24図	005出土土器実測図 (1/4)	33
第25図	グリッド出土土器実測図 (1/4)	35
第26図	塚1~3実測図 (1/80)	37
第27図	塚4実測図 (1/80)	39
第28図	008平面図 (1/160)	40
第29図	土器出土状況・土器実測図 (1/80・2/3)	41
第30図	グリッド出土縄文土器拓影図 (1/3)	43
第31図	土製品・土器実測図 (1/2・1/3)	45
第32図	土器実測図 (2/3)	46
第33図	011平面・土器実測・拓影図 (1/80・1/3・1/4)	47
第34図	012平面・土器拓影図 (1/80・1/3)	48
第35図	014平面・土器拓影図 (1/80・1/3)	49
第36図	グリッド出土弥生土器実測・拓影図 (1/4・1/3)	50
第37図	1号墳実測図 (1/160)	53
第38図	1号墳石棺掘り方断面・遺物出土状況図 (1/80)	55
第39図	1号墳石棺実測図 (1/80)	56
第40図	1号墳出土鉄器実測図 (1/3)	57
第41図	008平面・土器実測図 (1/80・1/4)	59
第42図	塚1実測図 (1/100)	60
第43図	001・002平面図 (1/160・1/80)	61
第44図	003~007・009・010平面図 (1/80)	63

第 45 図	013平面・土器拓影図 (1/80・1/3)	64
第 46 図	第 1 ブロック器種別分布図 (1/60)	67
第 47 図	第 1 ブロック石器実測図 (2/3)	68
第 48 図	第 2・第 3 ブロック器種別分布図 (1/60)	70
第 49 図	第 2 ブロック石器実測図 (2/3)	71
第 50 図	第 3 ブロック石器実測図 (2/3)	72
第 51 図	第 4 ブロック石器出土状況図 (1/40)	74
第 52 図	第 4 ブロック石器実測図 (2/3)	75
第 53 図	第 4 ブロック接合資料	77
第 54 図	第 4 ブロック接合資料	78
第 55 図	第 4 ブロック接合資料	80
第 56 図	グリッド出土石器実測図 (2/3)	81
第 57 図	003・004平面図 (1/80)	82
第 58 図	001・002平面図 (1/160)	84
第 59 図	遺跡位置・地形・グリッド配置図 (1/10,000)	85
第 60 図	遺跡位置・地形・グリッド配置図 (1/10,000)	86
第 61 図	助沢遺跡遺構配置図 (1/1,000)	87
第 62 図	はら V 遺跡遺構配置図 (1/1,000)	89
第 63 図	かにはら I 遺跡遺構配置図 (1/1,000)	90
第 64 図	かにはら II 遺跡遺構配置図 (1/1,000)	91
第 65 図	M-001~003平面図 (1/80)	93
第 66 図	焼土遺構平面図 (1/80)	94
第 67 図	野馬土手模式図	94
第 68 図	野馬土手平面・断面図 (1/160・1/80)	95
第 69 図	グリッド出土縄文土器拓影図 (1/3)	96
第 70 図	M-001・002平面図 (1/160)	97
第 71 図	グリッド出土縄文土器拓影図 (1/3)	99
第 72 図	P-001~003・005・007・009平面図 (1/80)	100
第 73 図	P-004・008平面図 (1/80)	101
第 74 図	グリッド出土縄文土器拓影・石器実測図 (1/3・2/3)	103
第 75 図	清和乙遺跡遺構配置図 (1/400)	105
第 76 図	清和乙遺跡地形・グリッド配置図 (1/10,000)	107
第 77 図	第 1 ブロック石器実測図 (2/3)	108

第78図	第1ブロック遺物出土状況図 (1/80)	109
第79図	第2ブロック石器実測図 (2/3)	111
第80図	第3ブロック遺物分布図 (1/80)	113
第81図	グリッド出土縄文土器拓影・石器実測図 (1/3・2/3)	113
第82図	G I-001平面・カマド実測図 (1/80・1/40)	115
第83図	G I-001出土土器実測図 (1/4)	115
第84図	G I-004・005平面図 (1/80)	117
第85図	G I-004・005カマド実測図 (1/40)	118
第86図	G I-004・005出土土器実測図 (1/4)	119
第87図	G I-009平面図 (1/80)	120
第88図	G I-011平面図 (1/80)	121
第89図	G I-011出土土器実測図 (1/4)	122
第90図	G I-018平面・カマド実測図 (1/80・1/40)	124
第91図	G I-018出土土器実測図 (1/4)	125
第92図	G I-019平面図 (1/80)	126
第93図	F I-002平面・出土土器実測図 (1/80・1/40)	127
第94図	F I-004平面・出土土器実測図 (1/80・1/40)	129
第95図	F II-001平面図・出土土器実測図 (1/80・1/4)	129
第96図	E II-001平面・出土土器実測図 (1/80・1/40)	131
第97図	包含層遺物出土状況図 (1/60)	133
第98図	包含層出土土器実測図 (1/4)	135
第99図	確認調査出土石製模造品実測図 (2/3・3/2)	139
第100図	石製模造品実測図その1 (2/3)	141
第101図	石製模造品実測図その2 (2/3)	142
第102図	石製模造品実測図その3 (2/3)	143
第103図	石製模造品実測図その4 (2/3)	144
第104図	白玉実測図 (1/1)	145
第105図	白玉計測分布図	146
第106図	G I 002平面・カマド・出土土器実測図 (1/80・1/40・1/4)	151
第107図	G I-003A・B平面・出土土器実測図 (1/80・1/4)	152
第108図	G I-006平面図 (1/80)	153
第109図	G I-007平面・カマド実測図 (1/80・1/40)	155
第110図	G I-007出土土器実測図 (1/4)	156

第111図	G I -008平面・カマド実測図 (1/80・1/40)	158
第112図	G I -008出土土器実測図 (1/4)	159
第113図	G I -010平面・カマド実測図 (1/80・1/40)	161
	G I -013平面・カマド・出土土器実測図 (1/80・1/40・1/4)	161
第114図	G I -014・016平面・カマド実測図 (1/80・1/40)	163
第115図	G I -014・016出土土器実測図 (1/4)	164
第116図	G I -015平面・カマド・出土土器実測図 (1/80・1/40・1/4)	166
第117図	G I -017平面・カマド実測図 (1/80・1/40)	168
第118図	G I -017出土土器実測図 (1/4)	169
第119図	G I -020平面・カマド・出土土器実測図 (1/80・1/40・1/4)	171
第120図	G I -027平面・カマド実測図 (1/80・1/40)	172
第121図	G I -028平面・カマド・出土土器実測図 (1/80・1/40・1/4)	173
第122図	G I -031平面図 (1/40)	174
第123図	F I -001平面・カマド・出土土器実測図 (1/80・1/40・1/4)	175
第124図	F I -005平面・カマド・出土土器実測図 (1/80・1/40・1/4)	176
第125図	グリッド出土遺物実測図 (1/4)	177
第126図	G I -021~023平面・出土土器実測図 (1/160・1/4)	179
第127図	G I -024・F I -007・009平面図 (1/160)	181
第128図	F I -008平面・出土土器実測図 (1/160・1/4)	182
第129図	E II -002・003平面・出土土器実測図 (1/160・1/4)	183
第130図	E II -004平面図 (1/160)	184
第131図	E II -005・006平面図 (1/160)	185
第132図	G I -025・026平面図 (1/40)	185
第133図	G I -029平面図 (1/40)	186
第134図	ビット群平面図 (1/160)	187

表 目 次

表 1	第 1 ブロック出土土器属性表	16	表 5	第 1 ブロック	
表 2	第 1 ブロック関連個体別資料			グリッド出土土器属性表	26
	属性表	17	表 6	009出土土器観察表	31
表 3	001出土土器観察表	21	表 7	005出土土器観察表	34
表 4	003出土土器観察表	21	表 8	グリッド出土土器観察表	35

表9	旧石器時代石器属性表	41	表29	EII-001出土土器観察表	132
表10	グリッド出土石器観察表	46	表30	包含層出土土器観察表	136
表11	008出土土器観察表	59	表31	石製模造品計測表	138
表12	第1文化層器種別組成表	66	表32	石製模造品計測表	146
表13	第1文化層石材別組成表	66	表33	白玉計測表	148
表14	第1ブロック出土石器属性表	69	表34	G I-002出土土器観察表	150
表15	第2ブロック出土石器属性表	71	表35	G I-003A・B出土土器観察表	153
表16	第3ブロック出土石器属性表	72	表36	G I-007出土土器観察表	154
表17	第4ブロック出土石器属性表	76	表37	G I-008出土土器観察表	157
表18	グリッド出土石器属性表	81	表38	G I-013出土土器観察表	162
表19	第1ブロック出土石器属性表	108	表39	G I-014出土土器観察表	164
表20	第2ブロック出土石器属性表	110	表40	G I-016出土土器観察表	165
表21	G I-001出土土器観察表	115	表41	G I-015出土土器観察表	167
表22	G I-004出土土器観察表	117	表42	G I-017出土土器観察表	169
表23	G I-005出土土器観察表	117	表43	G I-020出土土器観察表	170
表24	G I-011出土土器観察表	123	表44	G I-028出土土器観察表	174
表25	G I-018出土土器観察表	125	表45	グリッド出土土器観察表	178
表26	F I-002出土土器観察表	128	表46	G I-021出土土器観察表	180
表27	F I-004出土土器観察表	128	表47	F I-008出土土器観察表	181
表28	F II-001出土土器観察表	130	表48	E II-002出土土器観察表	184

図版目次

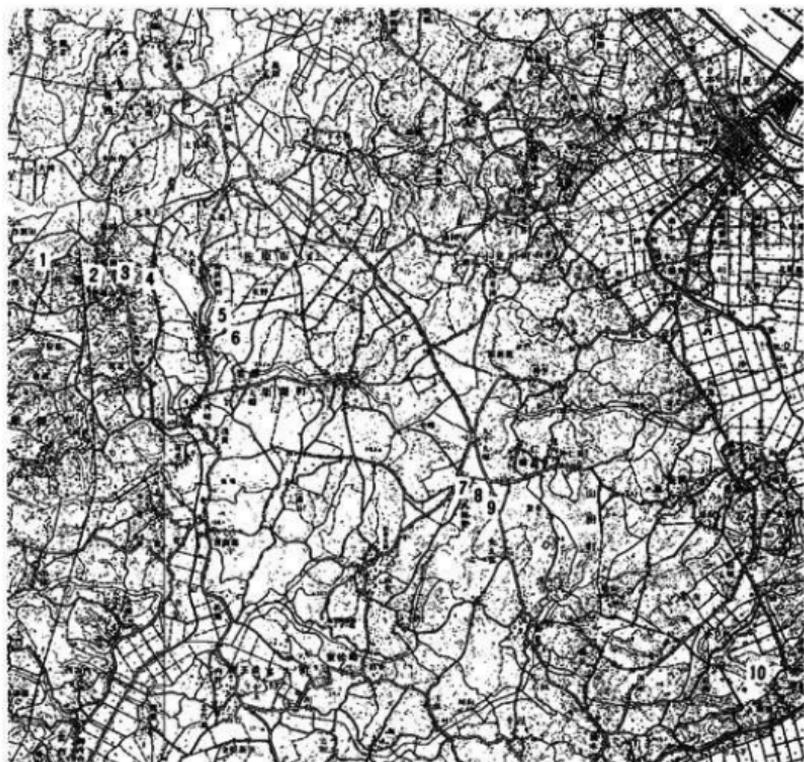
図版1	福田藤之沢遺跡近景 旧石器出土 状況	図版7	伊地山金杉遺跡近景 先土器出土 状況
図版2	001全景 001カマド内遺物出土状 況	図版8	014全景 011全景
図版3	004全景 003全景	図版9	008全景 1号墳近景
図版4	伊地山藤之台遺跡近景 塚1～3 近景	図版10	石棺検出状況 石棺内蓋石崩落状 況・石棺掘り上がり
図版5	塚4近景 塚1～3周溝掘り上が り	図版11	人骨出土状況(石棺外) 人骨出 土状況(石棺内)
図版6	005全景 009遺物出土状況	図版12	主体部掘り方 周溝全景

- 図版13 伊地山石塔前遺跡近景 旧石器出土状況 (第1ブロック)
- 図版14 旧石器出土状況 (第2ブロック)
旧石器出土状況 (第3ブロック)
- 図版15 003全景 004全景
- 図版16 001全景 002全景
- 図版17 福田籾之沢遺跡旧石器・縄文土器・土師器
- 図版18 伊地山藤之台遺跡縄文土器
- 図版19 // 009出土遺物
- 図版20 // 005出土遺物
- 図版21 // グリッド出土遺物
- 図版22 伊地山金杉遺跡縄文土器・土製品・石器
- 図版23 011・012・グリッド出土土器
- 図版24 伊地山石塔前遺跡旧石器
- 図版25 // 旧石器
- 図版26 // 旧石器
- 図版27 // 旧石器
- 図版28 助沢遺跡遠景 M-003全景
- 図版29 油田牧跡近景 はらV遺跡近景
- 図版30 M-001・002全景 かにらはらI遺跡近景
- 図版31 P-2全景 かにらはらII遺跡焼土遺構全景
- 図版32 清和乙遺跡航空写真 清和乙遺跡航空写真
- 図版33 旧石器第1ブロック出土状況 旧石器第3ブロック出土状況
- 図版34 EII-001全景 FII-008・FII-004全景
- 図版35 GI-002全景 GI-004全景
- 図版36 GI-005全景 GI-007全景
- 図版37 GI-008全景 GI-008カマド内遺物出土状況 (1)・(2)
- 図版38 GI-011全景 GI-013全景
- 図版39 GI-015全景 GI-018全景
- 図版40 GI-020全景 GI-028全景
- 図版41 GI-021全景 包含層遺物出土状況
- 図版42 EII-001・FI-002・GI-011出土遺物
- 図版43 GI-011・FI-008・包含層出土遺物
- 図版44 包含層出土遺物
- 図版45 GI-004・GI-018・FI-001出土遺物
- 図版46 GI-002・GI-017・GI-028・GI-007出土遺物
- 図版47 GI-016・GI-008出土遺物
- 図版48 GI-008・GI-014出土遺物
- 図版49 GI-020出土遺物
- 図版50 GI-013・GI-015・GI-003A・B出土遺物
- 図版51 石製模造品 (剣形)・(円盤形)
- 図版52 白玉
- 図版53 旧石器・縄文時代石器

序 章

1 調査に至る経緯

千葉県道路建設課は、東総地域及び銚子地域の活性化と、同地域から県庁所在地の千葉市との時間短縮を図るため、国道51号線の大栄町所地区から山田町大角を通過して千漣町清和乙地区までの一般県道大栄栗源千漣線建設を計画した。建設工事に先立ち千葉県教育委員会に工事予定地内における「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会があり、現地踏査を実施したところ、用地内に遺跡の所在が確認されたため、その旨を県道路建設課に回答した。その後、遺跡の取り扱いについて協議を重ねた結果、事業計画の変更が困難であることから、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、当センターが発掘調査を実施することとなった。



1. 福田藩之沢遺跡 2. 伊地山藩之台遺跡 3. 伊地山金杉遺跡 4. 伊地山石塔前遺跡 5. 助沢遺跡
6. 油田牧跡 7. はらV遺跡 8. かにはらI遺跡 9. かにはらII遺跡 10. 清和乙遺跡

第1図 遺跡位置図 (1/100,000)

2 各遺跡の地理的環境

千葉県北西部は銚子岬突端部の愛宕山周辺部に山地地形が形成される他は、段丘面が西に向かって展開し、下位段丘面である標高40m前後の台地が広がる東総台地を形成している。成田市から佐原市南部、小見川町南部、山田町を通る地域は、利根川水系と太平洋に流れ込む小河川の分水嶺となっているが、福田地区から伊地山地区にかけてはその分水嶺をわずかに南下した太平洋に流れ込む栗山川本流の水源地域となり、蕨手状に小支谷が刻まれる小舌状台地が存在する。福田藤之沢遺跡、伊地山藤之台遺跡、伊地山金杉遺跡、伊地山石塔前遺跡はそれらの台地上に占地する。久美上地区を水源とする栗山川支流の地域でも同様の台地を形成し、助沢遺跡、油田牧跡が占地する。また、山田町と栗源町の町境はまさに利根川水系と太平洋側の水系との分水嶺を通る地点で、山田町大角地区には栗山川支流の最深部に所在するはらV遺跡、かにはらI遺跡、かにはらII遺跡が占地している。さらに、千潟町清和地区は九十九里海岸に近接する栗山川東側支流の最深部の台地上に清和乙遺跡が占地している。

それぞれの遺跡の概略の地形は次のとおりである。

福田藤之沢遺跡

福田藤之沢遺跡は佐原市福田字藤之沢511-1他に所在する。

栗山川から枝分かれする小支谷に挟まれた北に延びる台地の中央部に位置し、東側の支谷からさらに浅い谷が台地中央に向かって延びてくるため、台地のくびれ部分にあたる。標高は41m前後、西側の谷部との比高差は約15mである。また、西側の谷からも極めて小規模な谷が路線の南側に向かって入り込むため、台地のくびれた様子を際立たせている。したがって、台地を縦断する路線内でも平端部はさほどなく、せいぜい40m程で西側は急傾斜に、東側は緩やかな傾斜で谷部へと移行していく。

伊地山藤之台遺跡

伊地山藤之台遺跡は佐原市伊地山409他に所在する。

成田市から山田町を通る東総台地の分水嶺をわずかに南下した栗山川水系の水源地域の小舌状台地に位置し、福田藤之沢遺跡の東側台地にあたる。

遺跡付近では、栗山川は北から東にかけて廻り込むように南下し、それに流れ込む小支谷が東側と南西側に刻まれ、その小支谷に挟まれる形で遺跡が立地している。西側の支谷は東側のそれに比べて深くまで侵入して南北に延びるが、東側は遺跡に向かって西から東に向かって刻まれる小さな谷である。また、東側の谷からも極めて小さな谷が入り込み、台地の平坦部にくびれた部分をつくっている。したがって、当遺跡の所在する地点はやせ尾根状の地形を示している。標高は41m前後、谷部との比高差は15m程である。

伊地山金杉遺跡

佐原市伊地山字金杉229-2他に所在する。

栗山川東岸の小支谷に挟まれた舌状台地先端部に位置し、栗山川を隔てた西岸には伊地山藤之台遺跡が所在する。当地は栗山川の東岸に東西に刻まれた小支谷により形成される栗山川に向かって西に延びる舌状の台地で、南北の幅はさほどなく、支谷も屈曲しながらは入り込むため、所々にくびれた部分をつくっている。しかし、舌状台地の先端部、つまり西側については幅が十分あるので平坦部が比較的広く展開している。したがって、路線内の遺跡についても、西側部分については平坦部が広く、中央東側で小さな谷が入るためやや短い平坦部が東側に所在する。標高は38～39m、栗山川沖積地との比高差は12m程である。

伊地山石塔前遺跡

佐原市伊地山字石塔前他に所在する。

栗山川東岸の台地上に位置し、伊地山金杉遺跡の所在する舌状台地の基部、栗山川から東に延びる小支谷の最深部にあたる。この台地は、助沢の部落の所在する栗山川東側の大きな支流と栗山川に挟まれたところにあり、それぞれの河川に向かって小支谷が樹指状に開析しており、中央部には平坦部が広がっている。当遺跡はその台地の西側部分で小支谷の開析される接点に位置しているのである。遺跡の所在する地点は全体に平坦で、標高40m前後、小支谷との比高差は13m程である。

助沢遺跡

香取郡栗源町助沢に所在する。

用地買収の関係で、小さい谷を挟んで2回に分けて調査を行なっている。

栗山川支流東岸の台地上に位置し、伊地山石塔前遺跡の所在する台地から支流を挟んだ東側の台地西縁部に占地している。遺跡は、栗山川支流から急峻な傾斜地を駆け上がった頂上が馬の背状に狭い平坦部をつくっており標高は39m程で、そこから約10m程の深さの谷を隔てて若干西傾斜の平坦部へと続く。遺跡は馬の背状の平坦部（2次調査地点）と浅い谷部を含んだ西側の平坦部（1次調査地点）とに別れる。2次調査地点はそのほとんどが削平されていたため平坦部が広く見えたが、本来はまったくの瘦せ尾根であったようである。1次調査地点の小さな谷に面した西半部は傾斜がきつく、また中央付近には漏れ谷状の凹地がある。東半部は平坦部が広がっている。標高は39m前後である。

畑田牧跡

香取郡栗源町岩部字東野1974-2に所在する。

助沢遺跡とは同一の台地上の南側縁辺部に位置する。主体となる土手は調査区を横切るように南北方向に1条延び、そこからさらに枝分かれしてもう1条が農道に沿って北東方向に延びている。南北に延びる土手は南斜面を駆け下りて、栗山川支流の谷部へと向かい、北東方向に

延びる土手は台地平坦部へと延びている。

はらV遺跡

香取郡山田町大角字はら1802-18他に所在する。

山田町と栗源町の町境にあたり、利根川水系と太平洋側との分水嶺にあたる地域で、栗山川支流の水源地となっている。水源地付近は2本に枝分かれしており、台地を3つに分けているが、その台地上に当遺跡および、かにはらI遺跡、かにはらII遺跡が所在する。

当遺跡は分水嶺に広がる台地上に位置し、東側に栗山川水源の小支谷が刻まれている。標高はおおよそ41mで平坦地が広がっている。東側谷部との比高差は7mである。

かにはらI遺跡

香取郡山田町大角字かぶき堀1730-1他に所在する。

南面する舌状台地の先端部付近に占地し、東から南、西側には谷が入る。路線内はほぼ平坦で、標高はおおよそ41m、谷部との比高差は約7mである。

かにはらII遺跡

香取郡山田町大角字かにはら1649-1に所在する。

調査範囲は台地西半の泉道榑海・佐原線以西の台地上でほぼ平坦地が続いている。標高はおおよそ41mで谷部との比高差は7mを計る。

清和乙遺跡

香取郡干潟町清和乙字軍野141-6他に所在する。

東総台地のうち榑海に面する台地は標高が高く、そこから流れる河川はいったん内陸部を通ったのち九十九里低地へと向かう。当遺跡の所在する地域も栗山川支流の最深部にあたりその支流の開析によりいくつかの台地に分割されている。当遺跡の所在する台地は栗山川支流最深部から2つめの東岸部台地で、調査地は谷津頭にあたる台地部分及び台地北縁部傾斜面にわたっている。台地平坦部を南に下ると500mほどで榑海に面する急傾斜地となり、調査地東端は榑海に向かう斜面と接している。標高は台地頂部で約47mとこの地域では最も高い部類に入る。北側の谷部とは比高差が10mであるが、谷が浅いため北側傾斜面はさほど急ではない。

3 調査の概要と調査方法

(1)各遺跡の調査概要

清和乙遺跡(348-001)は、昭和59年4月10日より9月29日まで調査を実施した。調査対象面積は10,600㎡で10%の確認の結果、5,655㎡の範囲を本調査対象面積とした。その結果、住居跡28軒・土壇3基・溝状遺構13条・土壇群1・先土器ブロック3箇所・古墳時代遺物包含層1箇所を検出した。主体となるものは、古墳時代と奈良・平安時代の集落で、古墳時代の包含層からは石製模造品を多く検出している。(調査担当者 雨宮)

助沢遺跡(346-002)は、2回に分けて調査している。1次調査は昭和60年4月15日より5月16日まで調査対象面積5,016㎡の約10%の確認調査を行ない、同年9月16日より10月26日まで1,040㎡の範囲の本調査を実施した。調査の結果、溝状遺構4条を検出した。2次調査は、昭和62年4月16日より4月28日まで調査対象面積1,343㎡の約10%の確認調査を行い、焼土遺構を2基検出した。ともに、遺物はほとんど出土しなかった。(調査担当者 鈴木 太田)

油田牧跡(346-003)は、昭和60年10月1日より10月26日まで200㎡の範囲で馬土手の調査を実施した。(調査担当者 鈴木)

はらV遺跡(345-001)は、昭和60年6月10日より8月7日まで調査を実施した。調査対象面積の4,550㎡の10%の確認の結果、368㎡の範囲の本調査を実施し、溝状遺構を2条検出した。他に縄文土器を少量出土した。(調査担当者 鈴木)

かにはらI遺跡(345-002)は、昭和60年7月18日より9月30日まで調査を実施した。調査対象面積4,097㎡の10%の確認の結果、696㎡の範囲の本調査を実施し、土壇8基を検出した。遺物は、縄文土器を少量出土しただけである。(調査担当者 鈴木)

かにはらII遺跡(345-003)は、昭和60年5月17日より6月11日まで調査対象面積2,574㎡の10%の確認調査を実施したが、焼土遺構を3基検出しただけである。遺物は、縄文土器を少量出土した。(調査担当者 鈴木)

福田藤之沢遺跡(209-034)は、昭和61年7月14日より10月9日まで調査を実施した。調査対象面積3,400㎡の約20%で確認調査と上層の遺構の調査を実施し、先土器の出土したグリッドを80㎡拡張本調査した。検出した遺構は住居跡1軒・土壇4基・溝状遺構1条・先土器ブロック1個所である。(調査担当者 海老原)

伊地山藤之台遺跡(209-035)は、昭和61年4月8日より5月29日まで調査対象面積4,100㎡の約14%の確認調査を実施し、その結果、1,486㎡と塚4基について本調査の対象とし、同年5月30日より7月11日まで本調査を実施した。調査の結果、塚4基については遺物は検出されなかったが、周溝をめぐらせていることが判明、他に住居跡2軒・土壇2基・先土器ブロック2個所を検出した。遺物は、土師器、縄文土器、先土器時代石器を出土している。(調査担当者 宮郷 海老原)

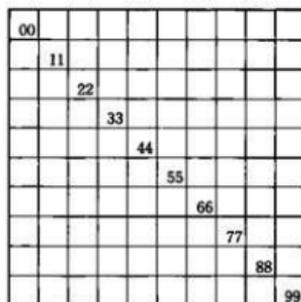
伊地山金杉遺跡(209-036)は、昭和61年10月9日より10月31日および同年12月1日より12月18日まで調査対象面積4,800㎡のうち約15%の確認調査を実施し、その結果、3,180㎡の範囲と古墳1基について本調査の対象とし、昭和61年12月19日より昭和62年2月6日まで本調査を実施した。調査の結果、箱式石室をもつ円墳1基・塚1基・住居跡4軒・土壇7基・溝状遺構3条・先土器ブロック1個所を検出した。古墳の石室はすでに盗掘を受けて遺物は石室外に散乱していた。また、墳丘下部からその周辺には弥生時代の包含層と住居跡を検出している。他に、土師器、縄文土器、先土器時代石器を出土している。(調査担当者 田形 海老原)

伊地山石塔前遺跡(209-037)は、昭和62年2月9日より同年2月20日まで調査対象面積の2,000㎡の約15%の確認調査の結果、土壌・溝状遺構・先土器ブロックを検出し、同年2月23日より3月23日まで1,200㎡の範囲を拡張本調査した。本調査の結果、土壌2基、溝状遺構2条、先土器ブロック4箇所を検出することができた。遺物は、先土器時代石器が中心であった。(調査担当者 田形 海老原)

(2)調査方法

発掘調査は、対象となる発掘区すべてを包含できるように公共座標を基準として40m方眼(清和乙遺跡については100m方眼)の発掘区を設定して大グリッドとし、西から東に向かって順にA・B・C・・・、北から南に向かって順に1・2・3・・・とし、A1・B2と呼称した。さらに、大グリッドを4m(清和乙遺跡については10m)ごとに分割して小グリッドを設け、第2図のように00から99までの番号を付した。

確認調査にあたっては、基本的にグリッド方式により2×4mのグリッドを設定して調査対象面積の約10%について上層の確認を行ない、さらにその半分にあたる2×2mの範囲で調査対象面積の約4%について下層の確認を実施したが、上層の確認では遺跡によっては多少異なった方式を取った。清和乙遺跡では2×4mのグリッドと1m幅のトレンチを併用し、伊地山藤之台遺跡・福田藤之沢遺跡は2m幅のトレンチを併用した。助沢遺跡1次調査北西区においては2m幅のトレンチのみによった。助沢遺跡2次調査においては2×4mのグリッドによる上層の確認と削平されていない部分の下層の確認を行なった。助沢遺跡1次調査南東区・はらV遺跡・かにはらI遺跡・かにはらII遺跡については2×2mのグリッドで上層の確認を行なっている。伊地山金杉遺跡・伊地山石塔前遺跡においては基本的な2×4mのグリッドによる上層の確認を行なっている。



第2図 グリッド配置図

第 1 章

福田藤之沢遺跡

遺跡コード 209-034

伊地山藤之台遺跡

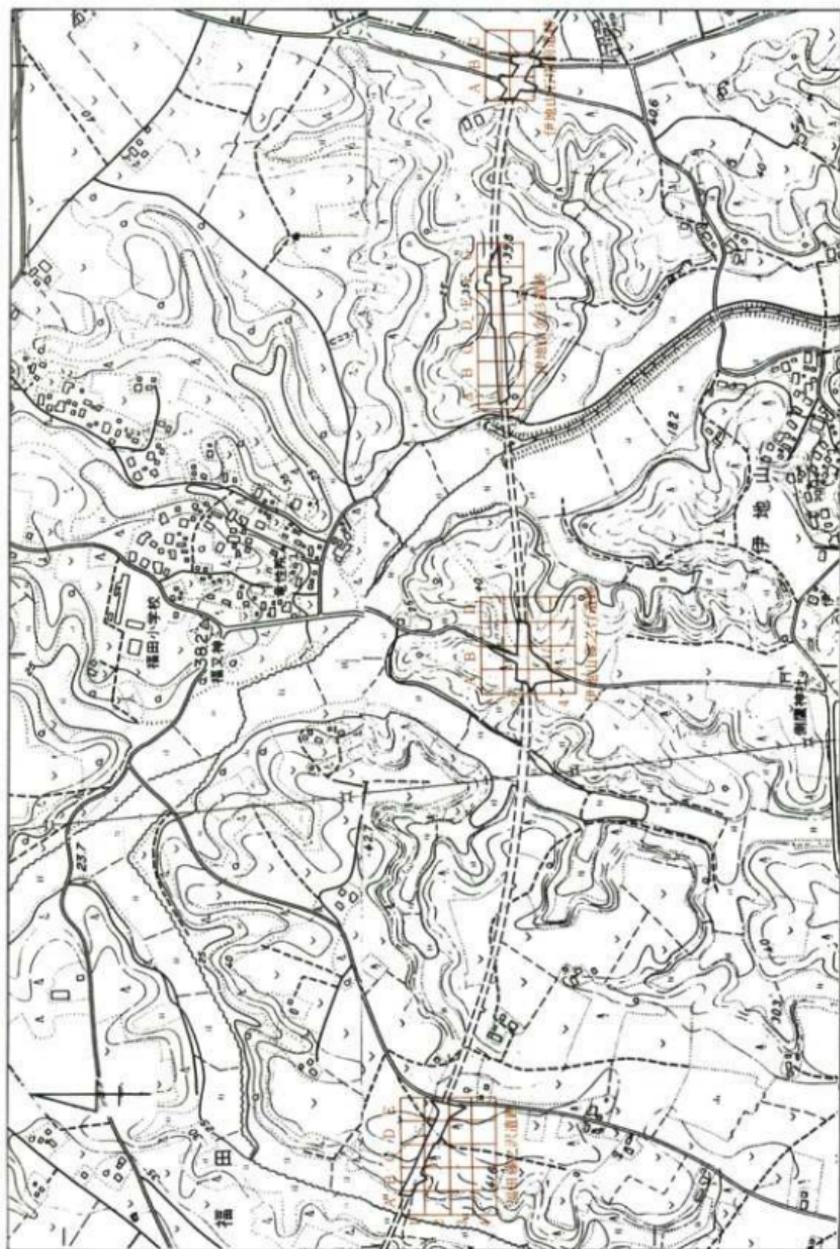
遺跡コード 209-035

伊地山金杉遺跡

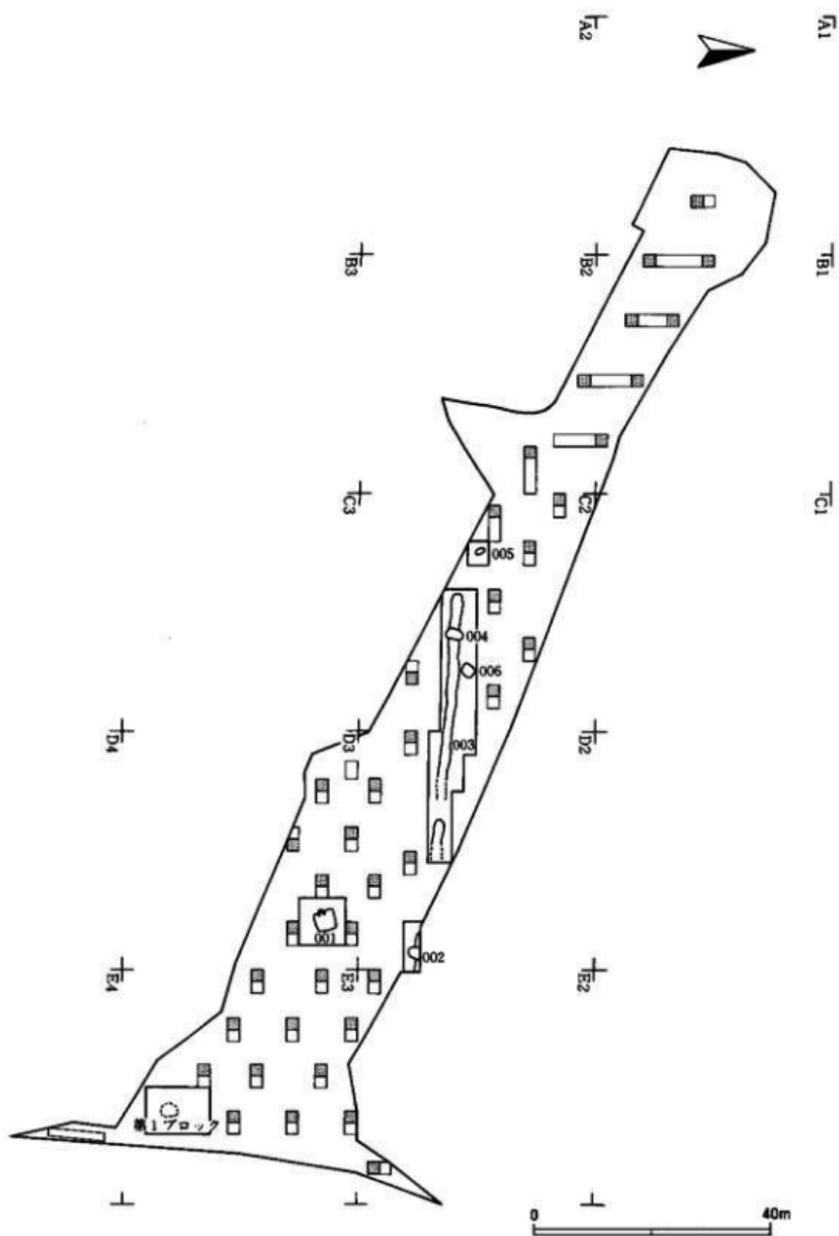
遺跡コード 209-036

伊地山石塔前遺跡

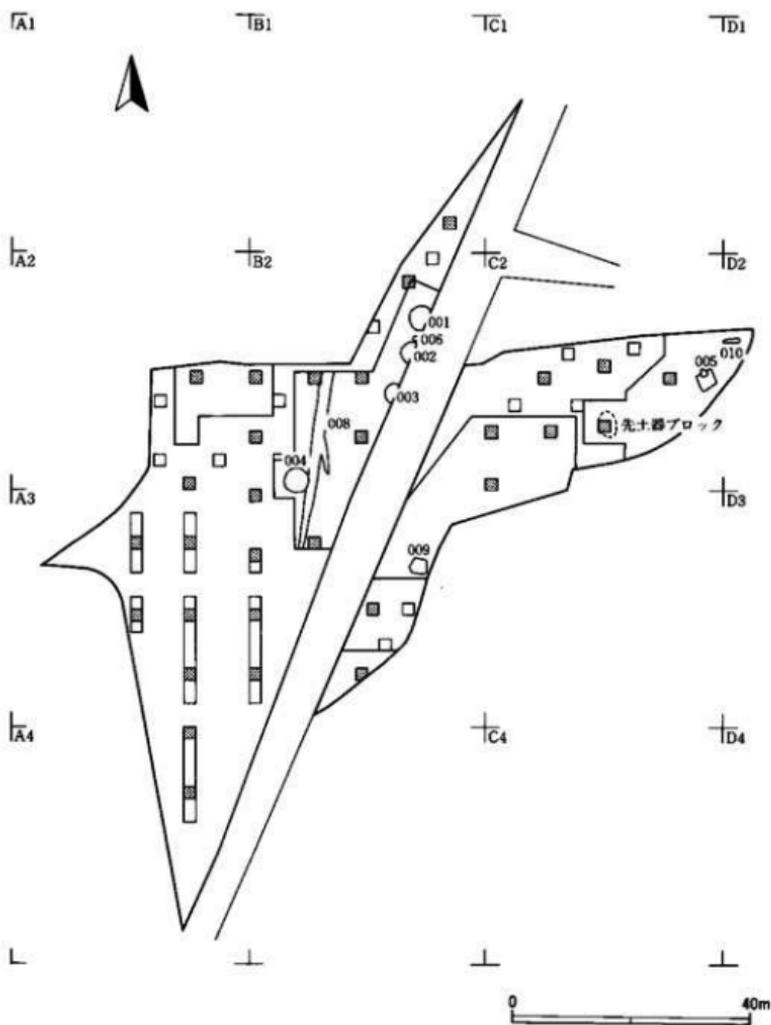
遺跡コード 209-037



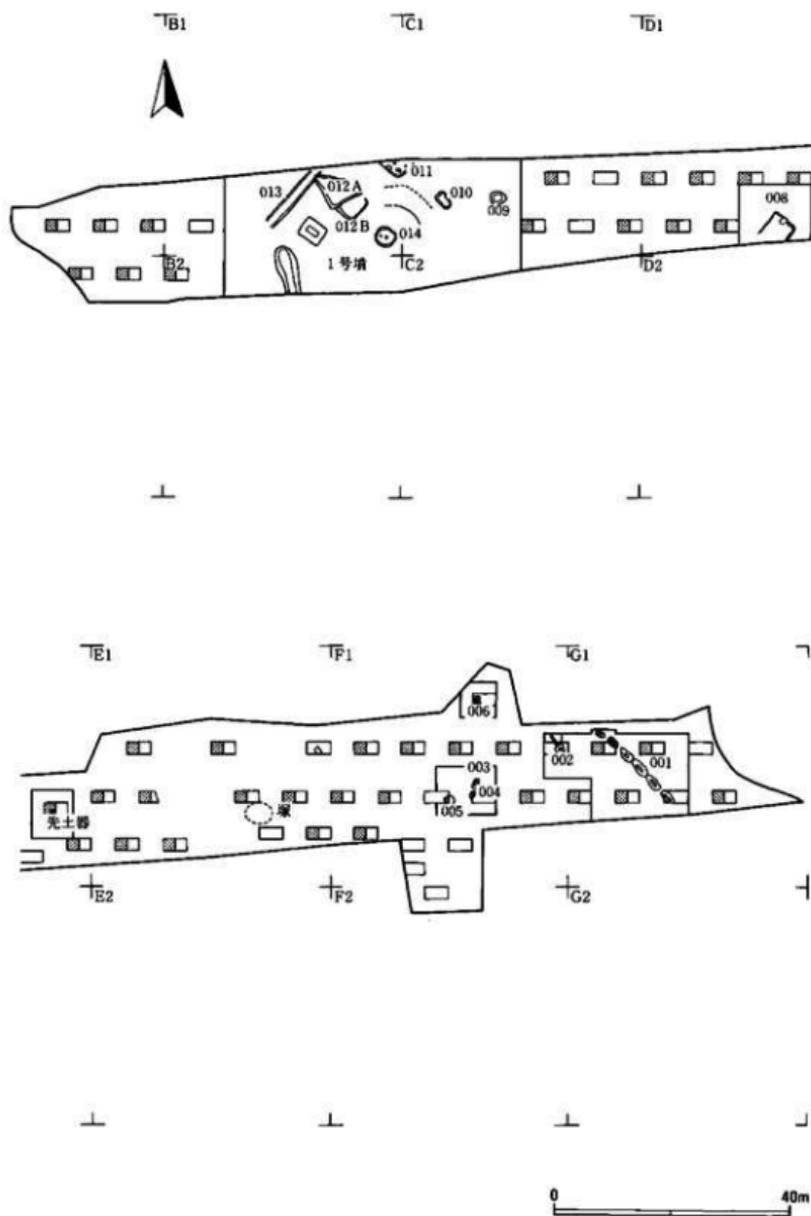
第3図 遺跡位置・地形・グリッド配置図 (1/10,000)



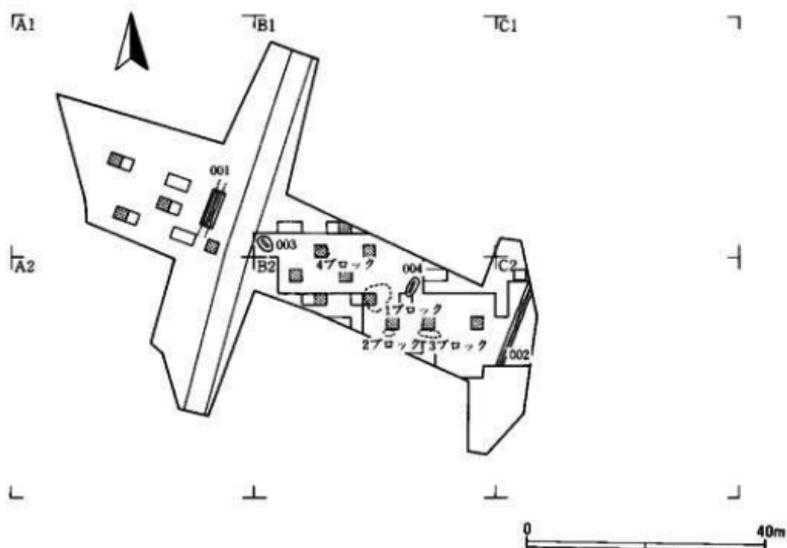
第4図 福田藤之沢遺跡遺構配置図 (1/1,000)



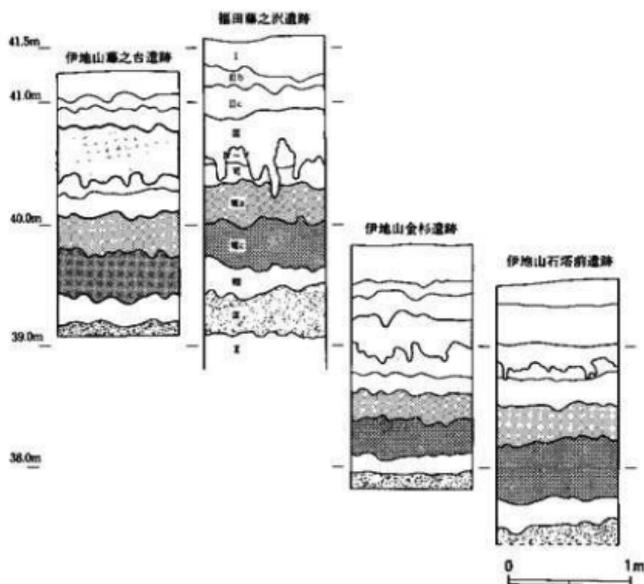
第5図 伊地山蔦之台遺跡遺構配置図 (1/1,000)



第6図 伊地山金杉遺跡遺構配置図 (1/1,000)



第7図 伊地山石塔前遺跡遺構配置図 (1/1,000)



第8図 各遺跡基本層序図

第1節 福田籐之沢遺跡

I. 旧石器時代の遺構と遺物

旧石器時代第1ブロック

1. 層序区分

I層： 黒色土層。表土層。

II a～b層： 暗赤褐色土層。新期テフラ層が上下に動いているため、新期テフラ層がまばらに残存する。

II c層： 黒褐色土層。黒みがかなり強い。

III～IV層： やや暗い色調。やや水っぽくもろい。

IV～V層： IV層下部～V層にあたると思われ、ハードロームがややブロック状にもろくなっている。

VI層： 黄白褐色土層。A T (始良丹沢火山灰) ブロックが黄粉のように明瞭に浮き出て見える。かなり砂っぽくシャリシャリしている。

VII a～c層： 灰褐色土層。VI層～IX層間の堆積が非常に薄く分層不可能。

VIII層： 明灰褐色土層。VII a～c層に比べてやや明るい程度で、VII a～c層との分層が困難。立川ローム最下層である。

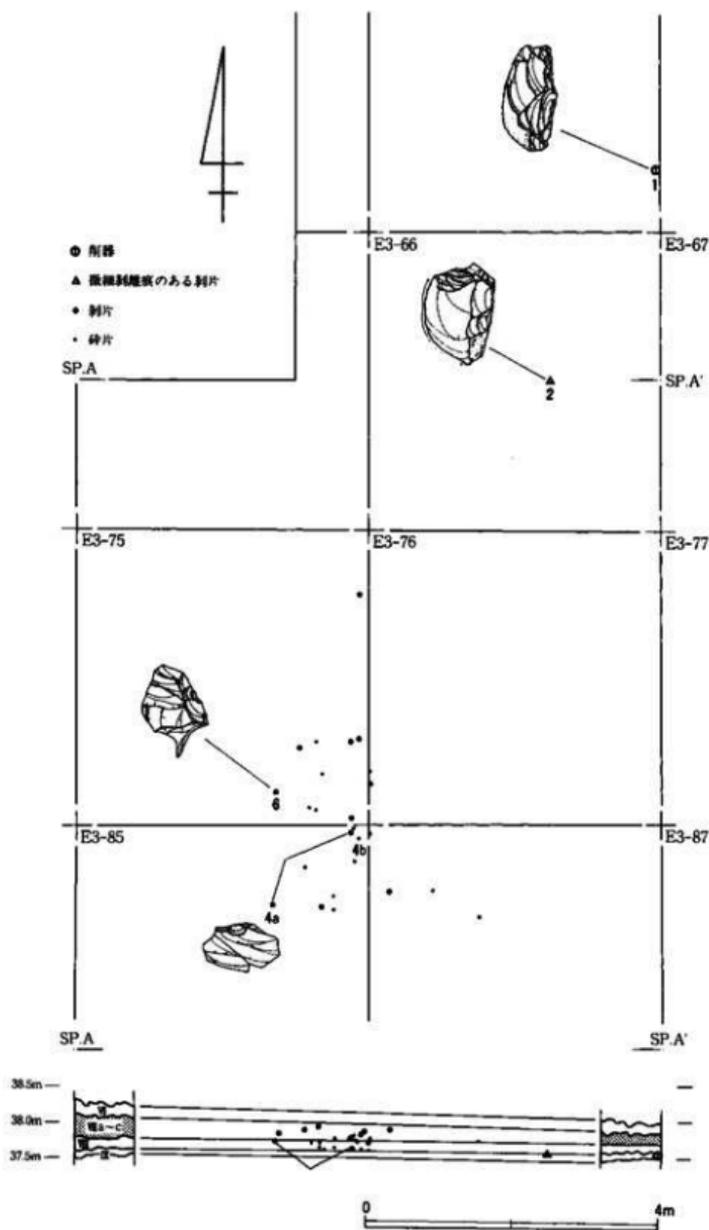
IX層： 暗灰褐色土層。かなり粘性が強く、水っぽい。武蔵野ローム最下層。この層も薄く、この下部は白色粘土が露呈する。

2. 出土状況 (第9、10図、図版1)

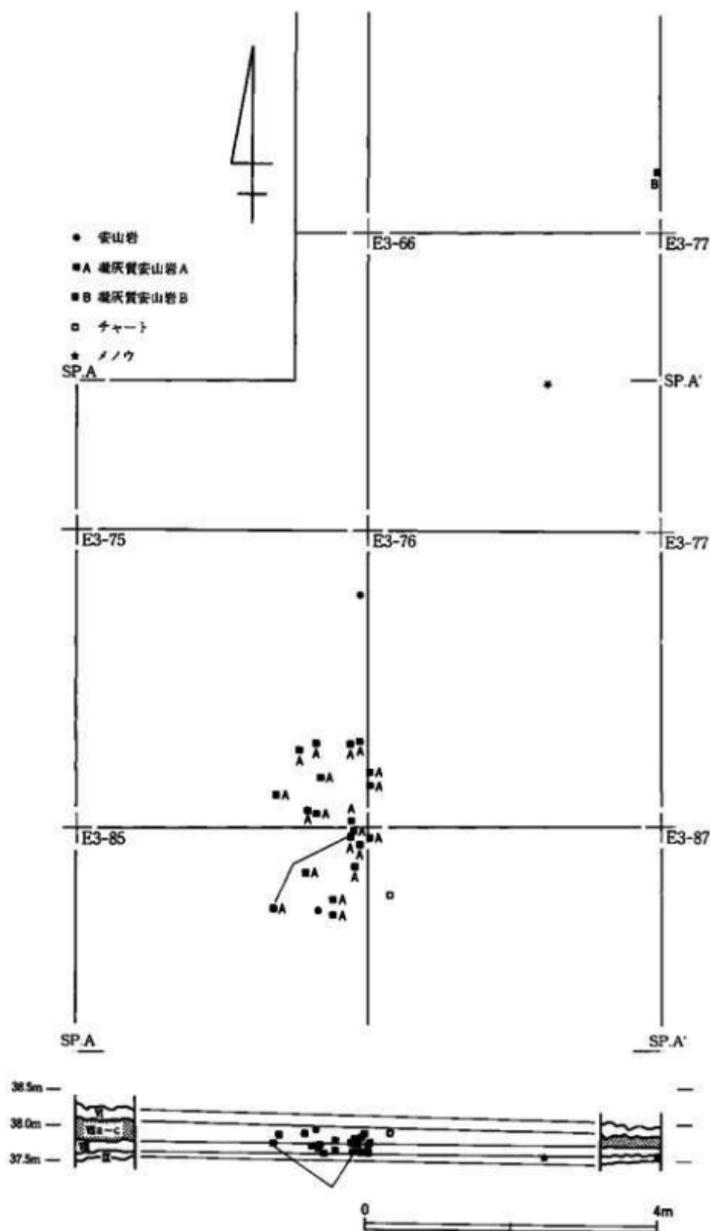
石器の出土層準はVII a～c層下部からVIII層にあたる。VII a～c層からVIII層は、層厚が薄く、色調・土質にあまり変化がないため、分層が困難であった。そのため、この石器群の生活面を特定することは困難である。しかしながら、石器製作技術・器種組成・石材組成から、VII c層からVIII層上部に生活面をもつ石器群であると推定される。

石器集中地点は1ヶ所検出され、約2 m×3 mの楕円形に分布している。

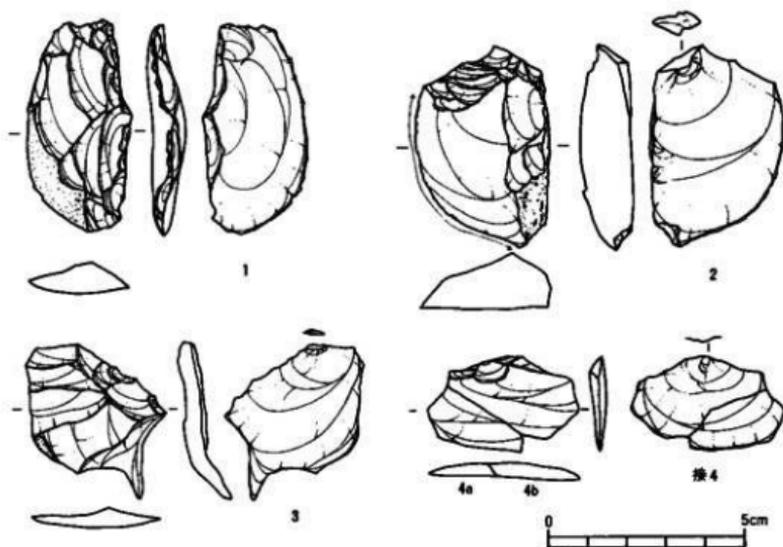
個別別資料は、5固体に識別される。その8割が、[個別別資料]凝灰質安山岩Aで約2 m×2 mの範囲に集中し、調整剥片が主体を占める。[個別別資料]凝灰質安山岩Bとメノウは、単品(1と2)で検出され、削器と使用痕のある剥片である。このことから、[個別別資料]凝灰岩Aはこの地点で石器製作を行ない、[個別別資料]凝灰質安山岩Bとメノウは石器(TOOL)のかたちで搬入されたと想定される。



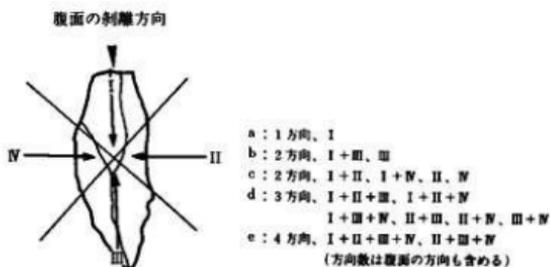
第9図 第1ブロック器種別分布図 (1/80)



第10図 第1ブロック個体別資料分布図 (1/80)



第11図 第1ブロック出土石器



第12図 背面構成の類型

3. 出土遺物 (第11図、図版17)

(1) 石器組成

検出された石器の総数は27点である。石器組成は、削器1点、微細剝離痕のある剝片1点、剝片10点、碎片15点である。

個体別資料は、5個体識別され、凝灰質安山岩A22点、凝灰質安山岩B1点、安山岩2点、メノウ1点、チャート1点となっている。凝灰質安山岩の比率が高い。

(2) 石器製作技術

[個体別資料] 凝灰質安山岩Aは、いずれも、3・接4のように、打面形状が線状を呈しており、横長剥片である。頭部調整が顕著で、15点の碎片は、頭部調整によって作出された碎片と思われる。他の[個体別資料]も、頭部調整が顕著で、横長剥片を剝離する技術が看取される。

(3) 出土石器 (第11図)

1は削器である。分厚い横長剥片を素材として、腹面の打瘤を折り取るように調整したのちに、背面側に急角度の調整を行なっている。背面は、腹面と同一方向に薄い横長剥片を数枚剝離していることが観察される。2は微細剝離痕のある剥片である。分厚い幅広い剥片の側縁に使用痕がみられる。頭部調整が顕著である。3・接4は剥片である。3・接4は[個体別資料]凝灰質安山岩Aである。

(4) 石器群の位置付けと問題点

佐原市福田藤之沢遺跡は、下総台地の北東部に位置し、第2黒色帯(VIIa～c層)の色調が淡く、層厚も薄いことから第2黒色帯の分層が困難で、石器群の位置付けが問題となろう。下総台地の北東部において、比較的資料がまとまって出土している新東京国際空港の遺跡群と比較して石器群の対比を試みることにする。福田藤之沢遺跡の特徴として、第一に、石材組成が安山岩を主体とすること。第二に、石器製作技術が、頭部調整が顕著で横長剥片を剝離する技術を主体とすることがあげられる。これら特徴と一致する石器群として、新東京国際空港No2遺跡A-2群、No7遺跡A地点第7石器群、No55遺跡の石器群が対比されよう。これらの石器群は、VIIc層からVIII層上部にかけて出土していることから、福田藤之沢遺跡の石器群は、VIIc層からVIII層上部に位置付けられよう。

表1 第1ブロック出土石器属性表

挿図番号	器種	大きさ(cm)			重量(g)	打面の種類	打面調整	頭部調整	背面構成				打角(度)	素材形状	登録番号	個体別資料		
		長	幅	厚					I	II	III	IV					C	
1	削器	2.6	5.3	0.8	12.3	線	—	○	8				1	a	—	D	E3-65-1	凝灰質安山岩B
2	使用痕のある剥片	5.0	3.4	1.3	24.6	平	×	○	1	3				c	112	B	E3-66-1	メノウ
3	剥片	3.0	4.7	0.7	6.9	線	×	○	1	1	1			d	111	C	E3-75-6	凝灰質安山岩A
接4a	剥片	2.3	1.5	0.3	1.2	線	×	○	1					a	—	C	E3-85-8	#
接4b	剥片	3.5	2.1	0.5	2.5	線	×	○	1					a	—	C	E3-85-9	#

■ 平……平担剝離面、多……多剝離面、C……自然面、線……線状

○……行なう、×……行なわない

素材形状(長:幅) A……～2:1、B……2:1～1:1、C……1:1～1:2、D……1:2～

表2 第1ブロック関連個体別資料属性表

個体別 資料	資料 総数	器 種 組 成	打 轉 面 の 類	打 面 調 整	底 底 調 整	背 の 調 整 形 成	打 角 平 均	素 材 形 状	図 版 番 号	関 連 ブ ロ ック
凝灰質 安山岩A	22	剥片7、砕片15	縦	×	○	b、c	111	D	3、抜4	1
凝灰質 安山岩B	1	削器1	縦	—	○	a	—	D	1	1
安山岩	2	剥片2	—	×	○	a	—	D		1
メノウ	1	使用痕のある剥片1	平	×	○	c	112	B	2	1
チャート	1	剥片1	C	×	×	a	—	D		1
総計	27	削器1、使用痕のある剥片1、剥片10、砕片15								

※ 平……平担削離面、多……多刺離面、C……自然面、縦……縦状

○……行なう傾度が高い、△……行なう傾度が低い、×……行なわない

素材形状(長:幅) A……2:1、B……2:1-1:1、C……1:1-1:2、D……1:2~

II. 縄文時代の遺物

グリッド出土の縄文土器(第13図・図版17)

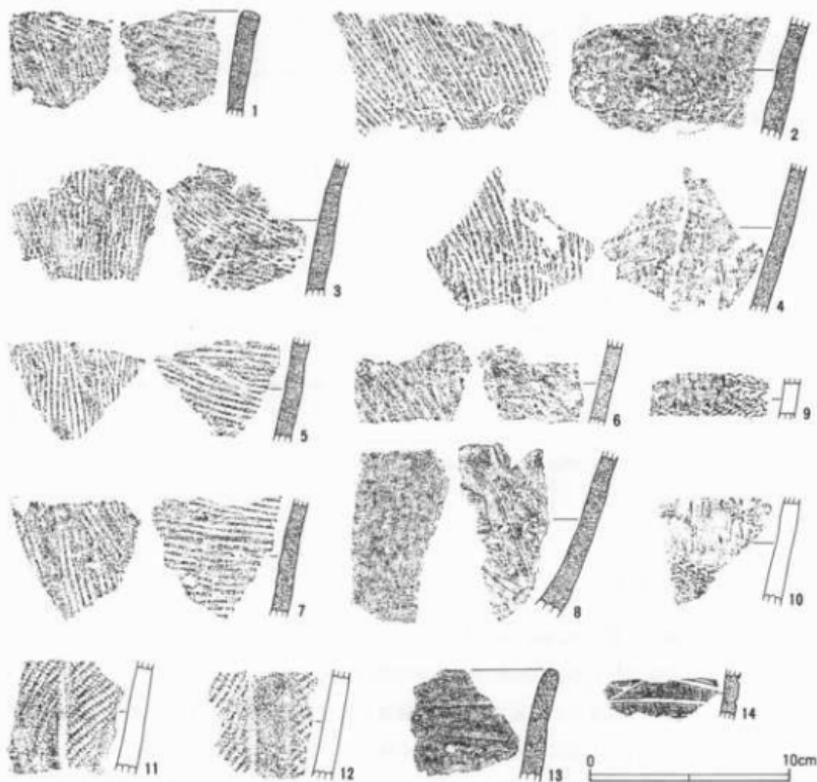
当遺跡からは条痕文系土器、前期興津式及び加曾利E式が出土している。

1~8はいわゆる条痕文系の土器で、胎土に繊維を多く含んでいる。1~7までは条痕が縦もしくは斜めに施され、内面にも同様の条痕文を施しているが、2、4、6についてはあまりはつきりと残ってはいない。型的には明確に型式設定できないので、条痕文系土器ということで捉えておきたい。8は外面が部分的に磨かれる無文の土器で、田戸上層式から子母口式に対比できよう。9・10は櫛状工具による連続刺突文を施している点で、興津式と考えられる。11・12は中期加曾利E式の胴下半部の破片で、磨消縄文をつくっている。おそらく同一個体であろう。

III. 奈良・平安時代の遺構と遺物

001(第14図・図版2、17)

遺構:主軸方向はS-70°-Wでカマドを西側に設けている北壁が3.10mであるのに対し、南壁が2.65mと短いため、住居プランは台形に歪んで見える。東西壁は約2.9mであることから、隅丸方形プランを意識してつくっているものと考えられる。壁高は30~40cmで、やや緩い立ち上がりとなる。床面は平坦ではあるが、あまりしまりがなく軟弱である。また、周溝、柱穴等は検出できなかった。遺物はほとんど出土せずカマド内から数点、カマド左側から杯を1点出



第13図 グリッド出土縄文土器拓影図 (1/3)

土した程度である。住居覆土は自然埋没であった。

カマド：西壁やや左寄りに位置し、袖部は残存するものの遺存度は悪く、山砂の流出が目立つ。中央部には天井崩壊土がみられ、遺物がその上部より出土している。カマド掘り方はほとんどなく床面とほぼ一致している。火床部はさほど熱を受けず焼土の堆積も薄い。煙道部は直線的に傾斜し、壁外にはさほど突出しない。

遺物：甕2点、杯1点が出土している。

1は大形の甕で、口縁部が強く外弯し肩の張る形態を示している。口唇部は強いヨコナデを加え端部を若干摘み出している。口縁部にはかるい平行叩き目を施しさらにヨコナデを行なっているが、数条の輪積み痕が残っている。胴部外面には平行叩き目が明瞭に残り、内面には指頭痕が連続的に叩き目と対応して残されるため凹凸が激しい。2は甕の口縁部破片である。3

は底部より若干内弯気味に立ち上がり、口縁部が外反する杯で、体部下端は手持ちヘラケズリ、底部には糸切り痕が残る。杯の形態から、9世紀第2四半期に位置付けられよう。

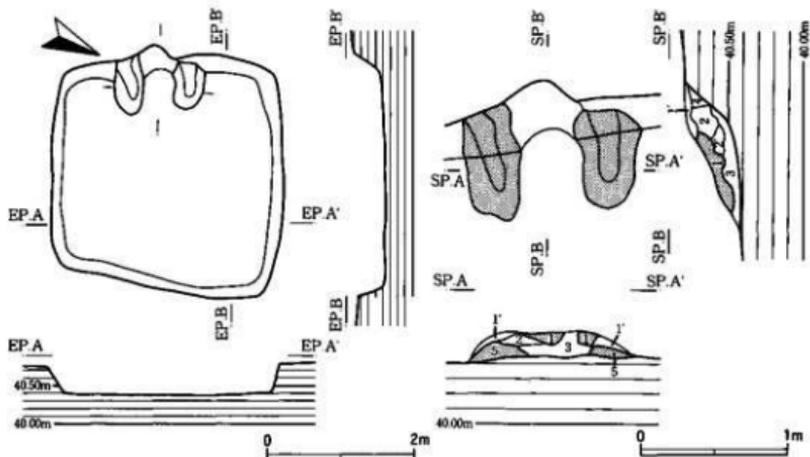
003 (第15図・図版3)

位置：C2-55からE2-61に向って東西に延びる。

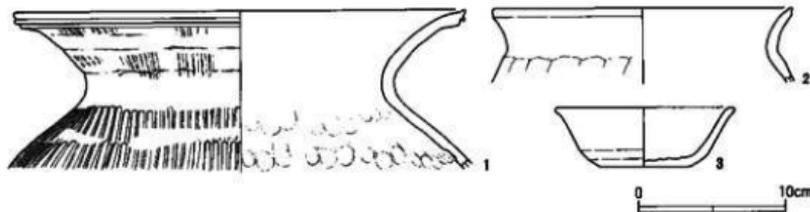
遺構：ほぼ東西方向に直線的に延びる溝状遺構である。E2-61付近で一旦途切れるが、再び調査区外へ延びていく。幅はおよそ2mで深さは20~30cmと浅く、断面形は皿状を示す。覆土は自然埋没である。時期は004よりも古い可能性が高い。

遺物：杯1点、高台付杯1点、甌1点、壺1点が出土している。

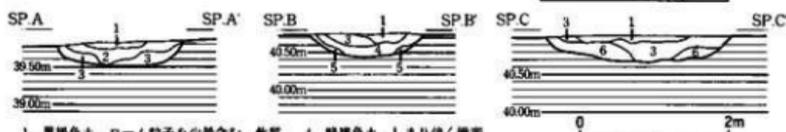
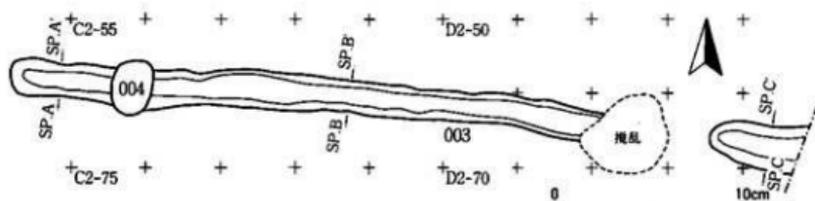
1は体部が内弯気味に外傾し、口縁部が若干反っている杯で、底部は回転糸切りの後周縁を手持ちヘラケズリしている。2は箱型に近い高台付杯で、口縁部は欠いている。3は丸底風の



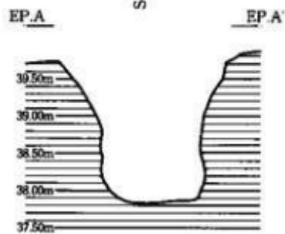
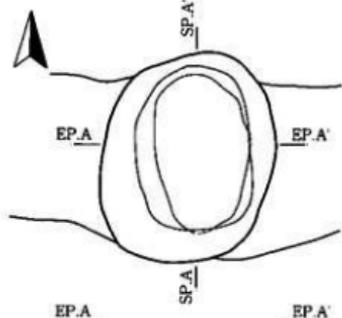
- | | |
|-----------|-------------|
| 1. 灰褐色土 | 山砂含む、天井部か |
| 1'. 暗灰褐色土 | 山砂含む |
| 2. 暗褐色土 | 焼土粒を少量含む |
| 2'. 暗褐色土 | 焼土粒、砂粒を少量含む |
| 3. 明褐色土 | 山砂を多く含む |
| 4. 暗褐色土 | 少量の焼土粒子含む |
| 5. 砂質土 | カマド跡 |



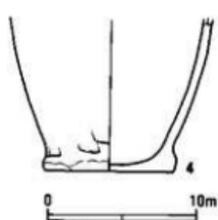
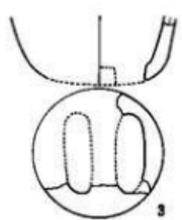
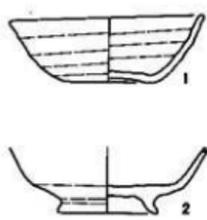
第14図 001平面・土器実測図 (1/80・1/4)



1. 黒褐色土 ローム粒子を少量含む、軟質
2. 明褐色土 ローム粒子を多量に含む
3. 茶褐色土 2よりしり強い
4. 暗褐色土 しり強く緻密
5. 黄褐色土 ローム粒主体
6. 黒褐色土 ゼラットとしてしり弱い



1. 褐色土 ローム粒少量含む
2. 黒褐色土 塊土、炭化粒含む
3. 褐色土 ローム粒少量含む
4. 暗褐色土
5. 褐色土 炭化材混入
6. 茶褐色土 粘性ありしまる
7. 明褐色土 6より若干明るい
8. 明褐色土 ハードローム主体
9. 明褐色土 ロームブロック主体
10. 暗褐色土 ローム若干含むしり弱い
11. 黄褐色土 ハードローム主体
12. 黄褐色土 ハードローム主体
13. 灰褐色土 粘性強くローム含む



第15図 003・004 平面・土器実測図 (1/400・1/80・1/4 土器は003出土)

底部に長楕円形の透かし孔が2箇所に入る瓶と思われる。4は甕の胴下半部である。

表3 001出土土器観察表

検出番号	器種	法量(cm) □・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	甕	30.6 — (11.0)	3%	口縁部内面ヨコナデ 口縁部外面タタキ後かるいヨコナデ 口縁部外面輪積み残る 胴部内面指摺痕残る 胴部外面タタキ後一部にナデ		小砂粒少	茶褐色	良好	
2	甕	20.0 — (5.2)	3%	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		砂粒多	暗褐色	不良	表面粗れている
3	杯	11.8 6.0 4.1	5%	体部内外面ヨコナデ 底部周縁手持ちヘラケズリ 底部未切り(かすかに残る程度)	R	小砂粒 スコリア 粒	暗黄褐色	良好	外面に煤付着

表4 003出土土器観察表

検出番号	器種	法量(cm) □・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	杯	12.8 6.0 4.6	5%	体部内外面ヨコナデ 底部周縁手持ちヘラケズリ 底部回転未切り	R	小砂粒少	暗黄褐色	良好	
2	高台付杯	— 8.6 (4.5)	5%	体部～底部内外面ヨコナデ	R	小砂粒 スコリア 粒	黄褐色	良好	
3	瓶	— (9.0) (4.8)	3%	胴～底部内外面ナデ 底部焼成前長楕円形の穿孔2か所有り		砂粒多	黄褐色	良好	
4	甕	— 8.7 (18.5)	1%	胴部内外面ナデ 底部木炭残る		骨母多	黄褐色	良好	

IV. その他の遺構

時期決定しがたい土壌が3基検出されている。

002 (第16図)

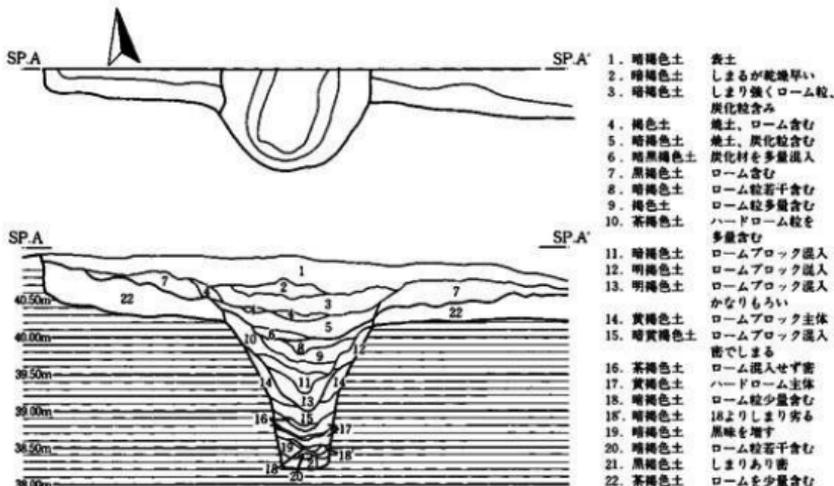
位置：D2-89に位置し、溝状の遺構を切り込んでいる。

遺構：主軸方向はN-26°-Eをとるが、北半部は調査区外となるため、南半部だけの調査となった。幅約2mの楕円形の陥穴で長軸の長さは不明である。当遺構を横切るように溝状の遺構が存在するが、当遺構の方が新しいことが土層観察からうかがえる。深さは2.7mあり断面形は中段から底面にかけて垂下するやや幅広のろうと状を示し、底面は長方形を呈し、平坦である。覆土は2～21層に分けたが、ほぼ4ブロックに分けることができる。18～21は最下部で陥穴使用時に堆積した層と思われ、腐食土を中心としている。12～17はロームブロックを主体とし、きぼどしまりもないことから埋め戻しと考えられる。8～11は自然埋没に近い。2～6は焼土、炭化粒を多く含む層である。遺物は出土しなかった。

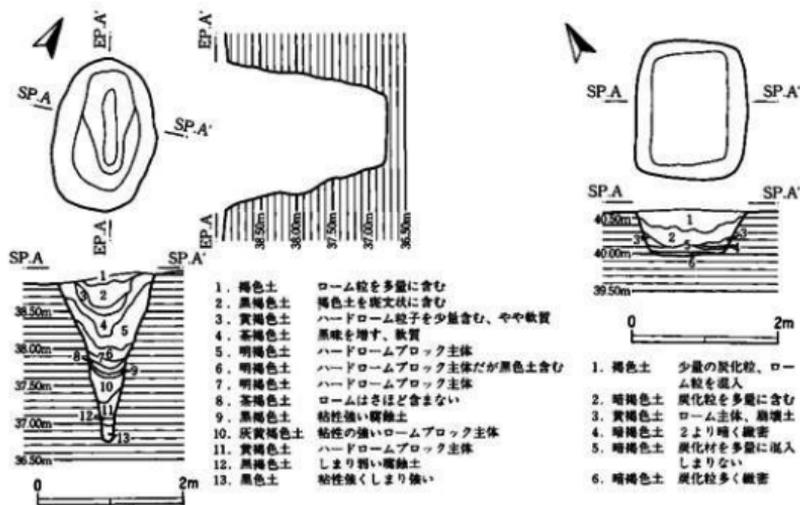
004 (第15図・図版3)

位置：C2-66、76に位置し、003を切る。

遺構：主軸方向はほぼ北を指し、長軸2.8m、短軸2.4mの楕円形を呈す。003と切り合うが、



0 2m



第16図 002・005・006 平面図 (1/80)

土層観察から当遺構のほうが新しいことがわかる。底面はほぼ平坦で堅くしまり、隅丸方形に近い形状を示す。側壁は中位でくびれ、底面付近が袋状となったのち緩く立ち上がる。深さは約2.3mを計る。覆土は1～6'が自然埋没、7～13は埋め戻しによるロームブロックが主体となる。確認面は003同様新期テフラ面で003が膨らみをもつような形で検出された。また、覆土内からは土師器を主体に出土していることから、奈良・平安時代以降の遺構であろう。

006 (第16図)

位置：C2-57に位置する。

遺構：主軸方向N-33'-E、長軸1.9m、短軸1.5mの隅丸長方形を呈す炭窯である。深さは60cmを計り、底面は平坦に仕上げられる。壁面はやや傾斜して立ち上がる。底面及び壁面には焼土が付着し、覆土下部には炭化材が薄い層をなしている。

第2節 伊地山藤之台遺跡

I. 旧石器時代の遺構と遺物

第1ブロック

1. 層序区分

I層： 暗褐色土層。ロームを少量含む。

II b層： 新期テフラ層。

II c層： 黒褐色土層。

III～V層： 茶褐色土層。かなりソフト化が著しく、下方はハードロームがブロック状に露呈する。

VI層： 明褐色土層。AT (始良丹沢火山灰) ブロックが明瞭に浮き出る。しまり強い。

VII a層： 茶褐色土層。赤黒色のスコリアを多く含む。VI層よりクラック少ない。

VII c層： 茶褐色土層。VII a層よりやや暗い色調、黒色のスコリアがやや減る。たいへん硬くよくしまる。

VIII層： 明褐色層。VI層よりやや黒く、VII層より明るい程度の色調。赤色スコリアをほとんど含まない。

IX層： 灰褐色土層。武蔵野ローム最下層と思われ、色は灰色味を帯びるが、粘性・硬度はVIII層とあまり変化がない。

2. 出土状況 (第17図)

石器の出土層準はVII a層にあたる。

石器の集中地点は、1ヶ所検出された。C2-75グリッドを中心に約4m×4mの範囲に4点出土した。

3. 出土遺物 (第18図、図版21)

検出された石器は総計4点である。石器組成は、剥片2点、礫2点である。石材組成は、安山岩2点、石英ハン岩2点である。

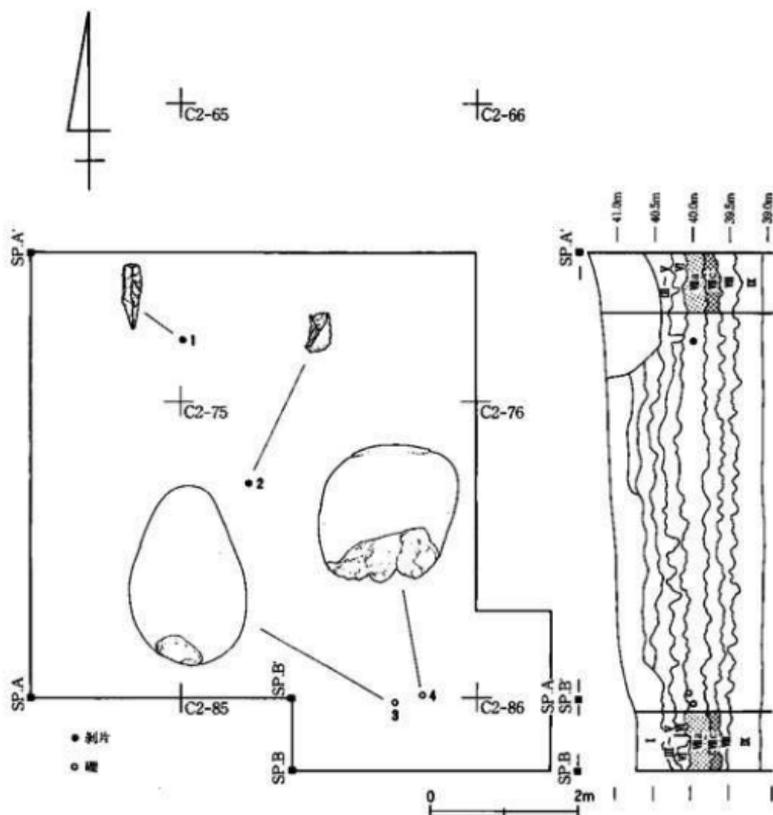
1・2は剥片である。いずれも、背面に、大きな剥離痕がなく、剥片自体も小さいことから、調整剥片と思われる。

3・4は礫である。片側に剥離痕がみられる。

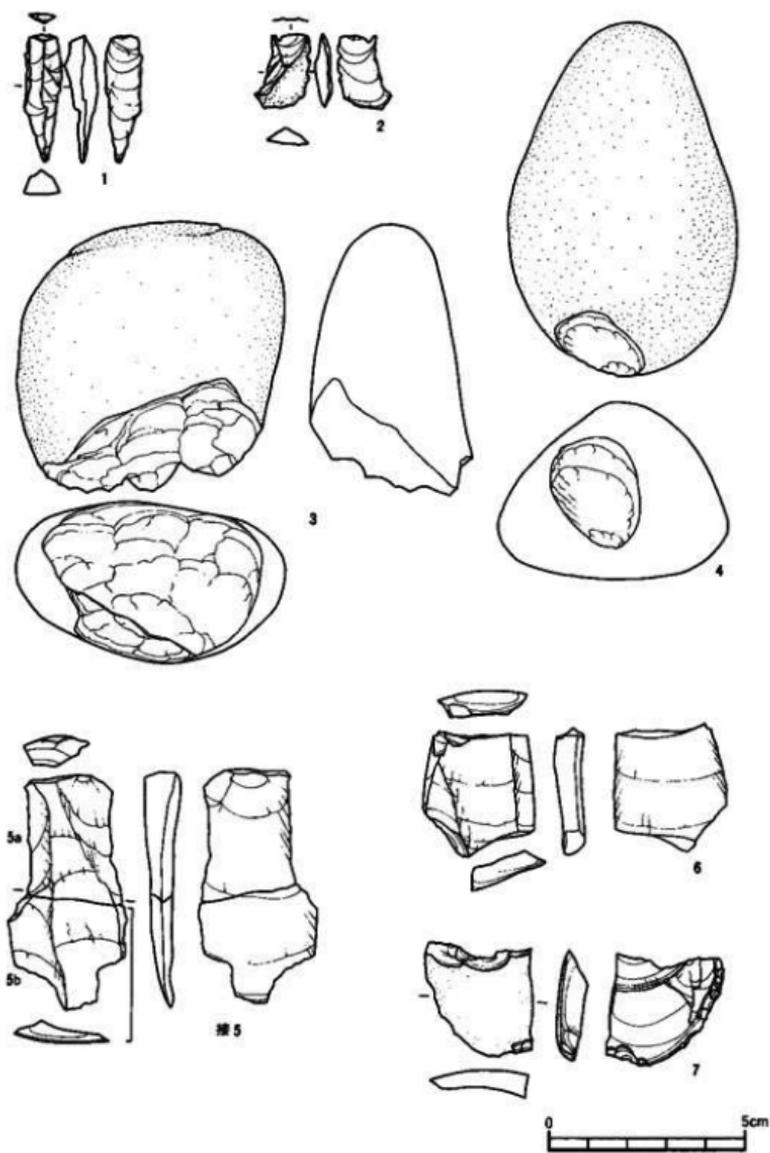
石器群の位置付けと石器製作技術は、資料点数が少ないので不明である。

グリッド出土遺物 (第18図接5～7)

接5・6はB3-74グリッドの一括遺物である。接5と6は両設打面の石核から剥離された剥片と思われる。いずれも折断されている。7は微細剥離痕のある剥片である。



第17図 第1ブロック遺物出土状況 (1/80)



第18図 第1ブロック出土石器(1~4)
グリッド出土石器(接5~7)

表5 第1ブロック(1~4), グリッド出土(5~7)石器属性表

標記番号	器種	長さ	幅	厚さ(cm)	重量(g)	石材	遺物番号	備考
1	剥片	3.2	0.9	0.8	1.9	安山岩	C2-65-1	
2	剥片	2.0	1.4	0.4	1.0	安山岩	C2-75-3	
3	礫	6.9	6.9	3.8	209.2	石英ハン岩	C2-85-1	
4	礫	9.0	5.8	4.6	284.2	石英ハン岩	C2-85-2	敲石か?
5a	剥片	3.4	2.1	0.6	6.3	安山岩	B3-74	
5b	剥片	2.8	3.0	0.4	3.5	安山岩	B3-74	
6	剥片	3.2	2.9	0.6	8.7	安山岩	B3-74	
7	微細剥離痕のある剥片	3.0	2.8	0.8	8.3	頁岩	C2-43-2	

II. 縄文時代の遺構と遺物

010 (第19図)

位置：D2-30に位置し、谷部へ向う傾斜面に立地する。

遺構：長軸3.1m、短軸40cmのいわゆる「T」ピット(陥穴)である。長軸方向は谷部へ向う傾斜面と平行し、ほぼ東西である。確認面がハードローム中位であるため遺構下部のみを検出したにとどまった。深さは約1mである。長軸両端はともに袋状を呈し、20~30cmオーバーハングする。側壁は細長く平坦な底面からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は底面付近に腐食土が堆積するほかはロームブロックを主体としている。縄文時代の所産である。

006 (第19図)

位置：塚封土下に所在する。



第19図 006(右)・010(左)平面図(1/80)

遺構：径1.1mほどの不整形円形を呈し、深さ1.6mを計る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。確認面はローム面で上位にテフラ層があることから、縄文時代の所産と考えて良いであろう。覆土は10層以下にロームブロックを多く含む層が堆積している。9層以上は自然堆積である。陥穴と考えられる。

グリッド出土の縄文土器（第20、21図・図版18）

当遺跡の遺構に伴わない縄文土器である。便宜上下記のとおり分類し、説明していく。

I群土器 早期沈線文系土器を一括する。三戸式を1類、田戸下層式を2類とし、さらに施文等により細分した。

II群土器 早期条痕文系土器を一括し、野島式を1類、田戸上層式以降を2類、条痕文のみの施文されているものを3類とし、さらに施文等により細分した。

III群土器 前期後半の土器を一括した。

IV群土器 中期の土器を一括した。

V群土器 後期の土器を一括した。

I群土器（1～16）

1類（1・2）

口縁から底部にまで全面にわたって太沈線文を施すものの胴部破片で、太沈線はえぐる手法を用いている。三戸式の範疇に入る土器である。

2類a種（3～13）

三戸式の文様構成を受け継ぎ、口縁部直下文様帯は縦位の太沈線文、胴部文様帯は細沈線で幾何学文様を構成し、空白部に貝殻腹縁文を施している。底部直上文様帯は横位の太沈線である。3は口縁部破片で口唇部は外削ぎ状に外反し、直下は縦位の太沈線で埋めている。4は口縁部文様帯と胴部文様帯の接点で、太沈線と細沈線が見られる。5～9は細沈線文と貝殻腹縁文とが入り組んでいる。10、11は底部直上の細沈線文、12は尖底の底部でかなり尖っている。13は横走する細沈線を施す口縁部破片である。

これらは田戸下層式でも古い段階の所産と考えてよいであろう。

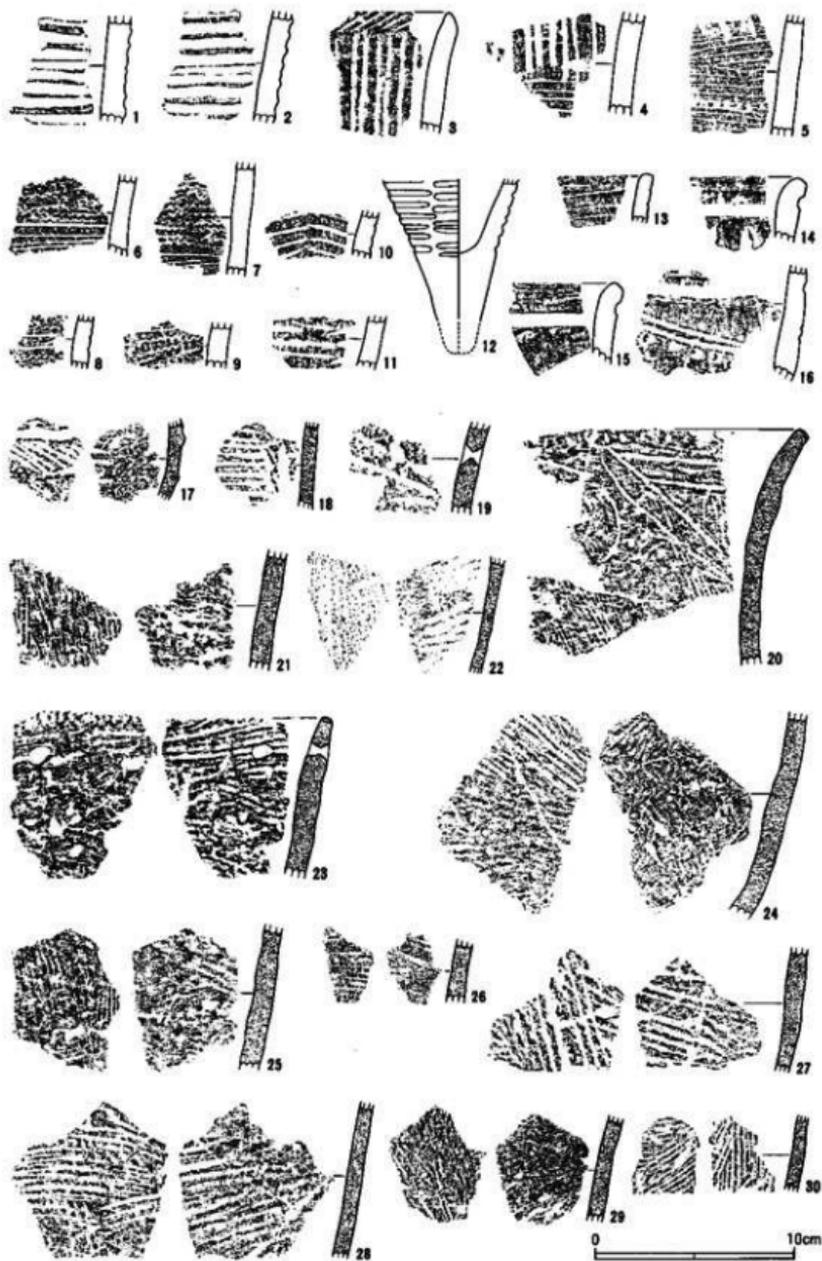
2類b種（14～16）

太沈線を主文様として幾何学文を構成するもので、口縁部は縦と横に、胴部は幾何学的な文様構成をなす土器である。城ノ台貝塚や椎の木遺跡に類例が多い。14は口唇部直下に横走太沈線を施し、そこから縦に垂下する太沈線が若干窺える。16は太沈線文を横走させ、斜めに竹管による平行沈線を描いたのち、その下方に連続的な刺突文を施している。

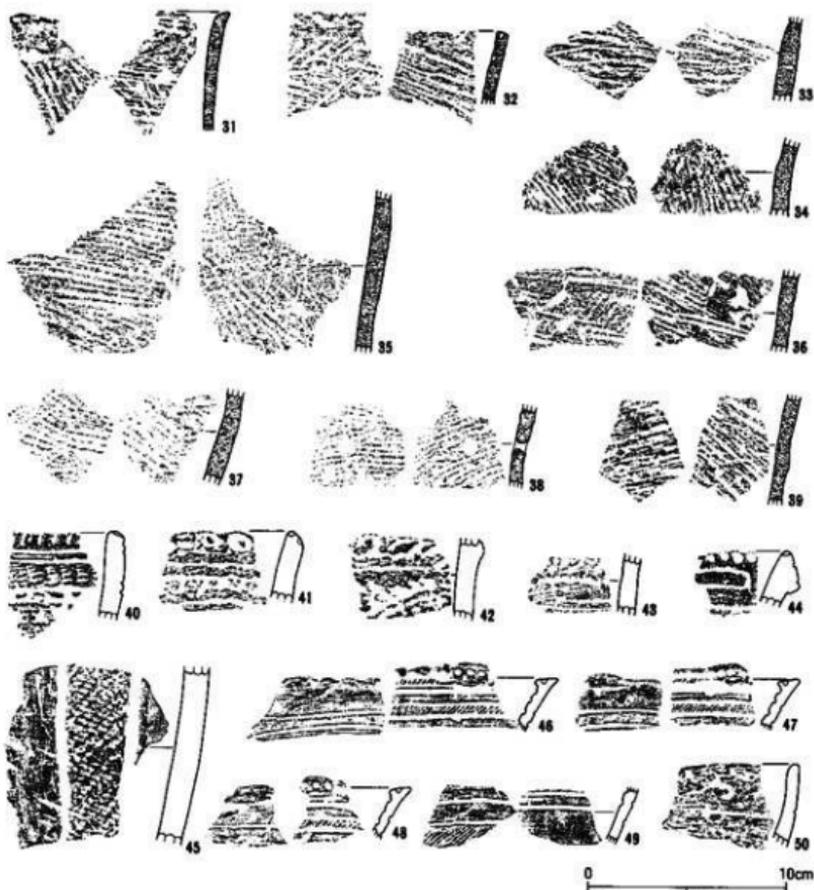
II群土器（17～39）

1類（17・18）

微隆起線上部に刻みを入れ幾何学文を構成し、微隆起間の空白部に沈線文を施す土器で、17



第20図 グリッド出土縄文土器拓影図 その1 (1/3)



第21図 グリッド出土縄文土器拓影図 その2 (1/3)

は内面に条痕文を残している。18ははっきりとしない。胎土には繊維を含む。

2類 a種 (19~26)

地に条痕文を施し、口縁部に平行沈線を2条、さらに斜行沈線を2条施し、空いたところに円形の沈線を描いている。胎土に多量の繊維を含んでいるのが特徴である。21~26も同様の胎土であるため本種に含めた。20は口縁部破片で上記のモチーフが観察でき、口縁部には連続した刻み目を施している。19は20と同一個体で補修孔と思える円孔が1ヶ所ある。19、20とも内面の仕上げはナデで条痕は使用していない。23の口縁部破片は口唇部に刻み目を施し、口縁部直下に補修孔が見られる。21、25はやや目の細かい条痕が縦方向に施文されている。

本種は胎土に繊維を多量に含んでいる点で、茅山上層式以降の時期ととらえてよいであろう。

2類b種 (27~39)

a種より繊維の含有が少ない条痕施文の土器を本種とした。31の口縁部破片は口唇部が内削ぎ状になり若干外反する。32は口唇部に深い刻み目を施している。

本種についてはいわゆる条痕文系の土器として捉えておきたい。

III群土器 (40~43)

半載竹管文を施す前期後半の土器を本群とした。4は口唇部に刻み目を施し半載竹管による平行線文、半月形刺突文、有節平行沈線文および櫛歯状工具による連続刺突文を施す。41は口唇部に円形竹管文を連続的に刻み、口縁部文様は変形竹管文と刺突文の組合せである。42は隆帯上に連続した刻み目を施し、直下に変形竹管文さらに斜位に2条の結節文を施している。43変形竹管文と平行沈線文の組合せである。

これらの土器は浮島式に比定できよう。

IV群土器 (44・45)

1類 (44)

折返し状の口縁を呈し、口唇部に連続した刻み目をもち、肥厚した口縁帯には長方形の沈線区画文が窺える。胎土には雲母片を多く含んでいる。阿玉台式土器である。

2類 (45)

磨消縄文をもつ深鉢で、無文帯と縄文帯とを縦の沈線で区画している。加曾利E式である。

V群土器 (46~50)

46~49は同一個体の浅鉢で、口唇部は内側に肥厚し3つの刺突を施す貼付文を付す。外面には平行沈線文を2状めぐらせ下位に縄文帯をつくっている。内面にも平行沈線文を5~6条めぐらし、中央の沈線間を細かい斜行沈線で充填している。50は粗製の浅鉢でやや内弯する口縁部に横位の沈線文が1条めぐっている。

加曾利B1式と考えられる。

III. 古墳時代の遺構と遺物

009 (第22図・図版6・19)

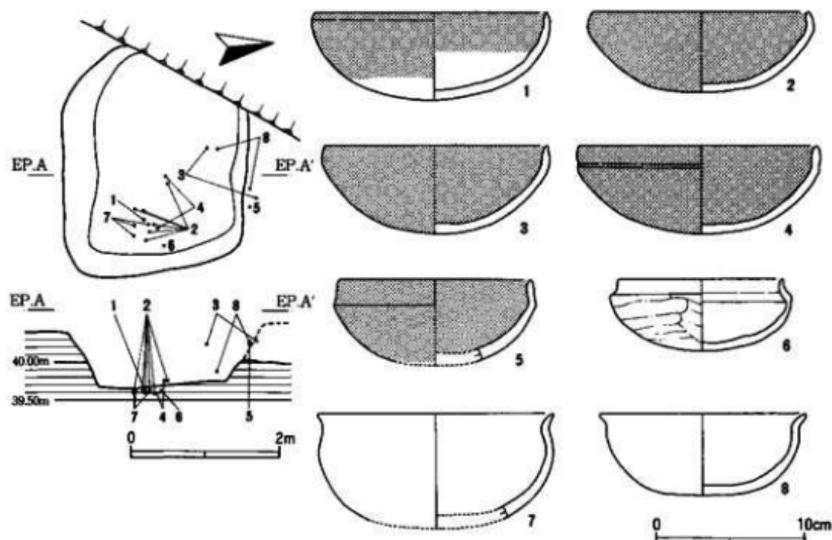
位置：B3-26、27に位置する。

遺構：西側に導水管が通るため全形は不明だが、長軸は約3m、短軸2.5mの隅丸長方形を呈すものと思われる。遺構北側は40cmほど掘りすぎたが、壁高は70cmほどで斜めに立ち上がる。床面は平坦であるがあまりしまりが無い。遺構の東側より遺物がまとまって出土したが、南東コーナー寄りでは床面直上に、北壁側では覆土中位にみられる。覆土はロームブロックを全体に混入していることから、埋め戻しによるものと推測される。遺物はその時に遺構北側より投

棄したものであろう。機能については不明である。

遺物：杯が8点出土している。

1から5は赤色塗彩された杯で、口縁部が内弯もしくは内傾している。6は口縁部をつよいヨコナデにより引き出し、体部との境に稜線をつくっている。体部は全面ヘラケズリされる。7、8は口縁部が短く外反し、丸い体部は碗状を示している。5世紀後半に位置付けられよう。



第22図 009 平面・出土状況・土器実測図 (1/80・1/4)

表6 009出土土器観察表

押図 番号	器種	法量 (cm) 口・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎土	色調	焼成	備考
1	杯	15.8 — 5.9	5%	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ミガキ		砂粒多 スクリア 粒多	淡黄褐色	良好	体部内外面部分赤彩
2	杯	14.5 — 5.5	5%	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ミガキ		砂粒多	黄褐色	良好	全面赤彩
3	杯	15.0 — 5.9	3%	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ミガキ		砂粒多	赤褐色	良好	全面赤彩
4	杯	16.0 — 6.0	5%	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ミガキ		砂粒多	暗褐色	不良	全面赤彩 焼成甘くもろい
5	杯	13.0 — (5.5)	3%	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ミガキ		砂粒多	赤褐色	不良	全面赤彩
6	杯	11.2 — 4.8	5%	口縁部内外面ヨコナデ 体部内面ナデ 体部外面ヘラケズリ		砂粒多	暗赤褐色	良好	
7	杯	16.0 — (7.2)	3%	口縁部内外面ヨコナデ 体部内面ミガキ 体部外面ヘラケズリ後かるいミガキ		砂粒多	淡茶褐色	良好	
8	杯	13.9 — 5.6	5%	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ 体部内面ナデ後ミガキ 体部外面ケズリ後ミガキ		砂粒多 スクリア 粒少	茶褐色	良好	

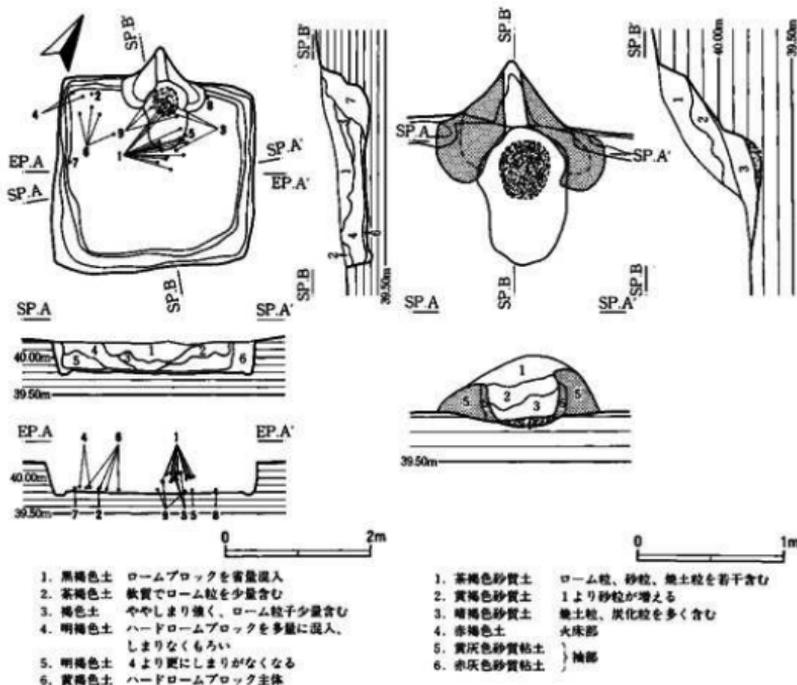
IV. 奈良・平安時代の遺構と遺物

005 (第23・24図・図版6・20)

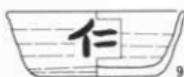
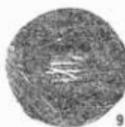
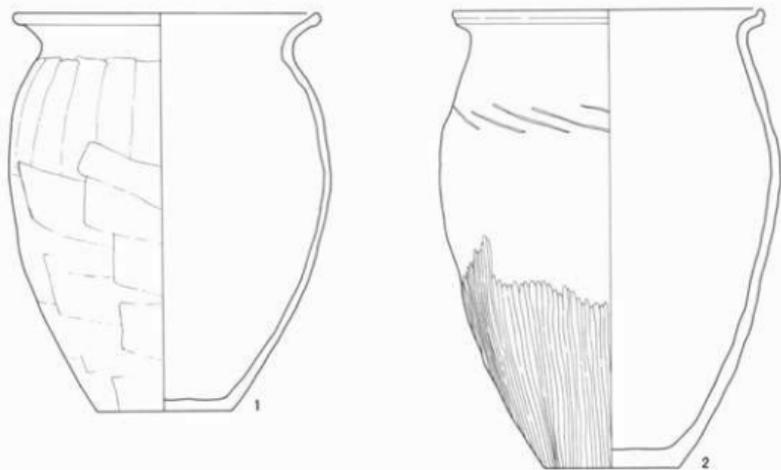
位置：C2-59に位置する。

遺構：主軸2.66m、横軸2.66mの隅丸方形を呈し、主軸方向N-28°-W、北壁にカマドを設ける。壁高は約40cmあり、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は適度のしまりがあり平坦で5cmほどの貼床がある。周溝はカマド部分を除いて全周するが、南側のほうが幅広く25cm前後を計る。北側は20cm弱である。深さは5cm前後と浅い。なお、床面を精査したが柱穴等は検出できなかった。遺物の出土状況は床面直上のものが多く、2はカマド左側に置かれていた。1、3は覆土中位からの出土で1層中と考えられる。なお、覆土の1層以外は短期間による埋め戻しの可能性が高い。

カマド：北壁中央に位置し、袖先端部分の構築材のほとんどが流出するため、壁から40cmほどしか袖部は残存していない。ただ、残存する袖部の遺存状態は良好でアーチ状に内弯する内面の山砂は被熱により赤色化している。火床部は若干掘り凹められる程度ではあるが、かなり



第23図 005 平面・出土状況・カマド実測図 (1/80・1/40)



第24图 005土器実測图 (1/4)

表7 005出土土器観察表

押図 番号	器種	法量 (cm)		遺存度	成形・変形手法	回転 方向	胎土	色調	焼成	備考
		口・底・高								
1	甕	21.0	%	%	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ後かいるナデ		砂粒多 スコリア 粒多	暗褐色	良好	二次焼成を受ける 木葉痕
		9.3								
		27.8								
2	甕	21.6	%	%	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ナデ後下半部ミガキ		砂粒・小 砂多量	暗赤褐色	良好	胴上部に「タガ」状 の工具によるしめつ け痕有り 二次焼成を受ける
		9.2								
		31.8								
3	甕	15.0	%	%	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ後ナデ		砂粒多 スコリア 粒少	暗褐色	良好	
		— (17.3)								
4	甕	13.0	%	%	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		砂粒多 スコリア 粒少	暗黄褐色	良好	二次焼成を受ける
		— (10.0)								
5	甕	—	%	%	胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ後かいるナデ		砂粒少	暗褐色	良好	二次焼成を受ける
		9.0 (5.0)								
6	甕	12.5	%	%	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ後かいるナデ		小砂粒多 スコリア 粒少	茶褐色	良好	
		— (5.0)								
7	蓋	19.9	%	%	内外面ヨコナデ 天井部回転ヘラケズリ		砂粒多 雲母、ス コリア	暗黄褐色	良好	墨書「佛」
		— 4.7								
8	杯	12.2	%	%	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁回転ヘラケズリ 底部静止未切り	R	砂粒・小 砂多	明赤褐色	良好	墨書「佛」
		7.8								
		5.2								
9	杯	12.4	%	%	体部内外面ヨコナデ 底部手持ちヘラケズリ	R	砂粒・小 砂多	淡赤褐色	良好	墨書「仁」
		8.5								
		4.6								

被熱している。煙道部掘り方は三角形に壁面を削り、両側辺に山砂を貼り円筒形で緩い傾斜の煙道部を作出し、壁外に45cmほど突出している。なお、燃焼部の掘り方は、浅い皿状に住居内側に広がり1mほどの長さをもっている。住居周溝はカマド下部でとまっている。燃焼部覆土上部から甕が出土しているが、ほぼ掛口部分と一致する。

遺物：甕6点、杯2点、蓋1点が出土している。

1、2は大形な甕で、1は外反する口縁端部が肥厚し、胴上部に張りのある形態を示す。胴部外面上部は縦方向のヘラケズリ、下半部は横方向のヘラケズリである。底部には木葉痕が残る。2は口縁部をつよいヨコナデにより摘み出し、胴部がやや長い形態を示している。胴下半部には縦方向に細かいヘラミガキが施され、肩の部分にはタガで絞めたような斜めの圧痕がめぐっている。底部には木葉痕が残る。3、6は口縁部をヨコナデし口唇を摘み出している甕である。胴部は球形にちかい。4も同様の形態であろう。5は大形品の甕底部付近か。7は大形な蓋で、発達したつまみと屈曲のよわい受け部をもっている。天井部外面は回転ヘラケズリである。外面には肉眼で観察できないほど薄くなってしまった「佛」の墨書が書かれる。8、9は箱型に近い形態の杯で、8には「佛」、9には「仁」の墨書が書かれる。

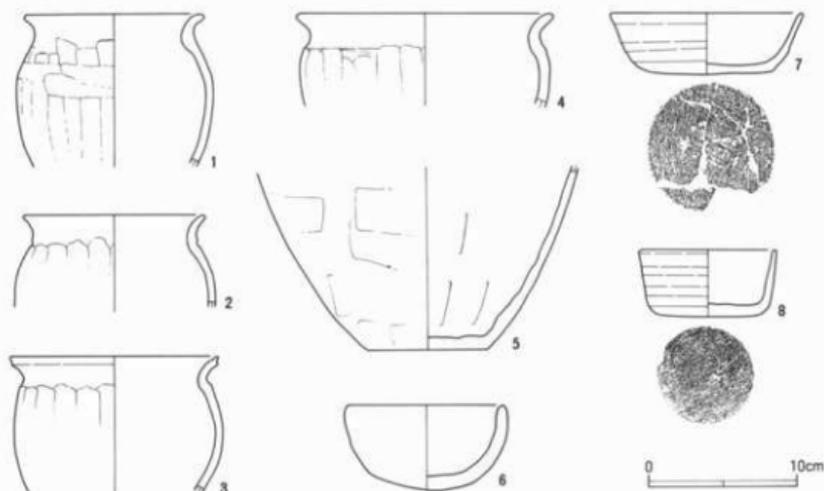
杯の形態から8世紀第4四半期に位置付けられよう。

グリッド出土の遺物 (第25図・図版21)

甕5点、杯3点が出土している。

1から5は甕で、口縁部が外反し胴部が丸い形態を示すものが多く、3は口縁部をつよくヨコナデし口唇部を摘み出している。5は胴下半部で二次焼成を受けて器面がかなり荒れてい

る。6は器肉が厚く、粗雑なつくりの丸底の杯である。7は底部径と口縁径との差が比較的小さい杯で、底部調整は糸切りの後周縁部を手持ちヘラケズリしている。8は箱型の杯で体部下端は回転ヘラケズリ、底部は手持ちヘラケズリを行なっている。7、8については005に隣接するグリッドからの出土であり住居上部の覆土である可能性も十分考えられ、時期的にもほぼ一致することが判明したことから、005に伴う可能性がきわめて強い。



第25図 グリッド出土土器実測図 (1/4)

表8 グリッド出土土器観察表

挿入 番号	器種	法量(cm)		遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎土	色調	焼成	備考
		口・底・高								
1	甕	13.8 — (9.3)		1/4	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ後ナデ		砂粒多 長石粒多	暗黄褐色	良好	
2	甕	12.0 — (6.2)		3/4	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		砂粒多	暗黄褐色	良好	
3	甕	11.0 — (10.3)		3/4	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ後半かいるナデ		砂粒多	黄茶褐色	良好	
4	甕	17.0 — (6.4)		3/4	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		砂粒多	黄茶褐色	良好	
5	甕	8.0 — (12.5)		3/4	胴部内面ヘラナデ 胴部外面ヘラケズリ		大砂粒多	黄褐色	良好	二次焼成を受け器面 が粗れている
6	杯	10.5 — 5.9		1/4	体部内外面ナデ		砂粒多	暗褐色	良好	
7	杯	13.0 8.5 4.1		1/4	体部内外面ヨコナデ 体部下端回転ヘラケズリ 底部周縁手持ちヘラケズリ 底部静止未切り	L	砂粒多	黄褐色	良好	005に隣接する確認 グリッドより出土
8	杯	9.3 6.8 4.5		1/4	体部内外面ヨコナデ 体部下端回転ヘラケズリ 底部手持ちヘラケズリ	R	砂粒多 スコリア 粒	黄褐色	良好	005に隣接する確認 グリッドより出土

V. 塚・その他の遺構

塚1～3 (第26図・図版4・5)

位置：B2区に位置し、中央を横切る道路に切られる。

遺構：南北に3基連なる塚で、北側から塚1・2・3とした。共に道路によって東半分を切り崩されている。

塚1は見かけの径が6.5mで高さ80cmを計り、断面形は座布団状を示している。外周部には北側から西側にかけて浅い周溝がめぐることが全周はしていない。周溝部分は現表土上でも若干凹んで見える。盛土は土層観察から北側より積み始めていることがわかる。封土下には旧表土が残っている。

塚2は見かけの径が約6cmで高さ50cmほどで注意しないと見過ごしてしまいそうな貧弱さである。外周部には西側から南側にかけて浅い周溝があり、南側部分では塚3の周溝と共有する。やはり周溝部分は現表土上でも若干凹んでいる。盛土はローム粒子を若干含む暗褐色土をわずかに積み上げる程度である。周溝は60cmほどの深さを計る。

塚3は見かけの径が6.5m、高さは30cmほどであるが周溝部分が若干凹むためそこからは50cmほどある。周溝は全周するが西側で若干浅い部分がある。北側では塚2と周溝を共有する。盛土はほとんどなく南側に若干痕跡を認める程度でほとんどが流出している。また、道路によって半分以上削平されているようである。

これらの塚の形状は丸味を帯びた不整形円形に見えるが、周溝部の形から連続する方形の塚であることがわかる。なお、塚2の周溝下部より006が検出された。

塚4 (第27図・図版4・5)

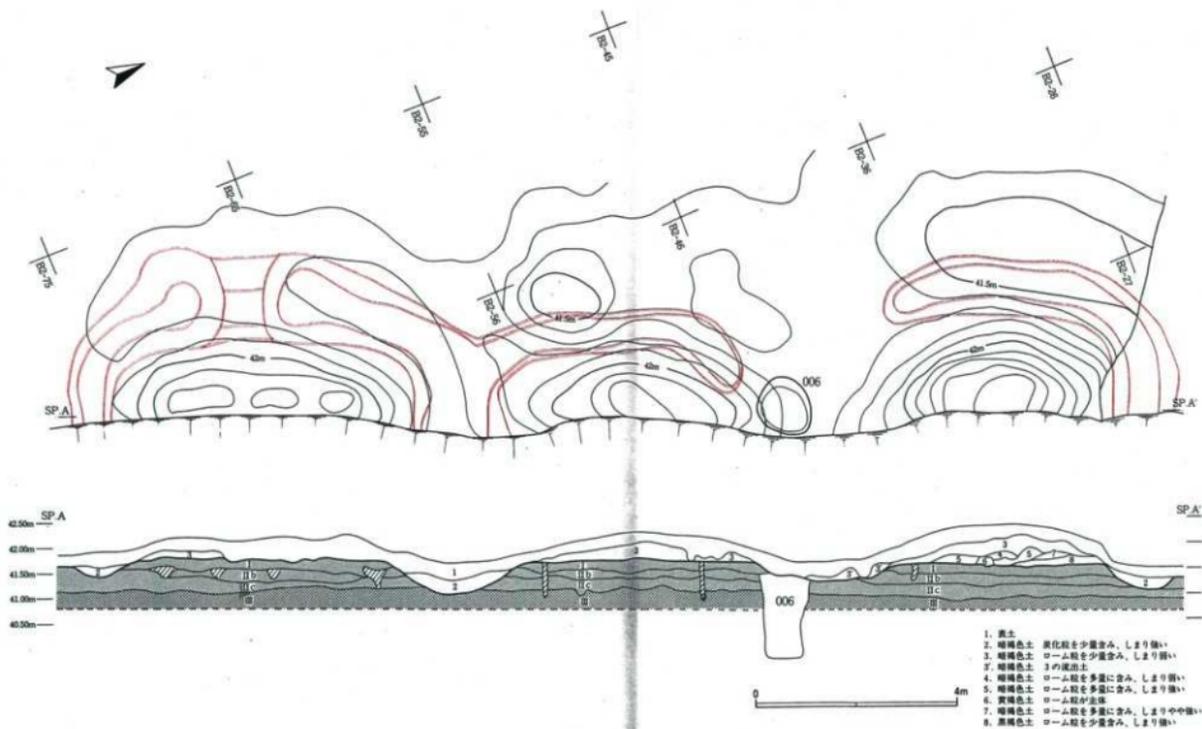
位置：B2-92・93、B3-02・03に位置する。

遺構：見かけの径は5mほどで、高さは50cmと耕作により地ならしされた非常に低い塚である。塚頂部はやや南寄りにあり、西側からの見かけの高さは30cmほどで、東側からは50cmである。封土は若干ロームを混える程度の暗褐色土層で西南部分に旧表土を10cmほどの厚さで残っている。塚に関連する遺物は検出できなかった。

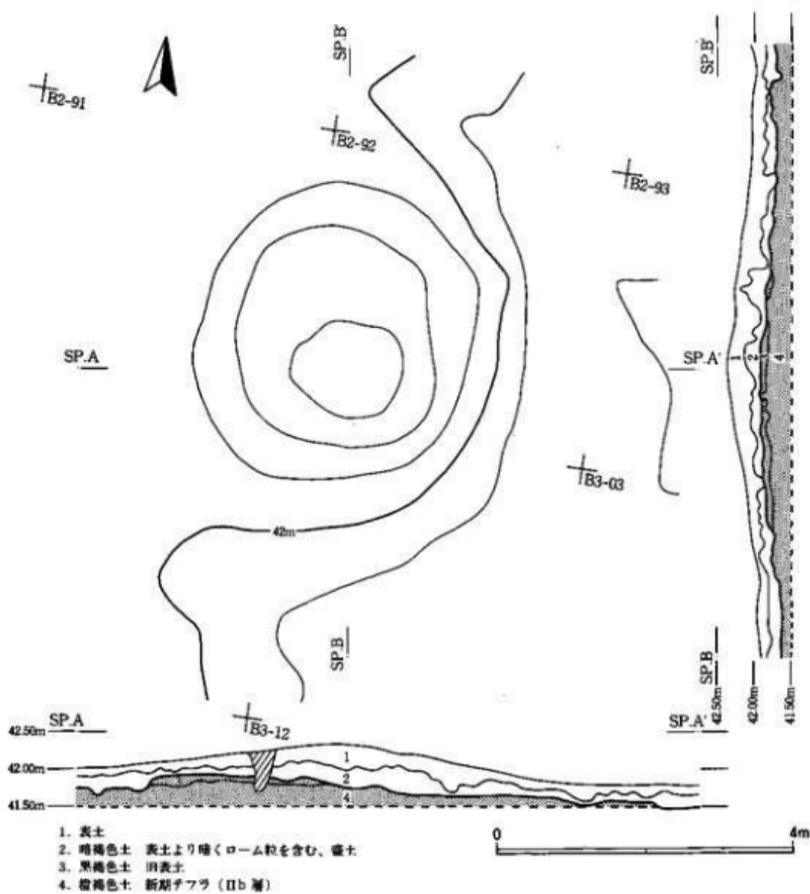
008 (第28図)

位置：B2-53からB3-22にかけて位置する。

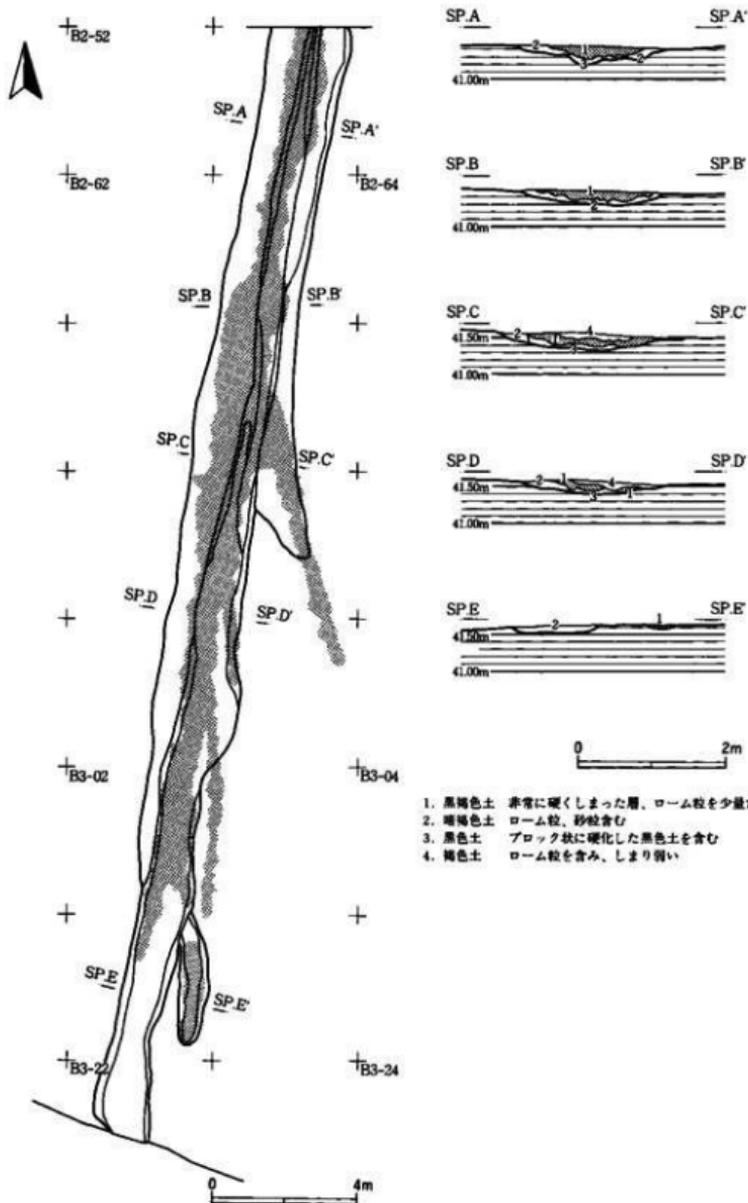
遺構：B2-53からB3-22にかけて直線的に南北に延びる幅2mほどの道路状の遺構である。スクリーントーン部分は非常に堅くしまった層で2～3ヶ所で枝分かれしている。添圧されるため、堅くしまった層の下部には腐食土があり、20cmほどの凹みをつくっている。



第26図 塚1-3実測図 (1/80)



第27区 塚4実測図 (1/80)



第28図 008 平面図 (1/160)

第3節 伊地山金杉遺跡

I. 旧石器時代の遺構と遺物

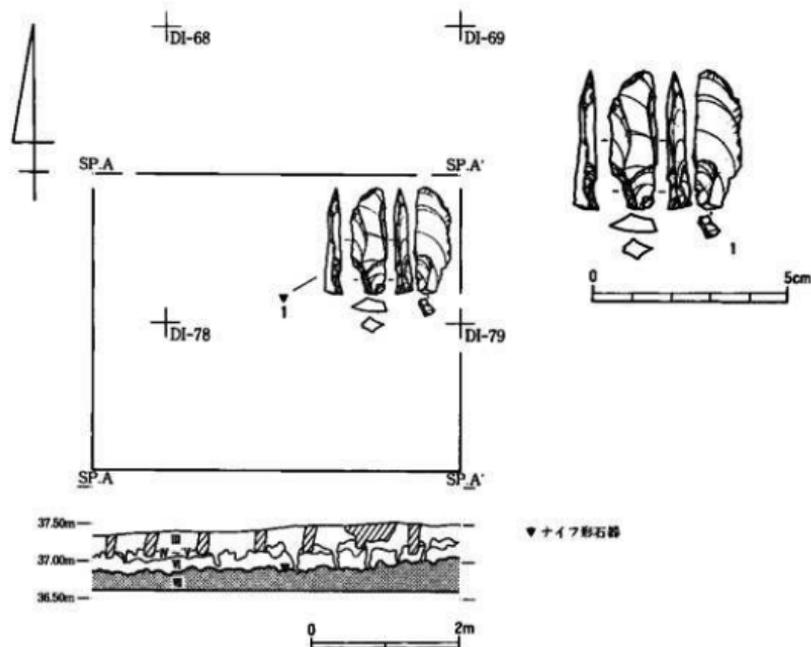
1. 出土状況 (第29図・図版7)

D1-68グリッドから単独で出土している。

出土層位は、VI層下部である。

2. 出土石器 (第29図)

1はナイフ形石器である。打面調整のある石刃を素材としている。右側縁を折断した後、基部の背面と腹面を調整加工を行ない、先端部左側縁に調整加工を行なっている。



第29図 石器出土状況・石器実測図 (1/80・2/3)

表9 旧石器時代石器属性表

標記番号	器種	長さ	幅	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	遺物番号	備考
1	ナイフ形石器	3.5	1.2	0.4	2.5	頁岩	DI-68-0001	単独出土

II. 縄文時代の遺物

縄文土器 (第30図・図版22)

当遺跡からは縄文土器を多く出土しているが、遺構に伴うものは少なく、ほとんど包含層からの出土である。便宜上下記のとおりに分類し、説明していく。

I群土器 早期燃糸文系の土器を一括する。井草式を1類、夏島式を2類とし、さらに施文等により細分した。

II群土器 早期沈線文系の土器を一括する。三戸式を1類、田戸下層式を2類とし、さらに施文等により細分した。

III群土器 早期茅山上層式以降の土器を一括し、施文等により細分した。

IV群土器 前期後半の土器

V群土器 後期後半の土器

I群土器 (1~21)

1類a種 (1・2)

口縁部が外反肥厚し、口唇部に1条の燃紐疋痕と縄文を施して第1文様帯とし、口唇部直下に横位の縄文を施して第2文様帯をつくっている。縄文はRLである。焼成はおおむね良好で堅い焼き上がりである。井草I式と考えられる。

1類b種 (3~6)

口縁部が外反肥厚し、第1文様帯は縄文のみとなり、第2文様帯は胴部の第3文様帯に吸収され消失している。第3文様帯は縦方向の縄文で、口唇部直下には無文部を残すものが多い。6は口縁部の外反する度合いが小さい。井草II式と考えられる。

1類c種 (7)

口縁部形態はa b同様外反肥厚する無文の小形品である。器面は軽くナデを施す程度で凹凸が目立つ。口縁部の形態から井草式と考えて差し支えないであろう。

2類a種 (8~10)

口縁部がやや外反肥厚する土器で、縦方向に燃糸文を施している。8・10は口縁直下から、9は口縁に若干無文部を残すように見えるが、器面が荒れているせいかもしれない。これらの土器は夏島式の範疇に収まるが、口縁部が若干肥厚している点で井草式の流れをくんだやや古手の土器といつてよいかもしれない。

2類b種 (11~16)

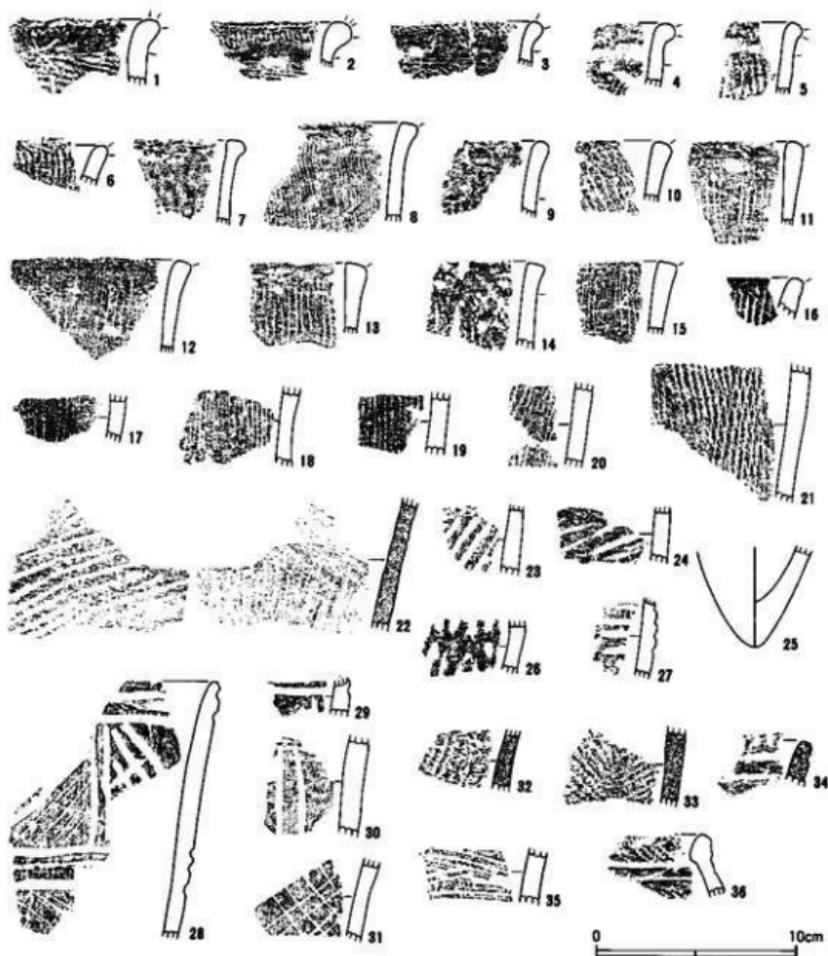
口縁部がほぼ直立し断面が方形を示すもので、縦方向に燃糸文を施している。口縁直下からの燃糸施文であるが、14は若干下位より施している。典型的な夏島式の口縁部形態といえる。

2類c種 (17~21)

a・b種の胴部破片を一括した。縦方向の撚糸を21のように胴部下位で重なり合うところも見られる。

II群土器 (22~31)

1類a種 (22~24) 太沈線文を斜位に施し、内面は粗いケズリにより仕上げている。22は若干繊維を含んでいるが、23、24は含んでいない。胎土には砂粒を多く含み焼き上がりは良好堅緻である。三戸式土器と考えられる。



第30図 グリッド出土縄文土器拓影図 (1/3)

1類b種 (25)

無文の尖底底部破片で胎土の状態から本類に含めた。やはり三戸式と考えられる。

2類a種 (26・27)

太沈線を施したものを本類とした。古手の太沈線で短い縦方向のもの(26)と横方向のもの(27)とがある。施工具は繊維質の棒状工具を使用している。田戸下層でも古い時期のものであろう。

2類b種 (28～31)

太沈線と細沈線を組んでいるもので、横位の太沈線で文様帯を区画し、その間を太沈線と細沈線で埋めている。28は口縁部の破片であるが、口唇部直下に2条横位の太沈線をめぐらし、間を置いて胴部に3条横位の太沈線を施し文様帯として、2条縦方向の太沈線で方形の区画帯を作出し、内部に斜位の太沈線と細沈線を充填している。下位の文様帯部分は細沈線による格子目文が見られる。29、30、31はそれぞれの部分の破片である。城ノ台貝塚や椎の木遺跡などでも同様のモチーフが見られる。田戸下層式でもやや新しい部類になるであろう。

III群土器 (32～34)

a種 (32)

絡糸体圧痕文を縦位に施し、繊維を多量に含む土器である。

b種 (33)

縦の羽状縄文を施し、繊維を多量に含む土器である。

c種 (34)

口唇部に刻み目を施し、横位に太沈線をめぐらせる繊維を多量に含む土器である。

これら、aからc種は茅山上層式以降の早期末の土器と考えられる。

IV群土器 (35)

横位から斜位に半載竹管文を施した土器で、興津式土器と思われる。

V群土器 (36)

若干内弯する口縁に帯縄文を施し沈線により無文部と区画している。後期安行式と考えられる。

土製品・石器 (第31・32図、図版22)

土製円盤 (第31図1～4)

すべて燃糸文系土器の破片を再利用した土製円盤である。

1は径3.1cmの不整円形を呈し、周縁部の加工は比較的雑で凹凸が多い。2は欠損品であるが径4.0cmのほぼ円形を示している。周縁部の加工もかなり丹念に行なわれ丸く仕上げられている。3は径4.6cmのやや楕円形を呈しており、周縁部の加工はあまり良いほうではない。4は径4.8cmの円形を示し、周縁部加工は比較的良い。やや大形の部類にならうか。

すべて縄文早期燃糸文の時期である。

有孔土製品 (第31図5・6)

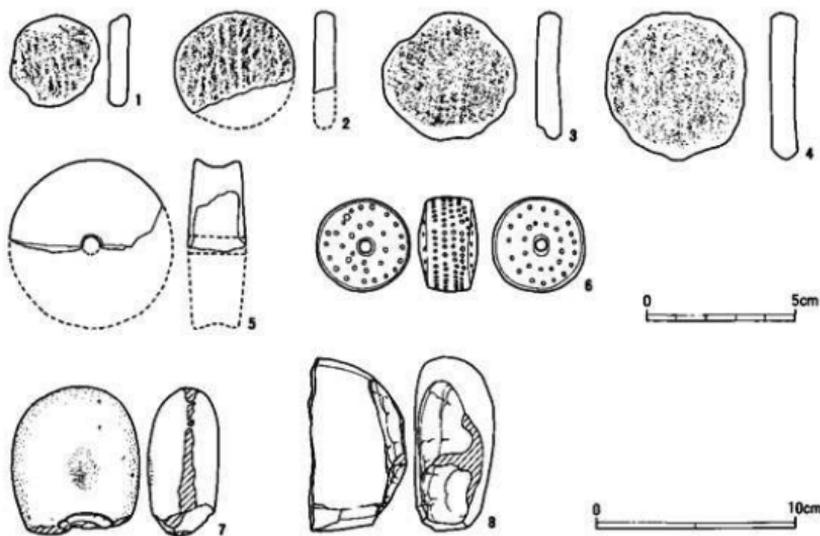
やや厚身の円盤中央に焼成前に小孔を穿った土製品で、無文と有文とがある。

5は大形品であるが中央で半分割れている。直径は推定で5.5cm、厚さは中央部で2.0cm、周縁部で1.5cmを計り、側面部中央は2~3mm凹んでいる。孔の径は6mm程である。器面は粗いケズリを加えるため砂粒の移動痕が目立つ。側面はきれいにナアられている。6は非常に細い円形竹管による刺突を全面に施す完形品で、径3.2cm、厚さ2.0cmを計る。片面は中央の小孔を中心に2重の竹管刺突列がめぐり、もう片方には螺旋状に竹管刺突列をめぐらしている。側面は当初5列の竹管刺突列をめぐらせるつもりで割り付けを行なっているが、左から4列目まで全周させた段階で余白が少なくなり、5列目は数個刺突したところでやめている。

石器

磨石 (第31図7・8)

7は楕円形の磨石で、長軸片面に大まかな剝離を施し、剝離頂部は磨滅して丸くなっている。また、側面から頂部にかけても磨滅痕が認められる。これらの磨滅痕は敲打によるものである。なお、中央部には敲打による凹があり凹石状を示している。8は半分に欠損している磨石で、片面に大まかな剝離を施している。剝離頂部は7と同様に磨滅しており丸味をおびている。その他の面はよく磨られ光沢を発する程である。また、割れた部分の角も取れていることから欠損したのちも継続して使用されていることが窺える。



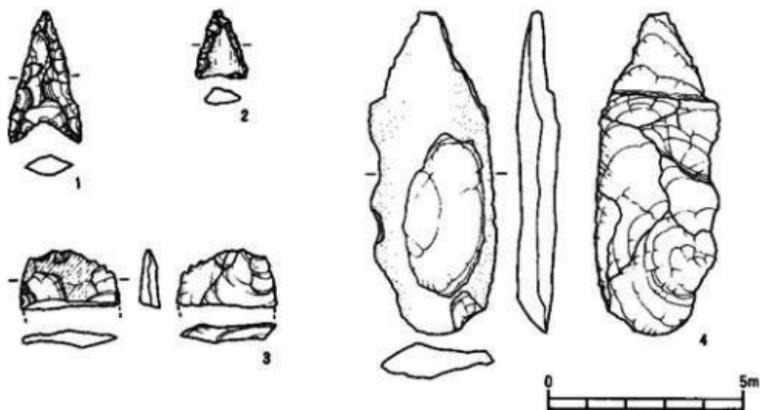
第31図 土製品・石器実測図 (1/2・1/3)

石鏃（第32図1・2）

1は側辺が直線的な細身の石鏃、2は側辺を簡単に加工しただけの小形品である。

剥片（第32図3・4）

3は頭部が残存している。4は腹面が少し赤化し、打点が明瞭でないので火熱による石器内部の熱によって剥離した資料と考えられる。



第32図 石器実測図（2/3）

表10 グリッド出土石器観察表

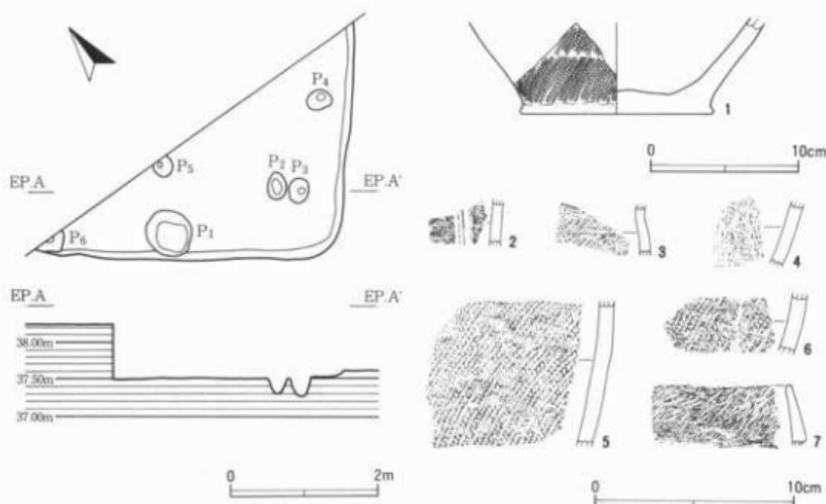
挿図番号	器種	長さ	幅	厚さ(cm)	重量(g)	石材	遺物番号	備考
1	石鏃	3.2	1.8	0.5	2.1	安山岩	1号墳54	
2	石鏃	1.7	1.2	0.4	1.0	安山岩	1号墳71	
3	剥片	2.5	1.5	0.5	1.8	チャート	1号墳63	
4	剥片	8.3	3.1	1.0	23.4	砂岩	1号墳52	

III. 弥生時代の遺構と遺物

011（第33図・図版8・23）

位置：BI-69、CI-60に位置し、2/3以上が区域外となる。

遺構：南側のコーナー部分しか検出できなかったため住居規模は不明であるが、おそらく隅丸方形プランを呈すものと思われる。床面は平坦でよくしまり、壁高は10cm程度と非常に浅くまた、立ち上がりも緩い。床面からはいくつかのピットを検出しているが、P₂が支柱穴の可能性が高い。P₁は入口部分のピットであろうか。他のピットについては位置的にずれており、ま



第33図 001平面・土器実測・拓影図 (1/80・1/4・1/3)

た、それほど良好なものがないため用途不明のピットと考えたい。遺物は数片しか検出されなかった。

遺物：菱形土器の破片が若干出土している。

1は大型品の底部付近の破片で、胴部には附加条縄文が施される。底部には木葉痕が残っている。2は頸部付近の細片で、櫛目文を垂下している。3は頸部から胴上半部にかかる部分で、頸部の無文部が若干うかがえる。胴部には附加条縄文が施される。4から6は附加条縄文が施された胴部破片である。7は口縁部破片で、内傾した折り返し口縁となる。やや乱れた附加条縄文が施される。

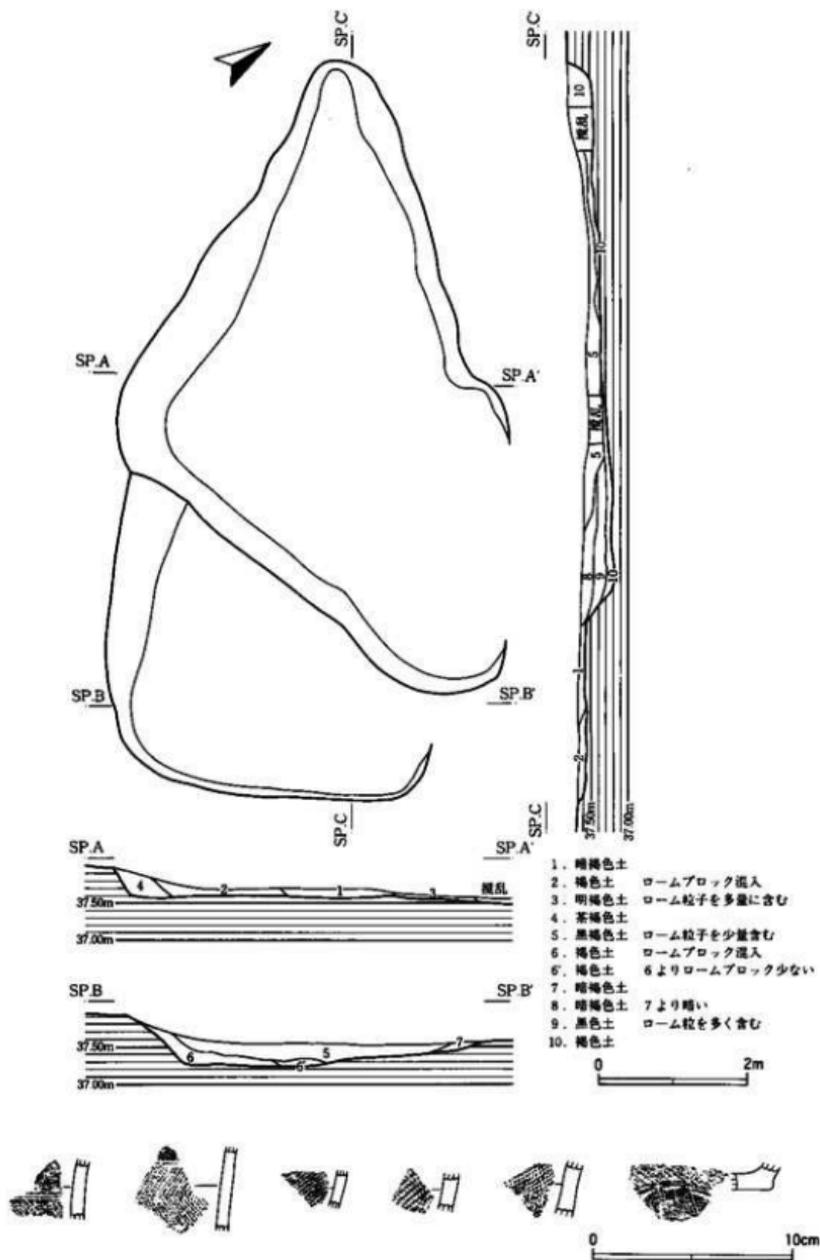
012 (第34図・図版23)

位置：B1-77、78、88に位置する。

遺構：不整形な竪穴状の遺構で2基重複しており、北側をA、南側をBとした。断面観察からAの方が新しい。Aは北に大きく張り出す三角形のプランを呈し、壁のラインはかなり蛇行している。立地がやや東傾斜のため、東側の壁が浅く南寄りでは立ち上がりが消えている壁高は深いところで60cmを計るが緩い立ち上がりを示している。床面は凸凹が激しく、西寄りでも深い。覆土は自然堆積のようである。

Bは隅丸方形のプランを示し、床面はほぼ平坦ではあるが掘り込みが浅く覆土の厚さは平均で10cm程度である。壁の立ち上がりも緩い。やはり自然堆積である。

A、B共に出土遺物はほんの数片である。



第34図 012 A・B平面・土器拓影図 (1/80・1/3)

遺物：共に甕破片が数点出土しているだけである。遺物からはさほど時間差はないようである。1、2は頸部から胴上半部にかけての破片で、2本の櫛目状沈線により無文部と縄文施文部とに分かれている。3から5は胴部細片、6は底部破片である。

014 (第35図・図版8)

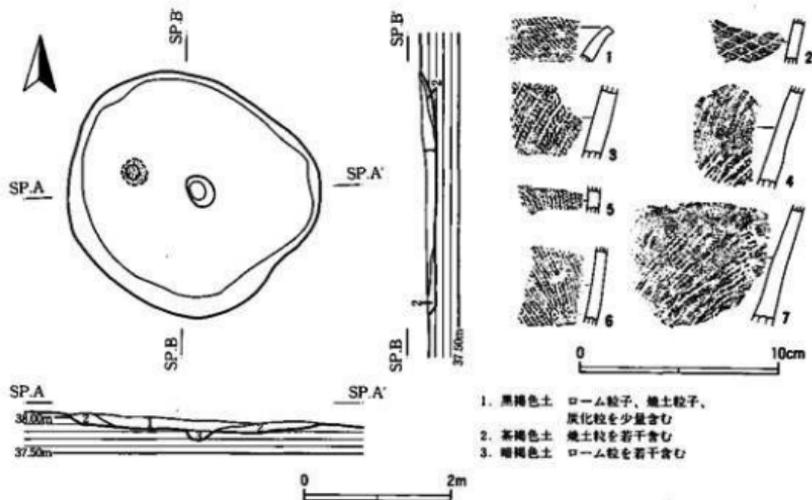
位置：B1-88、89、99に位置する。

遺構：南北3.27m、東西3.42mの不整形円形プランを呈し、東側が洋梨状に小さく張り出す。壁高は15cm前後で立ち上がりは緩い。床面はおおむね平坦であるがさほどしまりはなく、中央部に径40cm、深さ10cmほどの小ピットがある。さらに、西寄りの地点には炉が所在する。住居覆土は自然堆積のようであるが、焼土粒や炭化粒を若干混入している。遺物は住居中央部及び炉周辺より少量出土しただけである。

遺物：破片が数点出土している。すべて細片である。1は口縁部破片で折り返し口縁となる。文様は附加条縄文で、口唇部にまで施されている。2は頸部破片で、格子目状(網目状)に捺糸文が施されている。3から7は胴部破片で、附加条縄文を施している。7は底部に近い部分である。

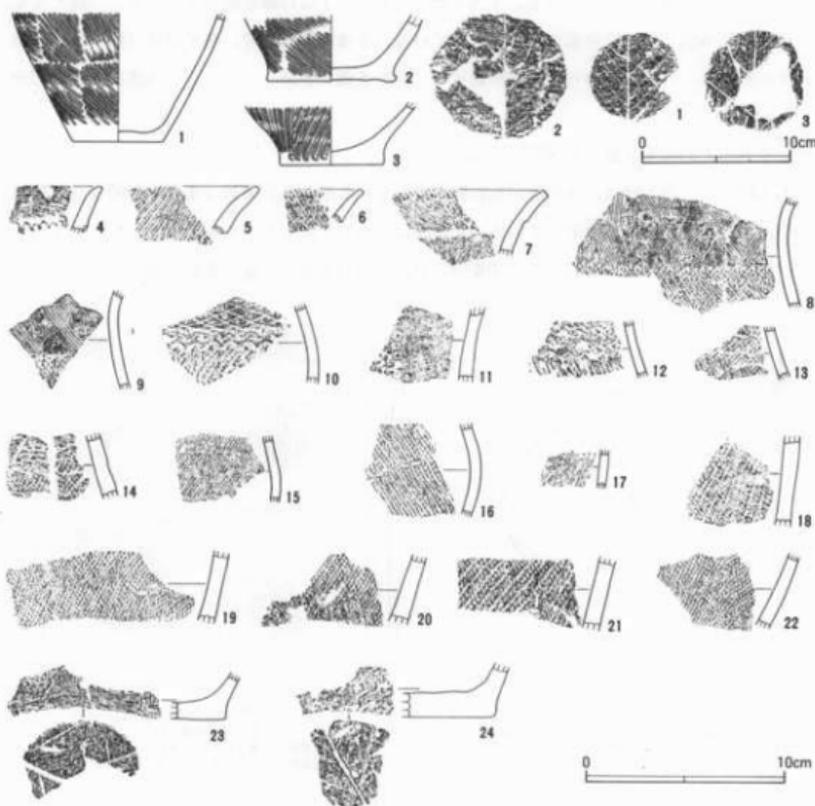
グリッド出土の弥生土器 (第36図・図版23)

本遺跡には、弥生時代の住居跡が数軒検出されているが、その周辺つまり1号墳墳丘下の包含層に多くの弥生土器を検出している。完形品はないが、胴下半部を復元しえたものが1点あるがほとんどは細片で、いわゆる北関東系の胴部に附加条縄文を施す甕形土器である。以下、



それぞれの土器について説明していく。

4から7は口縁部破片で、ともに折り返し状の口縁を呈し緩く外反している。4は、刷毛目状工具による調整痕を口縁帯に残し、口縁帯下部に連続した刺突を施している。5は口縁帯に附加条縄文を施し、6、7はそれが口唇部まで及んでいる。7から9は同一個体で、頸部文様が櫛状工具による格子目文を描いており、胴部の附加条縄文は原体末端をうまく回転させ頸部文様帯とのコントラストを表している。10は頸部文様に網目状捺糸文を施し、2段のS字状結節文をはさんで附加条縄文が施される。11は頸部文様帯で、円形竹管を縦方向に3列連続刺突し、1帯の円形竹管文帯を形成している。また、竹管文帯の上方では横にのぼしているような円形竹管の刺突も見られる。12は頸部文様帯にS字状結節文が4段見られ、13、14では間隔の空いたS字状結節文が見られる。15から22は胴部破片で、いずれも密接した附加条縄文が施



第36図 グリッド出土弥生土器拓影図 (1/3)

されている。23、24は底部破片で、木葉痕が残っている。

実測図1から3において胴下半部の器形が窺えるが、やや腰高の器形を呈すことが窺える。縄文の施文も小単位ごとに繰り返し行なわれている。底部はほとんどが木葉痕である。

これらの土器は弥生後期のいわゆる北関東系の土器群であるが、11のような竹管文を使用する類例はほとんどない。

IV. 古墳時代の遺構と遺物

1号墳（第37～40図、図版9～12、付章）

位置と現況

1号墳は調査区B1・2およびC1・2にわたって所在し、地形的には台地西縁部の傾斜地寸前の平端部に位置する。墳丘の東南側は所有者が違うために畑の境界を境に削平され、西北半も耕作によりかなり地ならしがなされているため座布団状の高まりしか残っていない。残存部分での見かけの径は約30m、高さは耕作により盛り土を崩していることから1m弱である。なお、本古墳より20m北西方向にはもう1基の古墳（円墳）が存在している。

周溝

遺存状況は極めて不良で、確認できた範囲はほんの一部である。したがって墳形がわかるような決め手に欠けているが、ほぼ円形と考えても差し支えなからう。

確認のできた周溝は西側と北側の一部で、西側のそれは幅3.5m、深さは30cmで長さ8mまで確認できるが、南側については攪乱がひどく不明であった。周溝は比較的直線的に延びているが、北端は徐々に深さを減じ主体部の直前で途切れてしまう。北側の周溝は周溝内側の立ち上がり若干認められる程度で外側の立ち上がりは覆土の状況から判断した推定線である。緩やかな円弧を描く北側周溝は、幅が約3.2m、深さは立ち上がりのわかる部分で10cm程度である。覆土は自然埋没であるが、遺物は検出されなかった。

主体部

主体部は、北西側裾部に位置する板石を使用した箱式石棺である。主軸方向はS-60°-Eを指す。掘り方と石棺の方向はほぼ同じである。

掘り方は、開口部長軸で4.0m、短軸北西辺が3.4m、南東辺が3.16mとやや台形に近い長方形を示している。墳底部では長軸3.67m、短軸北西辺が3.04m、南東辺が2.70mで深さ70から90cm前後である。墳底部はほぼ平坦に掘りあげたのち、石棺埋設部分をさらに10cm程度掘り凹め、なおかつ、側壁の板石を立てやすいように幅20cm、深さ10から20cmの長方形の溝を掘り込んでいる。

裏ごめはロームブロックと黒色土が互層をなしほぼ水平に堆積しているが、特別踏み固められた様子はなく、ほぼ均一にしまりのない層序が続いている。ただ、裏ごめ覆土中位までは薄

く幾重にも層位を分割できたが、上部では比較的大まかな埋め戻しがなされたため各層位が厚く、やや斜めの堆積が認められた。また、盗掘によるものか攪乱が至る所で確認された。なお、石棺をつくる板石の接合部分には灰白色粘土を薄く張り石棺を補強している。

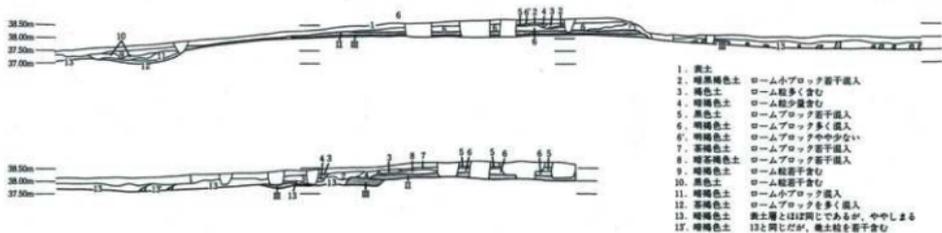
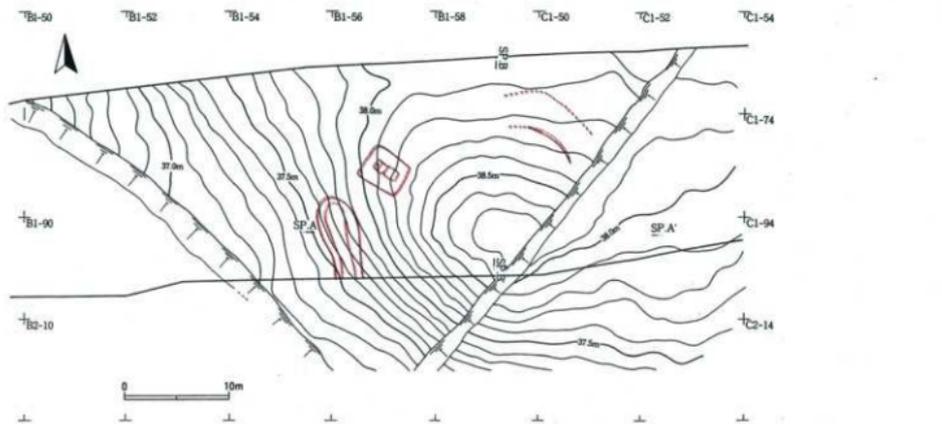
石棺は、雲母片岩の板石を使用した箱式石棺である。床面には側壁設置用の長方形の溝が掘られた内側に4列5枚の板石を敷きつめているが、東から2列目は細かく割れ一部は取り除かれている。盗掘によるものと考えられる。他の列についてはそれぞれ1枚の板石が並んでいる。敷石はお互いの接辺が密着するように面取りがなされているようで、ほとんど隙間のない並びを見せている。側壁は、北辺、南辺とも3枚の板石を使用している。北辺は、幅140cm、40cm、50cmの3枚の板石を並列し、天井部の高さを調整しながら設置している。高さの調整は側溝内への埋め込みの深さで行ない、1枚目と2枚目はほぼ基底部に接するように、3枚目は長さが短いため基底部から20cmほど浮かしている。全体的にやや内傾するように立てている。南辺は幅140cmと110cmの板石を並列しさらに接合部分に幅50cmの板石を裏面に補強用に置いている。2枚の板石については1枚の板石を二分割していることが接辺の面取りや材質から窺える。奥壁は2枚とも底辺が狭い台形状を示し、床石面で10～20cm側壁との間に隙間ができています。天井部の高さは側壁の高さとうまく調整しほぼ一致している。奥壁は共に内傾するように立てられている。天井部蓋石は幅100cmほどにそろえられた長方形の板石を3枚使用し、東側から長さ120cm、90cm、50cmを計る。中央の蓋石は東側の一部が欠けその破片が石室内に崩落し散在している。さらに、両側の蓋石の側辺よりも10cmほど南側にづれており、同所の掘り方上部に攪乱が入っていることから、明らかに盗掘による蓋石のづれと考えられる。

遺物は、石棺内からは床面に散在するわずかな人骨の細片と歯の部分で西側床面より検出されただけであった。ほとんどの遺物は石棺外の掘り方上面に集中し、石棺内に埋葬された人骨片が主に石棺北側に散乱していた。鑑定の結果、壮年の男性2体、女性1体が埋葬されていたことが判明した。詳しくは付編を参照されたい。また、鉄鏃や直刀片もほとんどが人骨に混じって出土している。おそらく、中央の蓋石を開けて、石棺内の遺物を掻きだしているものと思われる。なお、石棺東側の掘り方中位からは鉄製馬具が出土しているが、これは原位置を保っている。

1号墳出土鉄製品 (第40図)

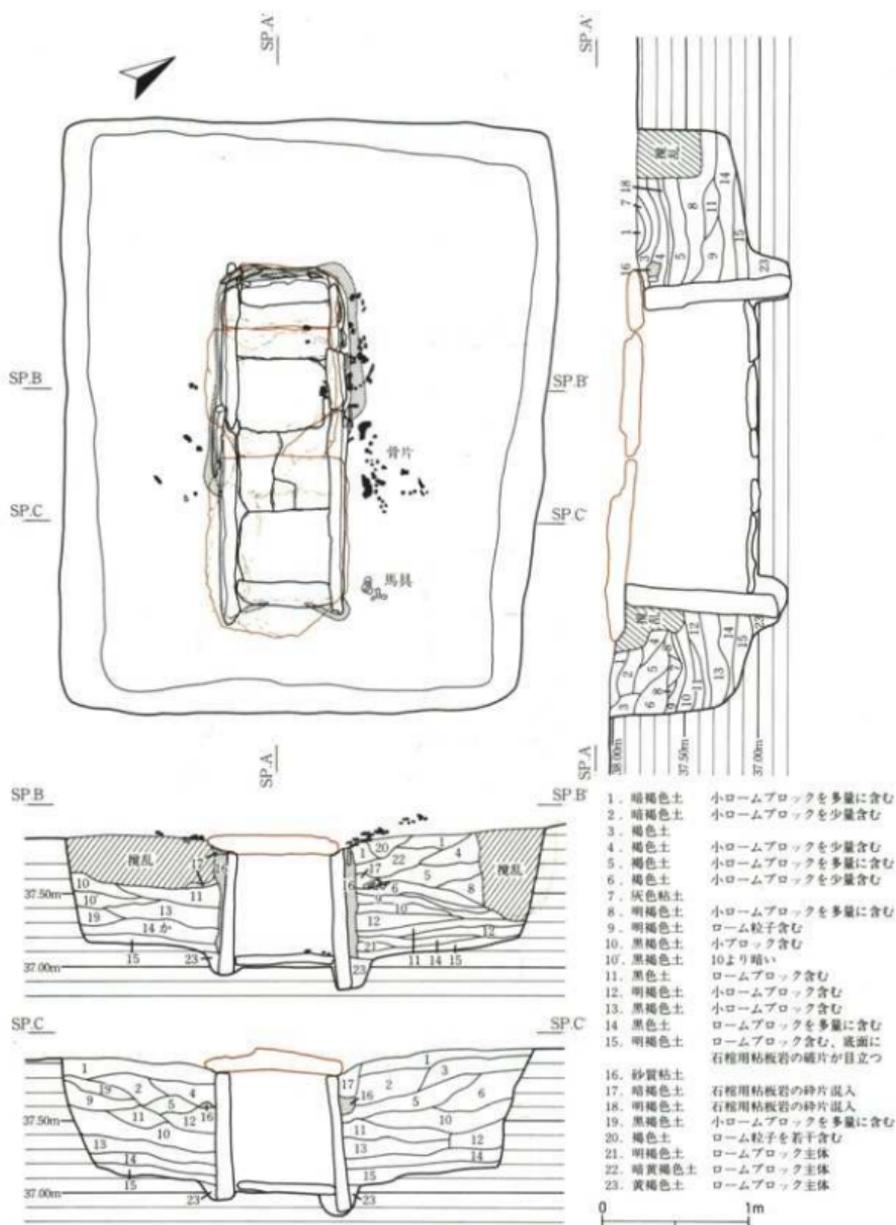
馬具 (1～3)

1は鉄製素環鏡板付轡である。組として完形品であるが、中央から半折りしたような状態で出土したため、原状復元して実測した。素環の鏡板は、径8mmの鉄棒を用い、楕円形状に造られる。図左側がやや大きく、長径7.7cm、短径6.1cm、右側は長径7.2cm、短径5.7cmを測る。上方に3.5×1.8cmの立間が付き、2.3×0.7cmの長方形孔があげられる。上辺は片丸造りとなる。引手は全長15.2cmを測り、くの字状に折れ曲がった径2.8cmの引手壺がそなえられている。銜は



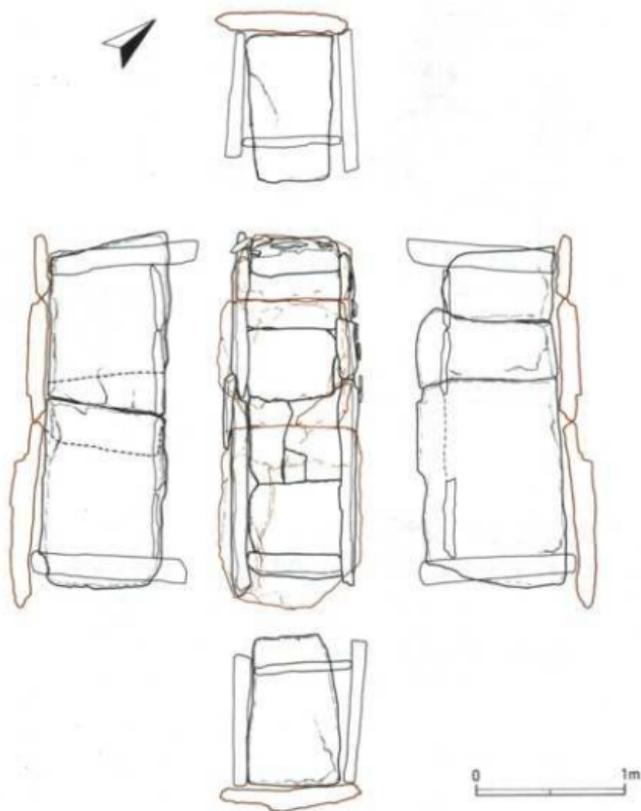
1. 黄土
2. 暗茶褐色土 ローム小アロック若干混入
3. 褐色土 ローム较多く含む
4. 暗褐色土 ローム粒少混含む
5. 黒色土 ロームアロック若干混入
6. 暗褐色土 ロームアロック多く混入
7. 暗褐色土 ロームアロックやや少ない
8. 暗茶褐色土 ロームアロック若干混入
9. 暗褐色土 ローム粒若干含む
10. 黒色土 ローム粒若干含む
11. 暗褐色土 ローム小アロック混入
12. 暗褐色土 ロームアロックを多く混入
13. 暗褐色土 黄土層とはほぼ同じであるが、ややしよる
- 13'. 暗褐色土 13と同じだが、黄土粒を若干含む

第37図 1号墳実測図 (1/160)

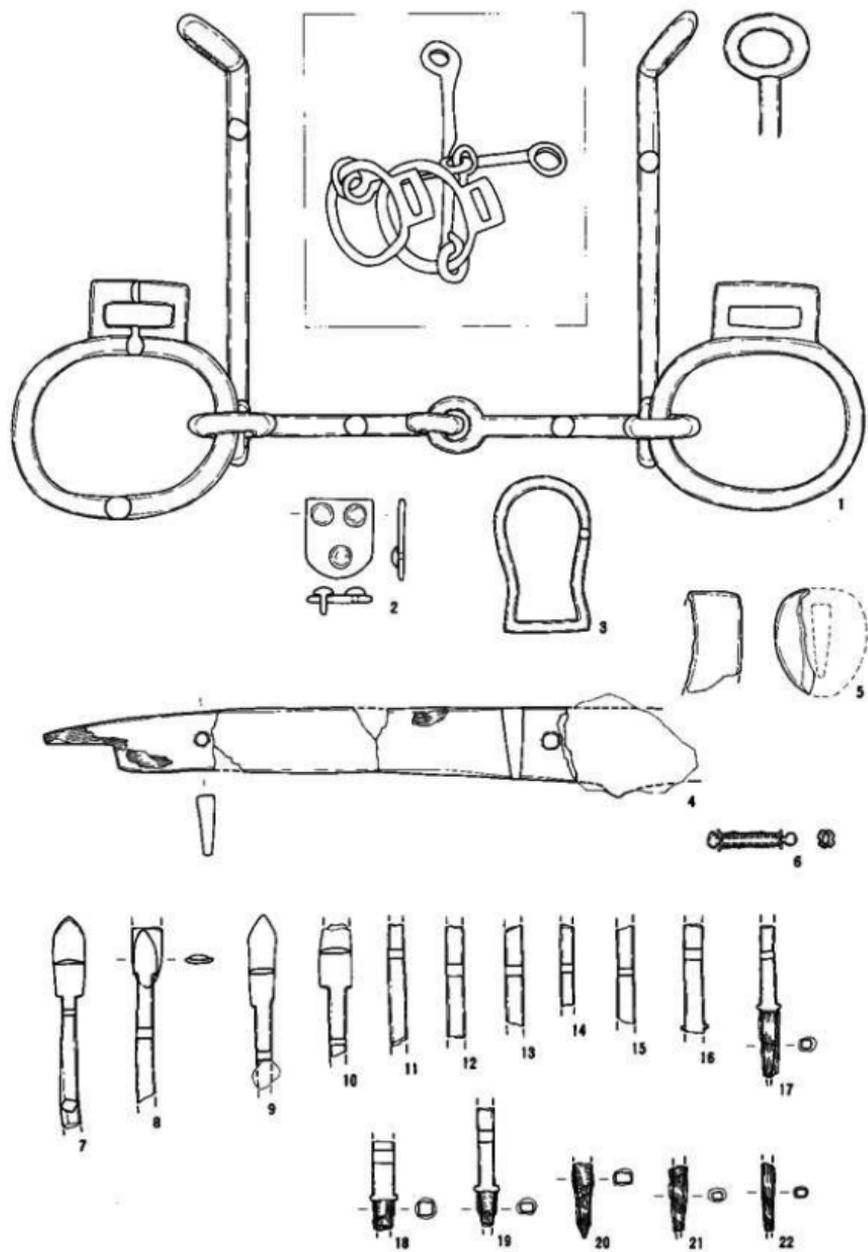


第38図 1号墳石棺掘り方断面・遺物出土状況図 (1/80)

二連式で、右側の2つの環は90°ねじれている。1本の長さは9.3cmを測る。2は鉄製の飾金具である。下側が丸味を有するこはぜ形を呈し、全長2.7cm、幅2.4cm、厚さ0.2cmを測る。上辺両側と下辺中央に3本の鉸が打ち込まれている。鉸頭部は錆のため詳細な形状は不明であるが、径0.8cm程の半球形を呈すると思われる。脚部は上辺左側のみ遺存している。裏面地金から0.4cm突出している。3は縮具である。径0.4cmの鉄棒を曲げて造られるが、側縁下方に弱いくびれを施している。刺金は認められない。全長5.3cm、最大幅3.2cm、下辺幅2.9cmを測る。



第39図 石棺実測図 (1/80)



第40图 铁製品実測图 馬具出土状况

直刀 (4・5)

4は茎片で、直角の隅状尻となる。茎幅2.4cm、棟厚0.7cmを測る。茎尻近くと身部側に目釘孔が計2ヶ所穿たれている。木質の遺存が若干認められる。5は欠損品で詳細は不明であるが、はばきであろう。卵倒形を呈すると思われ、内面に木質が遺存している。

両頭金具 (6)

全長3.0cm、筒部径0.5cmを測る。鉄製の板を筒状にし、両端を花卉状に分割して折り曲げている。両端部の破損が顕著なためいくつに分割されているかは判断できないが、4～6程と想定される。筒の内側には棒状の金具が差し込まれている。頭部は笠形を呈するが、図右側は変形しており、円盤状となる。これは、一端が笠形となる筒の径より小さい鉄棒を左側から差し込み、筒から外れないように右側の頭部を敲いて筒径より大きくしたためである。筒の外側には全体に木質が遺存している。木目の方向は本体と直交している。弓の飾りであろう。

鉄鏃 (7～22)

7～10は鏃身から篋被ぎにかけての破片である。いずれも片丸造りの剣身形の身部を呈する。7は身部がやや幅広で、篋被ぎに向かい徐々に幅を狭める。関の造りはしっかりしている。篋被ぎは茎側に向けて厚さを増している。鏃身長2.7cm、幅1.1cmを測る。8は錆により2個体の身部が重なっている。正位状態の身部はかなり小さく、三角形状に近くなる。9は細身となり、鏃身長3.1cm、幅0.9cmを測る。関の形態が特徴的で、片側がほぼ直角で、一方が無関に近くなる。10は先端部を欠くが、最大幅を関部に有するものであろう。11～15は篋被ぎ片となろう。16～19は篋被ぎから茎にかけての破片である。棘は方形を呈して突出している。20～22は茎片で17～19とともに矢柄の木質が遺存している。

V. 奈良・平安時代の遺構と遺物

008 (第41図・図版9)

位置：D1-86、87、96、97に位置し、一部調査区外となる。

遺構：確認面はローム上面で掘り込みが浅く、全体的に遺存度も良くない住居跡である。主軸の長さは入口側の壁の立ち上がりが確認できないため不明であるが、横軸は4.2mを計り、やや不整形な隅丸方形プランを呈すようである。主軸方向はN-35°-E、北壁にカマドを設ける。掘り込みが浅いため南側の床面からの壁の立ち上がりは確認できず、カマド側の壁高も15cm程度であった。床面は全体的に平坦であるが軟質で、柱穴、周溝等は検出できなかった。遺物はカマド周辺より多く出土しているがほとんど細片である。

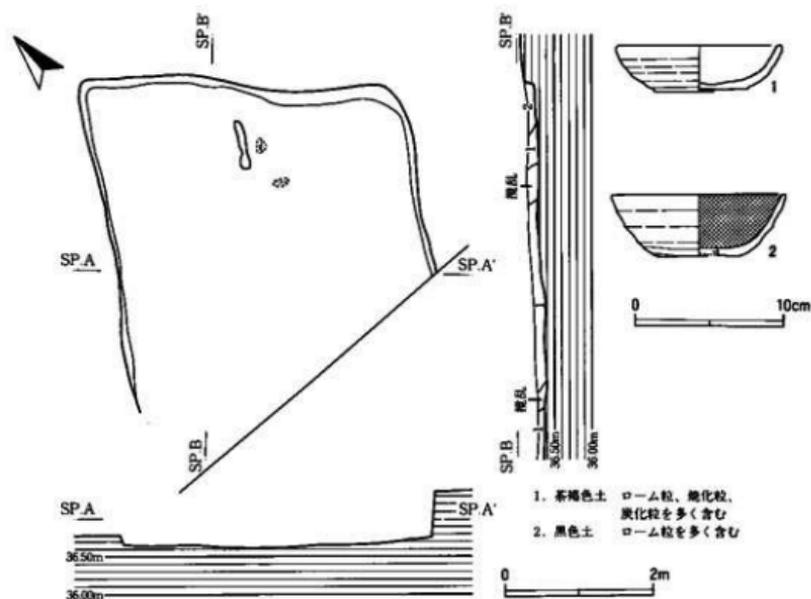
カマド：北壁中央に位置するが、遺存度が悪く構築材の山砂と焼土が若干検出された程度である。カマド掘り方はかなり浅いようで明確には確認できなかった。遺物は細片を集中的に出土している。

遺物：杯が2点出土している。

1は底部糸切りのまま無調整となる杯で、底部径に対して口縁部径がかなり大きい形態を示している。2は内黒の杯で、底部は糸切り、体部下端から底部周縁は回転ヘラケズリされる。9世紀後半の時期である。

表11 008出土土器観察表

神田 番号	器種	法量 (cm)		遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎土	色調	焼成	備考
		口・底・高								
1	杯	11.2 6.3 3.2		5%	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り	R	砂粒多 スコリア 粒	淡黄褐色	良好	当住居にかかる礎部 グリッドより検出
2	杯	11.2 6.3 3.2		7%	体部内面ミガキ(織文風) 体部外面ヨコナデ 底部周縁回転ヘラケズリ 底部糸切り	R	砂粒多	黄褐色	良好	内黒



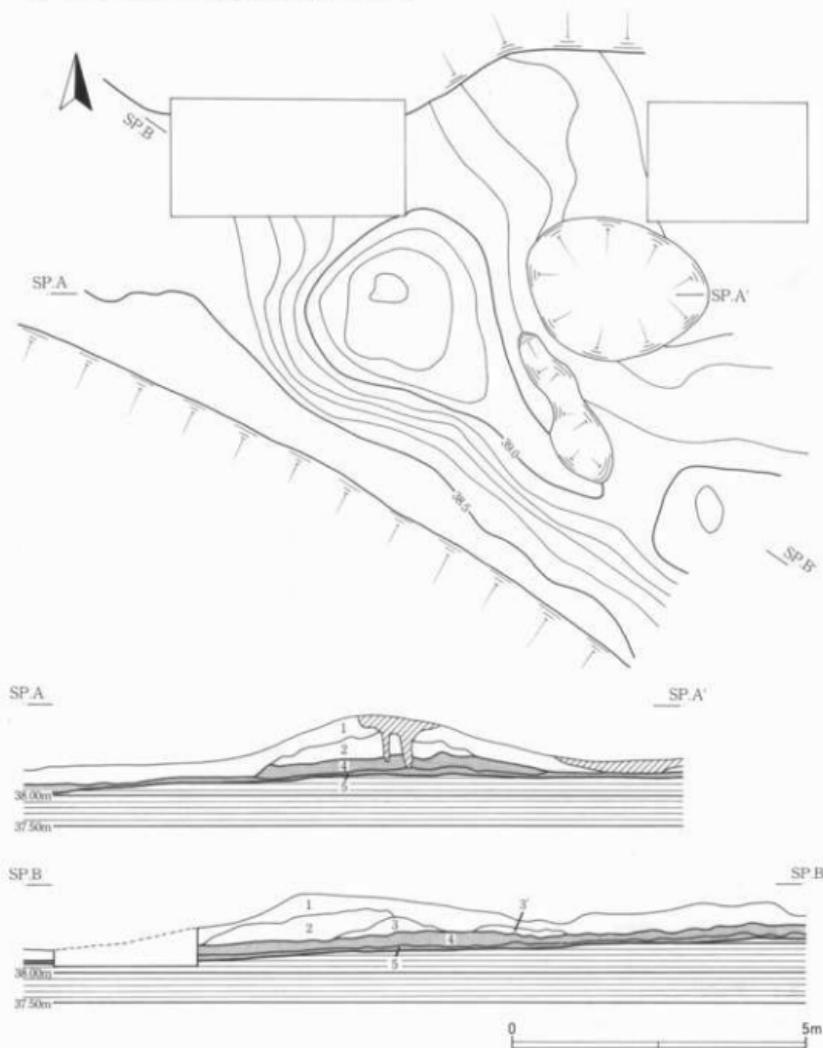
VI. 他の遺構と遺物

塚1 (第42図)

位置：E1-76周辺に位置する。

遺構：見掛け上は北側、両側の耕作により削平される間を土手状に東西方向に連なる部分が

若干の高まりをもっている程度のもので、高さは40~50cmほど、頂部は西寄りにある座布団上の塚である。形状は不整形で、南側から北西側にかけてやや急傾斜になるが、北側から東側にかけては緩傾斜である。北西辺が直線的であることから、方形の塚である可能性が大きい。盛土は旧表土上にわずかに積み上げる程度で、急傾斜の部分では旧表土をわずかに掘り込んでいる。なお、東側に大きな攪乱坑があいている。

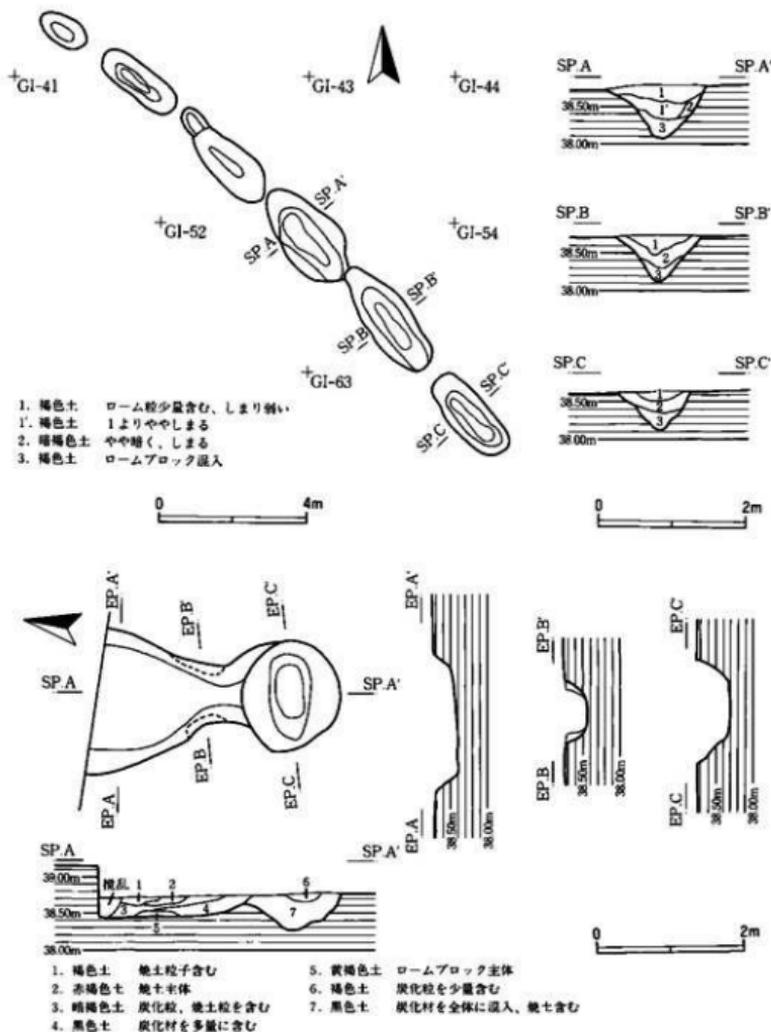


第42図 塚1実測図 (1/100)

001 (第43図)

位置：G1-31からG1-63に位置する。

遺構：北西から南東方向に連なる土壌列である。土壌は6基あり、すべて長楕円形を呈しほぼ等間隔で長軸方向に連なっている。それぞれの土壌の断面は「V」字形をしており、深さは50cmほどであるが、北西に向うに連れて次第に浅くなる。土壌覆土下位にはロームブロックを



第43図 001-002 平面図 (1/160・1/80)

多く含む層がある。遺物が認められないので時期については不明であるが、かなり新しい時期のものであろう。

002 (第43図)

位置：F1-49に位置し、一部調査区外となる。

遺構：瓢形の炭ガマである。確認面がローム上面であるため遺構の下位部分しか残っていないが、焚口部分は径1.5mほどの円形を呈し、深さ50cmほどの☆状をなしている。カマ本体は楕円形をとるようで、幅約2mを計る。焚口部との連結部では幅80cmほどに狭まり、また、底面も高まりをもっている。さらに、同部分では壁材として使用した山砂が焼けて硬化し赤色に変色している。本体においても同様の壁材が使用されているようであるがあまり遺存度は良くない。底面はほぼ平坦である。

炭ガマは製鉄用燃料や商品生産跡として古くから利用された歴史があるが、つい最近まで利用している例もあり、本遺構は伴出遺物がないため時期決定には決め手を欠くが、近・現代に近い時代のもと考えて良いようである。

003 (第44図)

位置：F1-56に位置する。

遺構：長径170cm、短径80cmの長円形を呈し、底面は階段状に2段となり、深いほうで45cm、浅いほうで30cmを計るが凸凹がある。壁面は比較的急傾斜で立ち上がっている。覆土は自然堆積であるが、遺物は出土しなかった。

004 (第44図)

位置：F1-66に位置し、003に隣接する。

遺構：長径108cm、短径75cmの楕円形を呈し、深さは40cmを計る。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは良好である。遺物は出土品かった。

005 (第44図)

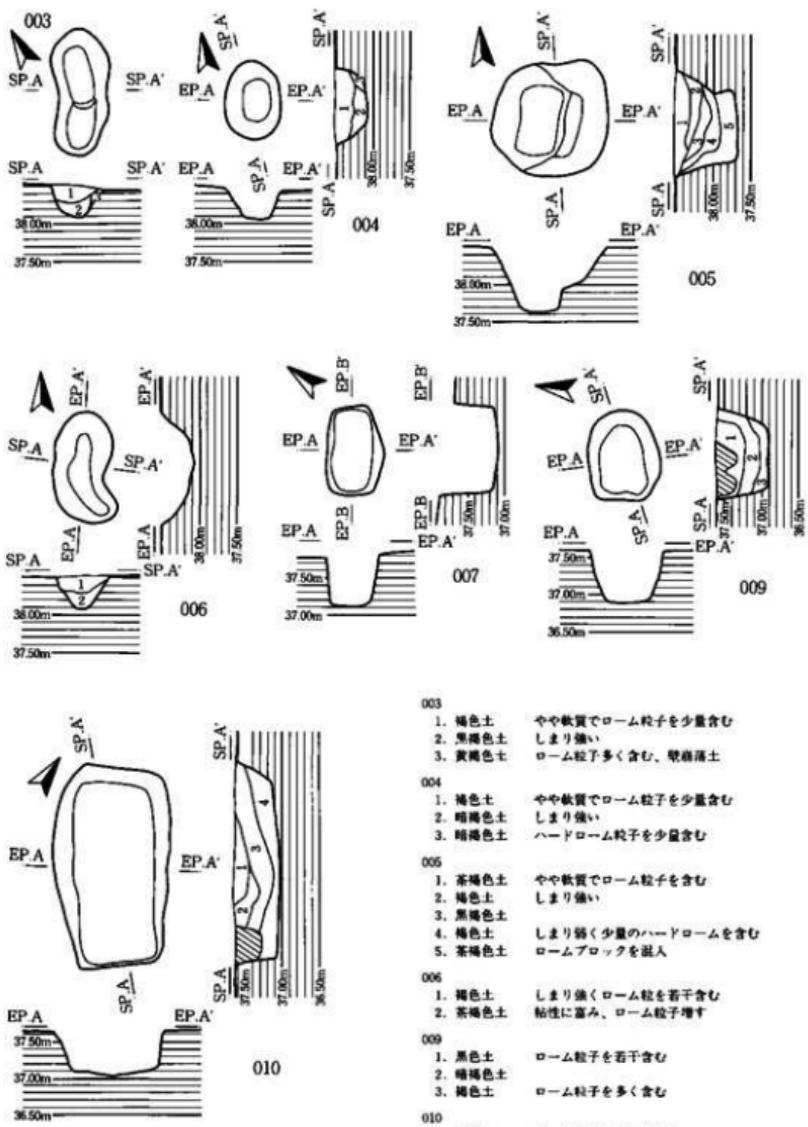
位置：F1-64、65に位置する。

遺構：上端では円に近い隅丸方形を呈しているが、底面は西寄りに隅丸長方形で偏り東側に階段状の段を土壌中位にもつ。両辺とも150cm程度である。底面までは深いほうで85cm、中段で50cmでともにほぼ平坦である。流れ込みと思われる遺物が若干出土した。覆土は下位にロームブロックを多く含む層が堆積しているが、その他は自然埋没である。

006 (第44図)

位置：F1-26に位置する。

遺構：不整形な土壇で覆土は自然埋没ではあるが、しみ状であまりはつきりしない層序である。底面は凸凹があり、壁面もだらりとしていることから、明確に土壇とは言いつれない。長径150cm、短径80cm、深さは40cmを計る。



- 003
 - 1. 褐色土 やや軟質でローム粒子を少量含む
 - 2. 黒褐色土 しまり強い
 - 3. 黄褐色土 ローム粒子を多く含む、軟弱層土
- 004
 - 1. 褐色土 やや軟質でローム粒子を少量含む
 - 2. 暗褐色土 しまり強い
 - 3. 暗褐色土 ハードローム粒子を少量含む
- 005
 - 1. 茶褐色土 やや軟質でローム粒子を含む
 - 2. 褐色土 しまり強い
 - 3. 黒褐色土 しまり弱く少量のハードロームを含む
 - 4. 褐色土 ロームブロックを混入
 - 5. 茶褐色土
- 006
 - 1. 褐色土 しまり強くローム粒子を若干含む
 - 2. 茶褐色土 粘性に富み、ローム粒子増す
- 009
 - 1. 黒色土 ローム粒子を若干含む
 - 2. 暗褐色土
 - 3. 褐色土 ローム粒子を多く含む
- 010
 - 1. 黒色土 ローム粒子を多量に含む
 - 2. 暗褐色土 小ロームブロックを混入する
 - 3. 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む
 - 4. 褐色土 ロームブロックを多量に混入する

第44図 003~007・009・010 平面図 (1/80)

007 (第44図)

位置：E1-49に位置する。

遺構：長径120cm、短径80cm、深さ70cmの長方形プランを呈す。底面も長方形で堅くしまり、壁は垂直に立ち上がる。遺物は出土しなかった。覆土は自然埋没である。

009 (第44図)

位置：C1-83、84に位置する。

遺構：長径1.2m、短径1m、深さ70cmの卵形の土壇である。底面はほぼ平坦で壁の立ち上がりは垂直に近いしっかりした掘り込みみである。遺物は出土しなかった。覆土は自然埋没である。

010 (第44図)

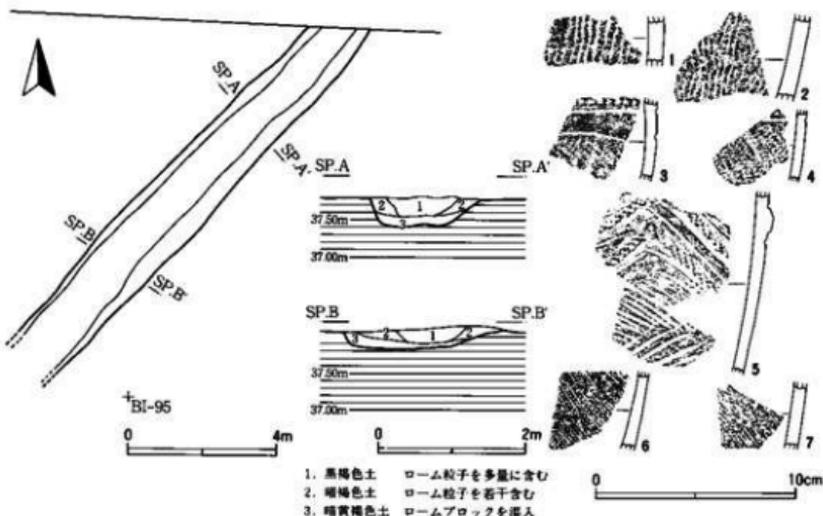
位置：C1-71に位置する。

遺構：長軸2.6m、短軸1.5mの長方形プランを呈し、深さ60cmを計る。長軸方向はN-34°-Wを指す。底面は中央がやや凹むがほぼ平坦で堅くしまり、壁面は若干崩壊しているところもあるが垂直に立ち上がる。覆土にはローム粒子を多く含んでいることから、埋め戻している可能性が高い。遺物は出土しなかった。

013 (第45図)

位置：B1-84、85に位置し、区域外へ延びていく。

遺構：直線的に北東方向に延びる溝状遺構で、当初1号墳の周溝と思われたが区域外に延びていくため不明な点が多い。溝の幅は広いところで1.8m、狭いところで1.5m、深さは30~40cm



第45図 013 平面・土器拓影図 (1/80・1/3)

である。側壁の立ち上がりは比較的なだらかで、底面は平坦である。覆土は自然埋没であった。

遺物：混入品と思われる縄文及び弥生土器が数点出土している。

1、2は燃糸文系土器の胴部破片で、縦方向に燃糸が走っている。3、4はコンパス文風の磨消縄文を施す深鉢胴部破片で、上部には連続刺突文がうかがえる。5は2段の三角形に区画した帯縄文をもつ深鉢口縁部付近の破片で、帯縄文間は無文に、区画内部は羽状の沈線が充填されている。後期安行式である。6、7は弥生北関東系甕の胴部破片で、附加条縄文が施されている。

第4節 伊地山石塔前遺跡

I. 旧石器時代の遺構と遺物

1. 層序区分(第8図)

I層： 黒褐色土層。耕作土。ハードロームをまばらに含む。

II層： 暗褐色土層。

III～IV層： 明褐色土層。ソフトローム層。

V層： 暗褐色層。第1黒色帯に相当すると思われる。かなり残存状況が悪く、ブロック状を呈する。

VI層： 黄褐色土層。ATブロックが明瞭にみられる。非常に砂っぽく、よくしまっている。

VIIa層： 暗明褐色土層。硬質の赤黒のスコリアを多く含む。

VIIc層： 暗明褐色土層。VIIa層より黒色味が強く、ややクラックが発達しやすい。

VIII層： 明褐色土層。微量の暗褐色の粒子を含む。ややしめっぽい。

IX層： 灰明褐色土層。武蔵野ローム最上層。水っぽく、軟質。あまり灰色味を帯びていない。

2. 第1文化層

第1文化層は尖頭器石器群をその内容にもつ石器群である。石器の検出層準はIII層からIV～V層にあたり、III層の下部に最も集中する。平面分布・垂直分布・石器製作技術からみてIII層下部に生活面をもつ石器群と思われる。石器の総点数は234点出土した。石器集中箇所は、3ヵ所検出され、第1ブロックが最も質・量とも充実している。

(1) 第1ブロック(第46・47図、図版13・24)

a. 出土状況(第46図)

III層からIV～V層にかけて出土しており、III層下部に最も集中する。平面分布は約4×4mの範囲から出土し、西側の約2×2mの範囲に碎片が密集している。その密集部の周辺に、尖頭器・彫器・削器が分布している。西側の碎片の密集している地点は、ほとんど12～15のよう

表12 第1文化層器種別組成表

ブロック 器種	1	2	3	計
尖頭器	1	3	1	5
彫器	2			2
削器	5			5
二次加工の ある剥片		1		1
微細剝離痕 のある剥片	3		6	9
剥片	38	1	7	46
砕片	166			166
計	215	5	14	234

表13 第1文化層石材別組成表

ブロック 石材	1	2	3	計
珪質頁岩	215	5	10	230
チャート			2	2
ノノウ			1	1
黒曜石			1	1
計	215	5	14	234

な尖頭器の調整剥片で占められており、剥片がほとんど含まれないことから、尖頭器の調整加工を行なった形跡を残す分布を示している。その周辺から尖頭器・彫器・削器という Tool が出土しているが、尖頭器・削器は折れている。これらは、尖頭器の調整加工を行なった場所で刃部再生を行なおうとして失敗したため廃棄したことも想定される。

b. 出土遺物 (第47図)

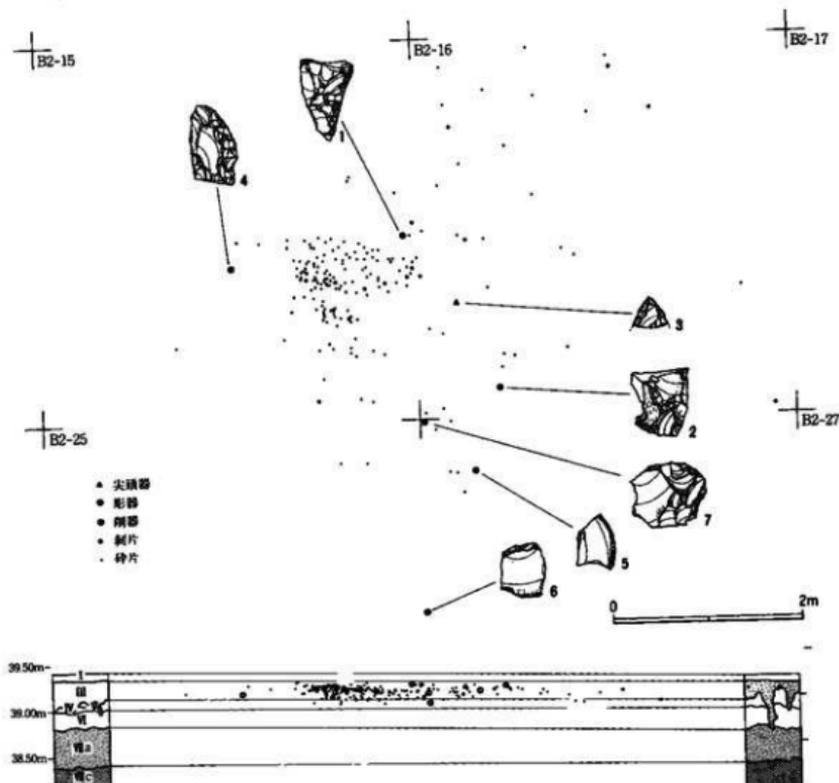
総計215点出土した。器種組成は、尖頭器1点、彫器2点、削器5点、微細剝離痕のある剥片3点、剥片38点、砕片166点である。石材組成は、すべて珪質頁岩である。

1は彫器である。上辺を折り取ったあと、右上端部から2回の櫛状剝離を、左側面から2回の長い櫛状剝離を行なっている。右側面に一連の細かな調整加工を行なったあと、上面に右側縁から1回の櫛状剝離を行なっている。2は彫器である。縦長剥片を素材として、腹面下端部に調整加工を行ない、上部を折り取っている。その後、上端右側から2回の櫛状剝離がみられる。1・2とも、彫刻刀面に微細剝離痕がみられ、使用に関するものと思われる。3は尖頭器である。裏面の左側面の下端部が最終調整となっており、折れ面と打点と一致することから、尖頭器の未製品であると推定される。4は削器である。面的な調整加工が行なわれている。3と同様に右側面下端部が最終調整となっており、折れ面と打点が一致することから、削器あるいは尖頭器の未製品であると推定される。5は削器である。左側縁に小さな調整が連続的に行なわれている。上下・右側縁は折れている。背面は大きい平坦剝離面で構成されており、尖頭器の調整剥片を素材にしたものと思われる。6は削器である。打面部側の腹面に調整加工を行

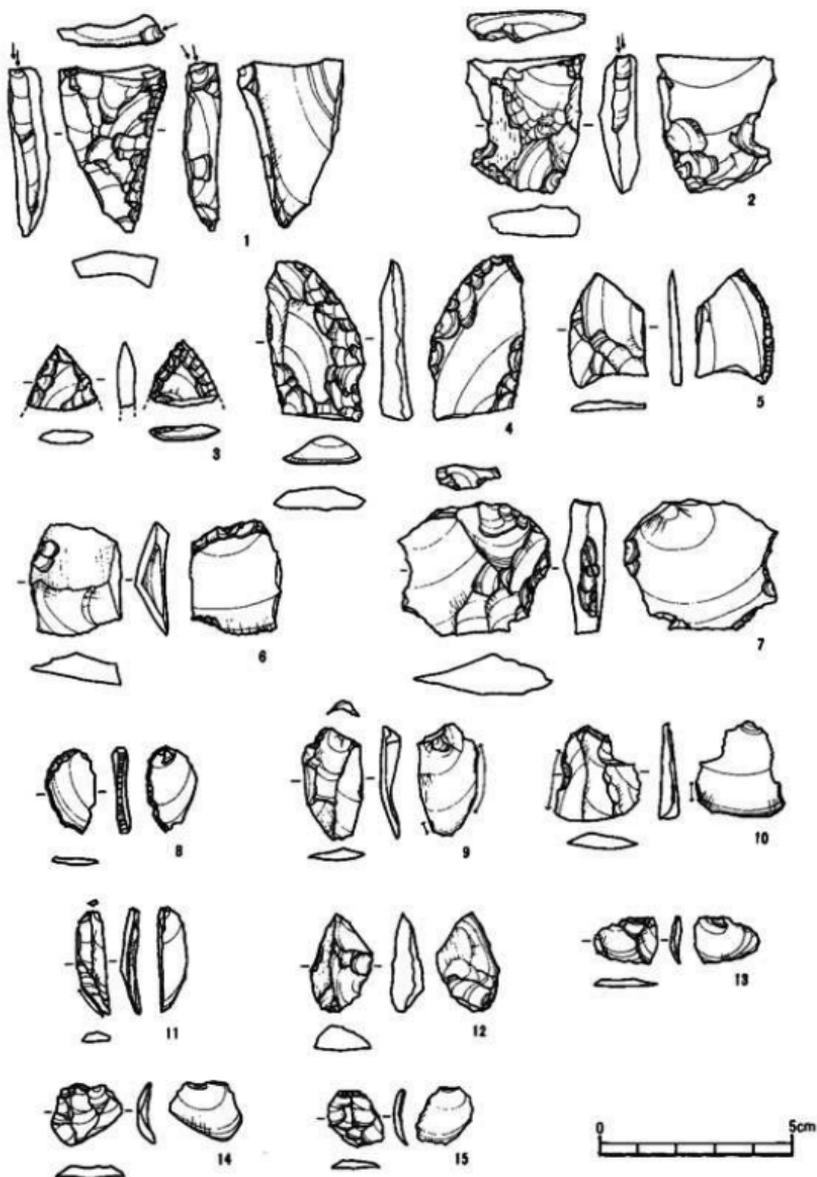
なっている。下部には、微細剥離痕がある。7は削器である。多方向から剥離する、剥片生産技術によって生産された剥片を素材としている。左側縁は塊状に小さな調整を行ない、右側縁は階段状の調整加工を行なっている。8は削器である。小さな調整加工が全周にまわっている。5の調整加工のあり方と似ている。9・10・11は微細剥離痕のある剥片である。12～15は尖頭器の調整剥片である。いずれも、背面は打面側小さな調整加工を行なった形跡があり、打面は線状を呈し、剥片の側面形状は「し」の字状を呈する。このブロックから出土している剥片・碎片のほとんどは、12～15のような特徴をもっており、尖頭器の調整加工に関するものと思われる。

c. 技術的特徴

彫器の製作技術は、幅広の剥片を素材として、全体形状を成形加工した後に、折断し、折断



第46図 第1ブロック器種別分布図 (1/60)



第47図 第1ブロック石器実測図 (2/3)

面から種々の剥離を数回行なっている。尖頭器の製作技術は、3のように比較的薄い剥片を素材として、周辺に平坦であるが奥まで入らない調整加工を行なうことが特徴である。4・5・8の削器の調整加工にもこのような特徴があらわれており、尖頭器の未製品としてとらえられるかもしれない。このブロックでは、1・2・4・5・6・7のような石器の素材となるような剥片は検出されていない。3cm以下の尖頭器の調整加工に関する剥片・破片が9割以上(215点中204点)を占めており、尖頭器の調整加工を行なった形跡を強く残すブロックである。

表14 第1ブロック石器属性表

検出番号	器種	長さ	幅	厚さ(cm)	重量(g)	石材	遺物番号	備考
1	彫器	4.2	2.8	0.8	8.9	珩質頁岩	B2-15-49	
2	彫器	3.4	3.0	0.8	9.7	珩質頁岩	B2-16-37	
3	尖頭器	1.8	1.6	0.3	0.9	珩質頁岩	B2-16-39	頭部
4	削器	4.3	2.4	0.7	7.9	珩質頁岩	B2-15-18	
5	削器	2.7	2.0	0.3	1.4	珩質頁岩	B2-26-4	
6	削器	2.9	2.3	0.7	4.6	珩質頁岩	B2-26-6	
7	削器	3.4	3.9	1.0	12.6	珩質頁岩	B2-26-9	
8	削器	2.1	1.2	0.3	0.8	珩質頁岩	B2-16-20	
9	微細剥離痕のある剥片	2.8	1.5	0.3	1.2	珩質頁岩	B2-05-1	
10	微細剥離痕のある剥片	2.4	2.2	0.4	2.0	珩質頁岩	B2-25-7	
11	微細剥離痕のある剥片	2.6	0.7	0.3	0.5	珩質頁岩	B2-25-1	
12	破片	2.4	1.6	0.7	2.0	珩質頁岩	B2-15-94	
13	破片	1.2	1.6	0.2	0.2	珩質頁岩	B2-16-18	
14	破片	1.8	1.4	0.3	.07	珩質頁岩	B2-16-15	
15	破片	1.7	1.2	0.2	0.3	珩質頁岩	B2-26-10	

(2) 第2ブロック (第48・49図、図版14・24)

a. 出土状況 (第48図)

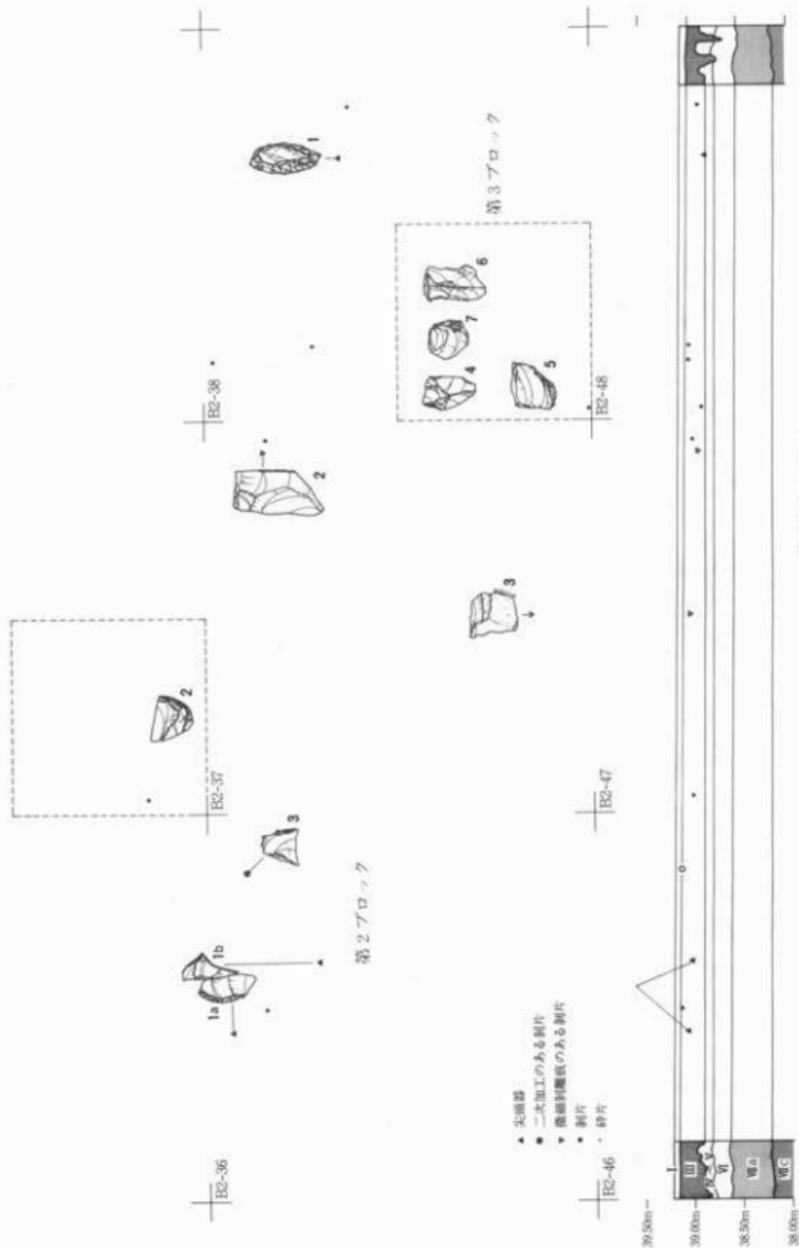
Ⅲ層中部から出土した。総計5点出土している。5点中4点が石器(Tool)で占められているのが特徴である。

b. 出土遺物 (第49図)

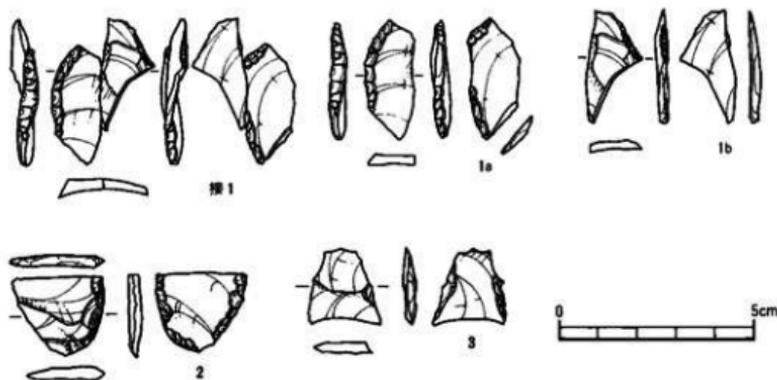
総計5点出土した。器種成は、尖頭器3点、二次加工のある剥片1点、剥片1点である。

石材組成は、すべて珩質頁岩である。

接1は尖頭器の接合資料である。接1の状態では周辺加工の尖頭器であったものが、1aと1bの2つに折れてしまい、1aの方は折れたのちにも調整加工を行なっている。2は尖頭器である。この1・2の資料は、素材が比較的薄い剥片で、周辺に小さい調整加工を行ない、折れているという点で第1ブロックの5の資料と共通する点がある。3は二次加工のある剥片である。左側縁の調整加工は接1と2の調整加工と共通している。右側縁と加担部は折れている。



第48図 第2・3ブロック器種別分布図 (1/60)



第49図 第2ブロック石器実測図(2/3)

c. 技術的特徴

標1の資料は、折れたのちに再調整していることから、尖頭器の製作中に折れたものを再調整している資料である可能性がある。このような特徴は、2・3においても観察される。おそらく、薄い素材の剥片の周辺部を調整加工して尖頭器を製作する過程において、素材が薄い剥片であるため折れた資料が作出され、そのまま捨てられるものもあり、折れたのちに標1のように再調整する資料があったのだろう。このような特徴は、第1ブロックの3・4・5・6の資料でも観察され、同様の製作過程の痕跡が推定される。

表15 第2ブロック石器属性表

標記番号	器種	長さ	幅	厚さ(cm)	重量(g)	石材	遺物番号	備考
1a	尖頭器	2.9	1.3	0.3	1.4	珩質頁岩	B2-36-3	
1b	尖頭器	2.8	1.3	0.2	0.7	珩質頁岩	B2-36-1	
2	尖頭器	2.0	2.3	0.3	1.7	珩質頁岩	B2-27-2	
3	二次加工のある剥片	1.9	1.8	0.3	0.9	珩質頁岩	B2-36-4	

(3) 第3ブロック(第48・50図、図版14・24)

a. 出土状況(第48図)

III層中部から出土した。B2-38グリッドの南西部はグリッド一括資料であるため詳しい出土状況が不明である。

b. 出土遺物(第50図)

総計14点出土した。器種組成は、尖頭器1点、微細剥離痕のある剥片6点、剥片7点である。石材組成は、珩質頁岩10点、チャート2点、メノウ1点、黒曜石1点である。第1・2ブロッ

クは、全て珩質頁岩でしめられていたが、第3ブロックでは、チャート、メノウ、黒曜石の石材があるのが特徴である。

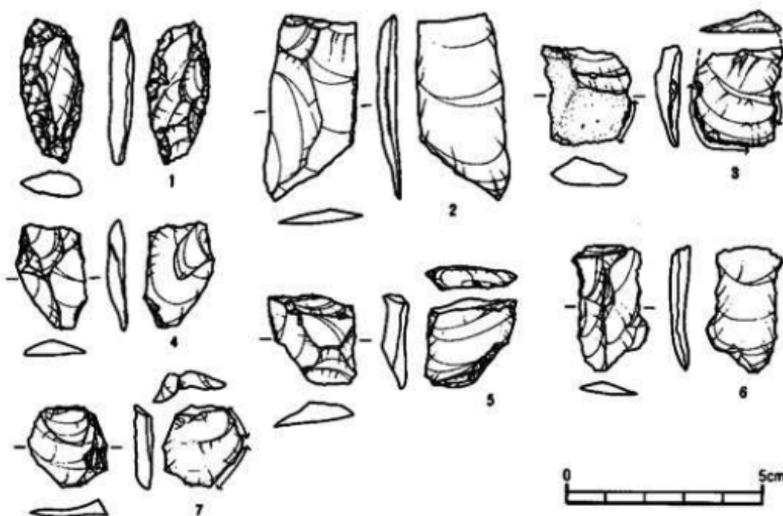
1は尖頭器である。周辺に調整加工を行なうが、第1・2ブロックの尖頭器に比べて比較的調整が大きく、奥まで入る調整加工である。2～6は微細剝離痕のある剥片である。このブロックにおいても、尖頭器の調整剥片・碎片があるが、その組成に占める割合は5割程度（14点中7点）で第1ブロックに比べて高くない。

c. 技術的特徴

尖頭器が1点出土しており、この特徴は第1・2ブロックと比べて周辺加工である点で共通するが、調整加工が少し異なる。剥片・碎片は第1・2ブロックと同様のものであり、第1～3ブロックは同様な技術的特徴をもっているといえる。

表16 第3ブロック石器属性表

図号	器種	長さ	幅	厚さ(cm)	重量(g)	石材	遺物番号	備考
1	尖頭器	3.6	1.6	0.6	3.6	チャート	B2-38-4	
2	微細剝離痕のある剥片	4.6	2.3	0.4	3.8	珩質頁岩	B2-37-2	
3	微細剝離痕のある剥片	2.5	2.2	0.7	3.2	黒曜石	B2-37-1	
4	微細剝離痕のある剥片	2.8	1.7	0.3	1.3	珩質頁岩	B2-38-6	
5	微細剝離痕のある剥片	2.4	2.2	0.6	2.7	珩質頁岩	B2-39-6	基部折れ
6	微細剝離痕のある剥片	3.2	1.8	0.3	1.8	珩質頁岩	B2-38-6	基部折れ
7	微細剝離痕のある剥片	2.1	2.0	0.5	1.5	珩質頁岩	B2-38-6	



第50図 第3ブロック石器実測図 (2/3)

3. 第2文化層

第2文化層はナイフ形石器をその内容にもつ石器群である。尖頭器はこの石器群に含まれない。出土層準は、Ⅲ層中部からⅣ～Ⅴ層の上部にかけて出土している。この石器群の生活面は、Ⅲ層がソフト化したローム層であり層厚も薄いことから明確にいえないが、出土層準・石器製作技術・器種組成・石材組成から、Ⅳ層上部に生活面をもつ石器群であろう。

(1) 第4ブロック (第51～55図、図版25～27)

a. 出土状況 (第51図)

Ⅲ層中部からⅣ～Ⅴ層の上部にかけて出土している。約2×2 mの範囲に密集している。接合資料である接1・接7・接8・接9は同一のチャートの個体別資料と思われ、この場所に、大きなチャートの母岩を持ち込んで石器製作を行なったことが推定される。ただ、調査時に遺物を一括して取り上げてしまっている資料があるため、接合関係・出土状況が不明な点もある。

b. 出土遺物 (第52～55図)

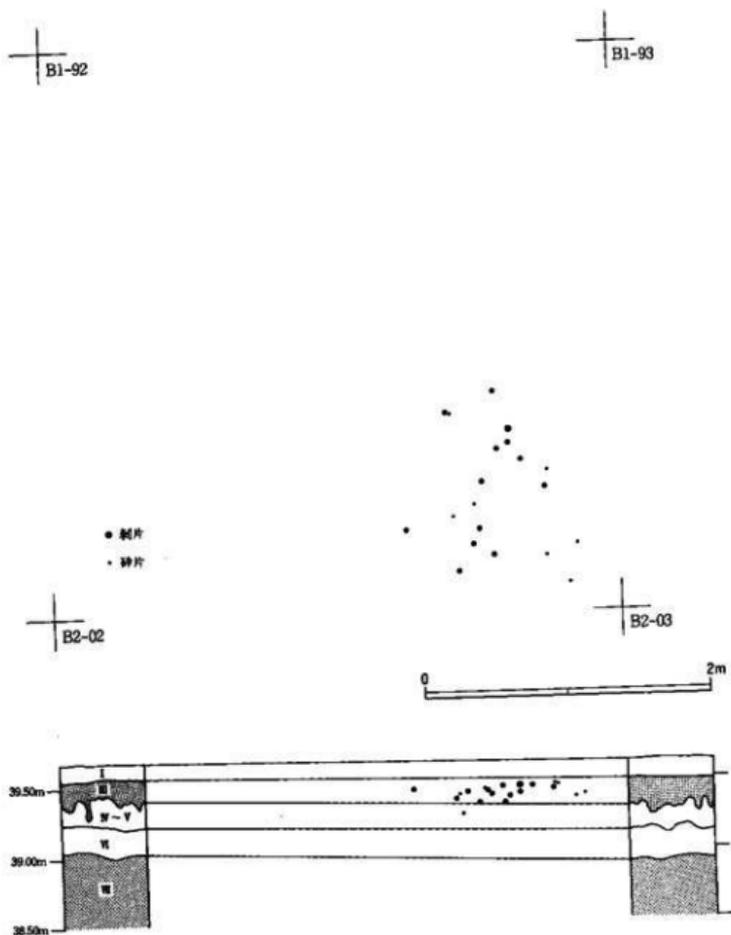
総計68点出土した。器種組成は、ナイフ形石器2点、削器1点、楔形石器1点、二次加工のある剥片1点、微細剥離痕のある剥片1点、石核1点、剥片44点、碎片17点である。石材組成は、チャート点、安山岩1点、凝灰岩1点である。接合資料接1・接7・接8・接9は同一のチャートの個体別資料で54点あることが識別できた。この割合は総点数の8割に近く(68点中54点)、非常に高い割合を示す。また、これと同一の個体別資料でナイフ形石器が2点あり、ナイフ形石器の石器製作技術を観察できる良好な資料である。

接1はナイフ形石器どうしが接合した資料である。打面は平坦打面で、頭部調整は行なわれていない。腹面と同一方向に、連続的に剥片を生産したことが観察される。1a・1bとも縦長の剥片を素材としている。1aは打面部に腹面から調整加工を行ない、左側縁に奥まで入る調整加工を、右側縁は比較的急角度のプランティングを行なっている。1bは、基部側に比較的浅い調整加工を行なっている。頭部しか残存しておらず、調整加工もプランティング的ではないのでナイフ形石器としてとらえるには躊躇する。しかし、1aと同一の個体別資料であり、素材形状も似ていて、調整加工を行なっている部位も共通していることからナイフ形石器としてとらえた。2は削器である。縦長の大型の剥片を素材として、右側縁に、腹面側に階段状の調整が行なわれ、先端部は微細剥離痕がある。3は微細剥離痕のある剥片である。4は楔形石器である。円礫を素材として両極剥離をしている。5は二次加工のある剥片である。右側縁と先端部に加工がある。6は石核である。素材は剥片で、節理面を打面として、数枚の剥片を剥離していることが観察される。

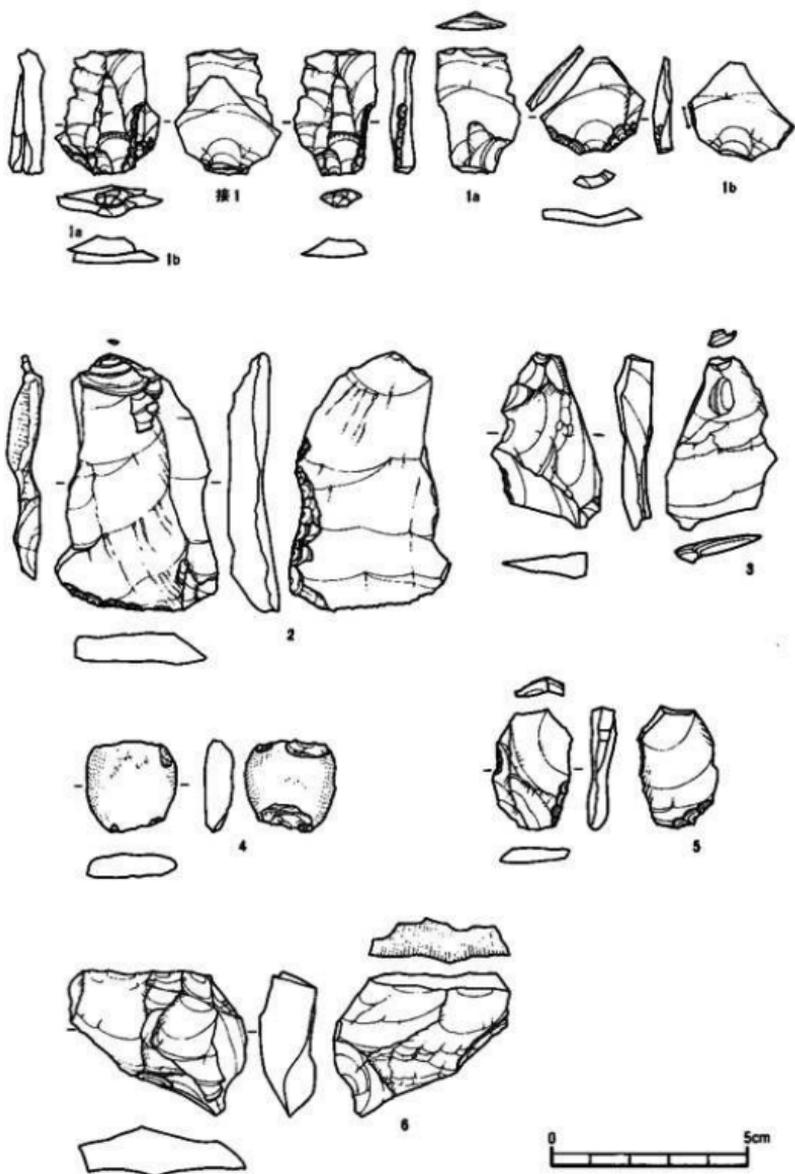
接7は、1・2のナイフ形石器の素材となった縦長剥片の生産技術を観察できる良好な接合資料である。接7は、以下のように[過程1]から[過程6]としてとらえられる。

[過程1] 7a・b・cと7d・e・f・g・hの資料に節理面によって分割されている。

- [過程2] 7a・b・cの上端(打面)に大きな剥離を1回行ない、その後同じような打点から同様の剥離を行なった際に、7aと7bと7cに分割してしている。
- [過程3] [過程1]の後に、7d・eを含む縦長剥片を数枚連続剥離した後に7d・eを剥離している。
- [過程4] その後[過程3]のように縦長剥片を連続剥離を行なおうとしたが、頭部付近が階段状にはいりこんだため、これ以上の剥離が困難となり7fを剥離して背面を再



第51図 第4ブロック石器出土状況図 (1/40)



第52図 第4ブロック石器実測図 (2/3)

生している。

[過程5] その後打面を再生し、7gを含む縦長剥片を2・3枚剥離している。[過程5]は[過程3]と同様の剥離過程としてとらえられるが、[過程3]ほど縦長剥片を剥離していない。

[過程6] その後[過程4]と同様に、剥離が困難となったために、7hを剥離して背面を再生している。

[過程1]は母岩の分割過程としてとらえられる。[過程3][過程5]は縦長剥片剥離過程としてとらえられ、1a・1bのナイフ形石器はこの過程で生産された剥片を素材としていると考えられる。[過程4][過程6]は背面の再生過程としてとらえられる。どの過程においても打面調整・頭部調整はみとめられなかった。

接8は、8aと8bを含む不定形の剥片を数枚剥離後、同様の剥離を行なおうとした際に8c・8d・8eに節理面によって分割してしまった資料と考がえられる。

表17 第4ブロック石器属性表

標図番号	器種	長さ	幅	厚さ(cm)	重量(g)	石材	遺物番号	備考
1a	ナイフ形石器	3.1	2.0	0.4	3.2	チャート	B2-03-3	
1b	ナイフ形石器	2.2	2.6	0.3	1.8	チャート	B1-93-1	先端折れ
2	削器	6.7	4.1	0.7	25.2	チャート	B2-02-1	
3	微細剥離痕のある剥片	4.5	2.7	0.9	7.7	チャート	B2-03-3	
4	楔形石器	2.3	2.2	0.6	5.0	安山岩	B1-93-1	
5	二次加工のある剥片	3.0	1.9	0.4	3.2	凝灰岩	B2-03-3	
6	石核	4.6	3.8	1.2	19.6	チャート	B1-92-22	
7a	剥片	1.8	1.0	0.4	0.9	チャート	B1-92-22	
7b	剥片	6.3	7.2	3.6	120.0	チャート	B1-92-22	
7c	剥片	5.0	2.3	4.0	35.7	チャート	B1-92-22	
7d	剥片	2.9	1.4	0.3	1.1	チャート	B1-92-22	
7e	剥片	2.9	1.6	0.6	2.2	チャート	B1-92-4	
7f	剥片	5.7	4.5	1.9	53.2	チャート	B1-92-22	
7g	剥片	2.1	1.5	0.5	1.2	チャート	B1-92-22	
7h	剥片	4.6	4.8	1.6	33.5	チャート	B1-92-22	
8a	剥片	2.4	2.6	0.6	3.7	チャート	B1-92-22	
8b	剥片	2.3	1.4	0.7	1.5	チャート	B2-03-3	
8c	剥片	1.9	2.2	0.5	1.1	チャート	B1-92-22	
8e	剥片	4.7	8.2	2.2	57.8	チャート	B1-92-3	
9a	剥片	2.8	5.4	1.5	20.5	チャート	B1-92-22	
9b	剥片	2.2	1.1	0.3	0.8	チャート	B1-92-22	
9c	剥片	3.3	4.1	1.0	12.1	チャート	B1-92-22	
9d	剥片	1.1	1.5	0.5	0.7	チャート	B2-03-3	
9e	剥片	3.7	2.8	0.9	9.6	チャート	B2-92-22	

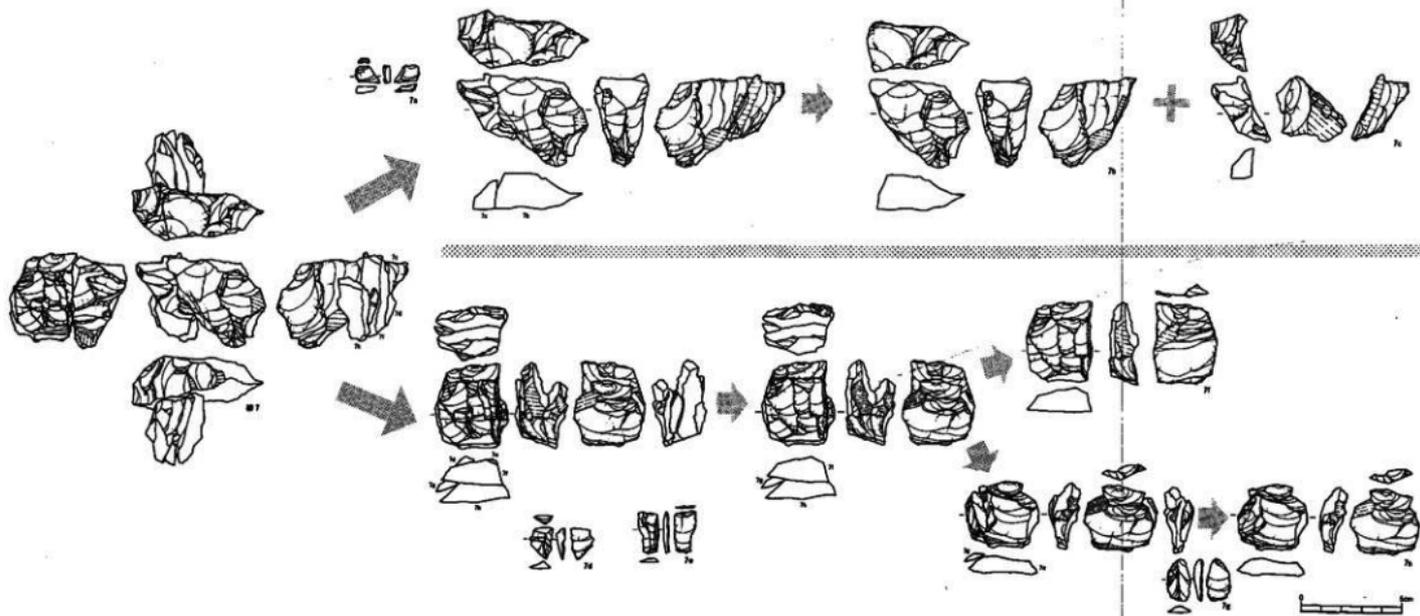
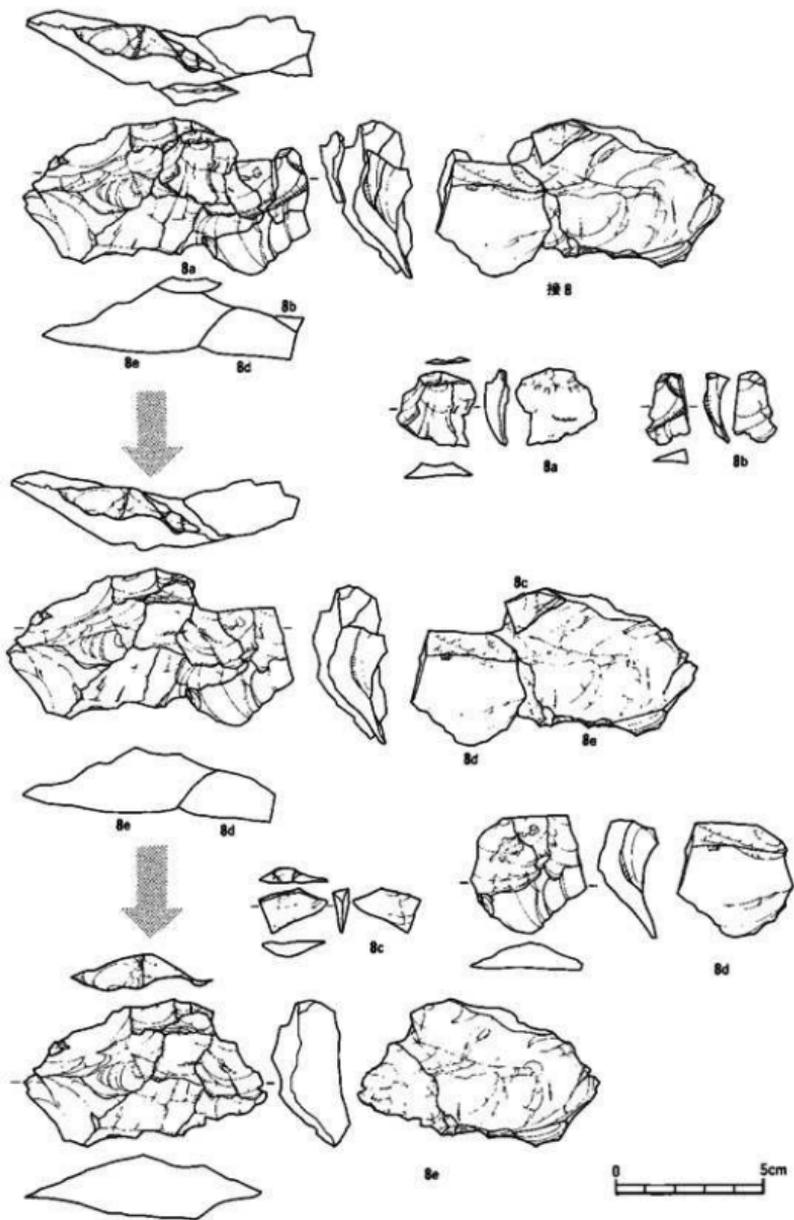


図33 第4アロック群全資料 (2/3)



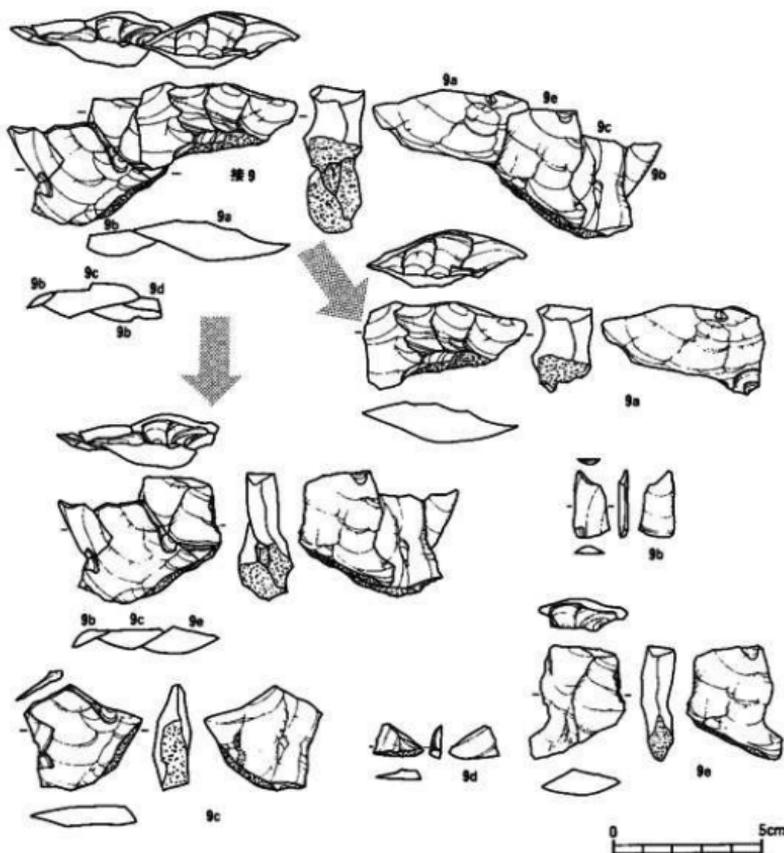
第54図 第4ブロック接合資料 (2/3)

接9は、9aの背面にあらわれているように小形の不定形の剥片を数枚剝離後、9aを剝離している。その後9b、9c、9d、9eの順に不定形な剥片を剝離している。

c. 技術的特徴

母岩を節理面によって分割し、分割剥片を素材として、剥片生産を行なっている。

接1・接7・接8・接9の接合資料の観察によると、1a・1b・7d・7e・7gのような縦長の規格的な剥片を目的剥片とし、ナイフ形石器の素材としていることが観察される。頭部調整・打面調整は行なわれず、剥片生産が困難になると背面の再生を目的とした背面再生剥片を剝離している。打面は単設打面であると推定される。



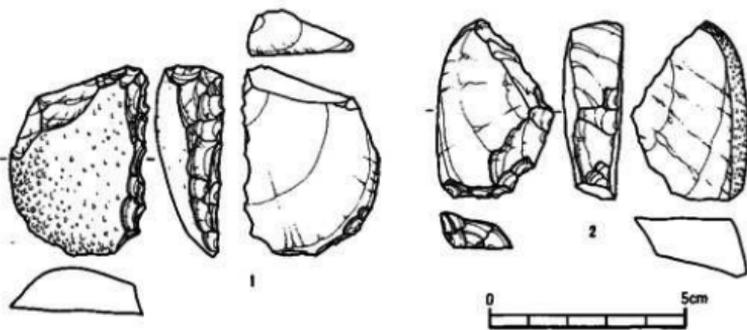
第55図 第4ブロック接合資料 (2/3)

4. グリッド出土遺物 (第56図・図版27)

1は削器である。背面に大きく自然面を残した分厚い剝片を素材としている。急角度に階段状に加工を行なっている。2は削器である。分厚い剝片を素材として、1と同様な急角度の階段状の調整を行なっている。時期は、出土層位が不明で、点数も少ないので不明である。1・2は素材と調整加工のあり方から同じ時期の遺物と考えられる。

表18 グリッド出土石器属性表

検出番号	器種	長さ	幅	厚さ(cm)	重量(g)	石材	遺物番号	備考
1	削器	4.8	3.5	1.2	27.3	安山岩	002-1	
2	削器	4.5	2.9	1.3	21.3	安山岩	002-1	



第56図 グリッド出土石器実測図 (2/3)

II. 縄文時代の遺構

縄文時代の遺構は003と004の2基の陥穴のみで、遺物は出土していない。

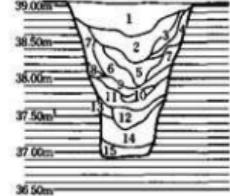
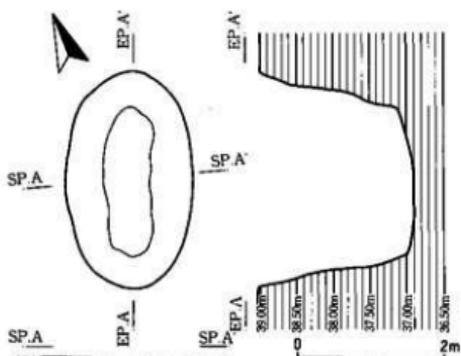
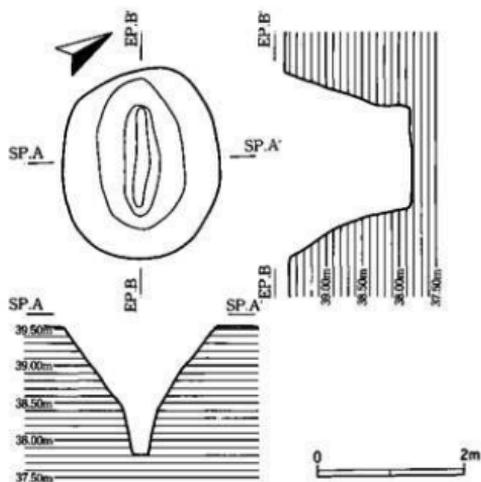
003 (第57図)

位置：B1-90に位置する。

遺構：N-57°-Wに主軸方向をとる陥穴である。長軸2.55cm、短軸2.11mの楕円形プランを呈す。底面は細長く幅20cm、長さ1.5mで、平坦に仕上げられている。ピット等は所在しない。壁面は底面から60cmほどはほぼ垂直に立ち上がり、中位で屈折して大きく開口する。全体の深さは1.7mである。覆土にはロームブロックを多く混入しており、遺物は認められなかった。縄文期の陥穴と考えて良いであろう。

004 (第57図)

位置：B2-16に位置する。



- | | |
|-----------|------------------|
| 1. 暗褐色土 | ローム粒を若干含む |
| 2. 黒褐色土 | 1よりしまり劣る |
| 3. 褐色土 | ロームブロック混入 |
| 4. 茶褐色土 | ロームブロック混入 |
| 5. 褐色土 | ロームブロック少量混入 |
| 6. 茶褐色土 | ロームブロック多量混入 |
| 7. 黄褐色土 | ロームブロック主体 |
| 8. 茶褐色土 | ロームブロック少量混入 |
| 9. 黒色土 | 炭化紀少量含む |
| 10. 茶褐色土 | ロームブロック少量混入 |
| 11. 黄褐色土 | ロームブロック主体、しまりない |
| 12. 暗褐色土 | ローム粒少量含む |
| 13. 黄褐色土 | ロームブロック主体 |
| 14. 灰黄褐色土 | 軟質で粘りあるロームブロック混入 |
| 15. 灰褐色土 | 軟質で粘りあるロームブロック主体 |

第57図 003・004 平面図 (1/80)

遺構：N-20°-Eに主軸方向をとる陥穴である。長軸2.95m、短軸1.74mの楕円形プランを呈す。底面はやや幅広の長円形でほぼ平坦に仕上がっている。ピット等は所在しない。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。深さは2m強である。覆土中位に黒色土層が1枚入るほかは全体的にロームブロックを主体とする層序を示している。遺物は認められなかったが、縄文期の陥穴と考えて良いであろう。

III. その他の遺構

溝状の遺構が2条検出された。

001 (第58図)

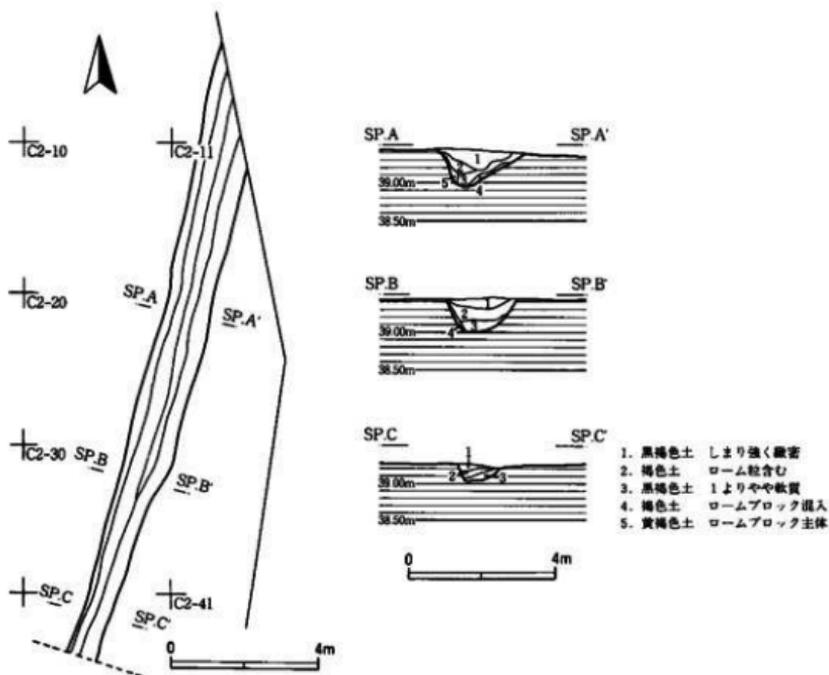
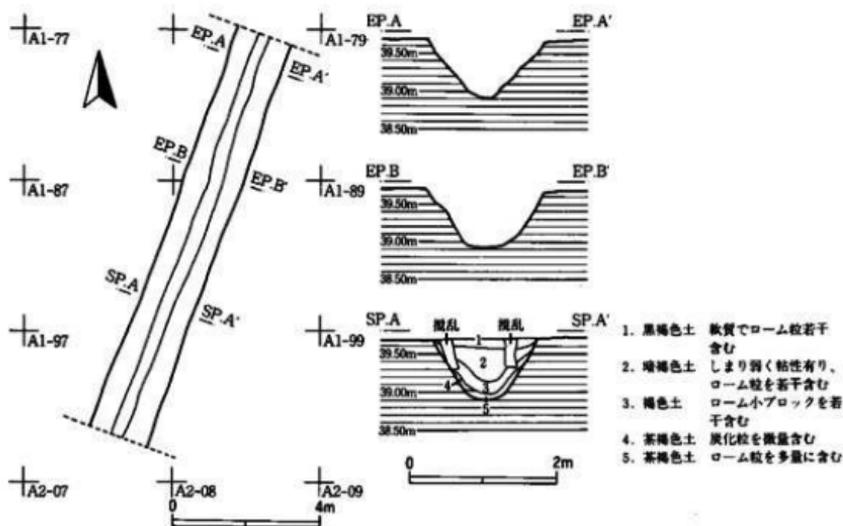
位置：A1-78、88、97に位置する。

遺構：ほぼ南北方向に直線的に延びる溝状の遺構である。幅は1.6mで一定し、底面の幅は狭く断面形状が「V」字状から「U」字状を示す。深さは70~80cm程である。覆土は自然堆積で遺物は検出されなかった。覆土等の状態からかなり新しい時期の溝と思われる。

002 (第58図)

位置：C2-01からC2-40にかけて位置する。

遺構：ほぼ南北方向に直線的に延びる溝状の遺構である。北側は調査区外となるが更に北進するようである。幅は南側で80cm、北側では140cmを計るが、底面は東寄りであり、東側壁は急傾斜に西側壁は緩傾斜に立ち上がる。特に北側部分ではその傾向が強い。深さはほぼ50cmである。覆土は自然堆積で遺物は検出されなかった。覆土等の状態から新しい時期の溝と思われる。



第58図 001・002平面図 (1/160)

第 2 章

助 沢 遺 跡

遺跡コード 346-002

油 田 牧 跡

遺跡コード 346-003

は ら V 遺 跡

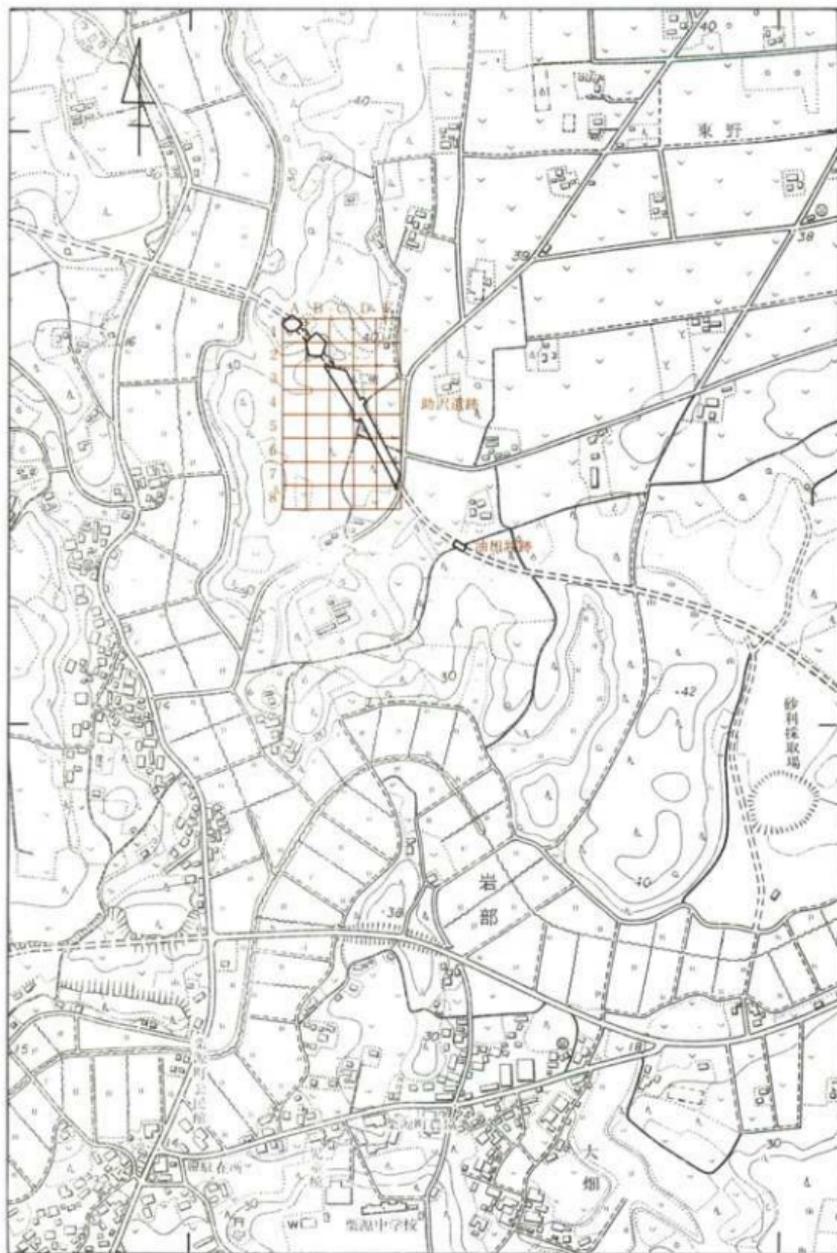
遺跡コード 345-001

かにはら I 遺跡

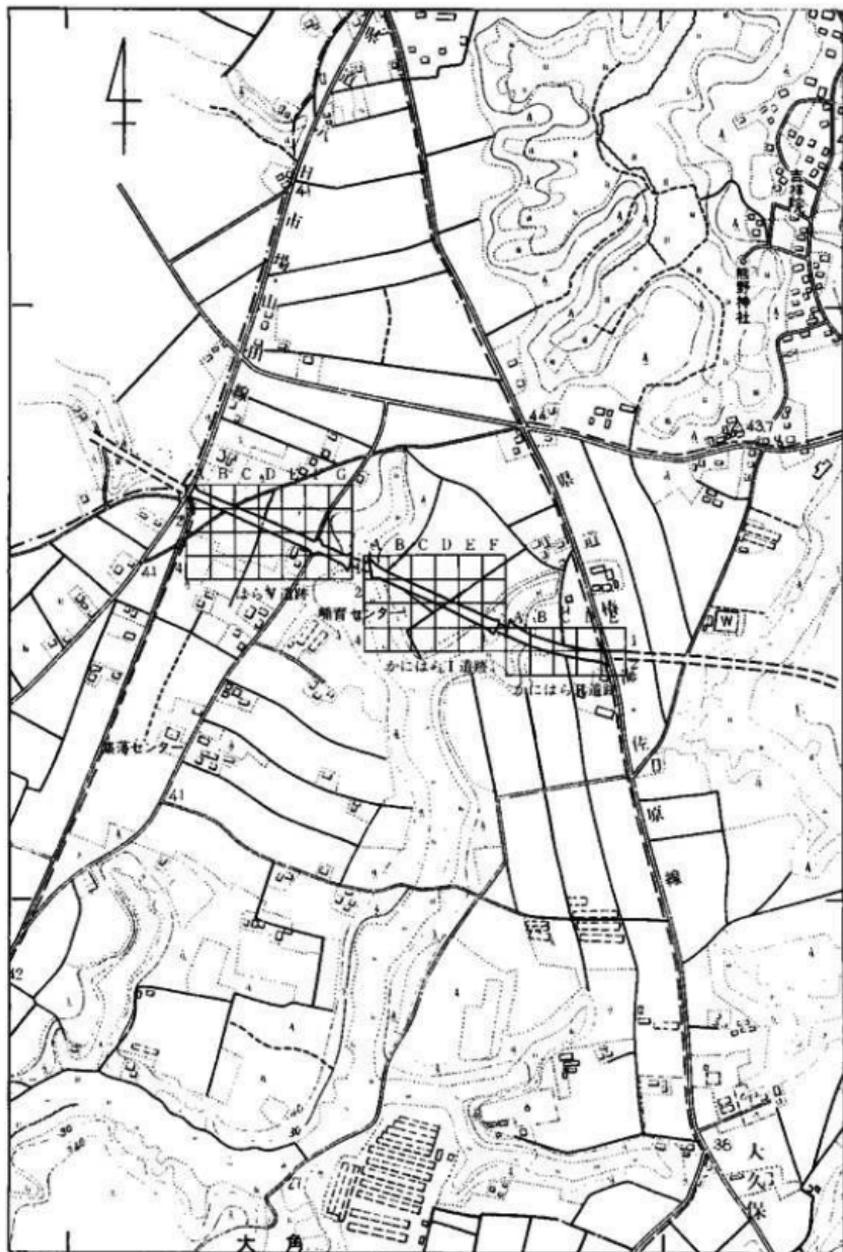
遺跡コード 345-002

かにはら II 遺跡

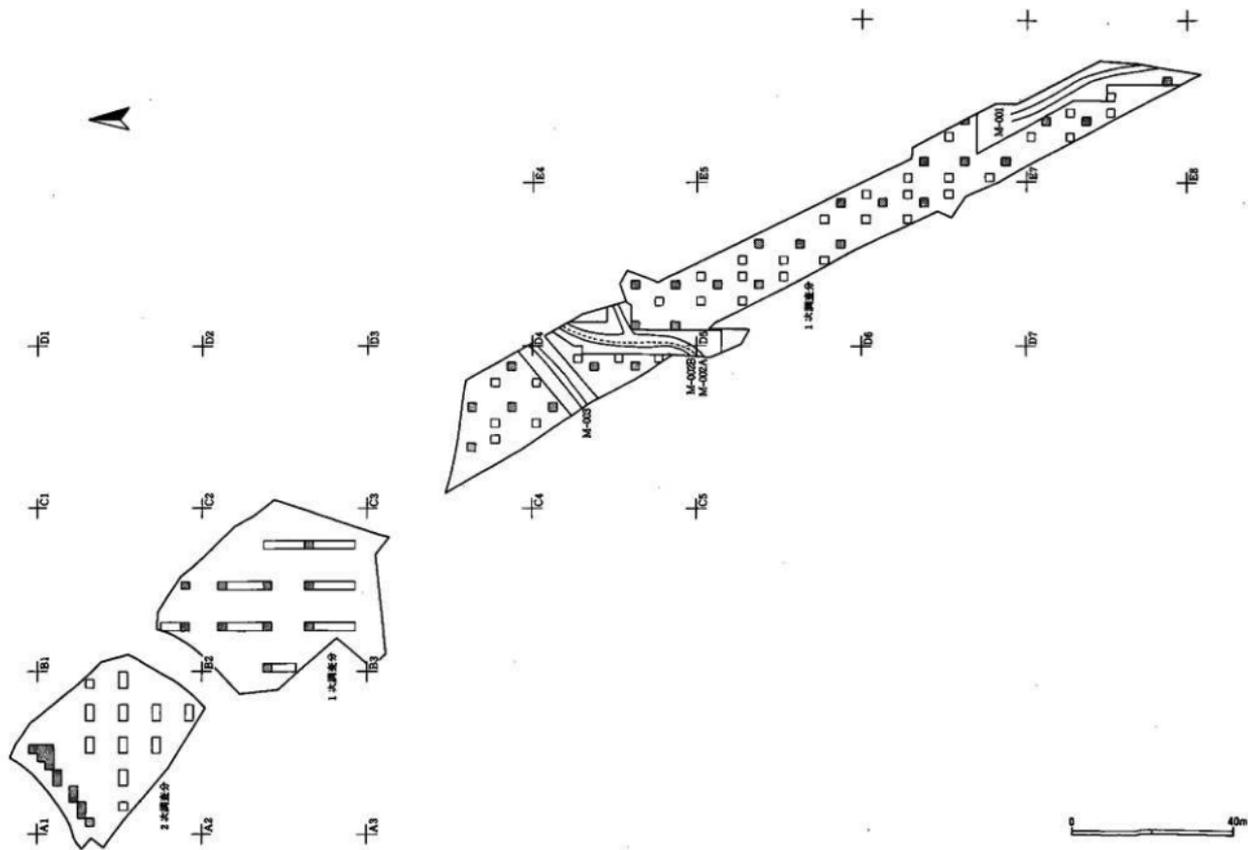
遺跡コード 345-003



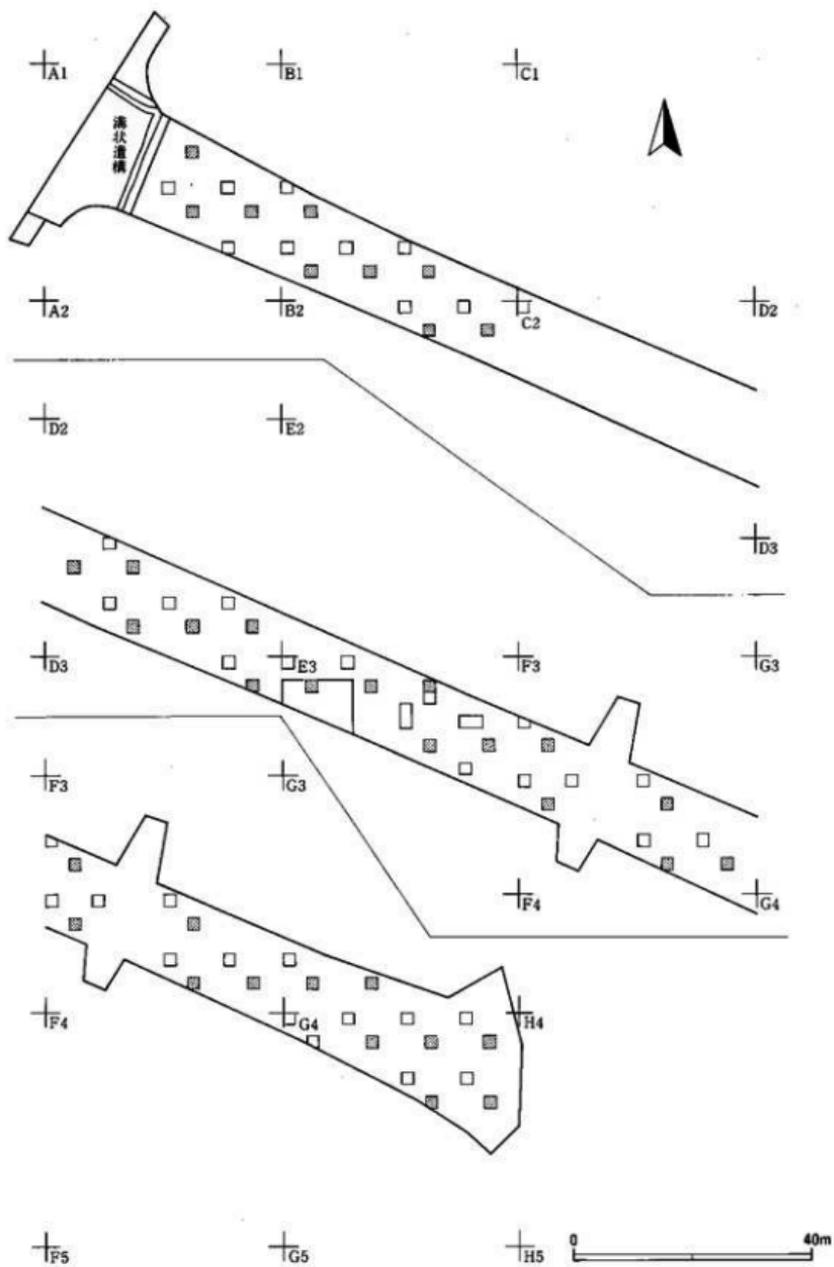
第59図 遺跡位置・地形・グリッド配置図 (1/10,000)



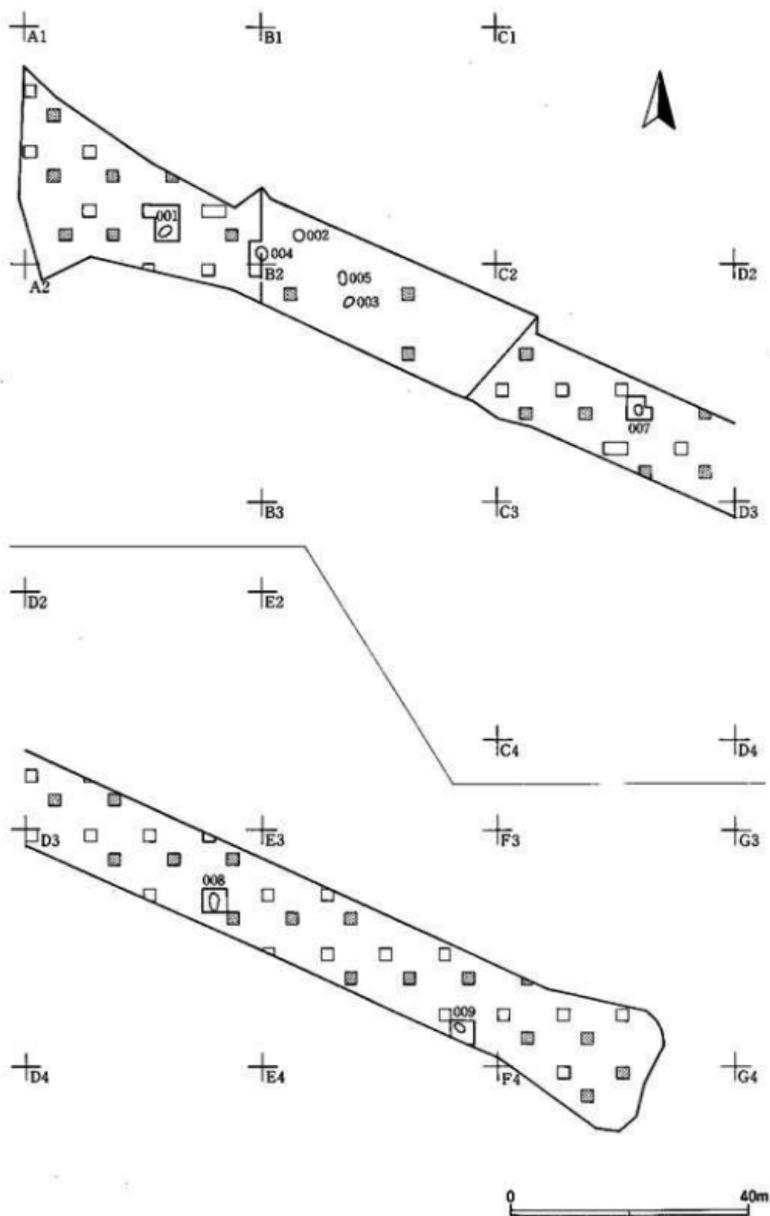
第60図 遺跡位置・地形・グリッド配置図 (1/10,000)



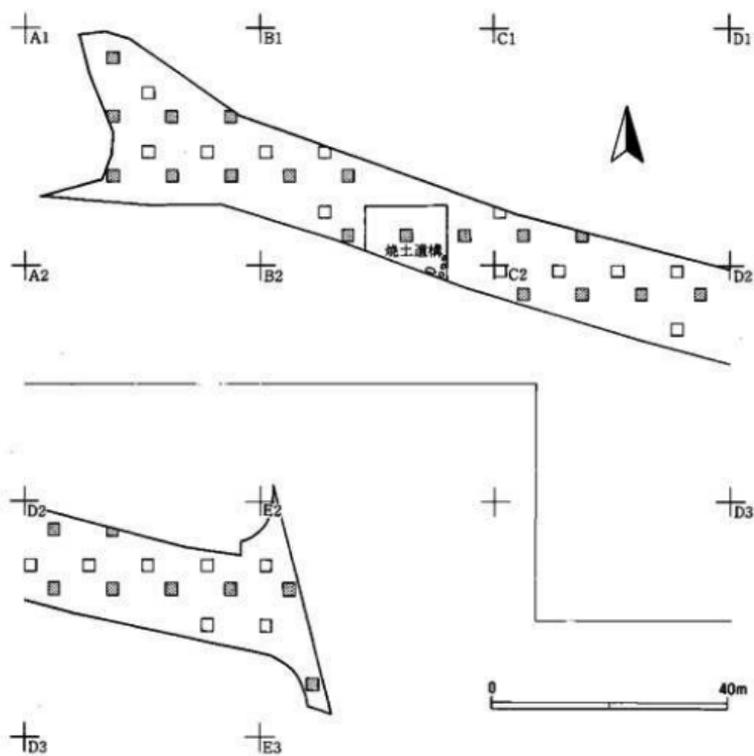
第61図 防空遠跡捜索機配置図 (1/1,000)



第62図 はらV遺跡遺構配置図 (1/10,000)



第63図 かねはらⅠ遺跡遺構配置図 (1/1,000)



第64図 かにらはらⅡ遺跡遺構配置図 (1/1,000)

第1節 助沢遺跡

本遺跡は1次、2次に年度を分けて調査を行なっているが、ともに遺構、遺物とも希薄であった。遺構は溝状遺構が3条、焼土遺構が1個所であり、それぞれ周囲を拡張して本調査を行なった。遺物は細片のみであった。

M-001 (第65図)

位置：E6-83からE7-87にかけて位置する。

遺構：ほぼ南北に走る溝状遺構で、南側は谷の奥部に向かっている。確認面はテフラ上面であるが表土面の観察でも若干凹んで見えた。幅1.2~1.5m、深さ30~40cmの浅い「U」字形の断面を呈し、底面にはほぼ等間隔に楕円形のピットが連続的に所在している。ピットは底面にすっぽりと収まり長さは1.5m前後でピット列の様相を示している。ピットの深さは溝底面から10~20cmほどがほとんどである。覆土は自然埋没で遺物は出土しなかった。時期は不明だが覆土の状態からかなり新しい時期の所産と考えられる。

M-002 (第65図)

位置：C4-99からD4-20にかけて位置する。中程で直交する新しい溝と切り合う。

遺構：南北に走る溝状遺構で南端が若干西側に湾曲する。M-001と同様にピット列状の溝とそうでない溝とが並走しながら接しており、前者をA、後者をBとした。

Aは幅1m前後、深さ10cmほどの溝底面に長さ2m、深さ40cmほどの楕円形ピットが並ぶ。北側に移行するにしたがい溝の深さがなくなり、ピット列のみとなる。

Bは深さ50cmほどで底面はほぼ平坦に仕上げられており、西側壁は緩い立ち上がりを示している。AはBの東側壁に沿って設けられており、Aの方が新しいことが断面観察から判明するが、埋没したBをかなり意識していることから、さほど時間差はないものと思われる。

また、中程には直角に突き当たるかたちで東西方向の溝が切り合っているが、Aよりも新しい時期である。

M-003 (第65図・図版28)

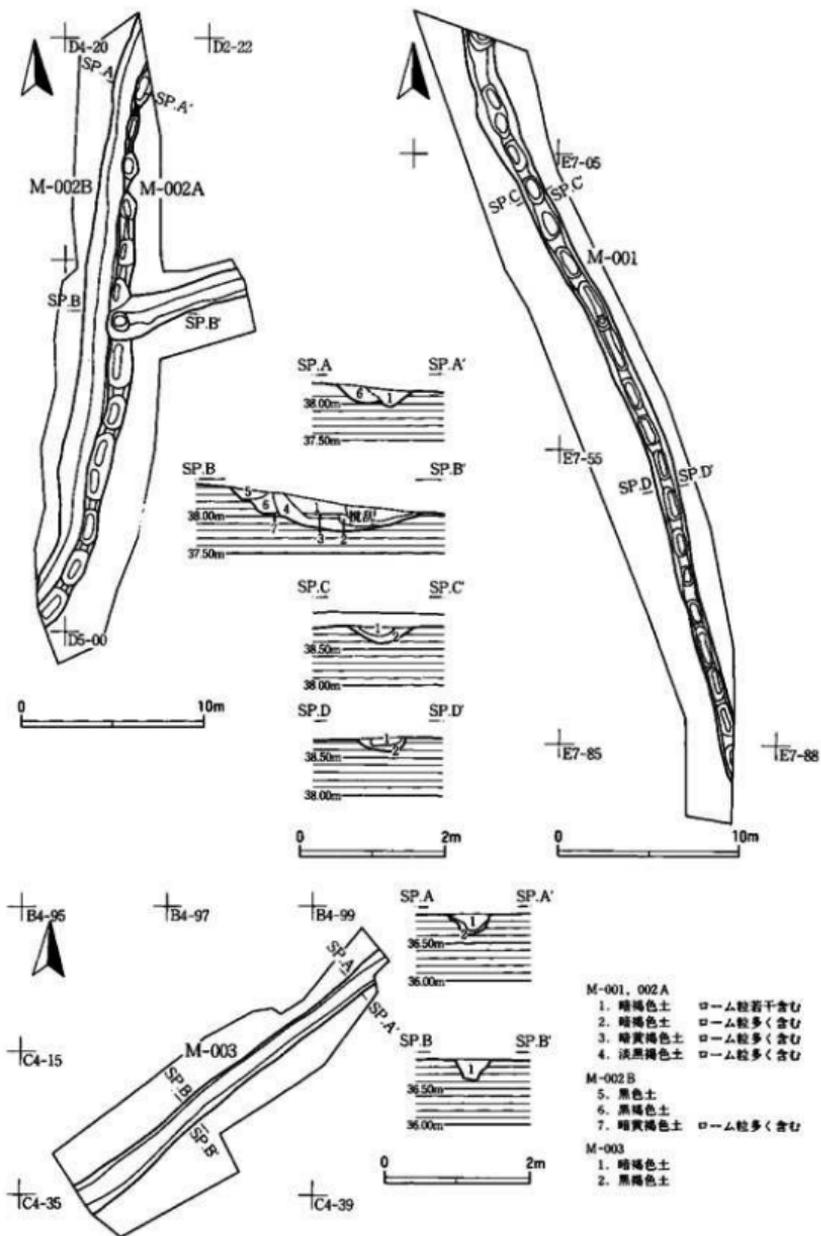
位置：B4-99からC4-33に位置する。

遺構：北東から南西方向に直線的に延びる溝状遺構である。幅は狭いところで1m、広いところで1.8mで深さはおよそ30cmである。壁の立ち上がりは比較的良好であり、底面は多少凹凸があるものの比較的平坦である。覆土は自然埋没で遺物は認められなかった。時期は不明であるが他の溝とはさほど変わらないであろう。

焼土遺構 (第66図)

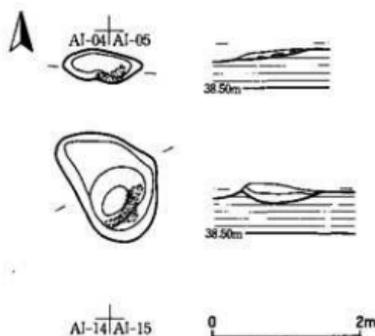
位置：A1-05に位置する。

遺構：1.63m×1.15mの不正楕円形のプランを呈すものと、1.05m×0.40mの長円形のプラ



第65図 M-001~003 平面図 (1/160)

ンを呈すものが2基隣接して検出された。前者は20cmほど掘り凹められており、焼土はやや浮いた状態で検出され、後者については掘り込みはきわめて浅く焼土は底面より検出されている。ともに焼土は部分的に認められるだけであることから、長期にわたって使用されたものではない。また確認面は表土下のテフラ上面である。遺物は出土していないが、覆土の状態からかなり新しい時期のものといえる。



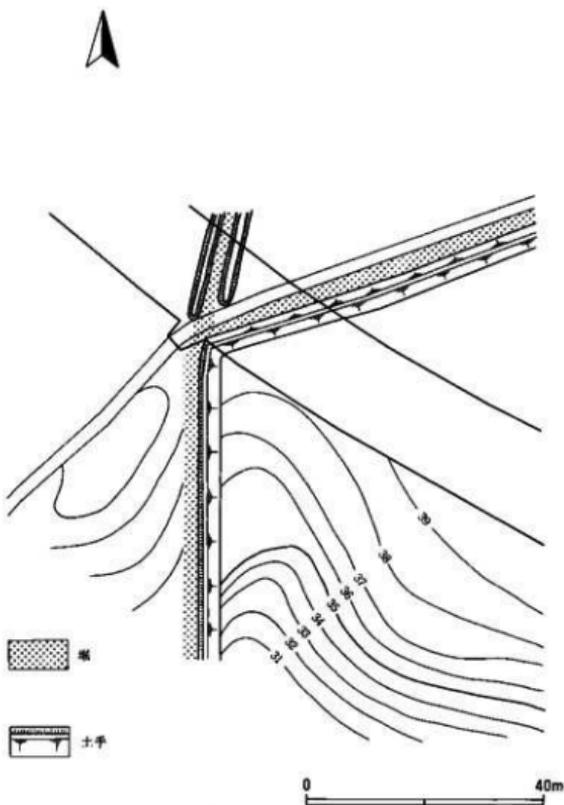
第66図 焼土遺構平面図 (1/80)

第2節 油田牧跡

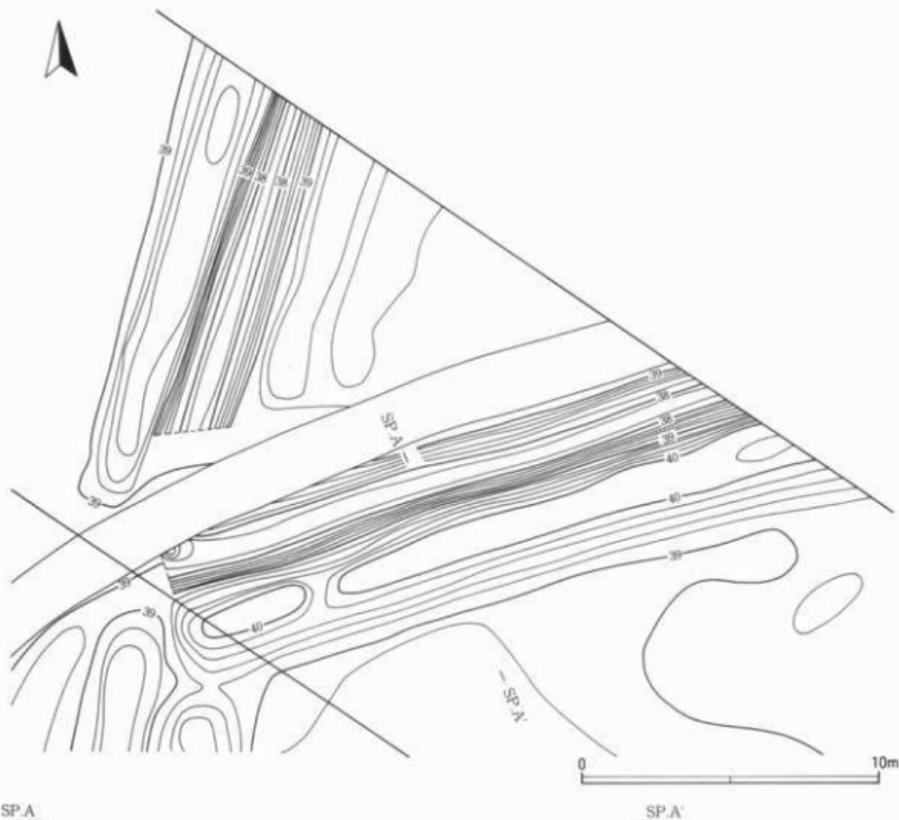
本遺跡は江戸時代の牧に関連する野馬土手である。

主体となる土手は、栗山川支流の谷部から南斜面を駆け上がり、調査区にあたる台地縁辺部が直角におかれ、農道に沿うように台地平坦部を北東方向に延びており、土手左側には堀を設けている。また、屈折する地点では谷から駆け上がってきた土手よりもやや右(東)に振られて同じ堀を利用し両側にやや低い土手を築いたものが北の方向に向かう。調査区にかかる部分は「Y」字状に枝分かれした地点で、堀の部分はほぼ全掘できた。

主体となるであろう屈折した土手の構造は、見かけの幅3.7m、高さ1.6mで、

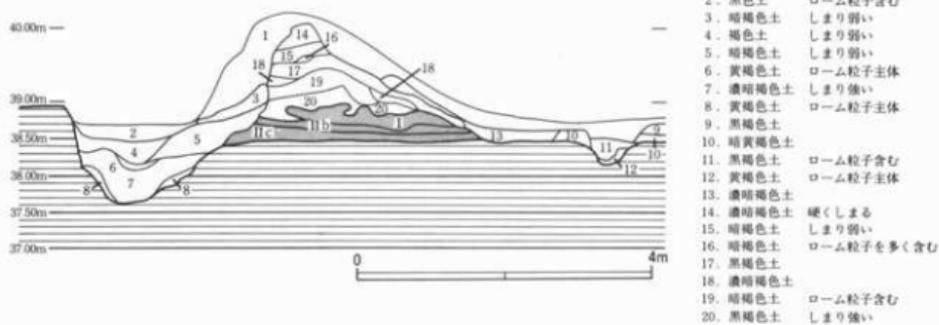


第67図 野馬土手模式図



SP-A

SP-A'



- | | |
|-----------|------------|
| 1. 暗褐色土 | 極めてしまり弱い |
| 2. 黒色土 | ローム粒子含む |
| 3. 暗褐色土 | しまり弱い |
| 4. 褐色土 | しまり弱い |
| 5. 暗褐色土 | しまり弱い |
| 6. 黄褐色土 | ローム粒子主体 |
| 7. 濃暗褐色土 | しまり強い |
| 8. 黄褐色土 | ローム粒子主体 |
| 9. 黒褐色土 | |
| 10. 暗黄褐色土 | |
| 11. 黒褐色土 | ローム粒子含む |
| 12. 黄褐色土 | ローム粒子主体 |
| 13. 濃暗褐色土 | |
| 14. 濃暗褐色土 | 硬くしまる |
| 15. 暗褐色土 | しまり弱い |
| 16. 暗褐色土 | ローム粒子を多く含む |
| 17. 黒褐色土 | |
| 18. 濃暗褐色土 | |
| 19. 暗褐色土 | ローム粒子含む |
| 20. 黒褐色土 | しまり強い |

第68図 野馬土手平面・断面図 (1/160・1/80)

表土を除去し堀を掘り上げた状態では、堀の上端幅2.4m、下端幅0.5m、深さ1.1m、土手基部幅3.0m、高さは旧表土から1.2mであった。土手はローム粒子を主体とする黄褐色土と黒色土が互層をなし、ほぼ水平に積み上げられているが、堀側の方がかなり急傾斜面をつくっている。反対側の傾斜は緩やかである。断面観察からも堀側の斜面の方がかなり急であることがうかがえる。堀は、断面形が「U」字状をなし底面はほぼ中央部を直線的に土手と平行して走っている。土手の覆土は中位までいったん水平に埋まったのち土手側から崩壊した土が流れ込み、その後全体を埋めつくしている。

北に延びる2条の土手は、東側が高さ0.3mと低く、西側は高さ0.8mで主体となる土手に比べてさほど高くない。幅は東側が1.5m、西側が2.0mである。2条の土手に間には前者の堀と同様の堀が設けられており、堀に面する土手の斜面は反対側と比べかなり急である。土手の構築は前と同様で、ほぼ水平に積み上げられている。ただし、東側のそれは黒色土が主体である。

第3節 はらV遺跡

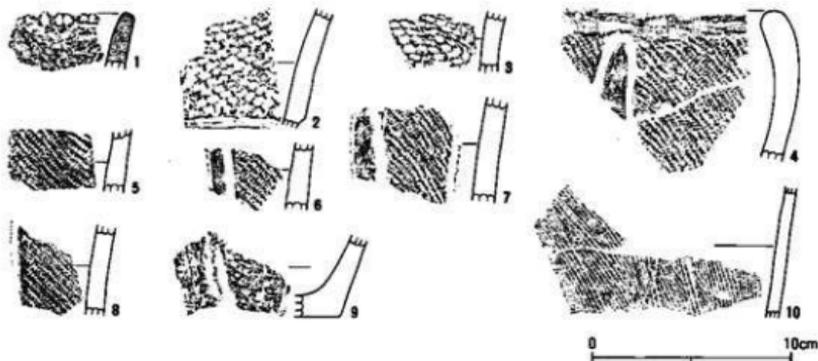
当遺跡では確認調査の結果、縄文土器が若干出土したものの該期の遺構については未検出で、溝状の遺構を2条確認したに留まる。本調査については溝状遺構を検出した地点を拡張することとなった。したがって、遺物の量はさきわめて少ない。

I. 縄文時代の遺物

縄文土器 (第69図)

当遺跡では若干量の縄文土器を出土している。

1は胎土中かなり多量の繊維を含む条痕文系土器の口縁部破片で、口唇部には刻み目を施している。器面には斜位の沈線が数条見られることから、幾何学的な文様構成になるようであ

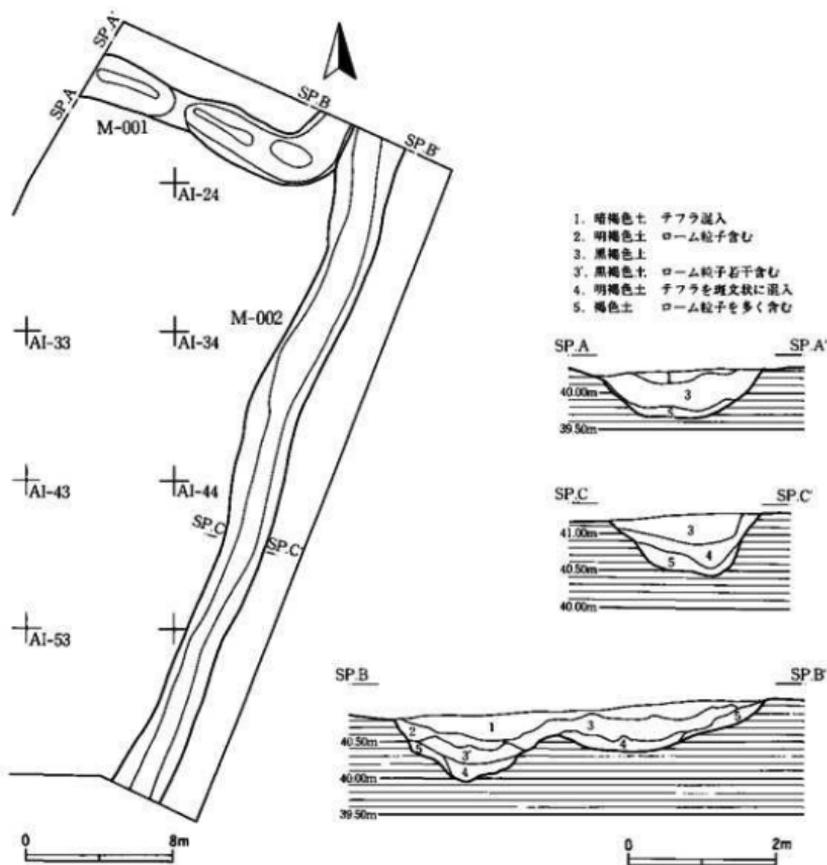


第69図 グリッド出土縄文土器拓影図 (1/3)

る。茅山上層式以降の条痕文系土器であろう。

2、3は復々節の縄文を地文としている土器で、2は横位の太沈線を施している。3は小破片であるため観察しにくい、垂下する2条の沈線が見られる。4から9は複節の縄文(RL)を地文として、沈線区画による磨消縄文帯を設ける土器である。4は内弯する口縁部破片で沈線区画は幅の狭い弧を描き内部は縄文が磨り消されている。5から8は胴部破片で垂下する沈線区画内に磨消縄文が見られる。9は底部破片で、垂下する沈線と縄文施文が若干見られる。ともに加曾利E式でも新しい時期となろう。

10は櫛目状の条痕を斜めから縦方向に施した土器で、器厚は比較的薄く焼成も良好で堅い仕上がりとなっている。晩期末の時期と考えられる。



第70図 M-001・002 平面図 (1/160)

II. その他の遺構

M-001 (第70図・図版30)

位置：A1-13、14に位置し、M-002と接する。

遺構：鎌の手状に屈折する溝状の遺構である。屈折部分から北側に延びる溝はM-002に接しながら並走し、西側へはほぼ直角に折れている。西側に延びる部分では途中でやや浅くなるところがあり底面は比較的凸凹がみられる。深い部分で約70cmを計る。溝の幅は2.5m 前後でかなり広いものである。覆土は自然堆積であるがしまりに欠ける。遺物は出土品かった。

M-002 (第70図・図版30)

位置：A1-64から14の方向に延び、M-001と接する。

遺構：やや蛇行しながらもほぼ南北に延びる溝状の遺構である。北側でM-001と接している。底面は凹凸が激しく幅も一定しない。側壁の立ち上がりも緩い部分が目立つ。深さは80cm前後であるが、北側の方が浅い。幅は2.5～3 mを計る。覆土は自然堆積であり、土層観察からM-001とは同時期と考えられ、かなり新しい。

第4節 かにはら I 遺跡

本遺跡は確認調査の結果、土壌を数基確認したが散漫に分布する地点ではグリッドを一部拡張し、比較的密集する地域では周辺を拡張し本調査に移行した。遺物は少なく縄文土器と石鏃を数点出土しただけである。

I. 縄文時代の遺構と遺物

P-002 (第72図・図版31)

位置：B1-81に位置する。

遺構：2.20×2.12mの円形プランを呈し、中位ですばまり底面に向かって垂直に落ちるろうと状の陥穴である。底面は皿状に凹む。深さは2.5mを計る。覆土はしまりの弱いロームブロック混入土を主体としているが、中位以下に3層の黒色土層がサンドイッチされている。遺物は出土していないが、縄文時代の陥穴である。

P-004 (第73図)

位置：B2-03に位置する。

遺構2.78×2.60mのほぼ円形プランを呈し、深さは2.3mを計る。底面は小さい楕円形で平坦堅緻。側壁は中位でややすばまり、全体に急傾斜な立ち上がりを示すが底面付近は垂直に近い。覆土下位にはほとんどしまりのない土層が堆積しているが、上位についてはしまりが良い。全体的にはロームブロックを主体としている。ただ、下位に3層の黒色土層を挟んでいる。また、

覆土上部に焼土、炭化物を多量に含む層がプラン中央部に認められた。覆土中から3点の縄文土器片を検出した。縄文時代の陥穴である。

P-008 (第73図)

位置：D3-37に位置する。

遺構：主軸方向は真北をとり、上端で2.8×1.1m、下端で2.95×0.40m、深さは1.36mを計るいわゆる「T」ピットといわれる陥穴で、幅の狭い底面は長軸方向両端がオーバーハングし袋状をなす。底面はほぼ平坦堅緻でピット等は認められない。壁面はほぼ垂直な立ち上がりを示す。覆土は全体にしまりがよく中位に黒色土層を挟む。遺物はないが縄文時代の陥穴である。

グリッド出土の縄文土器 (第71図 1～5)

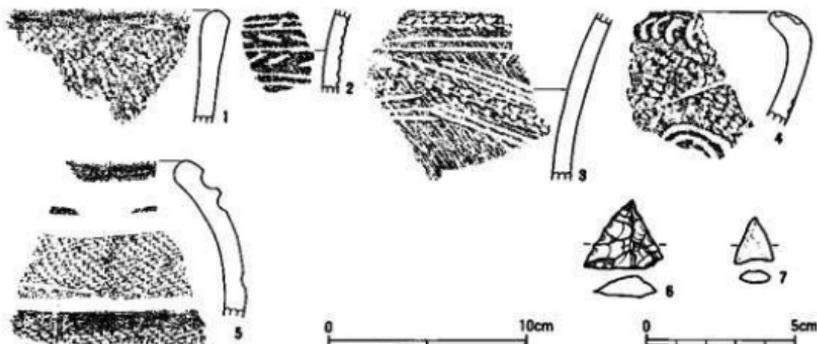
当遺跡ではわずかではあるが縄文土器が出土している。

1は縄文を施す口縁部破片で、若干肥厚外反している。縄文は羽状構成をとる。焼成は良好で堅い焼き上がりを示し、胎土には細砂粒を多く含んでいる。内面は平滑にナデ磨かれている。然糸文系土器のうちでも新しい部類に属するよう花輪台式と思われる。

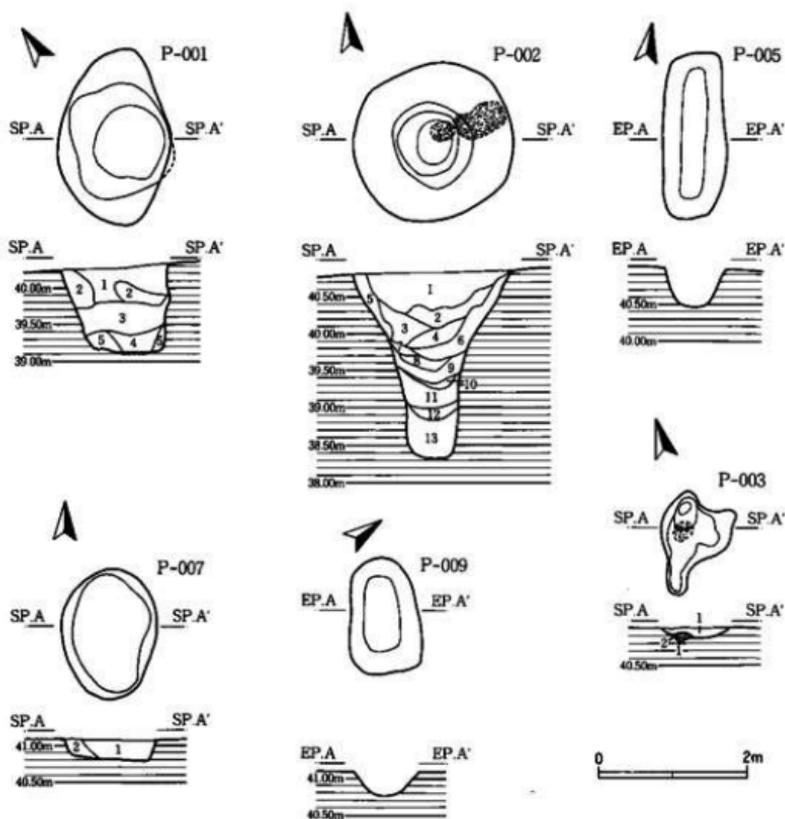
2は沈線文系土器の底部付近の破片で平行沈線と斜位の沈線により矢羽状の文様構成をとる。胎土には長石粒を多く含みざらっとしている。田戸下層式でも古手の時期と思える。

3は胴部上半部の破片で半載竹管背面で浅い沈線を施したのちに再度竹管先端部を連続的に刺突した結節沈線と2条の平行沈線の組合せによる幾何学文を構成する土器で、地に条痕文を施している。焼成は極めてよい。胎土に微量の繊維を含んでいる可能性がある。田戸上層式と考えられる。

4は強く内弯する口縁部の破片で羽状構成の縄文を地文とし、口縁上端に大形の竹管工具による連続刺突文を施し、さらに太沈線による波状文を施している。5は丸く内弯する口縁部破片で、複々節の縄文を地文とし、横位の太沈線を口縁部直下に2条、間を空けてさらに1条をめぐらせており、沈線に接する縄文の一部を磨り消している。



第71図 グリッド出土縄文土器拓影図 (1/3)



- P-001**
1. 暗褐色土 ハードローム小ブロックを多く混入
 2. 黒褐色土 ソフトローム粒子含む、焼土混入
 3. 暗黄褐色土 ハードロームブロックを多く混入
 4. 黒褐色土 ソフトローム粒子含む
 5. 暗黄褐色土 ソフトローム粒子含む

- P-003**
1. 暗褐色土 しまり強い
 2. 暗赤褐色土 攪拌された焼土混入

- P-007**
1. 黒色土 しまり強い
 2. 暗黄褐色土 しまり強く、ローム粒子を含む

- P-002**
1. 黒色土 炭化粒、ローム粒を含む
 2. 黒褐色土 ローム粒子を多量に含む
 3. 黒色土 ローム粒子を多く含む
 4. 黒褐色土 ローム粒子を多く含む
 5. 暗黄褐色土 ロームブロック主体
 6. 暗黄褐色土 5と同じ
 7. 暗黄褐色土 5とほぼ同じ、しまり弱い
 8. 黒色土 ローム粒子若干含む
 9. 暗黄褐色土 ロームブロックを多く混入
 10. 黒色土 ローム粒子を多く含む
 11. 暗黄褐色土 9と同じ
 12. 黒色土 10と同じ
 13. 暗黄褐色土 9と同じ

第72図 P-001~003・005・007・009 平面図 (1/80)

II. その他の遺構

P-001 (第72図)

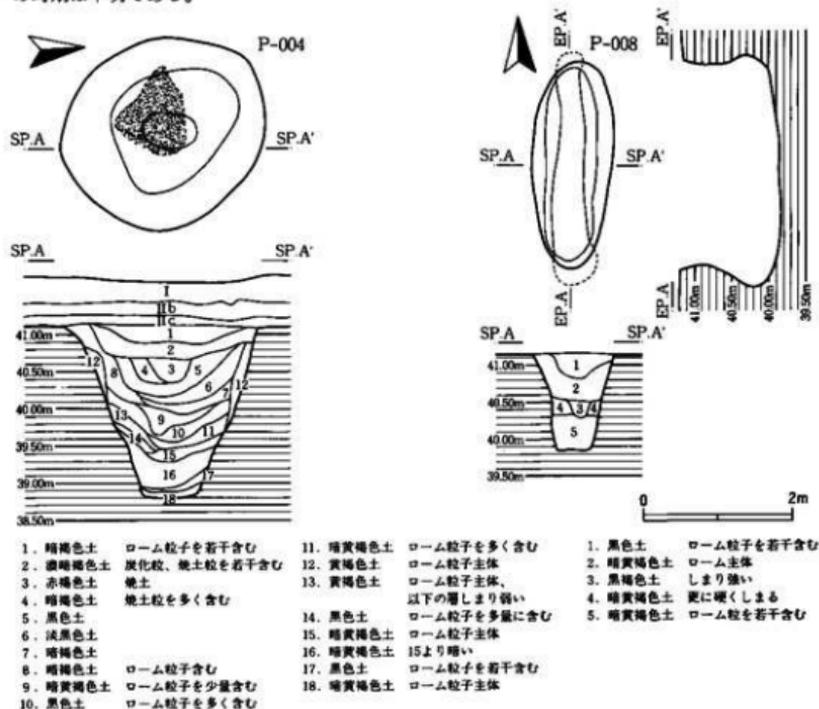
位置：A1-85、86に位置する。

遺構 N-35°-Wに主軸方向をとり、長軸2.37m、短軸1.50mの楕円形プランを呈す土壌である。底面は平坦堅緻でほぼ径1mの円形を示し東寄りにある。東側壁が若干オーバーハングし袋状を示している。他の壁は急傾斜で立ち上がっている。深さは1.2mを計る。覆土中位にはローム流を多量に含む層があり埋め戻された可能性が高い。遺物は出土しなかった。

P-003 (第72図)

位置：B2-13に位置する。

遺構：1.4×1.0mの不整形プランを呈す浅い土壌である。覆土はしよりの良い暗褐色土中に焼土、炭化粒を混入している。底面は全体的に凹凸があり、北側に小ピットを認める。小ピットの直上から焼土が検出された。土壌の掘り込みは15cm程度と浅い。遺物は出土しなかったため時期は不明である。



第73図 P-004・008平面図 (1/80)

P-005 (第72図)

位置：B2-03に位置する。

遺構：主軸方向N-8°-Wをとり、2.25×0.80mの隅丸長方形プランを呈す土壌である。深さは50cmを計る。底面はほぼ平坦であるが、中央が若干凹む。側壁は急傾斜に立ち上がる。覆土はしまりの良い暗褐色土層が充填しており一時期に埋め戻されたものと思われる。なお、遺物は検出されなかったが確認面が新时期テフラ上面であることから新しい時期の可能性が高い。

P-007 (第72図)

位置：C2-65、66に位置する。

遺構：主軸方向はほぼ真北を指し、長軸1.75m、短軸1.30m、深さ30cmの楕円形の土壌で、底面は平坦だがあまり締まりはない。壁の立ち上がりは良好である。覆土は自然堆積である。遺物は検出できなかったことから時期については不明である。

P-009 (第72図)

位置：E3-88に位置する。

遺構：主軸方向N-60°-Wを指し、長軸1.55m、短軸0.95mの卵形に近い楕円形プランを呈す。テフラ上面で検出された土壌で断面形は「U」字形を示し、底面は碗状に凹む。壁面の立ち上がりはだらっとしている。土壌内からの遺物の出土はない。

第5節 かにほらII遺跡

本遺跡では確認調査の結果、焼土遺構を検出した他は遺構はなく、若干の縄文土器が出土しただけである。焼土遺構を確認した地点は拡張本調査に移行した。また、拡張部分で縄文後期土器片がまとめて出土したが、それに関連する遺構は検出できなかった。

I. 縄文時代の遺物

縄文土器 (第74図)

当遺跡から出土している縄文土器は、遺構に伴うものではなくすべて包含層出土である。

1から3は同一個体と思われるもので、口縁部から胴上半部にかけての細片である。器形はやや丸味をもって肩の張る胴部が「く」の字状に屈折し、外傾する口縁部がつく。口縁部の文様帯は上部に隆帯による区画帯を設けその下位に3条のゆったりとした波状沈線文を施している。屈折部にも同じく3条の平行沈線文が施されている。なお、口縁部から胴部にかけて地文として縄文(LR)が施される。

4から10も同一個体と思われるもので、直線的に外傾する口縁部から胴部にかけての破片である。地文に縄文(LR)を施し、口縁部直下に1条の紐線文風に隆帯を貼付し、上部に連続指頭圧痕を施している。口縁部内面には1条の沈線がめぐっている。

前者は縄文中期加曾利E式に、後者は後期加曾利B式に比定できよう。

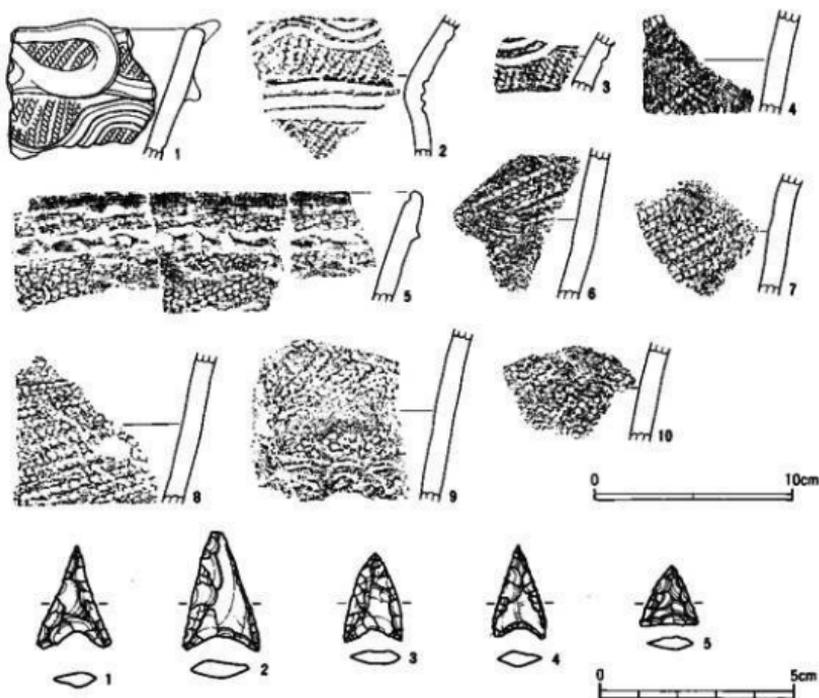
石器 (第74図)

石器もやはり包含層からの出土である。すべて石鏃で、5点出土している。ともに無柄タイプである。1はやや内湾気味に側辺のえぐれるもの、2は直線的な側辺、3・4はやや外にふくらむ側辺をもち、5は着柄部にえぐりのない三角形の形状である。石材は、1が安山岩、2・3・5がチャート、4が頁岩である。

II. 焼土遺構 (図版31)

位置：B1-97、B2-07に位置する。

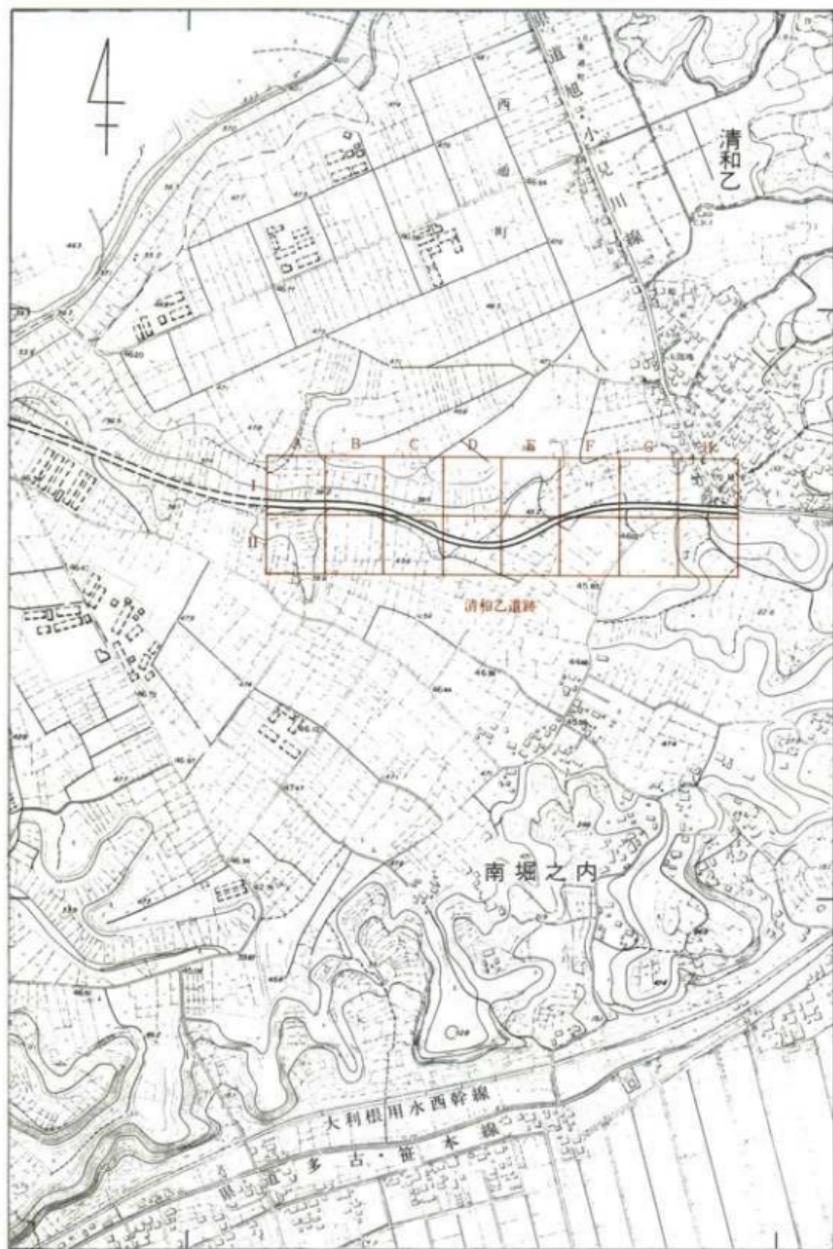
遺構：焼土、炭化材を多量に混入する落ち込みで、4基が近接して所在する。深さが20~40cmほどで、大ききは大きいもので径1m、小さいもので40cmである。かなり赤く焼けた焼土は2基から検出されたが、他の2基についても多量の炭化材が混入している。検出面はテフラ上面であるが遺物は出土していない。おそらくかなり新しい時期のものと思われる。



第74図 グリッド出土縄文土器拓影・石器実測図 (1/3・2/3)

第 3 章

清和乙遺跡
遺跡コード 348-001



第76図 遺跡位置・地形・グリッド配置図 (1/10,000)

I. 旧石器時代の遺構と遺物

当遺跡からは3ブロックを検出したが、一括で取り上げたものもあり、データ的には不十分な資料となってしまった。それぞれのブロックについては次に述べるとおりである。

第1ブロック (第77・78図、図版33・53)

1. 出土状況 (第78図)

石器の出土層位は、III層からIV～V層にかけて出土している。III層の中部に集中する。平面分布は、約6×6mの範囲に集中している。

2. 出土遺物 (第77図)

総計77点出土した。器種組成は、微細剥離痕のある剥片9点、剥片5点、碎片63点である石材組成は、全て黒曜石である。個別別資料分析は、石材が黒曜石で、碎片が多いため困難であったが、4・5個の個別別資料によるものとおもわれる。

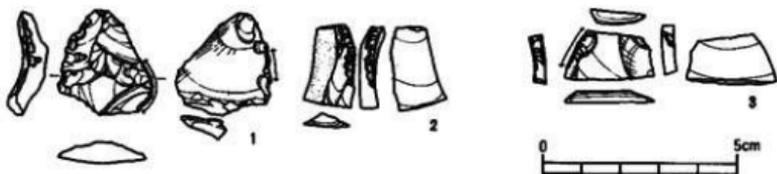
1～3は微細剥離痕のある剥片である。1の背面は細かく奥まで入る押圧剥離による剥離がみられ、側面形がしの字状になっていることから、尖頭器の調整剥片を素材としたものと考えられる。

3. 技術的特徴

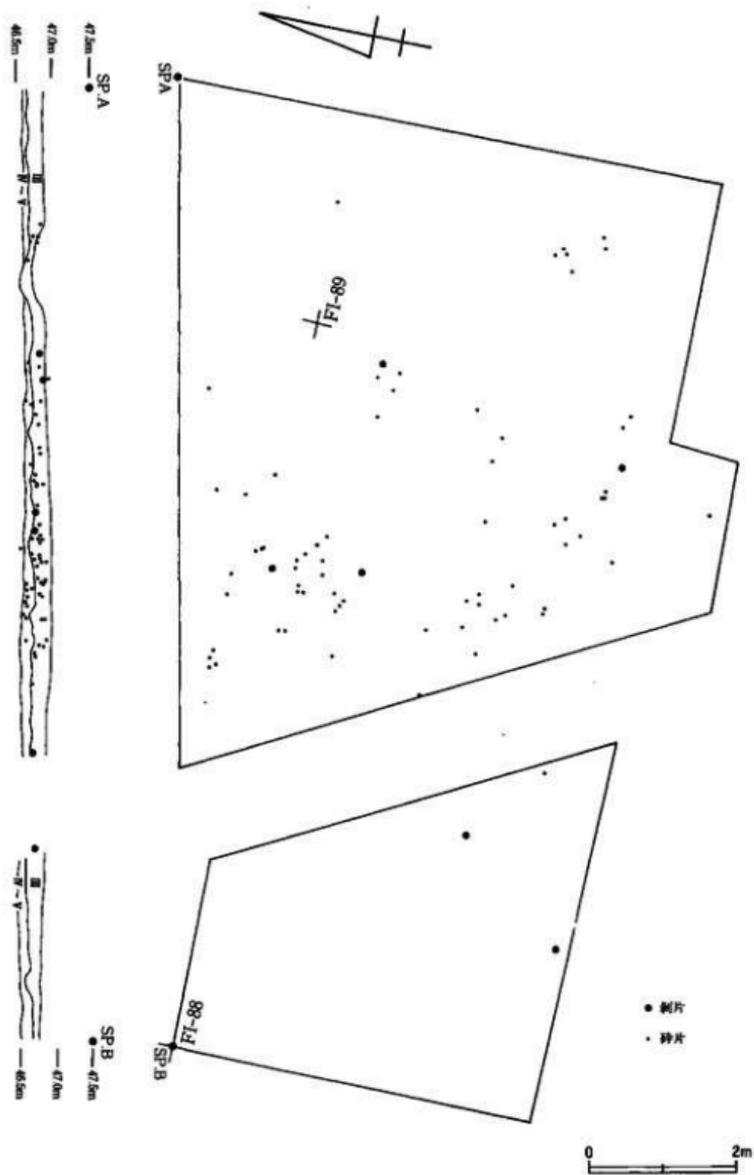
第1ブロックにおいて、利器(Tool)は検出されていないが、剥片・碎片の観察から、剥片・碎片の背面に細かい奥まで入る押圧剥離痕がみられ、側面形がしの字状に湾曲していることから、尖頭器の調整加工を行なったことがうかがわれる。特に、調整碎片が8割出土していることから、細部調整を行なったことが想定される。

表19 旧石器時代石器属性表

検出番号	器種	長さ	幅	厚さ(cm)	重量(g)	石材	遺物番号	備考
1	微細剥離痕のある剥片	2.7	2.4	0.8	3.3	黒曜石	F1-88-21	
2	微細剥離痕のある剥片	2.1	1.3	0.5	1.2	黒曜石	F1-88	先端折れ
3	微細剥離痕のある剥片	2.2	1.3	0.3	1.1	黒曜石	F1-88-53	基部・先端折れ



第77図 第1ブロック石器実測図 (2/3)



第78図 第1ブロック遺物出土状況 (1/80)

第2ブロック (第79図、図版53)

1. 出土状況

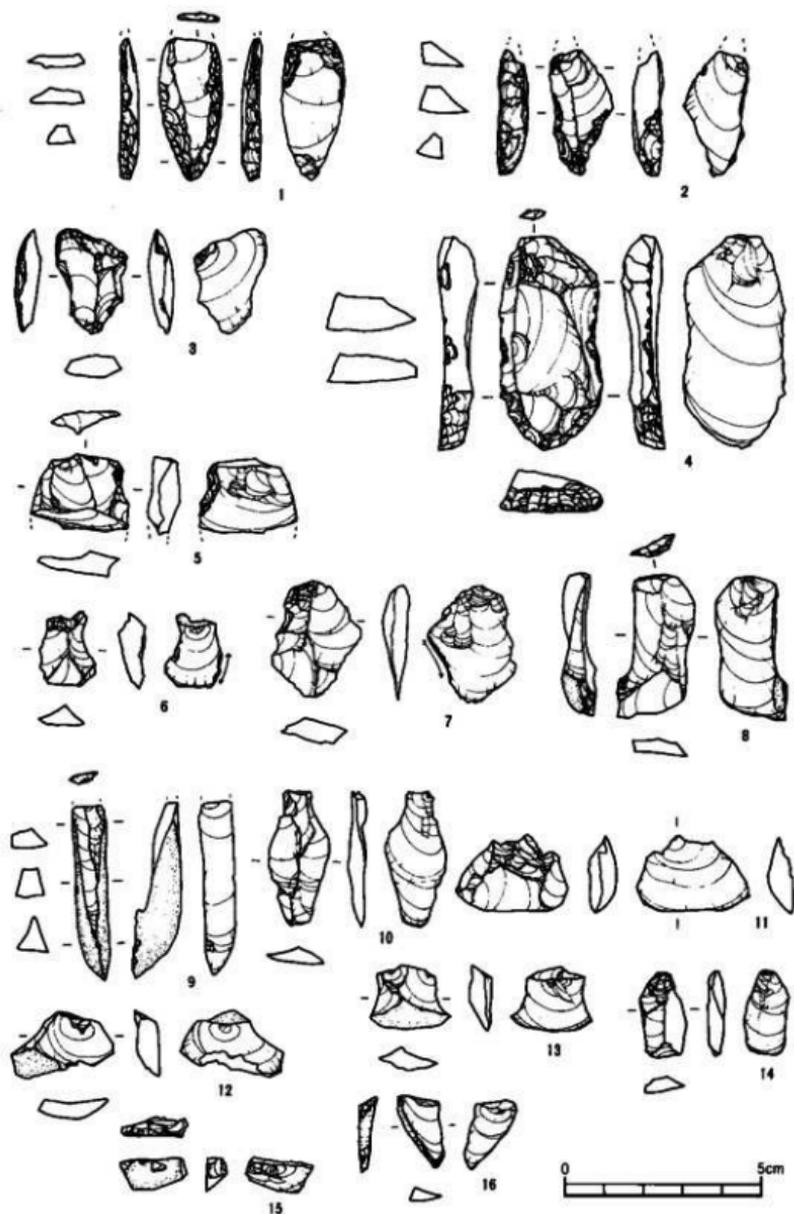
DII-56・57グリッドを中心とした遺物である。一括で取り上げられているため、出土地点、出土層位は不明である。

2. 出土遺物 (第79図)

石器組成は尖頭器1点、ナイフ形石器2点、擣器1点、削器1点、U-fl 2点、剥片9点の総計16点である。

表20 旧石器時代第2ブロック

検出番号	器 種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 材 (母 岩)	遺物番号
1	尖 頭 器	(3.6)	1.6	0.5	(3.2)	珉質頁岩 2	D II-57-17
2	ナイフ形石器	(3.2)	1.6	0.8	(3.3)	黒曜石 1	D II-56-10
3	ナイフ形石器	2.6	1.8	0.6	2.3	黒曜石 2	D II-56-10
4	擣 器	5.4	2.6	1.0	14.5	珉質頁岩 1	D II-56-10
5	削 器	1.9	2.5	0.8	3.3	珉質頁岩 3	D II-56-10
6	U - fl	1.9	1.4	0.7	1.3	珉質頁岩 5	D II-56-10
7	U - fl	3.0	2.3	0.7	2.9	珉質頁岩 3	D II-56-10
8	剥 片	3.7	1.9	0.9	4.5	珉質頁岩 5	D II-56-10
9	剥 片	4.4	0.9	1.3	4.1	珉質頁岩 5	D II-56-10
10	剥 片	3.5	1.6	0.5	1.7	珉質頁岩 4	D II-56-10
11	剥 片	1.9	2.8	0.7	3.5	珉質頁岩 4	D II-56-10
12	剥 片	1.7	2.6	0.6	1.4	珉質頁岩 5	D II-56-10
13	剥 片	1.7	2.0	0.6	1.4	珉質頁岩 5	D II-56-10
14	剥 片	2.2	1.2	0.5	1.0	珉質頁岩 5	D II-56-11
15	剥 片	0.9	1.7	0.5	0.7	珉質頁岩 5	D II-56-10
16	剥 片	1.9	1.1	0.5	0.6	珉質頁岩 6	D II-56-10



第79図 第2ブロック石器実測図 (2/3)

1は、周辺ないしは周縁加工の尖頭器で上半部及び基部には裏面への加工も見られる。先端部を欠損するが、裏面側上部欠損部からの縦方向の微細な剝離痕は一部側縁部の剝離痕を切っている。欠損時に生じたものであろうか。

2は、縦長の剥片を素材にした二側縁加工のナイフである。左側縁の調整は上部1/3が裏面側からの急角度のものである。また、これは同様に急角度の右側縁の調整加工に切られている。そのため、右側縁の基部が若干弯曲している。右側縁の刃部には微細な剝離痕が若干見られる。

3は、左側縁上部から先端部にかけてと右側縁下部に調整加工の見られるナイフ形石器である。打面はほとんど欠損するが、頭部調整の施された線状の打面と思われる。またこの石器は全体にローリングしており、特に表面側中央の稜は非常に鈍い。

4は、縦長の剥片（打面再生剝離か）を素材にした搔器である。調整加工は末端部から下部の1/3にかけて入念に急角度の調整加工を施している。若干磨耗によるのか、刃部の稜線が鈍いように思われる。

5は、横長の剥片の表面側左側縁に調整加工を施した削器である。下端部は切断面である。

6、7は、U-皿である。非常に微細な剝離痕を有する剥片であることと、それが裏面側に見られることから、剥片の剝離の際に生じたキズの可能性もある。

8～16は剥片である。

3. 特徴

母岩は珪質頁岩6種類、黒曜石2種類を識別した。石器組成において、周辺加工の尖頭器、二側縁加工のナイフ形石器を含むことから、ナイフ形石器終末期の石器群と思われる。

第3ブロック（第80図・図版33）

1. 出土状況（第80図）

石器の出土層位は、Ⅲ層を中心とし、平面分布は径8m程の範囲に集中している。ただし、住居跡に切られる部分では出土していない。

2. 出土遺物

総計で100点余りであるが、すべて剥片、破片で、利器（Tool）は検出されなかった。石材はすべて黒曜石である。

II. 縄文時代の遺物

当遺跡から縄文時代の遺構は検出できなかったが、遺物が若干出土した。

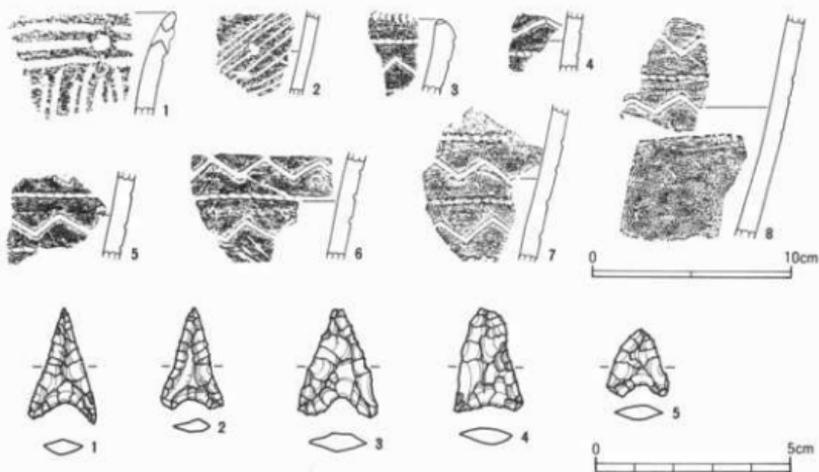
縄文土器（第81図）

当遺跡では包含層より縄文土器が若干出土している。すべて早期沈線文系の土器である。

1は外反する口縁部破片で、口唇部直下より横位の太沈線を3条めぐらせ、その下位に縦位の太沈線を施している。口唇部直下には補修孔とみられる円孔がある。2は斜位の細沈線を施



第80図 第3ブロック遺物分布図 (1/80)



第81図 グリッド出土縄文土器拓影・石器実測図 (1/3・2/3)

した土器である。これら2点は田戸下層式である。

3から8は同一個体で、口縁部から胴上半部にかけての破片である。口縁部は若干内湾し口唇部内側に刻み目を付けている。文様は口唇部直下より結節沈線文と鋸歯状文とを交互に施し、その組合せを3～4段繰り返している。胴下半部は無文帯となる。器面はきれいに磨かれ平滑に仕上げられており、焼成も良好で堅い焼き上がりを示す。この土器は、とかく複雑な文様構成をとる田戸上層式にあって、基本的な文様である結節沈線文と鋸歯状文のみの組合せということかなり単純化したモチーフをとっている。

石器 (第81図)

縄文時代の石器は石鏃を5点出土した。すべて無柄のタイプである。1・2・4は側辺がやや内側に入ぐれるもので、側辺からの剥離もシャープである。3・5は側辺がやや外側へふくらんでいる。5はかなりの小形品である。石材は2が安山岩、その他はチャートである。

III. 古墳時代の遺構と遺物

当遺跡からは5世紀から7世紀にかけての住居跡と遺物包含層が検出された。それぞれの遺構について説明していく。

なお、遺構番号については調査時に大グリッドごとに遺構番号を付けているので、本報告においてもその番号を踏襲することとした。

GI-001 (第82・83図)

位置：GI-78・88に位置する。

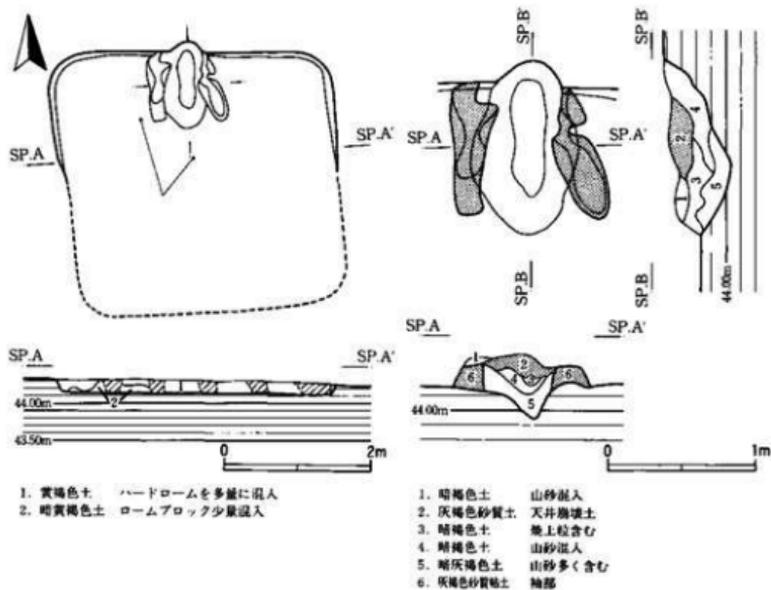
遺構：南北3.84m、東西は不明だが、隅丸方形を呈すると思われる。主軸方向はN-6'-Wである。住居跡上部は削平攪乱され、検出面がハードルーム上面であったことから、遺存状態が悪くカマドの所在する北側半分の立ち上がりが確認できただけである。壁高は24.5cmが最高で台地の傾斜に伴い西壁よりも東壁のほうが浅い。ただ、壁の立ち上がりはしっかりしている。床面はトレンチャーによる攪乱が激しく遺存度は悪いが、カマド周辺は堅緻である。周溝は認められなかった。遺物は甕の上半部を出土した他は10数片の小破片をまばらに検出した程度である。

カマド：北壁中央に位置し、山砂粘土を使用した袖部は基底部付近まで削平され、遺存度は良くなく流出砂粒が周囲に散っていた。特に左袖は山砂粘土と黒色土を混入しているため不明瞭であった。床面より20cmほど凹ませた船底形を呈す燃焼部には火床と思われる焼土の堆積がなく、焼土粒子を若干含む程度である。燃焼部から煙道部にかけては緩傾斜で住居壁面より17cm突出する。

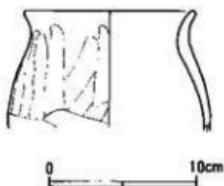
遺物：壜形土器が1点出土している。口縁部が外反し、やや胴部に張りをもたせた壜形土器で、胴部外面は上半が縦方向に、下半は斜位にヘラケズリされる。

表21 G I-001出土土器観察表

押図番号	器種	法量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	甕	11.3 — (8.0)	3/6	口縁部内外面 ココナデ 胴部内面 ナデ 胴部外面 ヘラケズリ		小砂粒多 スクリップ 粒	暗黄褐色	良好	



第82図 GI-001 平面・カマド実測図 (1/80・1/40)



第83図 GI-001 出土土器実測図 (1/4)

GI-004 (第84～86図・図版35・45)

位置：GI-86・87に位置し、GI-005を切る。南東コーナーは調査区外となる。

遺構：主軸4.82m、横軸4.78mの隅丸方形プランを呈し、主軸方向N-15°-W、北壁にカマドを設ける。東傾斜面のため西壁で50cm、東壁で30cmの深さとなり、立ち上がりは良好でほぼ垂直である。西壁は005の覆土を壁面としているが、断面観察より垂直な立ち上がりを示していた。床面はほぼ平坦であるがしまりは弱い。005と切り合う部分ではソフトロームを主体とする貼床がみとめられた。

主柱穴はP₁～P₄の4ヶ所検出でき、いずれも中位に平坦面や屈折部をもつ階段状の掘り方を示す。それぞれの深さはP₁が57cm、P₂が40cm、P₃が57cm、P₄が42cmとしっかりしている。なお、周溝は認められなかった。住居覆土には多くの焼土が認められることから、焼失住居と考えてよさそうである。遺物の出土状況も床面直上のものが多い。

カマド：北壁中央部に位置し、袖部は若干流出しているものの長く延び1.1mを計る。天井部は掛口部分がつぶれた状態で認められた。カマド掘り方は楕円形で袖部の内側に収まっている。底面は凸凹が激しい。火床部は掘り方中央にあり、焼土が厚く堆積している。底面との間にはロームを混入する暗黄褐色土層が堆積している。煙道部は幅が狭く急傾斜で立ち上がり壁外に20cmほど突出する。

遺物：甕2点、杯2点、手捏ね1点が出土している。

1は常総型甕で、肩に張りをもたせた胴部形態をとり、胴部下半外面に細かいヘラミガキを施している。2は反外する口縁部をもち、胴部は肩に張りをもたせた面長の形態をとる。外面は粗いヘラミガキがなされている。3、4は赤色塗彩された丸底の杯で、3は全面に、4は底面以外に施される。ともに外面はヘラケズリされ内面はみがかれている。5は手捏ねで、杯を模しているようである。体部調整は口縁部を強くヨコナデし直立する口縁帯をつくっている。他は無調整である。底部には木葉痕が残っている。若干上底風である。

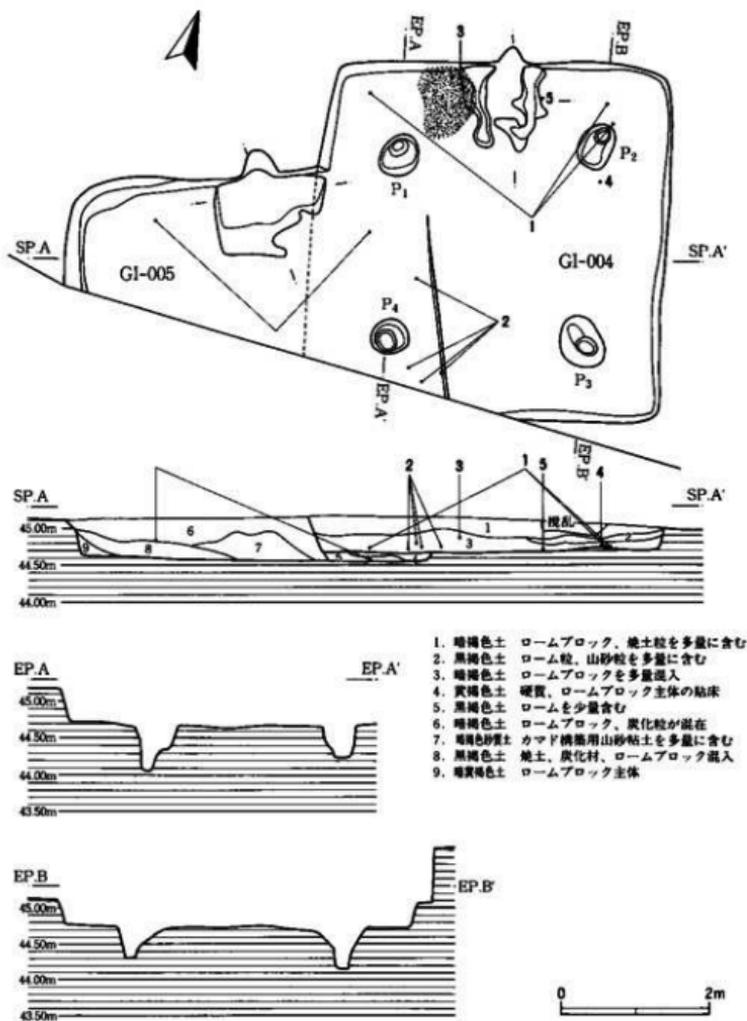
表22 GI-004出土土器観察表

押出番号	器種	法重(㎏) 口・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	甕	— 8.4 30.0	3/4	胴部外面ナデ後胴下半ヘラミガキ 胴部内面ナデ		砂粒多	暗赤褐色	良好	胴下半二次焼成受る
2	甕	20.0 — (23.5)	3/4	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ 体部内面ナデ後粗いミガキ 体部外面ヘラケズリ後粗いミガキ		砂粒多 スコリア 粒少	暗黄褐色	良好	
3	杯	12.1 — 3.9	3/4	口縁部内外面ヨコナデ 体部内面ミガキ 体部外面ヘラケズリ		小砂粒多	黄褐色	良好	赤彩
4	杯	10.5 — 3.7	3/4	口縁部内外面ヨコナデ 体部内面ミガキ 体部外面ヘラケズリ		スコリア 粒 小砂粒	黄褐色	良好	赤彩
5	手捏ね	11.0 6.8 4.0	3/4	口縁部内外面ヨコナデ 体部内面ナデ 体部外面調整・輪轆み痕残る 底部木葉痕		きめ細かい	明褐色	良好	

GI-005 (第84~86図・図版36)

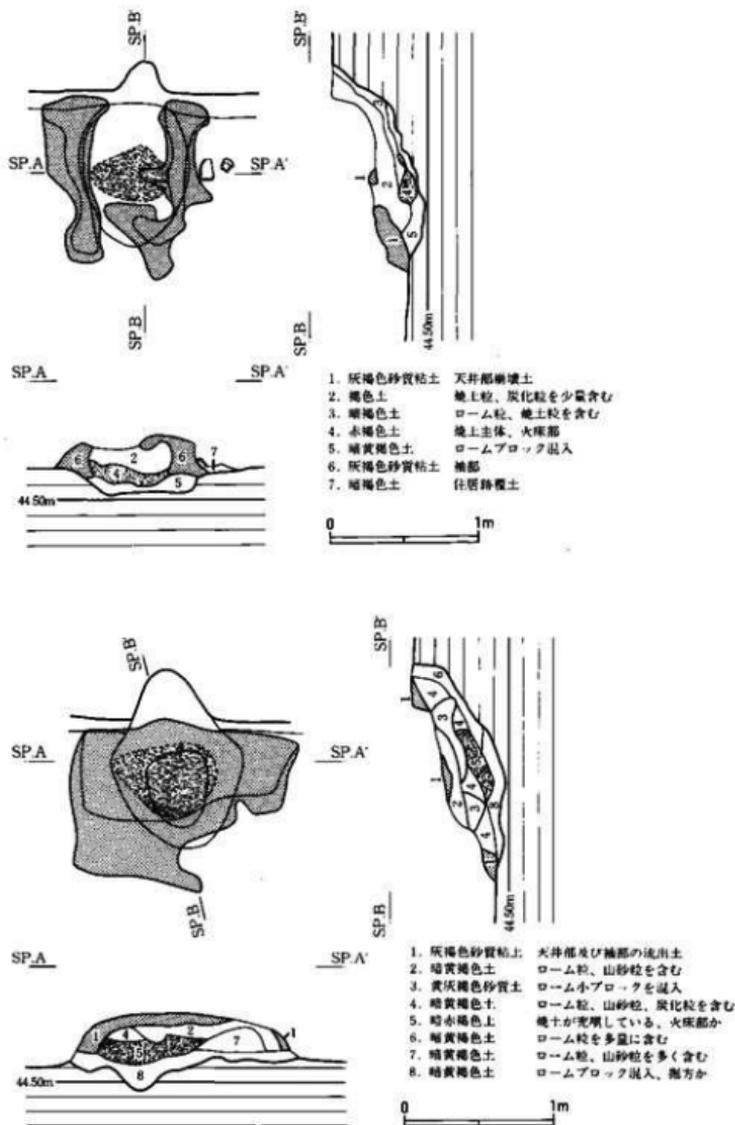
位置：GI-86・87に位置し、GI-004に切られる。南半は調査区外となる。

遺構：横軸5.00m、主軸は全域調査できなかったため不明である。おそらく、隅丸方形プランを呈すと思われ、主軸方向はN-25°-W、北壁にカマドを設けている。壁高は50cm前後と高く、カマド付近は垂直に立ち上がる。北西コーナーから西壁にかけては上部がやや崩れ、緩い



第84図 GI-004・005平面図 (1/80)

立ち上がりとなる。004に切られる東壁では10cmほどの段差を認めるが、北東コーナー付近で床面が同一レベルとなる。床面はやや凸凹がみられるものの堅くしまっている。柱穴、周溝等は



第85図 GI-004・005 カマド実測図 (1/40)

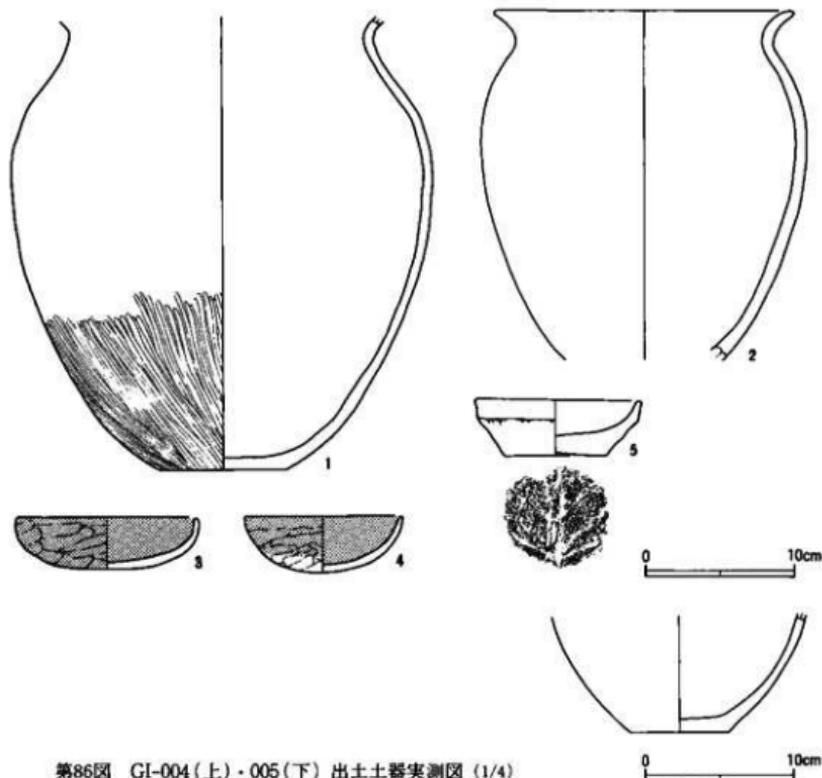
検出できなかった。遺物出土量は少なく、10数片の出土にとどまる。覆土中には焼土、炭化物粒子を多く含むことから焼失住居の可能性が高い。

カマド：北壁中央に位置し、天井部、袖部の構築材（山砂）が広範囲に流出し、両者の区別は判然としない。掘り方は楕円形で左寄りに底面があり、よく焼けた火床部と基底部の間に暗褐色土層が堆積している。

遺物：甕が1点出土している。胴下半部のみで、内外面ともナデを施しているが二次焼成を受けているため器面はかなり荒れている。

表23 G I-005出土土器観察表

押図 番号	器種	法量(cm)	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎土	色調	焼成	備考
		口・底・高							
1	甕	6.6 (8.2)	3/4	胴部内面ナデ 胴部外面ナデ		小砂粒多	羽茶褐色	良好	二次焼成受ける



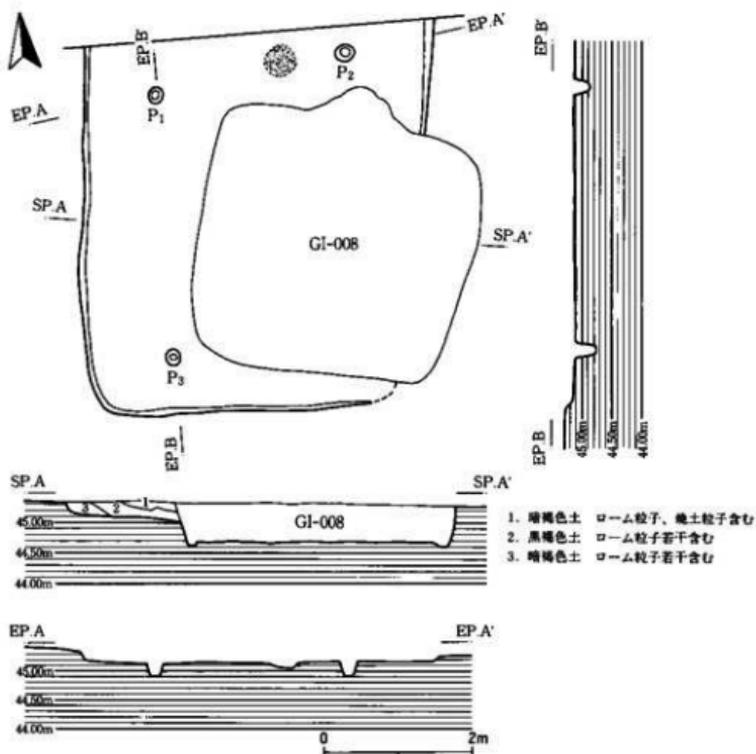
第86図 GI-004(上)・005(下)出土土器実測図(1/4)

GI-009 (第87図)

位置：GI-76に位置し、GI-008に切られ北壁側は調査区外となる。

遺構：主軸は計測可能部分で5.1m、横軸は4.68mの隅丸長方形プランを呈し、主軸方向はN-10°-Eを指す。北壁側の柱穴間に炉を設けている。住居の掘り込みが浅いため南東コーナーの立ち上がりは認められないが、全体にだらりとした立ち上りを示す。中央部はGI-008に切られるため不明だが、床面の状態はあまりしまりがなく凸凹が目立つ。柱穴は3ヶ所で検出できた。P₁は径20cmで深さ20cm、P₂は25cm・20cm、P₃は22cm・28cmですべて浅く、P₂の位置が北側に寄っているのが気掛かりではあるが、主柱穴と考えて良いようである。住居覆土は自然埋没のようである。

遺物：遺物はすべて細片で、出土量も少なかった。

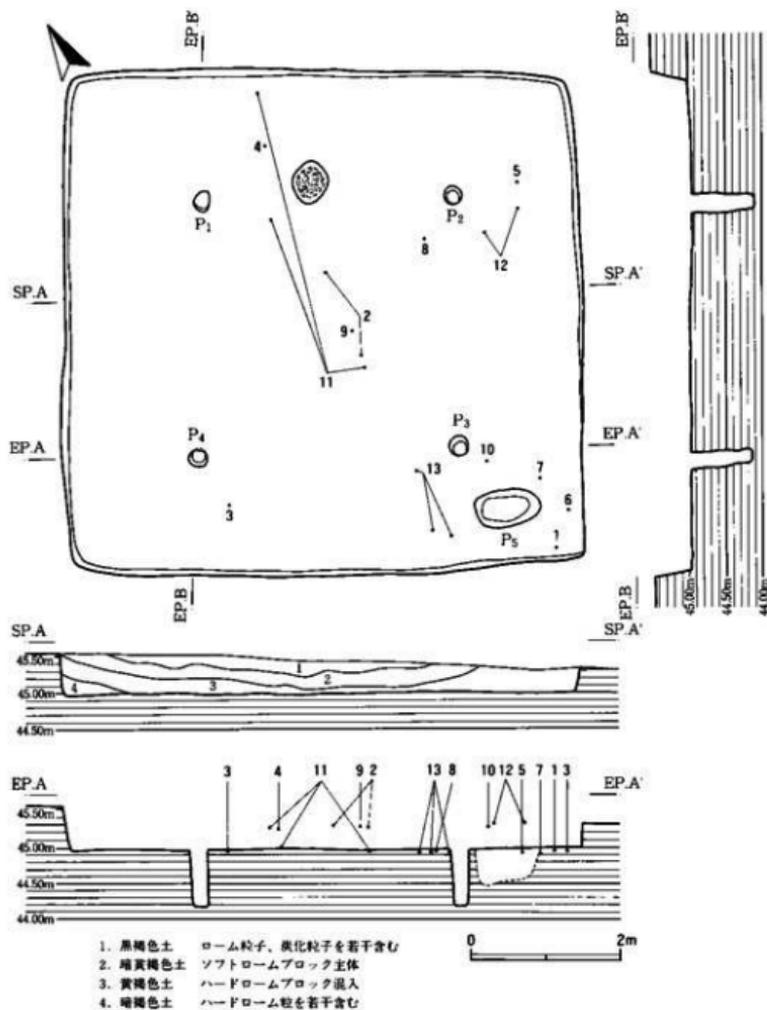


第87図 GI-009 平面図 (1/80)

GI-011 (第88・89図・図版38・42)

位置：GI-75、84、85に位置する。

遺構：主軸6.84m、横軸7.00mの方形プランを呈し、主軸方向N-30°-E、炉をもつ。壁高は北西コーナーが高く60cm、東南コーナーで30cmを計り、ほぼ垂直に立ち上がる。各壁は直線的でコーナーの丸味もほとんどない。床面は平坦で堅く、特に中央部は顕著である。主柱穴は



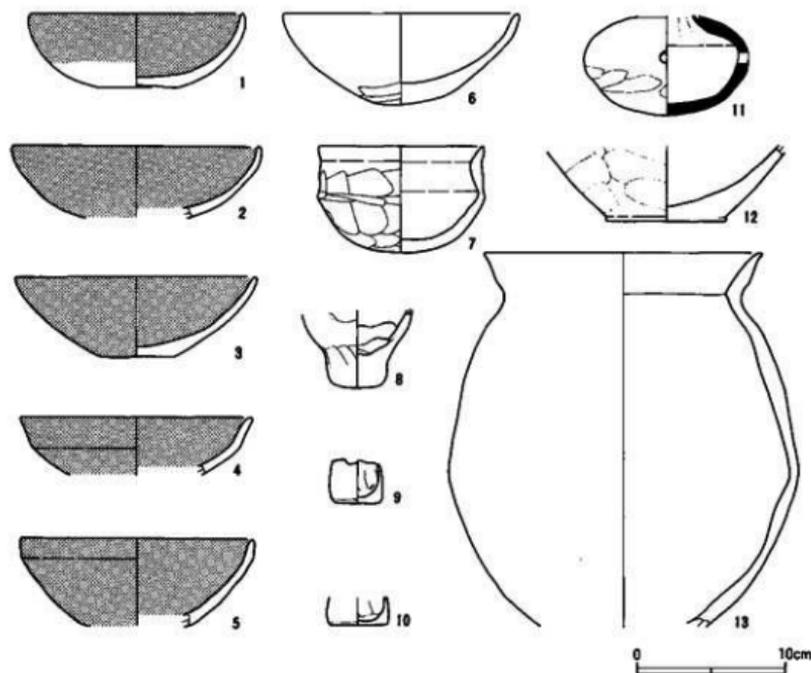
第88図 GI-011 平面図 (1/80)

4ヶ所で東南コーナーには貯蔵穴がある。P₁～P₄は支柱穴ですべて80cm以上の深さまで掘り込まれる。それぞれの径・深さはP₁が25cm・84cm、P₂が25cm・80cm、P₃が28cm・90cm、P₄が22cm・80cmである。P₅は貯蔵穴で長軸が住居の軸とほぼ平行する。大きさは90×52cmで丸味の強い隅丸長方形を呈し、深さ46cmを計る。基底部分はやや西側に傾斜しているものの平坦に近く、壁の立ち上がりは良好である。なお、床面の東半部には小ピットが散在していたが、時期が異なるため図面では省略した。遺物は床面直上及び覆土中位より多数出土しているが、ことに貯蔵穴周辺で甕、杯等の完形品が目立った。また、須恵器はそうや手づくね土器を伴っていることも注目される。

炉：地床炉でP₁とP₂の間にある。径は50×60cmの楕円形を呈し、皿状に凹み18cmの深さを計る。火床部の残りがよく焼土が厚く堆積する。

遺物：杯6点、甕1点、手捏ね3点、椀1点、甕2点が出土している。

1から5は赤色塗彩された杯で、1をのぞき全面に施されている。底部は小さい平底になるようである。1から3は底部から口縁部にかけて緩く内弯し、4・5は体部上方に弱い稜線をつくっている。6は赤色塗彩はなされず、底部がやや厚く突出しており外面にヘラケズリを施



第89図 GI-011 出土土器実測図 (1/4)

している。7は粗雑なつくりで、口縁端部は短く外反し、体部は中央でくの字状に屈曲し丸い底部に移行する。体部外面は横方向の粗いヘラケズリである。8から10は手捏ね土器で8はやや大きめである。11は須恵器産で、やや肩の張る偏球形の胴部最大径部位に若干下方に向けて1孔を穿ち、外面には下半に粗いヘラケズリを施している。口縁部は欠損している。器面は青灰色、断面の色調は中央がセピア色を呈している。12は壺の底部付近の破片。13は底部を欠く壺で胴部外面は丁寧に磨かれている。

表24 G I-011出土土器観察表

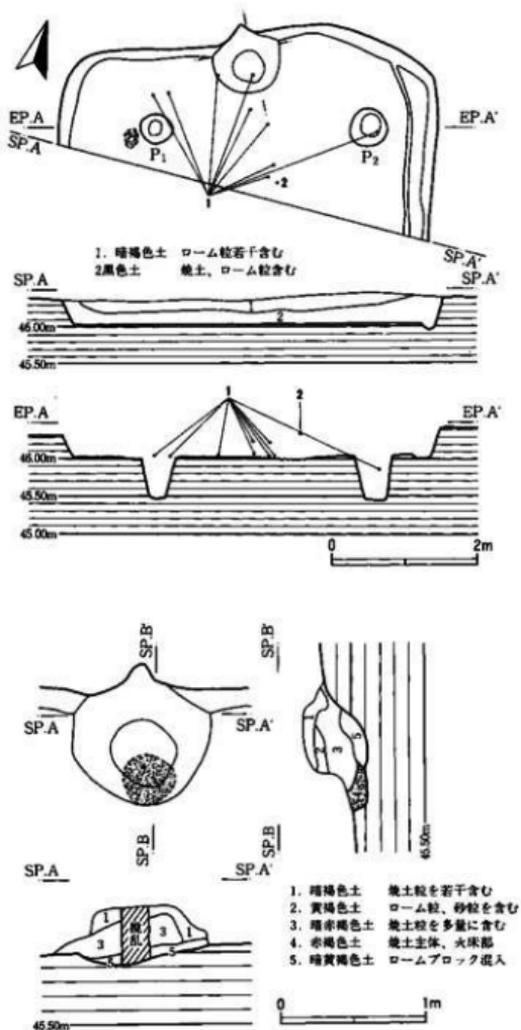
押区番号	器種	法量(cm)	遺存度	成形・整形手法	回転方向	胎土	色調	焼成	備考
		口・底・高							
1	杯	14.5 5.4 5.0	1/4	体部内外面ヘラミガキ		砂粒	赤褐色	良好	体部外面上部 体部内面 } 赤彩
2	杯	17.0 — (4.8)	3/4	体部内外面ヘラミガキ		砂粒少	赤褐色	良好	全面赤彩
3	杯	16.5 5.4 4.9	5/6	体部内外面ヘラミガキ		砂粒少	赤褐色	良好	全面赤彩
4	杯	15.8 — (3.9)	3/4	体部内外面ヘラミガキ		砂粒少	明褐色	良好	全面赤彩
5	杯	16.0 — (6.0)	3/4	体部内外面ヘラミガキ		砂粒少	赤褐色	良好	全面赤彩
6	杯	16.2 — 6.2	1/4	体部内外面ヘラミガキ 底部ヘラケズリ		砂粒少	明褐色	良好	
7	埴	11.3 — 7.2	5/6	口縁内外面ココナデ 体部内面ナデ 体部外面ヘラケズリ後かるいナデ		小砂粒多	茶褐色	良好	
8	手捏ね	— 3.3 (5.2)	3/4			小砂粒多	明褐色	良好	
9	手捏ね	3.3 2.9 3.1	5/6			小砂粒少	明褐色	良好	
10	手捏ね	— 3.7 (1.9)	3/4			小砂粒少	明褐色	良好	
11	壺	— — (6.8)	3/4	胴部内面ナデ、胴部にしぼり目 胴部外面ナデ後下部ヘラケズリ		緻密	青灰色	良好	須恵 断面一部セピア色
12	壺	— 8.0 (5.0)	3/4	胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		砂粒多	黄褐色	良好	
13	壺	18.8 — (25.4)	1/4	口縁内外面ココナデ後内面ミガキ 体部内面ナデ 体部外面ヘラケズリ後丁寧ナデ		砂粒多	暗褐色	良好	体部外面に煤付着

GI-018 (第90・91図・図版39・45)

位置：GI-82に位置し、南半は調査区外となる。

遺構：横軸5.20m、主軸は全掘できないため計測不能だが、プランは隅丸方形を呈すと思われる。主軸方向はN-17-Wで北壁にカマドを設ける。壁の立ち上がりは比較的緩く壁高は40cmを計る。コーナーの丸味は大きくカマド右側の壁は外方に脹らんでいる。床面は全体に堅緻で、カマド前面が若干凹んでいる。東壁下に浅い周溝を認めるが、幅は広く30cm前後を計る。P₁、P₂は支柱穴で、深さがそれぞれ53cmと60cmを計り掘り方はしっかりしている。覆土は2層に

分層できるが、下位層には焼土粒が多量に混入することから、当住居は焼失住居と考えると良いようである。ただし、カマドの遺存度が悪く遺物もごく少量であることから、住居廃棄後に焼き払った可能性が高い。遺物の出土状況は、甕の胴部破片がカマド及びカマド前面の床面付近から検出できた他は、杯破片が覆土中位から浮いた状態で出土した程度である。



第90図 G1-018 平面・カマド実測図 (1/80・1/40)

カマド：北壁中央に位置し、袖部、天井部等の構築材はほとんどが流出し、遺存度が非常に悪い。火床部は10cmほど椀状に掘り凹められた掘り方手前部分にわずかに残る程度である。煙道部は短く、壁外に10cmほど突出する程度である。

遺物：甗1点、杯1点が出土している。

1は高さ35cmほどの大形の甗で、直線的に立ち上がる胴部に外反する口縁をもつ。胴部外面は縦方向のヘラケズリが2段にわたって行なわれている。底部開口部はきれいに面取りがなされている。2は体部に明瞭な稜線をもち、口縁部が直立する杯である。

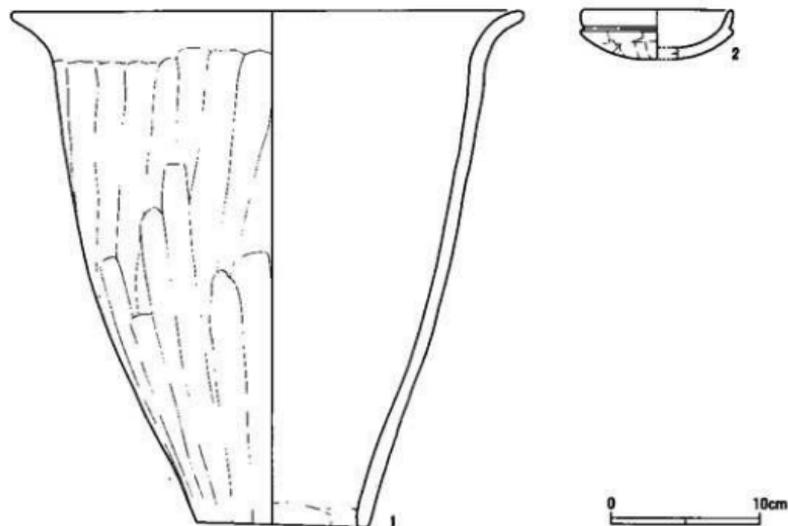
表25 G I -018出土土器観察表

押回 番号	器 種	法量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎土	色調	焼成	備考
1	甗	35.0 11.5 35.4	3/6	口縁部内外面ヨコナデ 体部内面ナデ 体部外面ヘラケズリ		スコリア 粒多	赤褐色	良好	
2	杯	9.9 — (3.2)	3/6	口縁部内外面ヨコナデ 体部内面ミガキ 体部外面ヘラケズリ		スコリア 粒多	暗黄褐色	良好	

GI-019 (第92図)

位置：GI-72、82に位置する。

遺構：主軸6.22m、横軸6.16mの方形プランを呈し、主軸方向はN-54°-Wを指す。掘り方は浅くソフトローム上面を床面としているため、確認面での壁高は5cm前後で、南壁及び東



第91図 GI-018 出土土器実測図 (1/4)

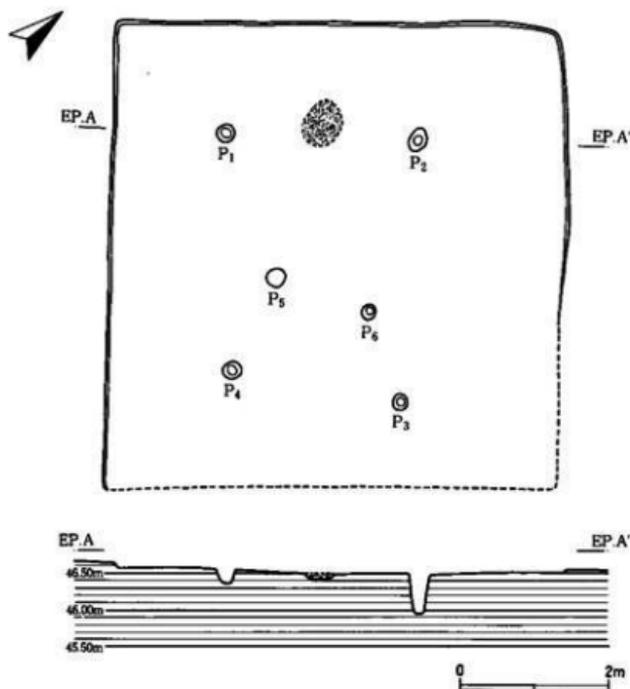
壁南半の立ち上がりは確認できなかった。床面は平坦でさほどしまっていない。ピットは6ヶ所で検出した。それぞれの径と深さは、 P_1 が25cm・16cm・ P_2 が26cm・51cm、 P_3 が21cm・33cm、 P_4 が25cm・25cm、 P_5 が25cm・38cm、 P_6 が18cm・43cmである。それぞれの配置から P_1 ～ P_4 は支柱穴、 P_5 、 P_6 は支柱穴と考えてよいであろう。遺物は覆土が浅いためか床面から細片を1点出土したのみである。

炉： P_1 と P_2 の中間にあり、60×50cmの楕円形を呈す。掘り方は浅く10cmほどで、火床部は赤褐色に焼けている。

FI-002 (第93図)

位置：FI-88に位置し、住居中央を南北に道路が通る。また、FI-008に切られる。

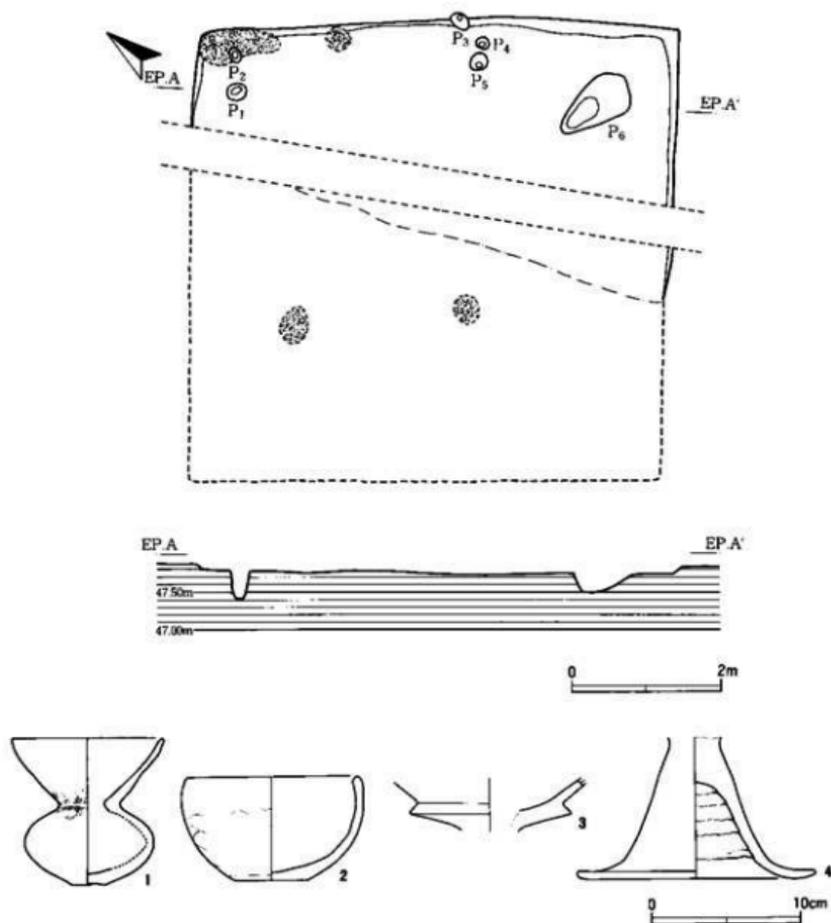
遺構：掘り込みが浅く、北西半は床面まで削られている。北東壁が6.55mを計り、北西壁1.3m、南東壁3.7mが残存する。住居確認面はソフトローム上面で、北東壁で18cmの高さがあり南へ移行するにつれて浅くなる。また、壁の立ち上がりも緩い。各コーナーはほぼ垂直に折れていることから、方形プランを呈するものと推測できる。北東半部に遺存する床面はほぼ平坦ではあるがしまりが弱く、はっきりとした床面の識別が困難であった。当初、床面の切れる南東部



第92図 GI-019 平面図 (1/80)

分で壁の立ち上がりと思える段状の堅い部分が検出されたが、周囲を精査したところ炉床が2ヶ所で検出できたことから大形な方形の住居であると判明した。ピットは6ヶ所で検出でき、 P_1 は深さ40cmとしっかりしていることから支柱穴の可能性が高いが、 P_6 は長円形の大型ピットで支柱穴と考えるには疑問が多い。また、 $P_2 \sim P_5$ については、住居に伴うピットではない可能性が高い。

遺物は覆土の残っている北東壁寄りから出土、東側コーナーからは埴の完形品(1)が出土した。覆土には焼土粒が多く混入しており、焼失住居の可能性が高い。



第93図 FI-002 平面・出土土器実測図 (1/80・1/4)

炉：床面の残っていない北西部2ヶ所から炉床を検出、ともに40～50cmほどの楕円形を呈す。
遺物：埴1点、椀1点、高杯2点が出土している。

1は長頸の埴で、やや偏球形の胴部につよく外傾する口縁部が付す。頸はつよくしまり「く」の字状を呈している。底部は上げ底で小さい。器面は刷毛目調整の後ヘラミガキを施している。2は体部が内湾しながら立ち上がる椀で、外面はヘラケズリを施す。3・4は高杯の杯部と脚部である。3は杯部下端に稜線をつくり、口縁部が大きく開く形態で、4は脚裾部が大きく外湾している。脚内面には輪積み痕を明瞭に残している。

表26 FI-002出土土器観察表

神図 番号	器種	法量(cm)		遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎土	色調	焼成	備考
		口・底・高								
1	埴	10.0	%		口縁上部内外面ヨコナデ 口縁下部内面ナデ 口縁下部～胴部外面刷毛目後ミガキ		小砂粒少	淡黄褐色	良好	底部上遺風
		2.1								
		10.0								
2	埴	11.6	%		口縁部内外面ヨコナデ 体部内面ナデ 体部外面ヘラケズリ		小砂粒 スクリア 粒	黄褐色	良好	
		4.8								
		7.2								
3	高杯	-	%		杯部内外面ミガキ		小砂粒 黄母粒	赤褐色	良好	
		(3.7)								
4	高杯	-	%		脚袖部内面ヨコナデ 脚内面輪積み痕 脚外面ミガキ		スクリア 粒多	黄褐色	良好	
		16.0 (9.6)								

FI-004 (第94図)

位置：FI-97に位置し、FI-008を切る。

遺構：主軸2.60m、横軸2.84mの隅丸方形プランを呈し、主軸方向N-29°-W、北壁にカマドを設ける。壁高は40cm前後で緩く立ち上がり、コーナーの丸味はさほど強くない。床面は中央部が若干高くよく踏み固められているが、壁側は軟弱である。なお、柱穴、周溝等は検出できなかった。住居覆土は2層に分けたが、ともにロームブロックを多量に混入していることから、一時期の埋没もしくは埋め戻しを行なっている可能性もある。遺物はほとんどが小破片で覆土中に散在していた。

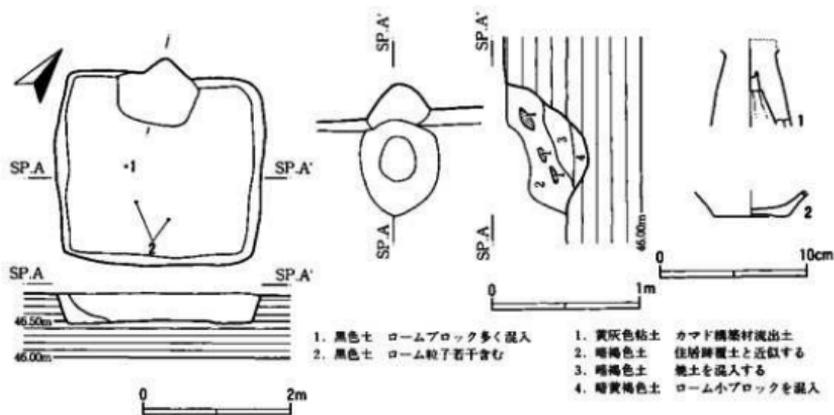
カマド：北壁中央に位置し、砂質粘土がまんじゅう状に検出できたが、ほとんどが流失したもので、袖部、天井部等の施設は壊れていた。15cmほどの深さの掘り方は楕円形を呈し、火床部はあまり焼けていなかった。煙道部は緩く立ち上がり、壁外に20cmほど突出している。

遺物：高杯1点、甕1点が出土している。

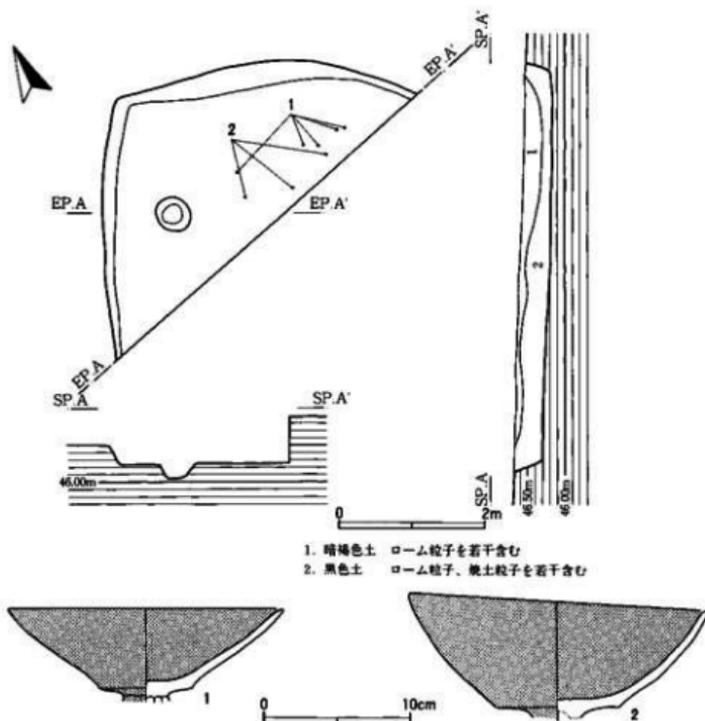
1は高杯脚部破片で、ほぞ状の接合部分がうかがえる。2は甕の底部破片と思われる。

表27 FI-004出土土器観察表

神図 番号	器種	法量(cm)		遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎土	色調	焼成	備考
		口・底・高								
1	高杯	-	%		脚内面しぼり目 脚外面ミガキ		小砂粒 スクリア 粒	暗赤褐色	良好	
		(6.0)								
2	甕(?)	-	%		胴部内外面ナデ		砂粒多	淡褐色	不良	二次焼成受ける
		5.0 (1.7)								



第94図 FI-004 平面・カマド・出土土器実測図 (1/80・1/40・1/4)



第95図 FII-001 平面・出土土器実測図 (1/80・1/4)

FII-001 (第95図)

位置：FII-04に位置し、南半は調査区外となる。

遺構：北壁から東壁にかけて調査できたが、その他は調査区外となるため規模、形状とも不明瞭である。おそらく方形プランをとるものと思われる。北壁、東壁ともやや外方に膨らみ、コーナーはほぼ直角に折れる。壁高は28cmで、緩く立ち上がり、トレンチャーによる攪乱が激しい。床面は平坦、堅緻で、東壁寄りにピットを1ヶ所検出したが、深さは約20cmと柱穴としては貧弱である。ほかに内部施設は認められなかった。遺物は攪乱により破損がはげしかった。

遺物：高杯が2点出土している。

ともに赤色塗彩された杯部のみの遺存で脚部は欠いている。1は体部下端に稜線を作成し、直線的に外傾し口縁にいたるが、2は体部下端の稜線から内弯気味に立ち上がっている。

表28 FII-001出土土器観察表

検出 番号	器種	法量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎土	色調	焼成	備考
1	高杯	18.5 — (6.4)	5%	杯部内外面ミガキ		スコリア 粒	黄褐色	良好	全面赤彩
2	高杯	19.8 — (8.7)	5%	杯部内外面ミガキ		小砂粒多	淡黄褐色	良好	全面赤彩

EII-001 (第96図・図版42)

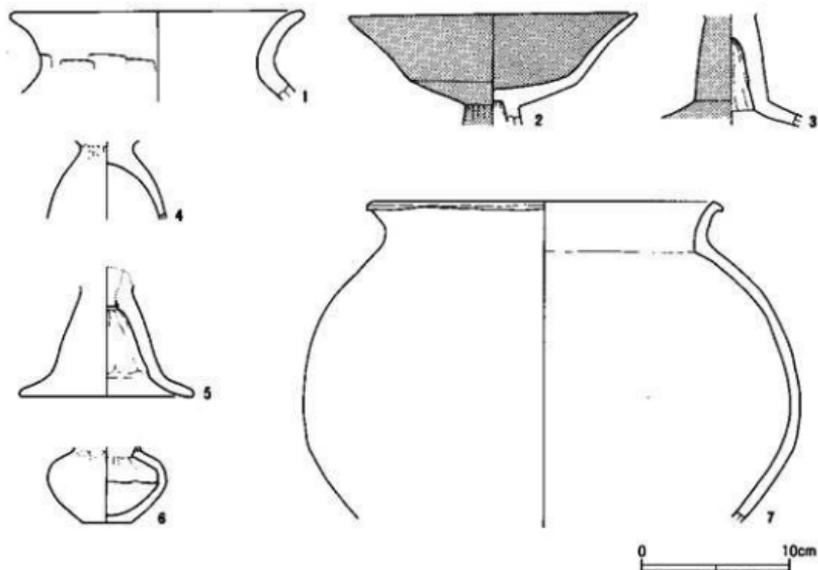
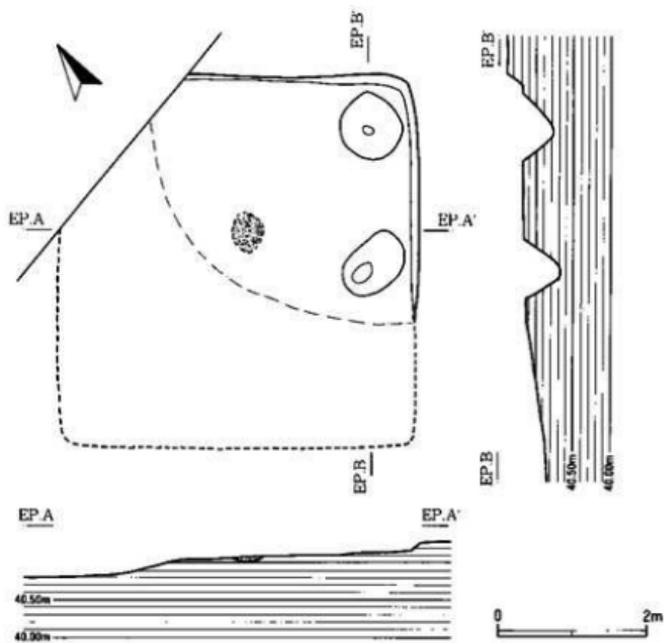
位置：EII-32、42に位置し、北西コーナーが調査区外にかかる。

遺構：西傾斜面に立地し削平を受けているため、住居規模は不明。主軸方向はN-31°-Eを指す。住居プランの判明するのは、北壁から北東コーナーを通って東壁途中までで、扇形に床面が残存している。壁高は最後部が北東コーナーの20cmでしだいに減少していく。残存する床面は平坦で堅くしまり、特に炉周辺は堅緻である。ピットは2ヶ所検出した。P₁は北東コーナーに、P₂は東壁中央にあり、ともに径80~90cm、深さ40cmのすり鉢状を呈す。遺物はわずかに残った覆土中より数片出土したのみである。

炉：55×40cmの楕円形を呈し、10cmほど皿状に凹む。火床部はしっかりしており焼土塊が充填していた。おそらく、炉は住居中央に位置すると思われる。

遺物：甕2点、高杯4点、埴1点出土している。

1は口縁部が強く外反する甕で、胴部は縦方向のヘラケズリが行なわれる。7は大形な甕で、球形につよく張りをもたせた胴部に短く外反する口縁をもつ。口唇部は面取りがなされ平坦な面をつくっているが、その時の余った粘土が垂れ下っている。胴部はきれいに磨かれ光沢もっている。2から5は高杯で、2・3は全面に赤色塗彩されている。完成品はなく、2は杯部のみの遺存で、下端に稜線をつくり屈折して外反しながら口縁部にいたる。3は脚部の破片で



第96图 EII-001 平面·出土土器夹测图 (1/80·1/4)

円筒部分が長く「く」の字状に開いて裾部にいたる。4は丸い膨らみをもつ脚円筒部で、5は円錐形の円筒部に外反する裾部の付す脚部破片である。6は埴の胴部で、肩に張りをもたせている。底部は平底となる。胴部内面中央には輪積み痕が、また肩部にはしぼり目痕が残っている。外面は刷毛目調整の後ミガキを施している。

表29 E II-001出土土器観察表

検出 番号	器 種	法量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎 土	色 調	肌 感	備 考
1	壺	19.5 — (6.0)	3/4	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ後ミガキ		砂粒多	暗赤褐色	良好	
2	高杯	19.2 — (7.5)	5/6	杯部内外面ミガキ 脚部内面しぼり目 脚部外面ミガキ		砂粒多	黄褐色	良好	赤彩
3	高杯	— — (7.6)	5/6	脚円筒部内面しぼり目 脚部内面ナデ 脚部外面ミガキ		砂粒多	暗黄褐色	良好	赤彩
4	高杯	— — (5.1)	5/6	脚内面ナデ 脚外面ミガキ		砂粒多	淡黄褐色	良好	
5	高杯	— 6.6 (8.7)	3/4	脚内面しぼり目 脚部内面ナデ 脚部外面ミガキ		砂粒多 スコリア 粒多	暗赤褐色	良好	
6	埴	— 3.2 (5.2)	5/6	胴部内面ナデ、上半部しぼり目 胴部外面刷毛目後ミガキ		小砂粒多	暗黄褐色	良好	
7	壺	(24.0) — (22.4)	5/6	口縁部内面ナデ 口縁部外面無調整 胴部内面ナデ 胴部外面ミガキ		砂粒 スコリア 粒	暗赤褐色	良好	

包含層

遺物出土状況 (第97図)

DII-57からEII-51にかけて北側から浅い谷が2筋入り込んでいるが、西側の凹地を中心としてさらに東側に入り込む谷部に至る東西50mにかけて、石製模造品、土師器、手づくね等を大量に包含する地点が広がっている。すべて表土層下のII層上部からの出土でなんらかの遺構の存在はまったく認められない。特に、西側に入り込む谷部には石製模造品が土師器に伴って100点以上出土しており、谷の西側には白玉が多く、東側には剣形及び円盤形石製模造品が多い。また、土器においては須恵器罐、高杯、手づくね形土器が目立っている。東側の谷部においては、白玉はほとんど見当らず、剣形及び円盤形石製模造品が主体である。土器は手づくね形土器が相変わらず目立つが、壺形土器も多く出土している。しかし、西側の谷部ほどの頻度ではない。台地の高い部分にはほとんどそれらの遺物が検出できないことから、谷部のみに見られる特殊な出土状況といえよう。

出土遺物 (第98～104図)

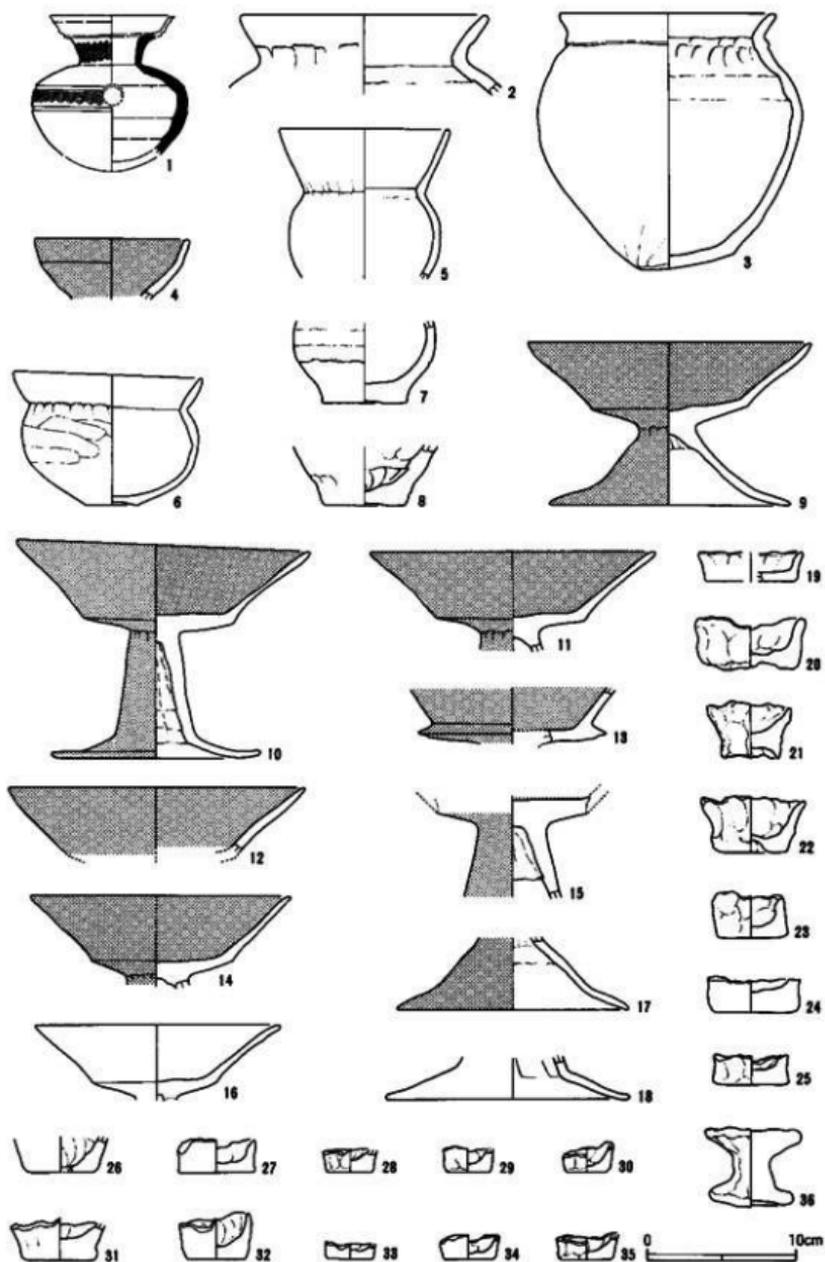
土器 (第98図・図版43・44)

高杯、手捏ねを中心とした多量の土器が石製模造品を伴って出土している。広範囲にわたっての出土であるが、包含層出土として一括で取り扱うこととする。

1は須恵器罐で口縁部と底部を欠いている。胴部はやや肩の張る偏球形を呈し、しまった頸



第97圖 具含層遺物出土狀況圖 (1/60)



第98图 贝含层出土土器突测图 (1/4)

部が若干外傾しながら立ち上がり大きく外に開いて口縁部にいたるようである。胴部最大径には2状の沈線がめぐり、その間には波状文が描かれる。さらに、頸部にも波長の短い波状文を描いている。器内は頸部では薄く、体部では厚く部分的に気泡が入って空洞になっているところもある。外面の色調は青灰褐色であるが、断面観察から器肉内部ではセピア色の部分が主体となっている。頸部から肩の部分にかけての外面には自然軸が浮き出している。2・3は壺で、3は短い口縁部が折り返し状を呈し、胴部はやや肩の張る形態を示す。底部はヘラケズリにより作り出されているためか口縁部とは水平でなく安定性を欠いている。胴部内面には輪積み痕が残り、頸部には指頭痕が観察できる。4は壇の口縁部で、上部が「く」の字状に内傾している。外面には帯状に、内面は全面に赤色塗彩が施される。5も壇であろう。頸部のしまりは弱く口縁部は若干内弯気味に立ち上がっている。胴部は球形を呈している。6は広口の壇である。7・8は小形の壺で、輪積み痕や指頭痕が残っている。

9から18は高杯である。杯部形態は13のように下部に鏝状の張り出しの付くもの以外は、下部に明瞭な後線をつかって大きく外傾するものがほとんどである。脚部形態は9、17のように「ハ」の字状に開くものと、下方でやや広がる円筒部から強く屈折して裾部に至るものとがある。16、18以外は全面に赤色塗彩されている。

19から36は手捏ねであるが、完形品はほとんどない。36は高杯を模したものであろう。

表30 包含層出土土器観察表

標目 番号	器種	法量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎土	色調	焼成	備考
1	壺	— (8.2)	3/4	頸部～胴部内外面ヨコナデ(水引き) 頸部に波状文を施す 胴部に沈線間波状文を施す		緻密	青灰褐色	良好	底面 断面茶褐色
2	壺	16.5 (5.0)	3/4	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ。輪積み痕残る 頸部～胴部外面ヘラケズリ後ミギキ		砂粒多	暗黄褐色	良好	
3	壺	14.3 6.3 17.2	3/4	口縁部内外面ヨコナデ 頸部内面指頭によるおさえ 胴部内面上半輪積み痕 胴部内面手ナデ 胴部外面ケズリ風のナデ		砂粒多	明褐色	良好	口縁折し風
4	壇	10.2 (4.2)	3/4	口縁部内外面ヨコナデ 頸部内外面ミギキ		小砂粒少	黄褐色	良好	赤彩
5	壇	11.2 (10.0)	3/4	口縁部内面ナデ後ミギキ 胴部内面ナデ 口縁～胴部外面ヘラケズリ後ナデ		小砂粒少	赤褐色	良好	
6	壇	12.5 3.5 9.0	3/4	口縁部内外面ヨコナデ後ナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ後かきりナデ		スコリア 粒多	茶褐色	良好	
7	小形壺	5.8 (5.5)	3/4	胴部内面ナデ 胴部外面ナデ。輪積み痕残る		砂粒多	暗黄褐色	良好	
8	小形壺	— 5.4 (4.0)	3/4	胴部内外面ナデ		砂粒多	暗黄褐色	良好	底面木墨痕 手捏ね風
9	高杯	18.9 15.0 11.0	3/4	杯部内外面～胴部外面ミギキ 胴部内面ナデ		砂粒多	黄褐色	良好	外面赤彩 杯内面黒色
10	高杯	19.5 14.0 14.7	3/4	杯内外面～胴部外面ミギキ 胴内筒部内面しまり目。輪積み痕残る 脚部内面ナデ		砂粒多	黄褐色	良好	外面赤彩 杯内面黒色
11	高杯	19.0 (6.5)	3/4	杯部内外面～胴部外面ミギキ 胴内面ナデ		砂粒多	黄褐色	良好	赤彩

12	高杯	20.0 — (4.3)	3/4	杯部内外面ミガキ		砂粒多	暗黄褐色	良好	赤彩 風化激しい
13	高杯	— — (3.7)	3/4	杯部内外面ミガキ		砂粒多	黄褐色	良好	赤彩
14	高杯	17.4 — (6.0)	3/4	杯部内外面ミガキ		砂粒多	暗黄褐色	良好	赤彩
15	高杯	— — (6.7)	3/4	杯部内外面～脚外面ミガキ 脚内面上半しぼり目 脚内面下半ナデ		小砂粒少	黄褐色	良好	赤彩 杯部曲部で破壊
16	高杯	15.2 — (5.0)	3/4	杯部内外面ミガキか?		砂粒多	黄赤褐色	不良	二次焼成で器面肌れ 剥落が激しい
17	高杯	— 15.6 (5.0)	3/4	脚部内面ナデ、輪盤み痕残る 脚部外面かるいミガキ		砂粒多	黄褐色	良好	赤彩
18	高杯	— 15.6 (4.8)	3/4	脚部内面ナデ 脚部外面ミガキ		砂粒少	黄褐色	良好	外面赤彩
19	手裡ね	— — 2.0	3/4			小砂粒多	黄褐色	良好	
20	手裡ね	— — 3.5	3/4			小砂粒多	暗黄褐色	良好	
21	手裡ね	— — 3.9	3/4			小砂粒多	黄赤褐色	良好	
22	手裡ね	— — 3.7	3/4			小砂粒多	茶褐色	良好	
23	手裡ね	— — 3.1	3/4			小砂粒少	暗黄褐色	良好	
24	手裡ね	— — (2.5)	3/4			小砂粒多	暗黄褐色	良好	
25	手裡ね	— — (2.0)	3/4			小砂粒多	黄赤褐色	良好	
26	手裡ね	— — (2.5)	3/4			小砂粒多	黄褐色	良好	
27	手裡ね	— — (2.4)	3/4			小砂粒多	黄褐色	良好	
28	手裡ね	— — (1.7)	3/4			小砂粒多	暗褐色	良好	
29	手裡ね	— — (1.9)	3/4			小砂粒少	暗黄褐色	不良	
30	手裡ね	— — (2.1)	3/4			小砂粒少	暗褐色	不良	
31	手裡ね	— — (2.9)	3/4			小砂粒多	暗褐色	良好	
32	手裡ね	— — (3.2)	3/4			小砂粒少	黄褐色	良好	
33	手裡ね	— — (1.1)	3/4			小砂粒多	黄褐色	良好	
34	手裡ね	— — (1.8)	3/4			小砂粒多	黄褐色	良好	
35	手裡ね	— — (1.6)	3/4			小砂粒多	黄褐色	良好	
36	手裡ね	— — 5.5	3/4			小砂粒多	黄茶褐色	良好	

石製模造品 (第99図 1～20)

確認調査時において20余点の石製模造品が出土している。円盤形・剣形の模造品である。ほ

とんど完形にちがいが欠損品もいくつか見られ、本調査時の傾向と同じであった。

1から13は円盤形の石製模造品である。1は大形品でやや楕円形に近い形状を示している。2は隅丸の長方形に近く、特異な形状といえるかもしれない。3、4、7～9はほぼ平均的な大きさで、形状も比較的整っている。5、6、10、11は小形品で、造りは前者とほぼ同様であるが、11は穿孔が1個所だけである。12、13は円盤形の破損品である。

14から20は剣形の石製模造品である。基本的には基部に1個所穿孔を行なうが、14のようにないものや、19のように2個所設けるもの、16のように2個所目が未貫通のものなどがある。形状は、基部直下が最も幅広で、片面が平坦でもう片面に稜線をもつものが多く、中央に稜線が1状入るもの(17)、中央に平坦部分をもち稜線が2状になるもの(14・18)と、両面とも平坦で扁平な横断面形状をとるものなどがある。20は欠損品である。

かれら円盤形、剣形とも表面側面を平滑に研磨したのちに穿孔を行なっており、歯こぼれ状に穿孔稜線が薄く欠けている。

滑石製品(第99図23・24)

23・24は棒状の滑石製品である。ともに直径6mmほどのもので、23は両端を欠いている。22は先端部を残している欠損品で、先端は鈍く尖っている。

土製品(第99図21・22)

21は勾玉を模倣した土製品で、焼成は良好、形状は太い紐状の粘土をわずかに弯曲させ、基部を指の腹でつぶして尖らせ、小さな穿孔を中央に開けている。全体にぼつりとした感じのするできである。22は欠損品であるが、土垂であろうか。太い円孔が中央を貫き、中程が太い円筒形を示している。

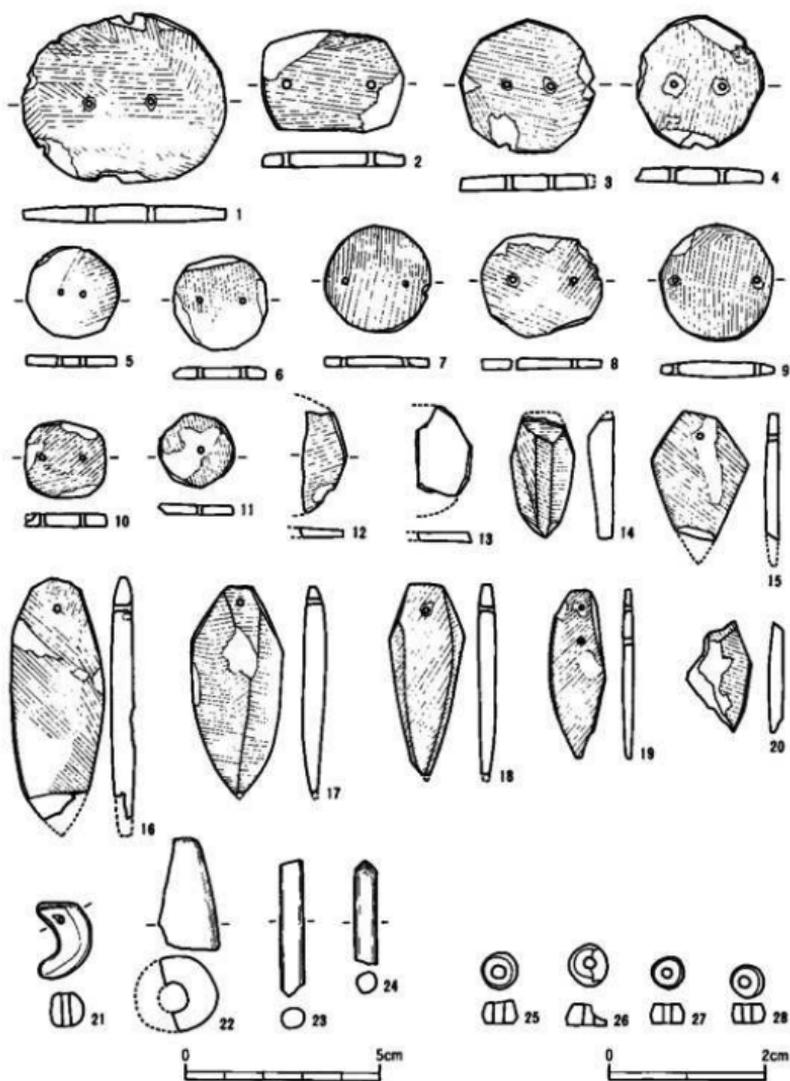
白玉(第99図25～28)

直径5mmほどの白玉である。側面中央部に弱い稜線をもつ。滑石製である。

表31 石製模造品計測表

番号	出土地点	法量(cm)			重量(g)	穿孔	備考
		長さ	幅	厚さ			
1	DII-58	4.3	5.2	0.4	15.3	2	円盤形
2	EII-50	2.6	3.6	0.5	8.1	2	円盤形
3	DII-58	3.4	3.4	0.5	9.0	2	円盤形
4	DII-58	3.3	3.2	0.3	6.2	2	円盤形
5	DII-58	2.3	2.3	0.3	2.8	2	円盤形
6	EII-18	2.4	2.4	0.3	3.5	2	円盤形
7	DII-58	2.7	2.7	0.3	3.6	2	円盤形
8	GI-83	2.6	3.1	0.3	4.4	2	円盤形
9	EII-50	2.9	2.9	0.4	5.0	2	円盤形
10	EII-52	1.9	2.1	0.4	2.9	2	円盤形
11	DII-58	1.8	1.8	0.3	1.5	1	円盤形
12	DII-55	(2.6)	(1.2)	0.4	1.6	-	円盤形破片

13	EII-27	(2.3)	(1.4)	0.3	1.4	-	円盤形破片
14	DII-57	(3.0)	1.6	0.7	4.5	-	剣形、基部欠
15	DII-58	(3.2)	2.4	0.3	3.8	1	剣形、先端部欠
16	EII-51	(6.2)	2.5	0.5	13.0	2	剣形、一志貫通
17	EII-52	(5.3)	2.3	0.5	9.1	1	剣形、先端部欠
18	DII-58	(4.8)	1.9	0.4	4.6	1	剣形、先端部欠
19	EII-50	4.2	1.4	0.3	3.0	2	剣形
20	DII-58	(2.8)	(1.6)	0.5	2.1	-	剣形、破片
21	FI-88	2.0	0.9		2.2	1	
22	EII-51	(2.6)	(1.3)		4.5		
23	DII-58	(3.5)	0.6		2.0		
24	DII-58	(2.7)	0.5		1.6		



第99图 確認調査出土石製模造品実測図 (2/3)

包含層出土の石製模造品（第100～103図・図版1）

本調査において、石製模造品は欠損品破片も含めて135点出土している。内訳は円盤形が69点、剣形が66点である。全体に破損率が高く、円盤形で40.5%、剣形に至っては60.6%となっている。ほぼ半分が部分的に欠けていることになる。特に、剣形模造品の割合が大きい。以下それぞれの特徴的なところを2・3触れることにする。基礎的な計測値は別表のとおりである。

円盤形石製模造品（1～69）

基本的には円形を基調としているが、楕円形や隅丸（長）方形に近いものも見られる。すべて扁平に磨き仕上げられている。中には、工具の使用痕が刷毛目状に残っているもの（2・3・12・25・33・51・52）がいくつか観察でき、3・14のように幅の狭い工具痕、12・52のようにやや幅の広い工具痕などが見られる。また、側縁部の調整にも使われている例（2・33）もある。破片で不明瞭なものを除いて、2個所穿孔するものももっとも多く全体の66%を占め、次いで1個所穿孔の23%である。ただ、59はその位置からすると、2個所穿孔するつもりであったのかもしれない。その他には、9のように中央に1個所穿孔した脇に未貫通孔の孔があり、4も2個所穿孔した片方の孔に隣接して未貫通孔を穿っている。31・55には穿孔がないが、側面の仕上げがまだ煩雑なことから、未完成品であるかもしれない。

剣形石製模造品（70～135）

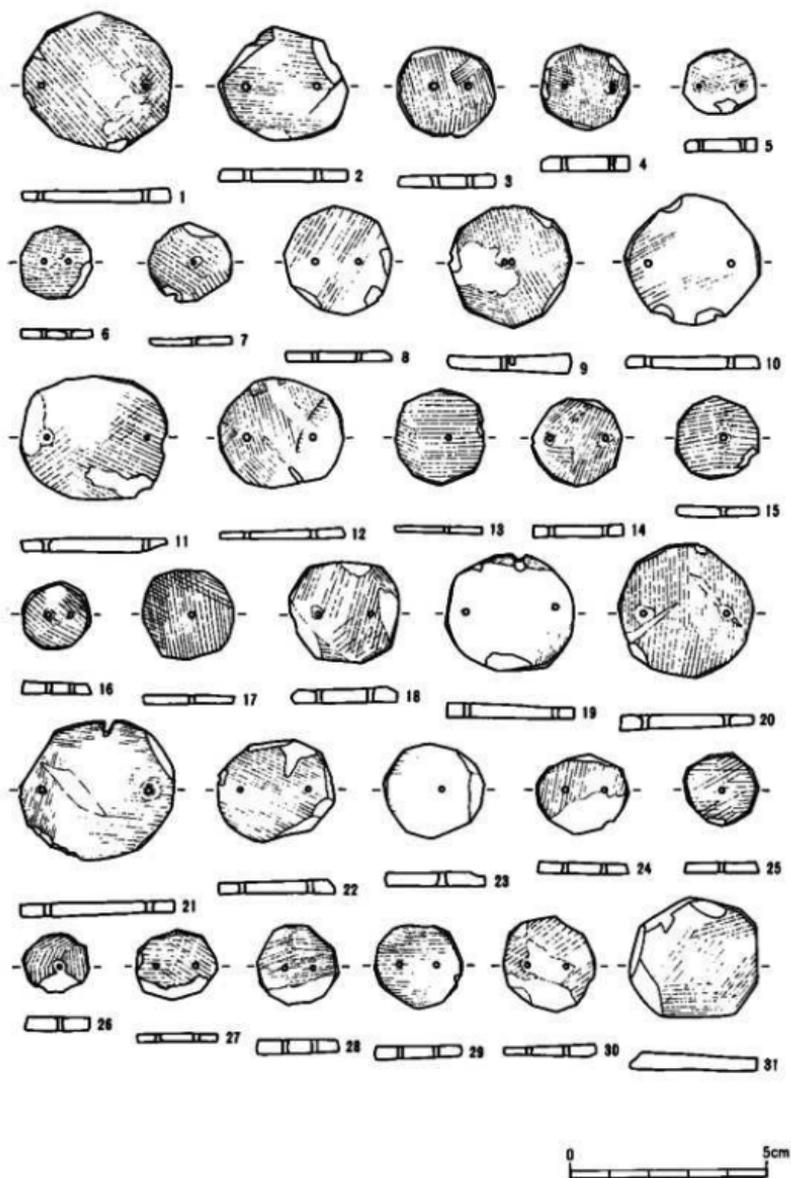
製作手法上から大きく分けて次の3形態に分けることができる。

- 1・片面は斜めに磨いて中央に稜線を造るが、裏面は平坦に仕上げているもの。
- 2・両面とも刃部を付けるように斜めに磨き、相似形をなすもの。
- 3・両面とも平坦に仕上げているもの。

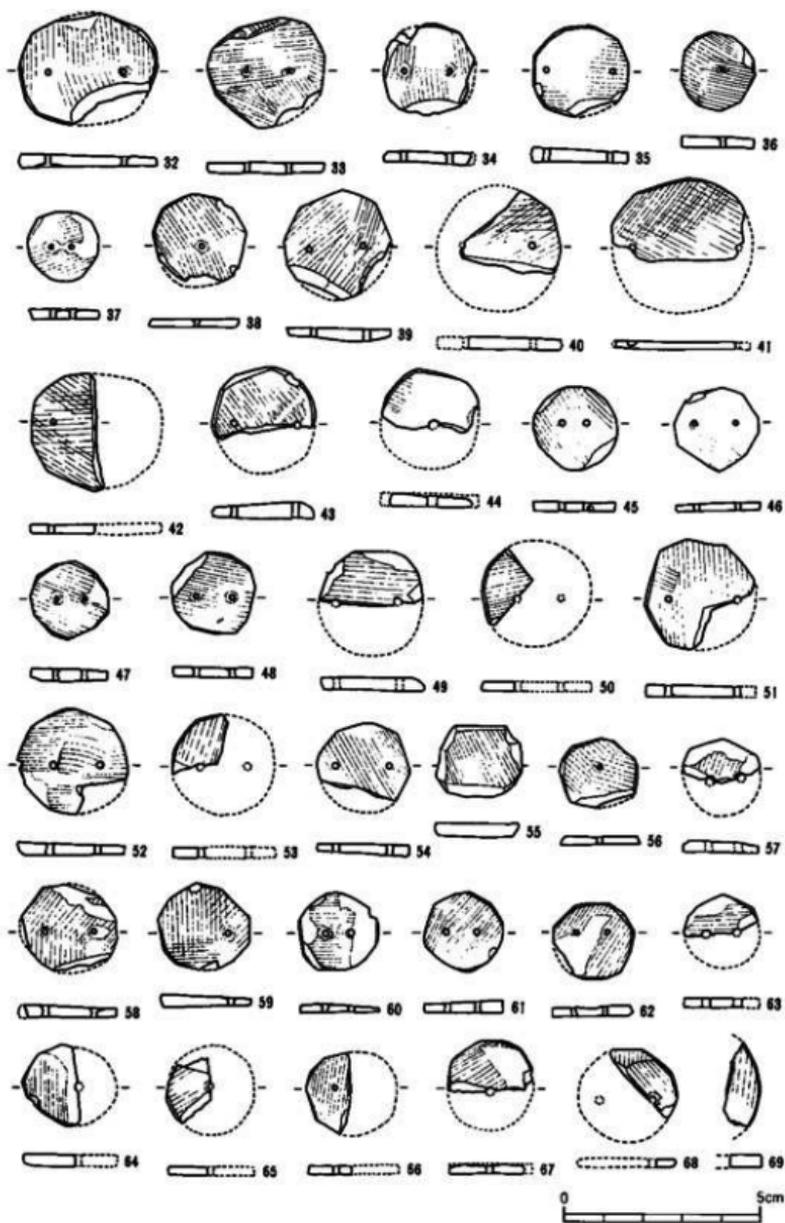
1の形態は全体の約半数にあたる70から100までで、両側に斜めに刃部に見立てた面と、基部から中央にむかう三角形の面とが造られている。基部に造られている三角形の面の中央に1個所穿孔するものがほとんどで、中には2個所穿つもの（79）や、穿孔しない小形なもの（93）等もある。裏面は平坦に造られているとはいえ、若干弯曲し刃部と基部が薄く仕上げられているものもいくつか見られる。基部先端部は基本的に長軸に対して垂直な面をもつようである。

表裏とも同じ製作方法で相似形を示す2の形態の101から109は、中央部に平坦面を造るもの（101～107）が多く、側面の傾斜はかなりきつい。108・109は1の形態の表面の製作方法を両面とも行なったもので、刃部がかなり鋭利な感じを受ける。104については穿孔はなされていない。103は基部をさらに斜めに磨き、中央の平坦面はきれいな三角形を示している。また、側面も直線的に仕上がっている。

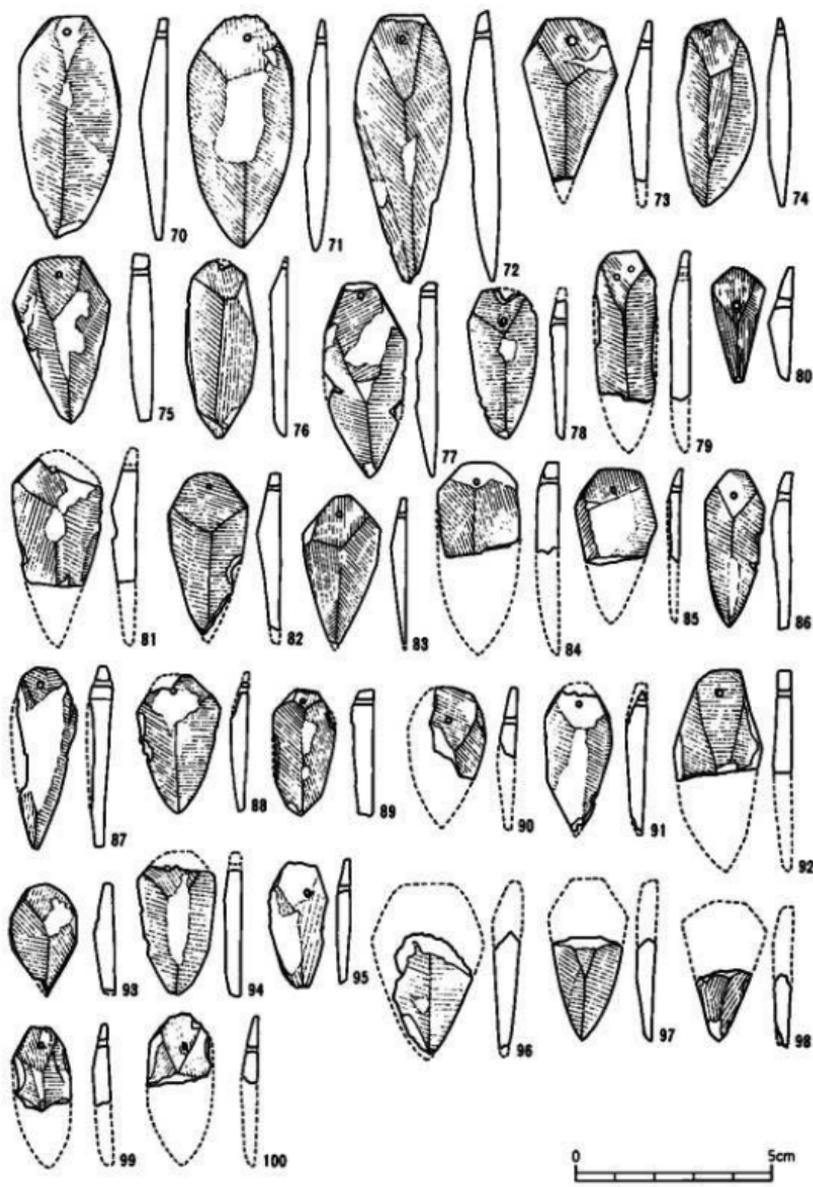
3の形態は110以降で、大きさはまちまちで、全体的に角のとれた丸味のある形となっている。中には111・112のように未完成品と思われる三角形のものも見られる。また、極めて小さいもの（126・127）もある。



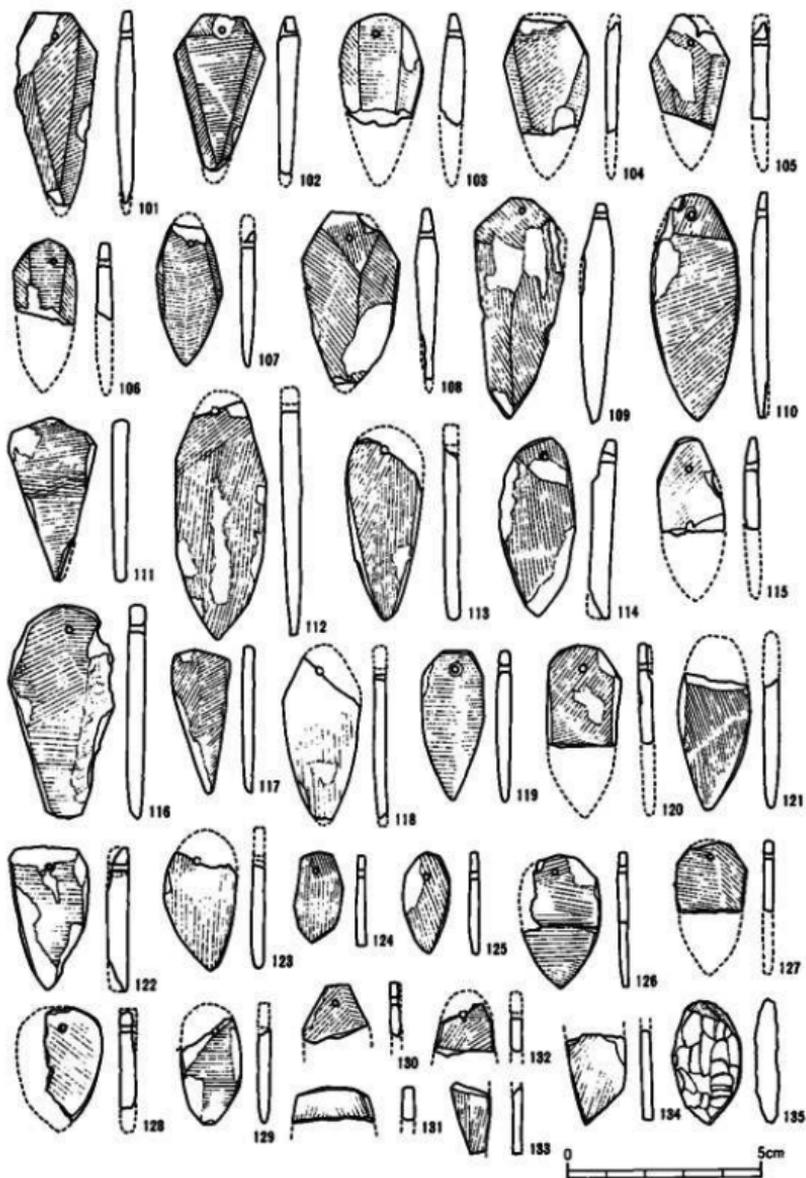
第100図 石製模造品実測図 その1 (2/3)



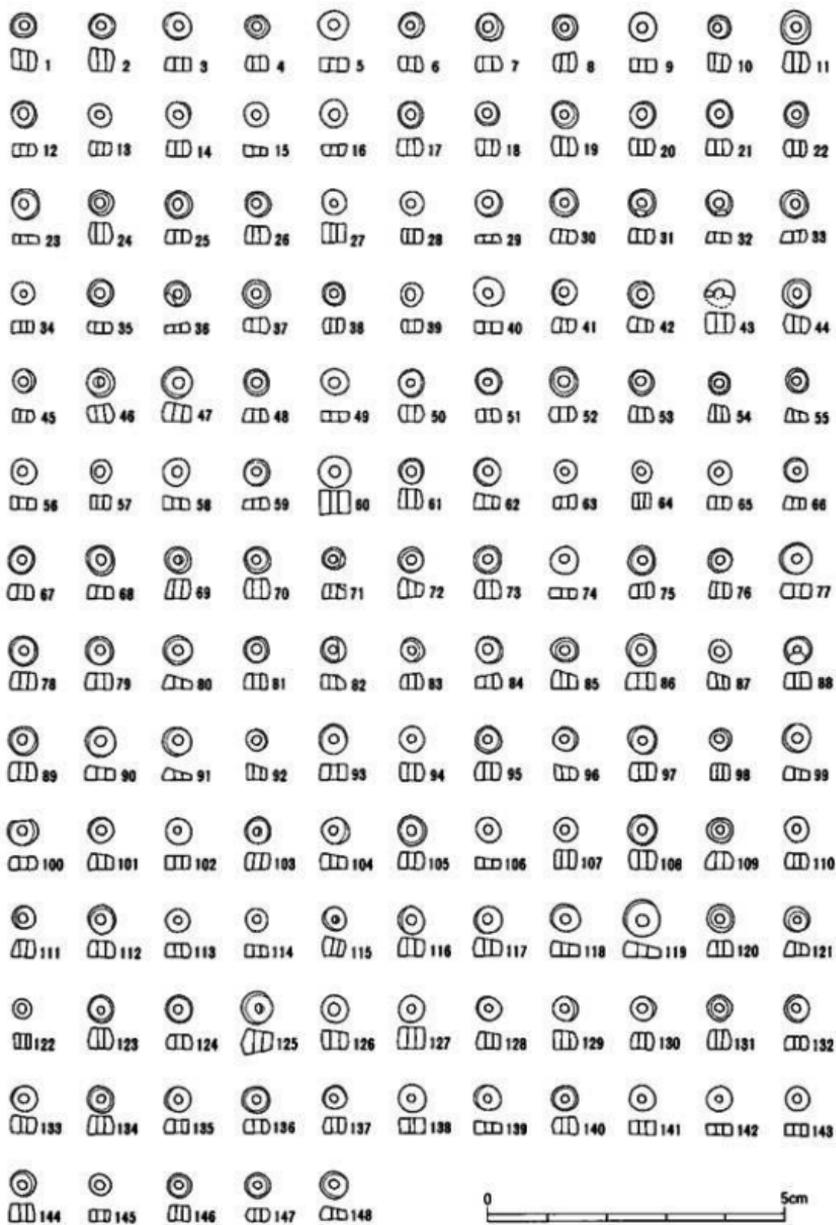
第101図 石製模造品実測図 その2 (2/3)



第102図 石製模造品実測図 その3 (2/3)



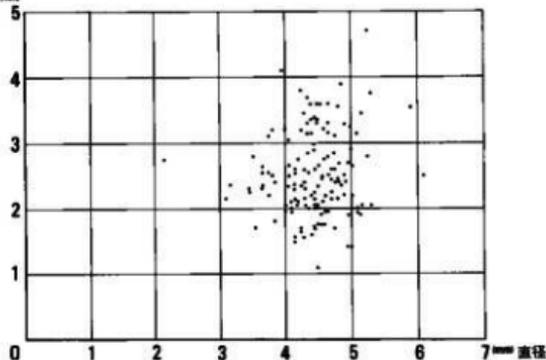
第103図 石製模造品実測図 その4 (2/3)



第104图 白玉夹箫图 (1/1)

白玉 (第 104・105 図) 厚さ mm

本調査において白玉は135個出土したが、極めて小さい遺物であるため未検出のまま廃土中に埋もれたものも相当量あったものと想定される。いくつか破損しているものも存在するが、ほとんどが完形品である。個々の計測値については別表のとおりであるが、相対的な



第105図 白玉計測値分布図

傾向はグラフを参照されたい。直径は4～5mmの間に集中し、紐等を通してつらねた場合は安定した太さを保てそうである。厚みについては1.5～4mmぐらいまで満遍なく分布している。中には直径が2mmぐらいのものや6mmを越えるものなどが見られるが、これらは例外的なものである。

表32 石製模造品計測表

番号	出土地点	法量 (cm)			重量 (g)	穿孔	備考
		長さ	幅	厚さ			
1	DII-58	3.6	3.8	0.4	9.0	2	円盤形
2	DII-40	2.9	3.3	0.4	6.2	2	円盤形
3	DII-48	2.3	2.5	0.3	3.7	2	円盤形
4	DII-58	2.2	2.2	0.4	3.5	3	円盤形、1未貫通
5	DII-49	1.7	1.8	0.3	2.0	2	円盤形
6	DII-57	1.9	1.9	0.3	1.7	2	円盤形
7	DII-58	2.1	1.9	0.2	1.6	1	円盤形
8	DII-48	2.7	2.7	0.3	3.9	2	円盤形
9	DII-48	3.1	3.1	0.6	9.5	1	円盤形、1未貫通
10	DII-48	3.3	3.4	0.4	7.2	2	円盤形
11	EII-40	3.2	3.7	0.4	8.3	2	円盤形
12	DII-58	2.8	3.2	0.3	4.8	2	円盤形
13	DII-58	(1.9)	2.4	0.3	2.4	2	円盤形、3/4欠
14	DII-56	2.2	2.2	0.3	3.3	2	円盤形
15	EII-58	2.1	2.1	0.3	2.3	1	円盤形
16	DII-58	1.7	1.7	0.3	1.7	2	円盤形
17	DII-57	2.3	2.3	0.2	2.5	1	円盤形
18	迹記なし	2.6	2.8	0.5	5.9	2	円盤形
19	G I-002	3.0	3.3	0.5	8.2	2	円盤形
20	EII-40	3.4	3.5	0.4	9.5	2	円盤形
21	EII-005	3.5	4.0	0.4	10.3	2	円盤形
22	DII-49	2.5	3.0	0.4	5.4	2	円盤形
23	DII-58	2.5	2.6	0.4	2.1	1	円盤形
24	EII-40	2.0	2.3	0.3	2.6	2	円盤形
25	DII-58	1.8	1.9	0.3	1.8	1	円盤形
26	DII-58	1.5	1.6	0.4	1.5	1	円盤形
27	DII-58	1.8	2.0	0.2	1.6	2	円盤形
28	DII-58	2.0	2.1	0.3	2.7	2	円盤形
29	DII-58	2.1	2.2	0.3	2.8	2	円盤形
30	DII-48	2.4	2.3	0.3	3.0	2	円盤形
31	DII-48	3.1	3.4	0.3	6.5	無孔	円盤形
32	G I-15	(2.8)	3.5	0.4	6.5	2	円盤形
33	DII-58	2.7	3.0	0.3	4.6	2	円盤形
34	DII-47	2.3	2.4	0.3	2.7	2	円盤形
35	G I-73	2.4	2.5	0.4	2.1	2	円盤形
36	EII-58	1.8	2.0	0.3	2.1	1	円盤形
37	EII-58	1.8	1.8	0.3	1.6	2	円盤形
38	DII-48	2.4	2.2	0.2	2.3	1	円盤形
39	EII-40	2.8	2.6	0.3	3.6	2	円盤形
40	DII-57	(2.2)	(2.5)	0.3	2.2	1	円盤形、破片

41	DII-57	(2.1)	(3.5)	0.3	3.8	2	円盤形、 $\frac{1}{2}$	
42	DII-58	2.9	(1.7)	0.3	3.1	1	円盤形、 $\frac{1}{2}$ 、孔1?	
43	DII-58	(1.7)	2.6	0.4	2.9	2	円盤形、 $\frac{1}{2}$	
44	DII-58	(1.5)	(2.4)	0.4	2.0	1	円盤形、 $\frac{1}{2}$	
45	DII-58	2.1	2.1	0.3	2.3	2	円盤形、1未貫通	
46	DII-49	2.1	2.2	0.2	1.6	2	円盤形	
47	DII-58	2.0	2.0	0.4	2.3	2	円盤形	
48	DII-58	2.1	2.1	0.3	2.6	2	円盤形	
49	EII-41	(1.4)	2.6	0.4	2.3	2	円盤形、 $\frac{1}{2}$	
50	DII-48	(1.1)	1.9	0.3	1.0	1	円盤形、破片 円盤形、孔1?	
51	DII-57	2.9	(2.6)	0.4	4.1	1	円盤形、 $\frac{1}{2}$ 、 孔1?	
52	DII-49	2.7	2.8	0.4	4.1	2	円盤形	
53	DII-48	(1.9)	(1.2)	0.3	1.0	1	破片 円盤形、孔1?	
54	F I-004	(1.9)	2.4	0.3	2.4	2	円盤形、 $\frac{1}{2}$ 、 孔1?	
55	DII-48	2.3	(2.2)	0.4	3.2	-	円盤形	
56	DII-47	2.0	1.9	0.2	1.5	1	円盤形	
57	DII-58	(1.0)	2.0	0.4	1.1	2	円盤形、 $\frac{1}{2}$	
58	DII-58	2.2	2.4	0.4	3.2	2	円盤形	
59	DII-58	2.3	2.2	0.3	2.8	1	円盤形	
60	DII-58	2.0	2.0	0.2	1.6	2	円盤形	
61	EII-41	2.0	2.1	0.3	2.5	2	円盤形	
62	EII-40	1.9	2.0	0.3	1.8	2	円盤形	
63	EII-51	(1.0)	2.0	0.3	0.9	2	円盤形、 $\frac{1}{2}$	
64	DII-48	(1.4)	2.1	0.4	1.8	1	円盤形、 $\frac{1}{2}$	
65	DII-49	(1.6)	(1.2)	0.3	0.8	1	円盤形、破片 孔?	
66	DII-58	2.1	(1.1)	0.3	1.2	1	円盤形、 $\frac{1}{2}$ 、 孔?	
67	DII-50	(1.3)	2.2	0.3	1.4	1	円盤形、 $\frac{1}{2}$	
68	DII-58	(2.2)	(0.9)	0.3	0.9	1	円盤形、破片	
69	EII-50	(2.2)	(0.9)	0.4	1.1	-	円盤形、破片	
70	DII-58	5.6	2.6	0.7	12.2	1	剣形	
71	DII-57	5.9	2.7	0.7	14.2	1	剣形	
72	DII-57	6.9	2.4	0.8	14.5	1	剣形	
73	DII-58	(4.1)	2.4	0.6	6.2	1	剣形、先端部欠	
74	DII-58	4.8	1.9	0.5	6.2	1	剣形	
75	DII-58	4.2	2.4	0.6	7.0	1	剣形	
76	DII-58	4.5	1.8	0.4	4.8	1	剣形	
77	DII-58	4.9	2.2	0.5	4.6	1	剣形	
78	DII-58	4.7	1.7	0.4	3.1	1	剣形	
79	DII-57	(3.9)	1.5	0.5	4.1	2	剣形、先端部欠	
80	DII-58	3.0	1.4	0.6	2.3	1	剣形	
81	DII-57	(3.2)	2.3	0.6	5.9	1	剣形、基部、 先端部の一欠	
82	DII-58	4.1	2.0	0.6	6.2	1	剣形	
83	DII-58	3.8	1.9	0.4	3.4	1	剣形	
84	DII-48	(2.3)	2.1	0.6	4.4	1	剣形、 $\frac{1}{2}$	
85	DII-58	(2.4)	2.1	0.3	2.3	1	剣形、 $\frac{1}{2}$	
86	DII-58	4.0	1.5	0.5	3.4	1	剣形	
87	EII-40	4.6	1.5	0.6	4.2	1	剣形	
88	DII-48	3.5	2.1	0.5	4.0	1	剣形	
89	DII-58	3.2	1.6	0.6	4.2	1	剣形	
90	DII-57	(2.5)	(1.4)	0.4	1.4	1	剣形、破片	
91	DII-48	(3.6)	1.7	0.5	3.9	1	剣形	
92	DII-58	(2.6)	2.2	0.5	4.7	1	剣形	
93	EII-41	2.8	1.7	0.5	3.0	-	剣形	
94	DII-58	3.2	1.9	0.4	3.6	-	剣形、基部欠	
95	DII-58	3.2	1.5	0.3	2.2	1	剣形	
96	DII-57	(2.9)	(1.9)	0.6	3.7	-	剣形、基部欠	
97	DII-47	(2.6)	(1.8)	0.5	2.4	-	剣形、基部欠	
98	DII-48	(1.8)	(1.4)	0.4	0.9	-	剣形、先端部の み	
99	DII-58	(2.2)	1.4	0.5	2.0	1	剣形、先端部の み	
100	DII-57	(1.7)	1.6	0.4	1.4	1	剣形、基部のみ	
101	DII-58	4.9	2.0	0.5	6.8	1	剣形	
102	DII-58	4.0	2.3	0.5	6.9	1	剣形	
103	DII-58	(2.8)	2.2	0.5	5.4	1	剣形、先端部欠	
104	DII-58	(3.0)	2.2	0.3	3.9	-	剣形、基部、 先端部の一欠	
105	DII-57	3.0	2.0	0.4	3.6	1	剣形	
106	DII-47	(2.1)	1.6	0.4	2.1	1	剣形、基部のみ	
107	DII-58	3.6	1.6	0.4	3.3	1	剣形、基部欠	
108	DII-57	(4.3)	2.4	0.5	0.5	1	剣形	
109	DII-59	5.6	2.3	0.8	11.6	1	剣形	
110	DII-58	5.8	2.3	0.5	10.0	1	剣形	
111	DII-58	4.1	2.2	0.4	4.6	-	剣形	
112	DII-57	(6.0)	2.3	0.5	10.4	1	剣形、基部欠	
113	DII-57	4.6	1.9	0.4	6.1	1	剣形、基部欠	
114	DII-58	4.5	1.8	0.6	8.4	1	剣形	
115	G I-15	(2.4)	1.7	0.4	3.1	1	剣形、基部のみ	
116	G I-007	5.4	2.7	0.5	10.9	1	剣形	
117	DII-57	3.7	1.5	0.3	2.3	-	剣形	
118	DII-58	(4.0)	2.0	0.4	4.2	1	剣形、基部欠	
119	DII-58	3.8	1.6	0.3	3.4	1	剣形	
120	DII-48	2.6	1.9	0.4	3.9	1	剣形、先端部欠	
121	EII-51	(3.3)	1.9	0.5	5.5	-	剣形、基部欠	
122	DII-57	3.7	2.0	0.5	6.2	1	剣形	
123	DII-48	2.7	1.8	0.3	2.8	-	剣形、基部欠	
124	DII-48	2.3	1.2	0.3	1.4	1	剣形	
125	DII-58	2.5	1.2	0.3	1.3	-	剣形	
126	DII-58 DII-47	3.4	2.0	0.3	3.2	1	剣形	
127	DII-58	(1.8)	1.8	0.3	2.8	1	剣形、先端部欠	
128	DII-57	(3.0)	1.5	0.5	3.0	1	剣形、 $\frac{1}{2}$	
129	DII-58	(2.8)	1.6	0.3	2.1	1	剣形、基部欠	
130	表探	(1.5)	1.7	0.3	0.8	1	剣形、基部のみ	
131	DII-57	(0.9)	2.1	0.3	1.0	-	剣形、破片	
132	DII-48	(1.3)	(1.6)	0.3	1.0	-	剣形、破片	
133	DII-48	(1.9)	(1.0)	0.2	0.6	-	剣形、破片	
134	DII-47	(2.2)	(1.5)	0.3	2.0	-	剣形、破片	
135	DII-48	3.3	1.8	0.6	4.5	-	剣形	

表33 白玉計測表

実測番号	グリッド	測物番号	径(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考	実測番号	グリッド	測物番号	径(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考
1	DII-57	0042	4.30(1.35)	3.45		ガラス玉か?	40	DII-58	0141	5.15(1.45)	2.05		
2	DII-58	0128	4.50(1.55)	3.60			41	DII-58	0209	2.15(1.35)	2.75		
3		0128	3.45(1.60)	2.25			42	DII-57	0055	4.45(1.60)	2.90		
4		0128	4.70(1.30)	2.15			43	G I - 7	0076	4.80(1.65)	3.55		欠
5	DII-58	0198	5.00(1.50)	2.20			44	G I - 4	0090	4.85(1.60)	3.90		
6	DII-56	0010	4.30(1.80)	2.60			45	DII-58	0158	3.85(1.30)	1.80		
7	DII-57	0051	4.70(1.75)	2.25			46	DII-58	0163	4.50(1.50)	3.35		
8	DII-58	0032	4.35(1.50)	3.15			47	G I -11	0129	5.15(1.70)	3.45		
9		0032	4.65(1.30)	1.95			48	DII-57	0015	4.60(1.85)	1.75		
10	DII-58	0205	4.00(1.60)	3.20			49	G I -11	0052	4.75(1.70)	1.70		
11	DII-57	0115	4.90(1.50)	3.55			50	DII-58	0136	4.50(1.55)	2.65		
12	DII-58	0204	4.20(1.60)	2.10			51	DII-58	0168	4.45(1.60)	2.15		
13	DII-57	0069	4.15(1.10)	2.30			52		0168	4.85(1.50)	2.35		
14	DII-58	0140	4.30(1.40)	2.40			53	DII-57	0101	4.30(1.80)	2.15		
15		0140	4.15(1.25)	1.50			54	DII-57	0098	3.75(1.75)	3.10		
16	DII-57	0108	4.45(1.40)	2.05			55		0098	4.20(1.65)	2.05		
17	DII-58	0153	4.65(1.35)	2.80			56	DII-57	0033	4.55(1.35)	1.90		
18		0153	3.10(1.40)	2.15			57	DII-57	0103	3.65(1.50)	2.35		
19	DII-57	0113	4.65(1.40)	3.15			58	DII-58	0120	4.60(1.55)	1.95		
20		0113	4.35(1.55)	2.00			59		0120	4.45(1.40)	1.70		
21	DII-57	0049	4.70(1.40)	2.60			60	DII-58	0184	5.30(1.55)	3.75		
22	DII-57	0023	4.15(1.60)	2.55			61	DII-58	0145	4.40(1.40)	2.20		
23	DII-57	0052	4.95(1.40)	1.40			62	DII-57	0133	4.55(1.60)	2.45		
24	DII-57	0043	4.05(1.75)	2.35			63	DII-57	0122	4.00(1.40)	1.95		
25	DII-58	0172	4.50(1.70)	2.35			64	DII-57	0076	3.75(1.30)	2.55		
26	DII-58	0176	4.45(1.65)	2.00			65	DII-58	0114	4.10(1.20)	1.95		
27	DII-57	0053	4.40(1.30)	3.15			66	DII-57	0008	4.90(1.65)	2.50		
28	DII-57	0111	4.25(1.35)	2.35			67		0008	4.15(1.40)	2.35		
29	G I -11	0106	4.50(1.55)	1.10			68	DII-58	0091	5.10(1.85)	1.95		
30	DII-57	0132	4.90(1.50)	2.40			69	DII-57	0056	4.40(1.75)	3.35		
31	DII-57	0001	4.55(1.55)	2.50			70		0056	4.50(1.60)	3.30		
32		0001	4.15(1.35)	1.55			71		0056	3.75(1.25)	2.20		
33	G I -11	0120	4.80(1.55)	2.70			72	DII-57	0095	4.35(1.75)	3.70		
34	DII-57	0036	4.00(1.60)	1.95			73	DII-57	0138	5.00(1.45)	3.25		
35	DII-58	0201	4.55(1.50)	1.75			74	DII-58	0211	5.00(1.40)	1.40		
36	DII-57	0002	4.25(1.35)	1.65			75	DII-57	0116	4.80(1.45)	2.40		
37	DII-57	0019	4.75(1.40)	2.30			76	DII-58	0106	3.65(1.55)	2.30		
38		0019	3.85(1.30)	2.40			77	DII-57	0099	5.30(1.45)	2.05		
39		0019	4.00(1.70)	2.05			78	DII-58	0144	4.60(1.35)	3.20		

天板番号	グリッド	透物番号	径(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考	天板番号	グリッド	透物番号	径(mm)	厚(mm)	重(g)	備 考
79	DII-58	0142	5.15(1.35)	1.90			118	DII-58	0169	4.75(1.60)	2.60		
80	DII-58	0178	4.90(1.20)	2.20			119	DII-58	0065	6.10(2.20)	2.50		
81	DII-57	0068	4.35(1.50)	2.55			120		0065	4.65(1.35)	2.50		
82	DII-58	0132	4.30(1.45)	2.05			121		0065	4.15(1.25)	2.35		
83	DII-58	0180	4.25(1.50)	3.80			122	DII-58	0146	3.15(1.25)	2.35		
84	DII-58	0202	4.55(1.45)	2.50			123	DII-57	0071	4.65(1.40)	3.60		
85	DII-58	0118	4.25(1.65)	3.20			124	DII-57	0075	4.55(1.35)	2.10		
86	DII-58	0171	5.25(1.45)	2.80			125	DII-57	0058	5.25(1.45)	4.70		
87	DII-57	0107	3.65(1.35)	2.55			126	DII-57	0144	4.35(1.45)	2.85		
88	DII-58	0137	4.60(1.25)	2.20			127	DII-57	0105	4.40(1.25)	3.60		
89	DII-57	0032	4.90(1.25)	3.30			128	DII-57	0066	4.05(1.45)	2.50		
90		0032	5.00(1.55)	3.00			129	DII-57	0021	3.80(1.55)	3.20		
91	DII-58	0203	4.95(1.40)	1.90			130	DII-57	0065	4.20(1.40)	2.75		
92	DII-58	0101	3.46(1.20)	2.35			131	DII-57	0029	4.05(1.20)	3.05		
93	DII-57	0039	5.00(1.45)	2.65			132	DII-58	0143	4.10(1.40)	2.00		
94	DII-58	0162	4.45(1.40)	3.40			133	DII-57	0013	4.75(1.45)	3.10		
95		0162	4.60(1.50)	2.75			134	DII-57	0109	4.60(1.40)	3.20		
96		0162	3.65(1.15)	2.65			135	DII-58	0133	4.45(1.40)	2.60		
97	DII-58	0092	5.00(1.70)	2.90			136	DII-57	0054	4.80(1.70)	2.45		
98		0092	3.50(1.25)	2.80			137	DII-58	0183	4.05(1.35)	2.65		
99	DII-57	0128	4.80(1.55)	2.15			138	DII-57	0119	5.00(1.25)	3.00		
100	DII-58	0098	5.10(1.55)	2.00			139		0119	4.50(1.50)	1.75		
101	DII-57	0110	4.30(1.50)	2.30			140	DII-58	0097	4.50(1.50)	2.00		
102	DII-58	0094	4.45(1.20)	2.25			141	DII-58	0093	4.50(1.45)	2.05		
103	DII-58	0135	4.35(1.35)	3.30			142	DII-57	0118	4.30(1.05)	1.55		
104	DII-57	0142	4.70(1.40)	2.45			143	DII-57	0037	4.25(1.30)	1.70		
105	DII-57	0004	4.95(1.65)	2.70			144	DII-57	0143	4.45(1.45)	3.00		
106		0004	4.40(1.30)	1.60			145	DII-57	0136	3.55(1.40)	1.70		
107	DII-58	0195	3.85(1.35)	3.00			146	DII-57	0112	3.80(1.30)	2.50		
108	DII-58	0212	5.10(1.40)	3.15			147		0112	4.15(1.55)	2.15		
109		0212	4.65(1.50)	2.50			148	DII-57	0010	4.80(1.45)	2.15		
110		0212	4.15(1.30)	2.60									
111	DII-58	0096	3.80(1.65)	3.20									
112	EII-51	0022	4.75(1.40)	2.85			25			4.75(1.75)	2.95		
113	DII-58	0208	4.10(1.50)	2.10			26			5.20(1.30)	2.95		
114	DII-57	0134	4.00(1.25)	2.05			27			4.10(1.45)	2.55		
115	DII-57	0097	3.95(1.50)	4.10			28			4.25(1.10)	2.20		
116	DII-57	0016	4.65(1.45)	3.30									
117	DII-58	0173	4.55(1.50)	3.60									

IV. 奈良・平安時代の遺構と遺物

当遺跡の主体となる時期である。住居跡を中心とする集落跡といえる。

GI-002 (第106図・図版46)

位置：GI-75に位置する。

遺構：主軸3.24m、横軸3.80mの隅丸長方形プランを呈し、主軸方向N-45°-W、北西壁にカマドを設ける。壁高は32cm、ほぼ垂直な立ち上がりを見せる。北東壁は外方へ若干ふくらむが東南壁は内側に弯曲している。各コーナーの丸味も大きい。床面は平坦、堅緻である。周溝は全周し、幅は15cm前後、深さ10cm前後としっかりしているものの北東壁側が若干狭い。なお、柱穴等は床面を精査したが検出できなかった。遺物の出土量は少ないが、住居覆土内の接合関係のみとかなり離れた地点での接合が目につく。特に、小形甕(2)では北東コーナーから南西コーナーまで対角線上で接合関係がみられる。

カマド：北西壁やや左寄りに位置し、袖および天井部の構築材の流出が目立ち、特に、袖先端部が不明瞭である。カマド掘り方はほぼ円形、椀状に凹め、最下層にロームブロックを含む暗褐色土が堆積し、その上部に火床部を設けている。煙道部は急傾斜に立ち上がり、壁からわずかに突出する程度である。

遺物：甕2点と杯1点が出土している。

1は大形の甕で、口縁部をつよくヨコナデして口唇部がつまみ出される。胴部は張りをもたせている。2は小形の甕で、強く外反する口縁部に張りをもたせた短い胴部となる。外面は横から斜めのヘラケズリを胴部全面に行なっている。3は全面に赤色塗彩された杯で、口縁部と底部の径の差が比較的小さい大形品である。体部は直線的に外反している。底部調整は回転糸切りの後回転ヘラケズリで仕上げている。

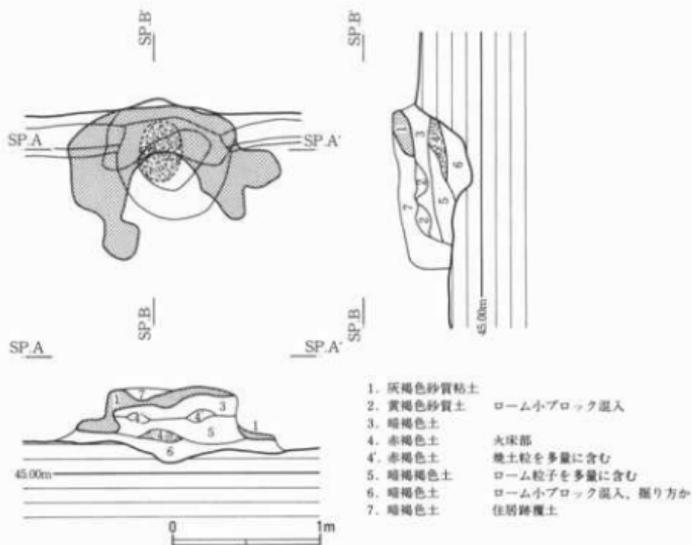
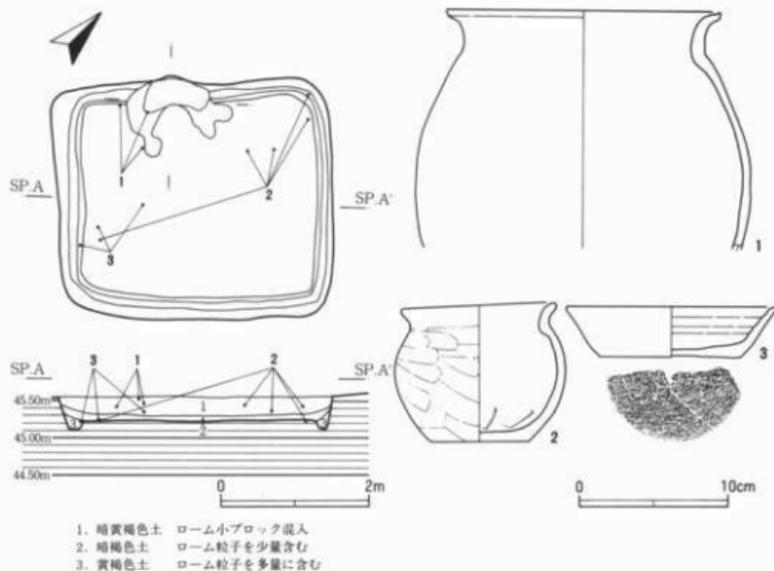
表34 GI-002出土土器観察表

押印番号	器種	法量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	甕	18.4 — (16.0)	3/4	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ後ナデ		小砂粒多	赤褐色	良好	胴部外面に煤付着
2	甕	10.3 6.6 9.4	1/4	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ 底面ヘラケズリ		小砂粒 スコリア 粒	暗褐色	不良	器面割落多い
3	杯	14.0 9.5 3.4	3/4	体部内外面ヨコナデ 底部回転糸切り後回転ヘラケズリ	R	小砂粒 スコリア 粒	暗褐色	良好	口縁部の突出部が磨耗 全面赤彩

GI-003A (第107図)

位置：GI-77・78に位置し、GI-003Bを切る。

遺構：南北2.70m、東西は不明であるが隅丸方形プランを呈すると思われ、主軸方向はN-22°-

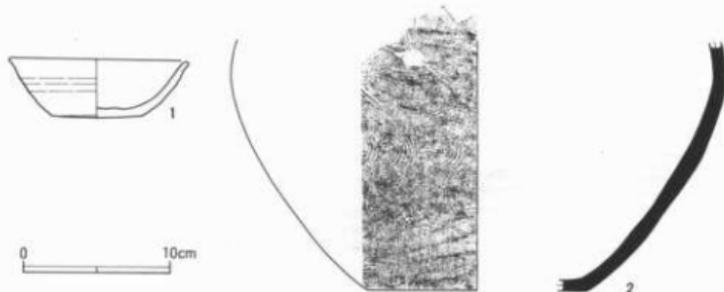
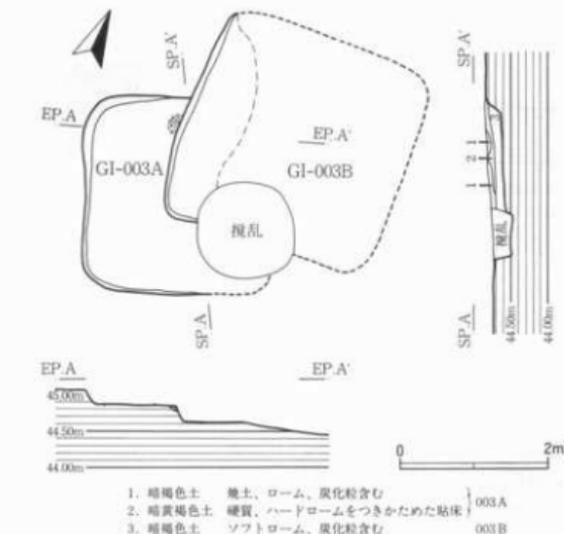


第106図 GI-002 平面・カマド・出土土器実測図 (1/80・1/40・1/4)

W、北壁にカマドを設ける。台地東傾斜面に営まれたため、東壁の立ち上がりは確認できない。西壁では17cmの高さがあり、住居中位で確認面と床面が同一レベルとなる。床面は堅くしまり、003Bの覆土上面でロームを主とした堅くしまる当住居の貼床を確認することができる。壁面下に周溝はない。遺物は床面より数片出土しただけである。

カマド：北壁中央に位置し、袖部は残存せず、火床部を認めただけである。火床部は貼床部分では不明瞭であったが、003Bの床面で赤褐色に焼けたロームを確認できた。

遺物：杯が1点出土している。1は口縁部が大きく外反し、口径が比較的広い形態をとる。底部は全面ヘラケズリされているようである。



第107図 GI-003A・B 平面・出土土器実測図 (1/80・1/4)

GI-003B (第107図・図版50)

位置：GI-77・78に位置し、GI-003Aに切られる。

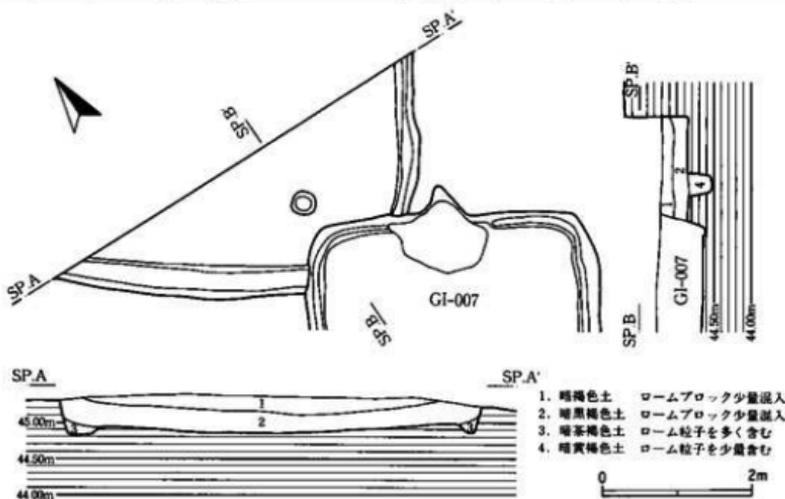
遺構：3m前後の方形プランを呈すと思われるが、壁及び床面の一部しか残っていないため不明確である。主軸方向はN-5°-Wをとるものと考えられる。遺存部分は西壁と南西寄りの床面で、003Aの床面から20cmほど下位まで掘り込まれている。残存する床面は比較的堅くしまっている。周溝は認められない。カマド、柱穴等は確認できなかった。遺物は床面より数片出土した。大形の須恵器甕の破片も床面直上である。

遺物：須恵器甕が1点出土している。

2は胴部下半の破片を推定復元したもので、大きく張りのある胴部形態をとっている。外面には同心円の叩き目を観察することができるが、胴部最大径部分と下端部分にはナデを施しており、叩き自体もあまり深く刻まれていないので明瞭な残り方はしていない。胎土には雲母粒を多く含み、キラキラとしている。同心円叩き須恵器は茨木南部から北総にかけて分布しているが、量的にはあまり多くない。7世紀から9世紀初頭まで盛行するようであるが、当住居では他に盤状杯の破片が伴っていることから、8世紀前半に位置付けてよいであろう。

表35 G I-003A・B出土土器観察表

神田 番号	器種	容量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎土	色調	焼成	備考
1	杯	12.0 6.0 4.1	5/6	体部内外面ヨコナデ 底部手持ちヘラケズリ	R	小砂粒多	赤褐色	良好	
2	甕	- (15.0) (17.2)	1/6	胴部内面ナデ 胴部外面同心円叩き後からいナデ 底周縁ヘラケズリ		雲母粒多 く含みキ ラキラ光 る	灰黄色	良好	同心円叩き須恵器



GI-006 (第108図)

位置：GI-76・77に位置し、南東コーナーをGI-007に切られる。

遺構：全掘できなかったため規模については不明であるが、隅丸方形プランでN-36°-Eをとるものと推測される。柱穴は南東コーナーに1ヶ所検出しただけである。径33cm、深さ30cmを計る。壁高は45cmで良好な立ち上がりを示すが、壁のラインはやや外方へふくらみをもっている。床面は住居中央に向かって若干凹むようで10cm程壁側より低く、全体的に堅くしまっている。周溝は広く20~40の幅をもち全周するようで、深さは平均で10cmを計る。住居覆土は自然埋没で、下部より土器細片を数片認める程度で遺物量は少なかった。

出土遺物：すべて甕の細片で図示できるものはない。

GI-007 (第109・110図・図版36)

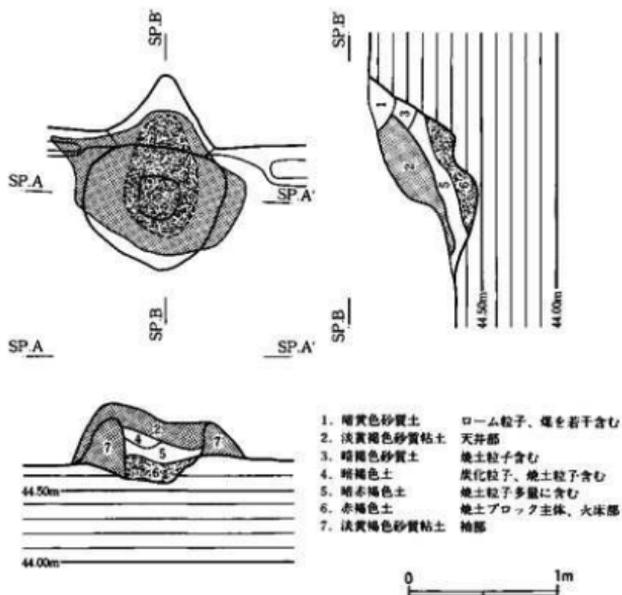
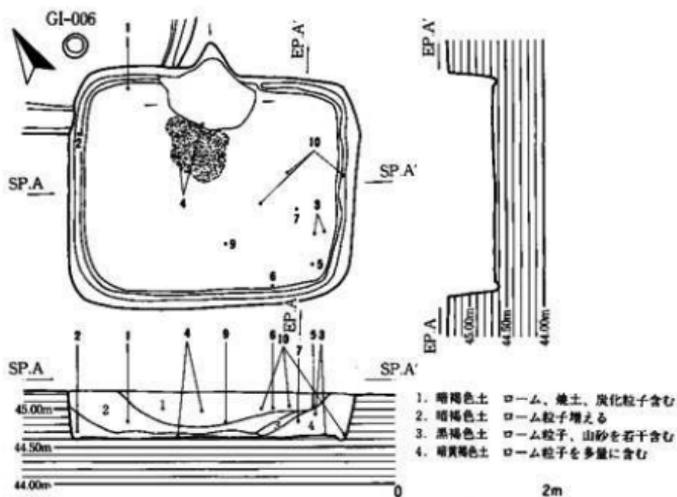
位置：GI-76・77に位置し、GI-006を切る。

遺構：主軸3.30cm、横軸3.92mの隅丸方形プランを呈し、主軸方向N-30°-E、北壁にカマドを設ける。掘り込みは深く壁高60cm前後を計り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は全体的に平坦、堅緻である。床面を精査したが、柱穴等は検出できなかった。なお、周溝はカマド部分のをぞき全周し、幅20cm、深さ7~8cmであった。

住居覆土中には焼土が多量に混在し、特にカマド前面はおびただしい量であった。また、遺物の出土量も多く、床面から浮いた状態で投棄されたと思われるものが目立ち、特に東南コーナー付近に多い。

表36 G I-007出土土器観察表

断面番号	器種	寸法 (cm)		遺存度	成形・整形手法	回転方向	胎土	色調	焼成	備考
		口・底・高								
1	甕	12.0 — 2.1		3/6	体内外面ヨコナデ 天井部回転ヘラケズリ		砂粒多	青灰色	良好	須臾
2	杯	12.8 7.8 4.3		3/6	体内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ 底面手持ちヘラケズリ		砂粒多	青灰色	良好	須臾
3	杯	13.2 7.0 4.0		3/6	体内外面ヨコナデ 底面周縁手持ちヘラケズリ 底面静止未切り		砂粒多	茶褐色	良好	
4	杯	14.2 (8.6) 4.2		3/6	体内外面ヨコナデ 体部下端~底面手持ちヘラケズリ	R	小砂粒少	赤褐色	良好	
5	杯	13.6 7.7 4.2		3/6	体内外面ヨコナデ 体部下端~底面手持ちヘラケズリ	R	小砂粒少	赤褐色	良好	
6	杯	12.5 7.3 4.3		3/6	体内外面ヨコナデ 体部下端~底面周縁手持ちヘラケズリ 底面静止未切り	R	砂粒 スコーリア 粒	橙褐色	良好	番号「一」
7	杯	12.0 7.5 4.0		3/6	体内外面ヨコナデ 底面手持ちヘラケズリ	R	砂粒少	暗黄褐色	良好	体部下端磨耗する
8	小形甕	10.8 — (7.5)		3/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ後かいるイナデ		砂粒多	茶褐色	良好	
9	甕	— 7.5 (4.4)		3/6	体部内面ナデ 体部外面ヘラケズリ		砂粒多	暗茶褐色	良好	
10	甕	— 12.0 (14.2)		3/6	体部内面ナデ後かいるイミガキ 体部外面ヘラケズリ後かいるイナデ		小砂粒多	明茶褐色	良好	



第109図 GI-007 平面・カマド実測図 (1/80・1/40)

カマド：遺存度は比較的良好で、天井部の山砂構築材もつぶれた状態ではあるがさほど流出しておらず、袖部から天井部にかけてアーチ状をなしていた。火床部は広範囲に及び、焼土の堆積も厚く、15cmほどあった。燃焼部から煙道部にかけて階段状に1段平坦面があり、そこから急傾斜に立ち上がって壁外に40cmほど突出している。ただ、掛口部分は山砂が流入充填しており検出できなかった。

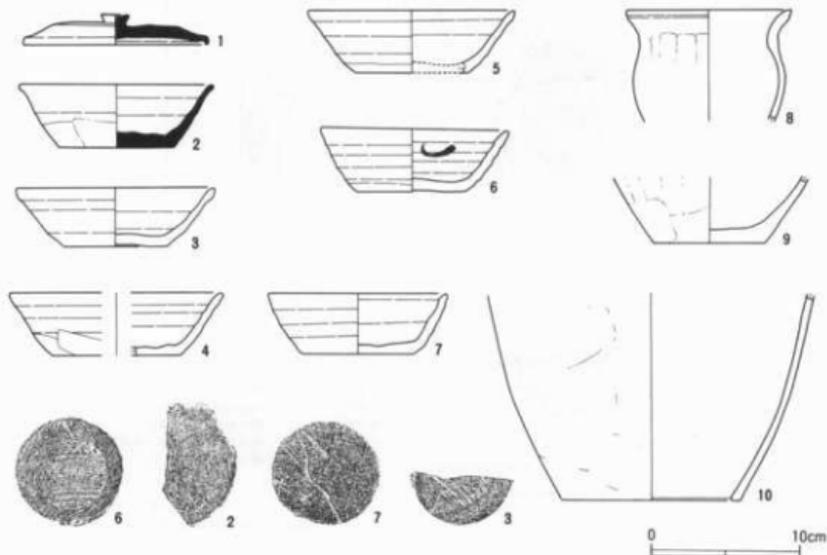
遺物：須恵器蓋1点、須恵器杯1点、杯5点、甕2点、甌1点が出土している。

1は丈の低い須恵器蓋で、つまみ頂部は凹んでいる。2は須恵器杯で、比較的深さがあり底径も大きめである。口縁端部が若干外反する。3から7はロクロ成形による土師器杯で、口縁部径と底部径との差が比較的少ないタイプである。6は内面に「一」の墨書が見られる。底部調整は糸切りの後ヘラケズリを行なうものが主体である。8は小形の甕である。9は甕の胴部下半の破片である。10は大形の甌で、器肉は薄く削られたのちちるいナデを施している。

GI-008 (第111・112図・図版37・48)

位置：GI-76に位置し、GI-009を切る。

遺構：主軸3.54m、横軸3.72cmの隅丸方形プランを呈し、主軸方向N-15°-E、北壁中央にカマドを設ける。壁の立ち上がりは良好で、幅広の周溝がカマド袖部から全周している。壁高は45~50cm、周溝の深さは10cm弱である。床面は中央が高く盛り上がり堅緻な部分が広がって



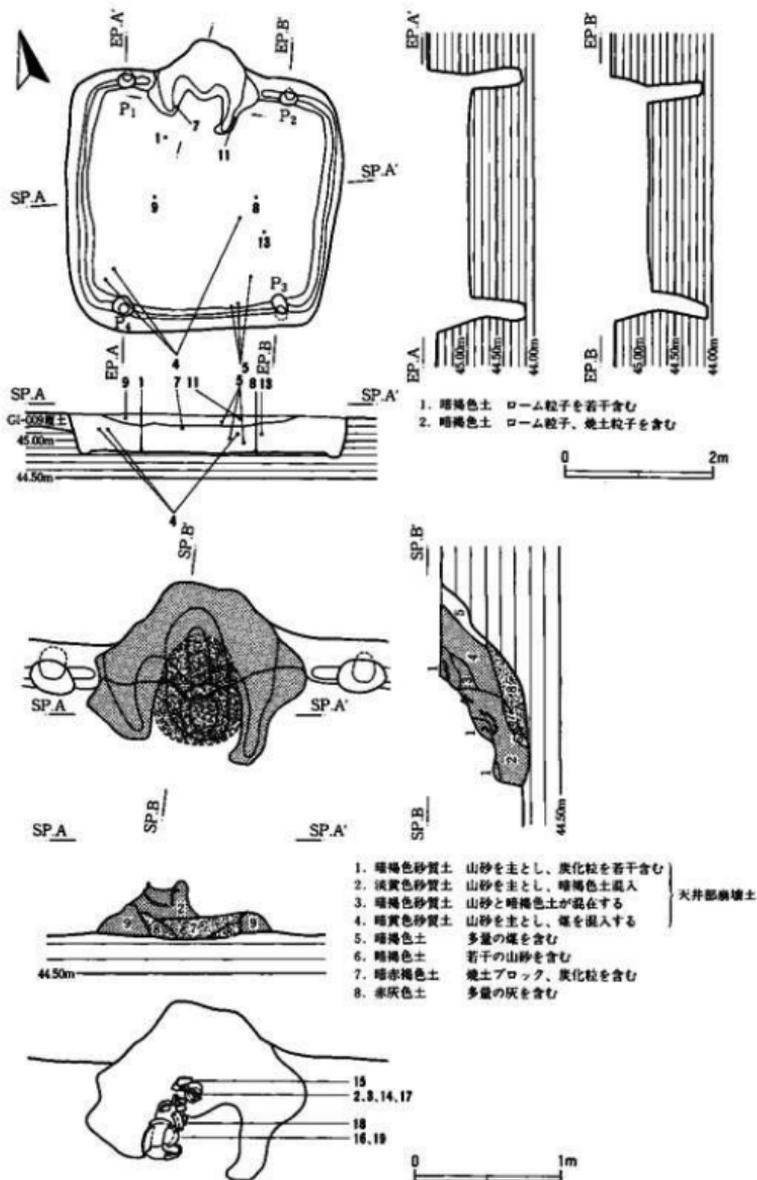
第110図 GI-007 出土土器実測図 (1/4)

いる。また、北壁、南壁下の周溝内から支柱穴と思えるピットを4ヶ所検出した。ともに掘り方は深く、住居中央に向けて若干内傾している。それぞれの深さは、 P_1 が70cm、 P_2 が78cm、 P_3 が72cm、 P_4 が73cmを計る。遺物の出土量は多く、床面直上の遺物は1、8のみで、カマド内出土品を除くと床面からかなり浮いた住居覆土内の遺物が目立つ。墨書土器の多いことも特徴の1つである。

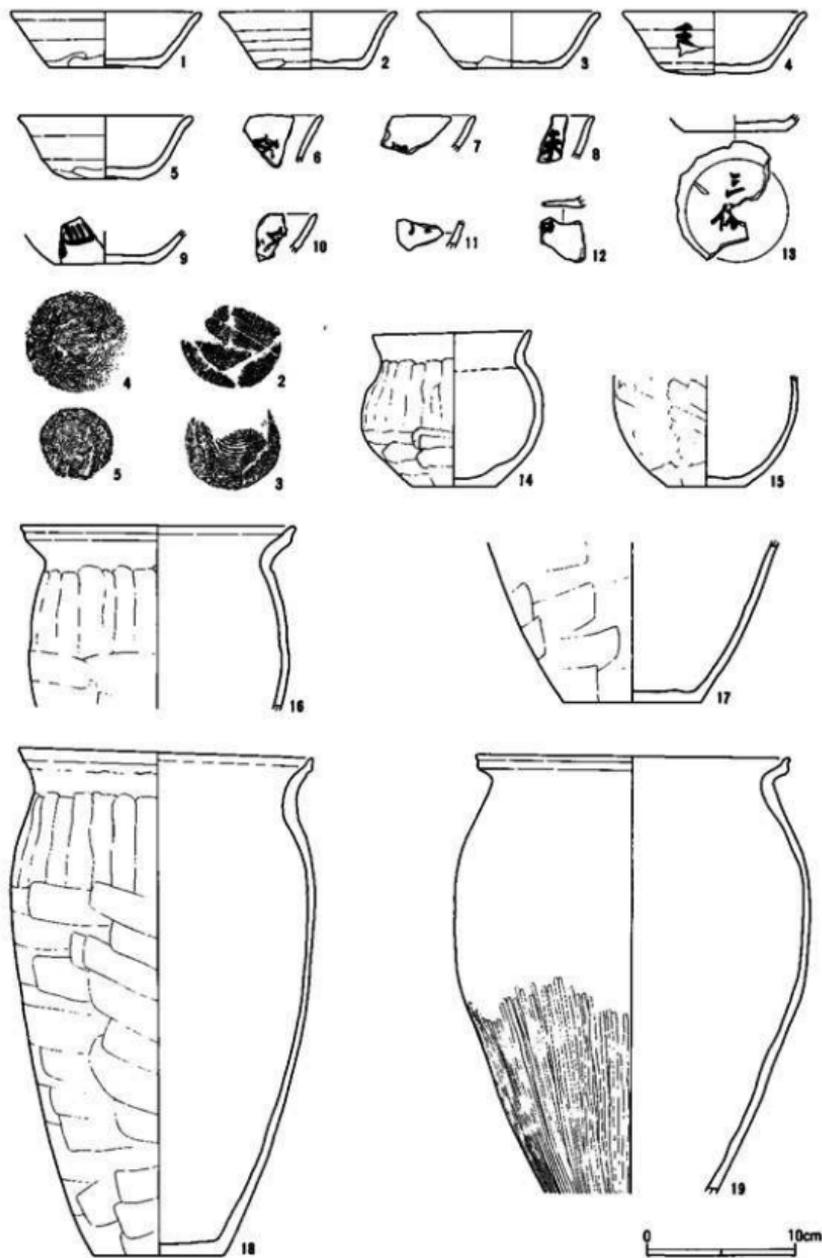
カマド：北壁中央部に位置し、天井部、袖部の遺存度は良いほうである。特に、天井部の構築材（山砂）に混入するように、焚口部分から煙道部分にかけて一列に並んで甕、杯が出土し

表37 G I-008出土土器観察表

押出番号	器種	法量(cm)		遺存度	成形・整形手法	回転方向	胎土	色調	焼成	備考
		口・底・高								
1	杯	12.6 7.4 3.7		3/4	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部手持ちヘラケズリ	R	砂粒多 スコリア 粒	淡黄褐色	良好	
2	杯	12.0 6.6 3.8		3/4	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケズリ 底部回転切削	R	小砂粒少	暗褐色	良好	
3	杯	11.8 7.0 3.8		3/4	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部手持ちヘラケズリ	R	小砂粒少	暗褐色	良好	
4	杯	12.0 7.1 4.1		3/4	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケズリ 底部回転切削	R	大砂粒少 スコリア 粒	淡黄褐色	良好	墨書「米」
5	杯	11.4 5.0 4.2		3/4	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケズリ	R	大砂粒少 スコリア 粒	黄褐色	良好	
6	杯 (体部)	— — —		3/4						墨書不明
7	杯 (体部)	— — —		3/4						墨書不明
8	杯 (体部)	— — —		3/4						墨書「米」
9	杯	6.6 (2.2)		3/4	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部手持ちヘラケズリ		スコリア 粒少	黄褐色	良好	墨書不明
10	杯 (体部)	— — —		3/4						墨書不明
11	杯 (体部)	— — —		3/4						墨書不明
12	杯 (底部)	— — —		3/4						墨書「口」?
13	杯 (底部)	— — —		3/4						墨書「三口」?
14	小形甕	10.5 5.6 10.5		3/4	口縁部内外面ヨコナデ 体部内面ナデ 体部外面ヘラケズリ		砂粒多	赤褐色	良好	
15	小形甕	— 5.2 (7.5)		3/4	体部内面ナデ 体部外面ヘラケズリ		小砂粒多	暗茶褐色	良好	
16	甕	18.8 (12.3)		3/4	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		砂粒 スコリア 粒	暗茶褐色	良好	
17	甕	— 9.3 (10.7)		3/4	体部内面ナデ 体部外面ヘラケズリ後かゝいナデ		スコリア 粒多	暗黄褐色	良好	
18	甕	19.6 8.5 33.5			口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		砂粒多	暗褐色	良好	
19	甕	20.5 — (29.2)		3/4	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ナデ胴下半ヘラミガキ		砂粒多	暗褐色	良好	



第111図 GI-008 平面・カマド実測図 (1/80・1/40)



第112图 GI-008出土土器实测图 (1/4)

ている。当初、遺物が山砂に混在していたためカマド袖部の補強材として使用されていたかとも思えたが、天井部付近にあるややくすんだ山砂であることや、杯を含む遺物の出土状況が特殊なこと、また、住居覆土内出土の墨書土器に意味不明のものが多いことなどから、祭祀的意味合いの強い遺物の出土状況であると考えたい。焚口部分には大形の甕(18・19)があり、中位には14、17のように大形な甕と小形な甕、さらに杯を配している。杯については底部破片も含め4～5個を反転した状態で重ね合わせている。煙道部先端近くには15の小形な甕がある。このように、カマド前面から奥にかけて、大形品→杯を含む小形品といった配列を組んでいる。カマド掘り方は壁に向って浅い楕円形をとり、煙道部は壁外に向って40cmほど突出する。火床部には灰が厚く堆積していた。なお、周溝はカマド袖部と接する地点でとまっている。

遺物：杯5点、墨書を残す杯破片が8点、甕6点が出土している。

1、2は比較的底部径と口縁部径の差が少ないタイプの杯、3から5は体部が底部より内弯気味に立ち上がり直線的に外傾しながら口唇部が若干反るタイプである。底部調整は回転糸切りの後手持ちヘラケズリを行なう。6から13は墨書の破片で、6・7・10・11は同様の文字のようであるが、読取りはできない。8は4と同じく「禾」、13は「三□」、12は小さい「口」が読める。9ははっきりしているが読取りはできない。意味をもたない文字(記号)が多い傾向が強い。14・15は小形の甕で胴部が球形を呈している。胴部は上半が縦方向に下半が横方向にヘラケズリされる。16から18は長胴の甕で、口縁部は強くヨコナデされ摘み出されている。胴部調整は14・15と同じである。19は常総型甕である。

GI-010 (第113図)

位置：GI-77・87に位置する。

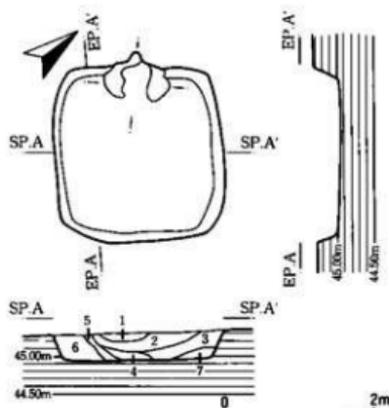
遺構：主軸2.36m、横軸2.30mの小形な隅丸方形プランを呈し、主軸方向N-55°-W、北東壁にカマドを設ける。柱穴、周溝等は検出できず、壁高は35～40cmで立ち上がりは緩い。床面は全体に平坦、堅緻である。遺物は数片しかなく、壁寄りの覆土最下層に焼土を多く含む層があり、その上部覆土にはロームブロックを多く含む層が堆積している。廃屋の焼却や出火時に家財道具の搬出後、土による消火ないし埋め戻しなどが想定できよう。

カマド：北東壁中央に位置し、袖部は先端の山砂が流失し短く、火床部まで延びていない。掘り方は浅い皿状で、最下層にはロームブロック混入土が堆積し、袖部もその上部に構築されている。煙道部は直線的に傾斜し、壁から50cmほど突出する。

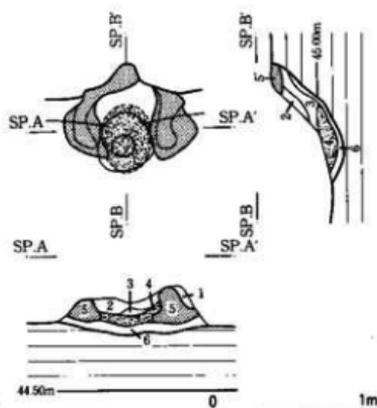
GI-013 (第113図・図版38)

位置：GI-73に位置するが、北半は調査区外のため全掘できなかった。

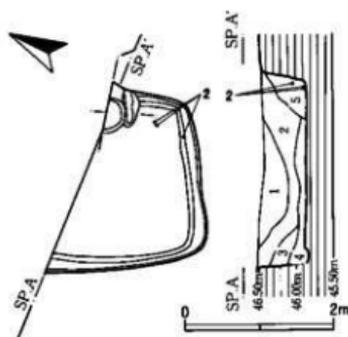
遺構：東西2.40m、南北は全掘できないため不明だが、隅丸方形プランを呈すと思われる。主軸方向はN-66°-Eである。壁高は60cm前後と深く、壁の立ち上がりも良好で垂直に近く、やや外方へ膨らむふっくらとしたラインを描く。床面はほぼ平坦で前面堅緻、特にカマド前面が



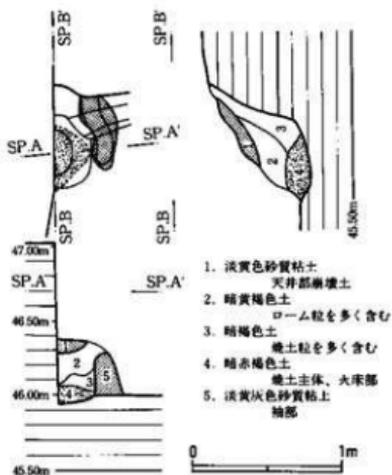
1. 暗褐色土
2. 暗黄褐色土 ロームブロック若干混入
3. 黄褐色土 ロームブロックを多量に混入
4. 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む
5. 暗黄褐色土 2とはほぼ同じ
6. 暗褐色土 4とはほぼ同じ
7. 暗黄褐色土 炭化粒、焼土粒、ローム粒を含む



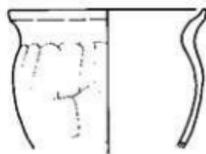
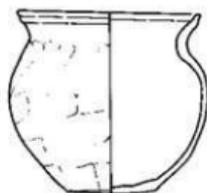
1. 灰黄褐色土 粘土を混入する輪の流出土か
2. 暗黄褐色土 ローム粒、焼土粒を若干含む
3. 暗褐色土 ローム粒を若干含む
4. 暗赤褐色土 焼土主体、炭化粒混入、大塚部
5. 白灰色砂質粘土 カマド輪部
- 5'. 白灰色砂質粘土 天井部



1. 暗褐色土 ローム粒子若干含む
2. 暗褐色土 ロームブロック混入
3. 黄褐色土 ローム粒主体
4. 暗黄褐色土 ローム、山砂粒子を若干含む
5. カマド腹土



1. 淡黄色砂質粘土 天井部崩壊土
2. 暗黄褐色土 ローム粒を多く含む
3. 暗褐色土 焼土粒を多く含む
4. 暗赤褐色土 焼土主体、大塚部
5. 淡黄灰色砂質粘土 輪部



0 10cm

第113図 GI-010 平面・カマド実測図 (1/80・1/40) 上
GI-013 平面・カマド・出土土器実測図 (1/80・1/40・1/4) 下

著しい。なお、床面を精査したが柱穴は検出できなかった。深さ5cmの浅い周溝がめぐる。遺物は全体に疎らであるが、カマド右側の南東コーナーで甕が出土した。

カマド：東壁中央にあり、袖部の遺存度は良好で、天井部の構築材もつぶれた状態で検出した。火床部はあまりはつきりせず、全体的に淡く厚い焼土が堆積している程度であった。掘り方は床面から10cmほど凹め煙道部は急傾斜に立ち上がり壁外への突出はあまりみられない。なお、袖下部においても住居の周溝が認められた。

遺物：甕が2点出土している。

ともに口縁部を強くヨコナデし、口唇部を擠み出している小形な甕である。胴部は球形を呈し、上半は縦方向、下半は横方向にヘラケズリされる。2は二次焼成を受けているため器面がかなり荒れており、剝落している部分も多い。また、焼土も多量に付着している。

表38 GI-013出土土器観察表

検出 番号	器 種	法量 (cm)		遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
		口・底・高								
1	甕	12.3 6.0 12.6		3/4	口縁部内外面ヨコナデ 体部内面ナデ 体部外面ヘラケズリ		小砂粒多	赤褐色	良好	二次焼成受け面 の剝落が激しい 焼土付着
2	甕	13.2 — (9.5)		3/4	口縁部内外面ヨコナデ 体部内面ナデ 体部外面ヘラケズリ		砂粒多	茶褐色	良好	

GI-014 (第114・115図・図版48)

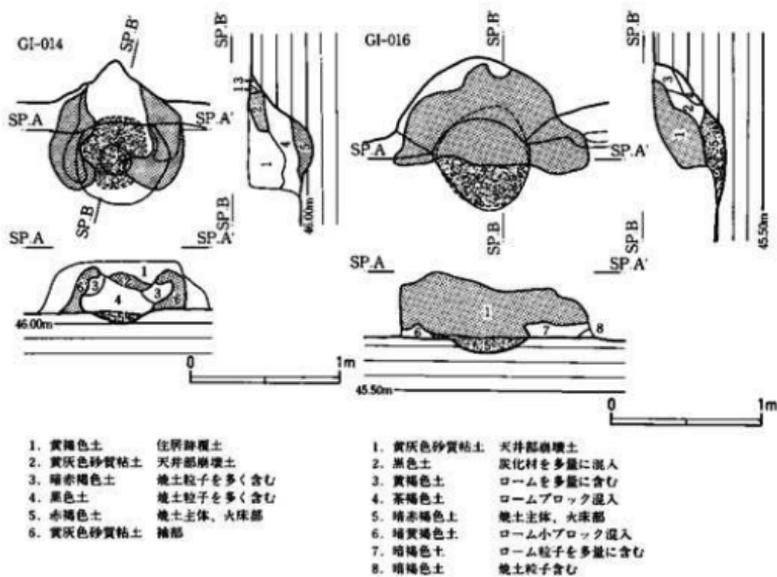
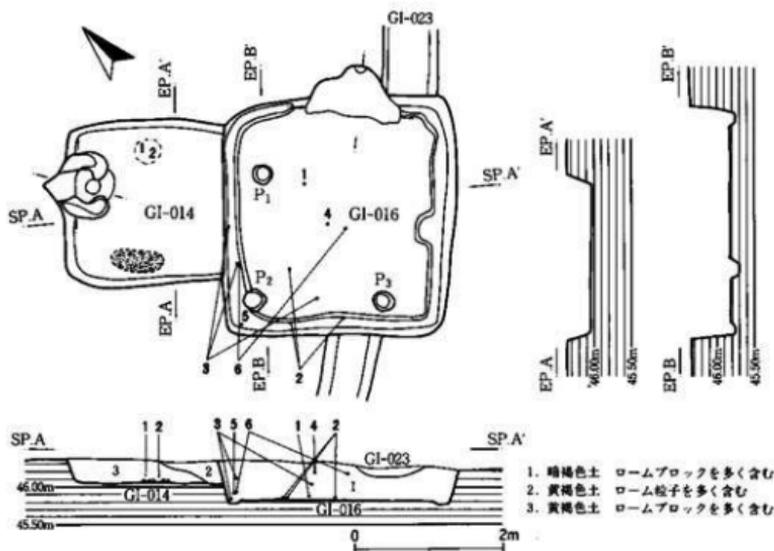
位置：GI-72・73に位置し、GI-016に切られる。

遺構：主軸2.23m、横軸2.12mの隅丸方形プランを呈し、主軸方向N-47°-W、北西壁にカマドを設ける。南東壁はGI-016に切られる。壁高は約30cmでやや緩傾斜、北東壁は若干外へ影らむ。床面はほぼ平坦でしまりも良かったが、柱穴は検出できなかった。住居南東壁寄りの覆土中には焼土混入土があり、炭化粒も含むことから焼失住居と思われる。また、北西コーナーでは粘土塊を認めた。遺物はカマド右袖前方に床面密着の状態で杯と甕の破片が集中して出土し、他の地点からの出土はほとんどなかった。

カマド：北西壁やや右寄りに位置し、袖部は内壁が崩れているものの遺存は良好で、天井部構築材もカマド内につぶれた状態で検出できた。火床部は10cmほど掘り凹め、赤色化した焼土が充填していた。煙道部は直線的に傾斜し、壁から30cmほど突出している。

遺物：甕1点と杯1点が出土している。

1は常総型甕で、口縁部は欠いている。長胴の下半部には丁寧なヘラミガキが縦方向に施されている。底部には木葉痕が残されている。木葉痕は2枚分観察できる。2は体部が底部より若干内弯気味に立ち上がり、直線的に外傾する杯である。底部は回転糸切りの後体部下端から底部周縁部にかけて手持ちヘラケズリがなされている。



第114図 GI-014・016平面・カマド実測図 (1/80・1/40)

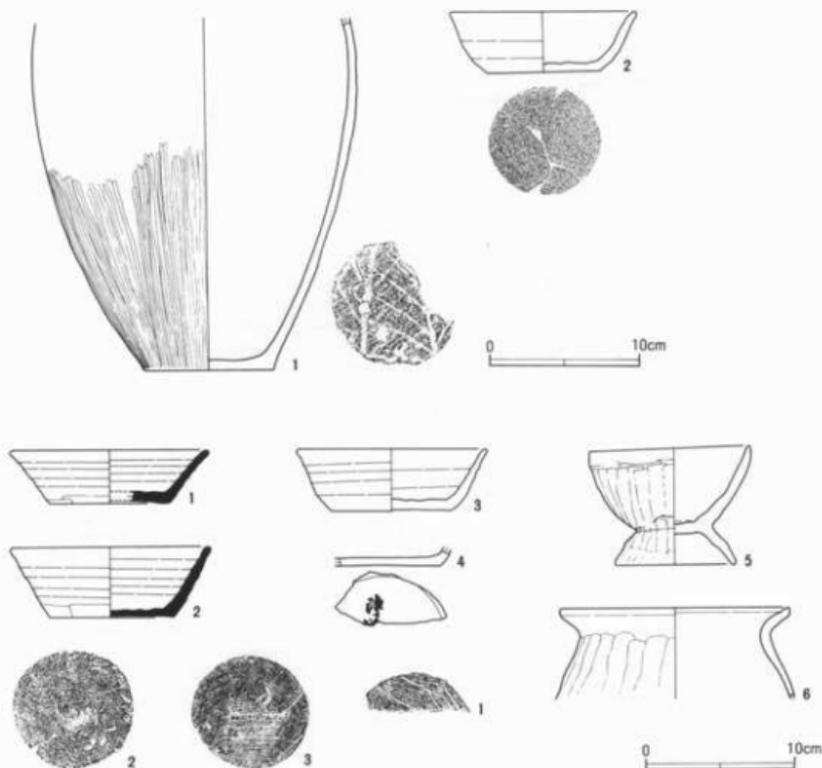
表39 G I-014出土土器観察表

標回 番号	器 種	法量 (cm) 口・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
1	甕	— 8.8 (23.8)	5%	胴部内面ナデ 胴部外面ナデ後下半部ヘラミゴキ		砂粒多	暗黄褐色	良好	底部木葉痕
2	杯	12.4 7.6 4.1	5%	体部内外面コナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り	R	小砂粒少	赤褐色	良好	煤付着

GI-016 (第114・115図・図版47)

位置：GI-72、73、82、83に位置し、GI-014を切り、GI-023に切られる。

遺構：長軸3.20m、短軸3.15mの隅丸方形プランを呈し、主軸方向N-43°-E、北東壁にカマドを設ける。壁高は約50cmあり、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦で堅くしまり、カマド



第115図 GI-014・016 出土土器実測図 (1/4)

前面は特に堅緻である。周溝はカマド袖際まで廻り、深さ5～6cm、幅は25cm前後あり、東南壁中央ではビット状に広がっている。ビットは径25～28cmのものを3ヶ所検出したが、深さはP₁が13cm、P₂が10cm、P₃が15cmと比較的浅く、位置関係も不揃いであることから主柱穴とは考えにくい。住居内覆土は単一層で、埋め戻しの可能性が大きい。遺物は床面直上や床面から浮いた状態のものなどさまざまで、かなり離れた地点同志の接合も認めらる。

カマド：北東壁中央やや右寄りに位置し、構築材の山砂粘土が広範囲に広がり、天井部がつぶれた状態で検出された。袖部基部はロームブロックを混入した土を構築材としている。火床部は若干掘り凹める程度である。煙道部には木炭片が多く残っており、壁外に40cmほど張りだしている。

遺物：須恵器杯2点、杯1点、墨書を残す杯破片1点、台付碗1点、壺1点が出土している。

1、2は須恵器杯である。口縁部径と底部径との差が比較的少ないタイプのもので、1は体部がやや外弯気味に立ち上がり、2は直線的に外傾している。体部下端から底部の調整は手持ちヘラケズリである。2の底部には数条の擦痕が認められる。3も同じタイプの土師器杯で、底部周縁は手持ちヘラケズリを行ない糸切り痕を残している。4は全面ヘラケズリの杯底部破片で、「浄」の墨書がある。5は類例に乏しい形態の台付碗で、深身の碗にハの字状に開く高台が付く。口縁部がヨコナデされる他は縦方向のヘラケズリが行なわれる。体部には部分的に輪積み痕が残っている。6は壺である。

表40 G I-016出土土器観察表

押出番号	器種	法量(cm)	遺存度	成形・整形手法	回転方向	胎土	色調	焼成	備考
		口・底・高							
1	杯	13.1 8.0 3.6	3/4	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部手持ちヘラケズリ	R	黄鉄鉱粒	青灰色	良好	須恵
2	杯	13.2 8.4 4.8	3/4	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部手持ちヘラケズリ	L	長石粒多	青灰色	良好	須恵 底部に擦痕残す
3	杯	12.6 8.1 4.2	3/4	体部内外面ヨコナデ 底部周縁手持ちヘラケズリ 底部静止糸切り	R	スコリア 粒少	暗褐色	良好	
4	杯 (底部)	— —	—	—					墨書「浄」
5	台付碗	10.6 7.9 8.0	3/4	境口縁内外面ヨコナデ 境体部内面ミガキ 境～台部外面ヘラケズリ後粗いミガキ 台縁部～内面ヨコナデ		砂粒多	暗黄褐色	良好	
6	壺	15.7 — (6.3)	3/4	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		小砂粒少 スコリア 粒少	暗茶褐色	良好	

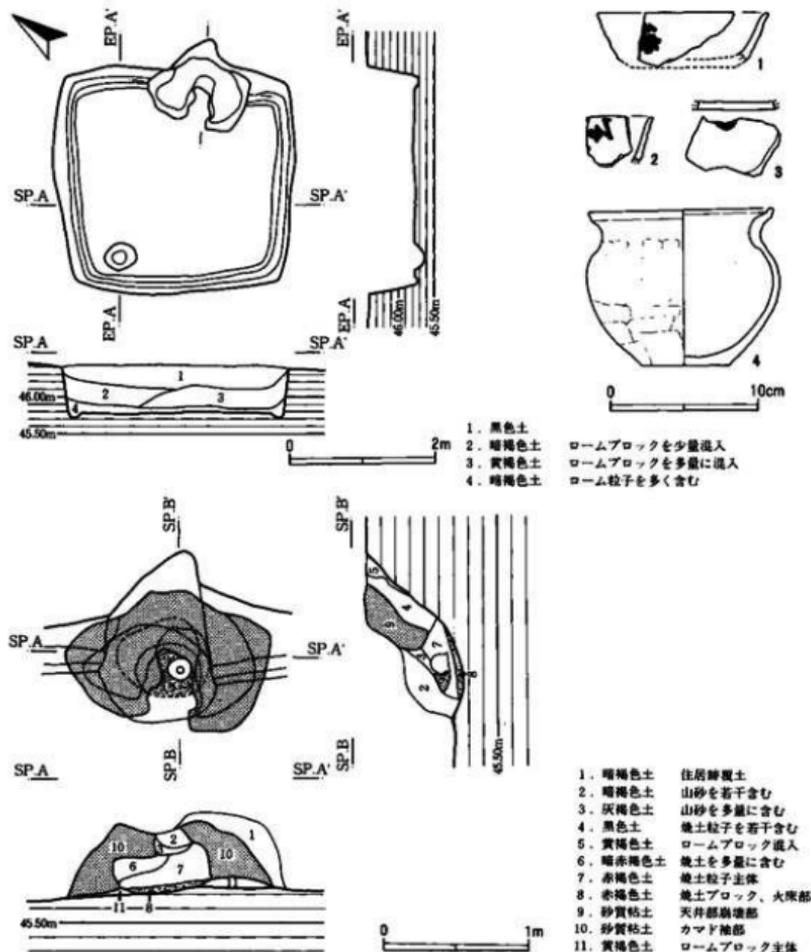
GI-015 (第116図・図版39)

位置：GI-72・73に位置する。

遺構：主軸3.04m、横軸3.33mの隅丸方形プランを呈し、主軸方向N-54°-E、北東壁にカマドを設ける。壁高は60cmを越え深く、立ち上がりは垂直でしっかりしている。壁のラインは

やや外方へ膨らんでいる。床面は平坦で堅緻、特にカマド周辺部は著しい。周溝は20cmの幅で全周し、深さはさほどないがカマド掘り方まで続く。掘り方のしっかりした住居ではあるが、遺物量は少なく、カマド内より完形品を1点出土した他は細片を少量認めただけである。

カマド：北東壁中央やや右寄りにあり、天井部はつぶれているものの煙道部分ではブリッジ状にその痕跡をとどめている。構築材は砂質粘土（山砂）で、掛口部分は穴の空いた状態で残り、同所より小形甕が倒立した状態で出土した。袖部は基底部にローム混入土があり。その上部につくられていた。カマド掘り方は浅い皿状を呈し、火床部の残りは良い。煙道部は緩い傾



第116図 GI-015 平面・カマド・出土土器実測図 (1/80・1/40・1/4)

斜で立ち上がり、壁外に40cmほど突出する。

遺物：墨書を残す杯破片3点、甕1点が出土している。

1は底部より若干内弯気味に立ち上がり、直線的に外傾する形態の杯破片で、「種」の文字が認められる。2は意味不明の墨書。3は杯底部に円を描いていると推測される墨書で、後述するGI-020出土の墨書土器(4)と同じタイプと思われ、1、3は同一個体の可能性が高い。4は口縁部を強くヨコナデし、口唇部を摘み出している小形な甕である。胴部は球形を呈し、上半は縦方向、下半は横方向にヘラケズリされている。二次焼成を受けているため器面の剥落が激しく、焼土が付着している。

表41 GI-015出土土器観察表

検出番号	器種	法量(cm)		遺存度	成形・整形手法	回転方向	胎土	色調	焼成	備考
		口・底・高								
1	杯 (体部)	11.6 —	—	3/4	体部内外面ヨコナデ 体部下縁手持ちヘラケズリ		スコリア 粒	明褐色	良好	墨書「種」
2	杯 (体部)	— —	—							墨書不明
3	杯 (底部)	— —	—							墨書不明
4	小形甕	12.4 5.8 10.6	—	5/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		砂粒多	赤褐色	良好	二次焼成受け器面の 剥落激しい 焼土付着

GI-017 (第117・118図・図版46)

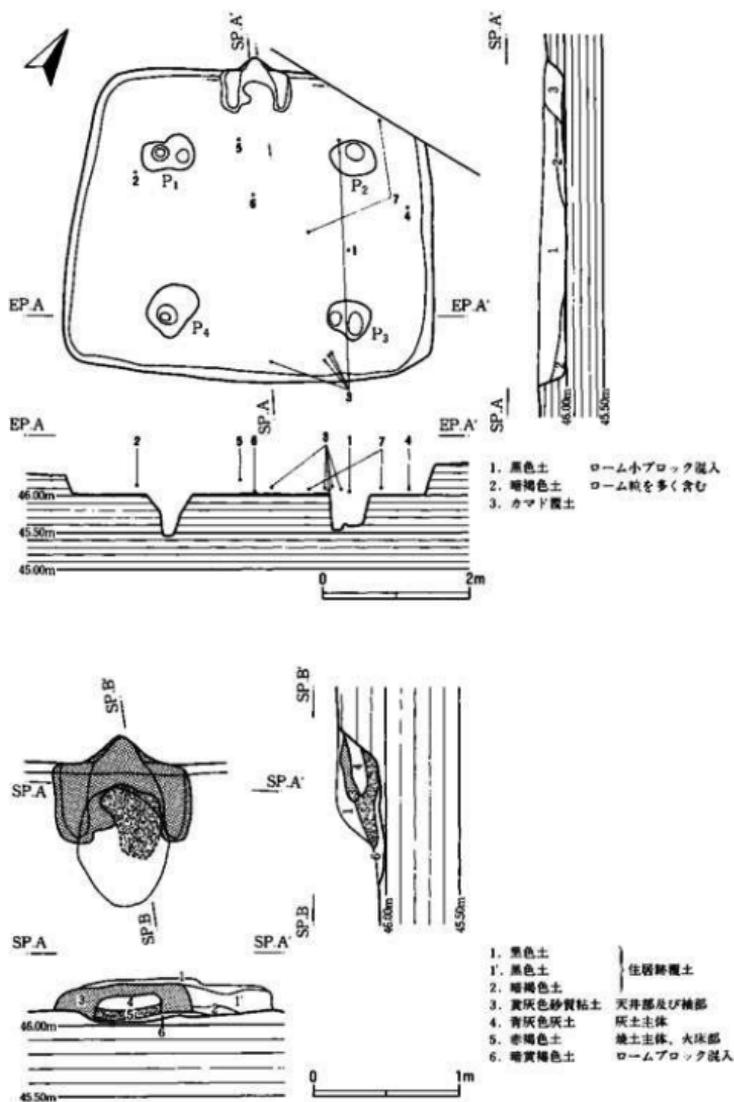
位置：GI-72に位置し、北東コーナーが調査区外にかかる。

遺構：主軸4.16m、横軸は南壁寄りでは5.08m、北壁寄りでは4.60mとやや台形に近い隅丸方形プランを呈し、主軸方向N-34°-W、北壁にカマドを設ける。壁高は40cmほどでやや傾斜がある。床面は平坦できわめて堅くしまり、特にカマド周辺は著しい。主柱穴は4ヶ所で検出したが、P₁とP₂は掘り直しの痕跡がある。ともに内側の掘り方では4本の柱穴が方形をとらないことから、外側に修正したものと考えられる。住居プランがやや台形になったため主柱穴の位置の設定を誤った結果であろうか。主柱穴の深さは、P₁が45cmと40cm、P₂が62cm、P₃が50cmと43cm、P₄が53cmである。遺物は床面より浮いた状態で覆土中位より多く出土しているが、特に集中する地点はない。

カマド：北壁中央に位置し、拱口部分から煙道部分にかけての遺存状態が良い。構築材は山砂粘土で、袖部は短く焚口部分の山砂は流出している。特にカマド右側に多く散在していた。カマド掘り方は浅く皿状を呈し、火床部は広範囲に及ぶが焼け方はさほど強くなく、下部にローム混入黄褐色土が堆積していた。煙道部の立ち上がりは急で短く、屋外に20cmほど突出するだけである。

遺物：杯3点、碗1点、高台付杯1点、甕2点が出土している。

1、2は盤状杯で、1は全面に赤色塗彩される。3は大形の椀で、体部は緩やかに弯曲している。体部外面はヘラケズリの後に粗いヘラミガキが施される。4は浅身の杯で、全面に赤色塗彩がなされている。体部は直線的に外傾し底部調整は回転ヘラケズリである。5は須恵器高



第117図 GI-017 平面・カマド実測図 (1/80・1/40)

台付杯の底部破片で、底部調整は回転ヘラケズリである。6は甕底部、7は甕上半部で、同一個体の可能性がある。口縁部は強くヨコナデされ、口唇部を揃み出している。やや胴部に張りをもたせた形態である。

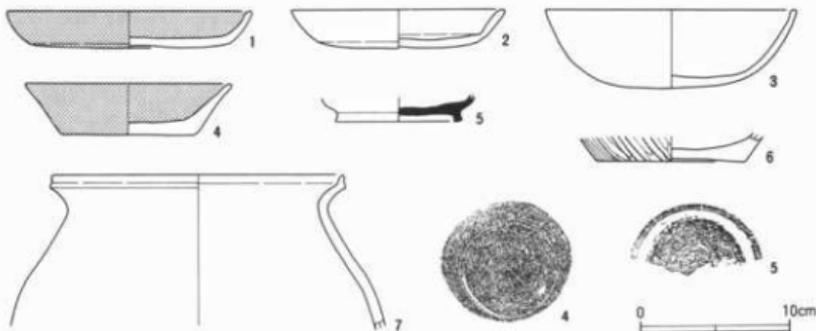
表42 G I-017出土土器観察表

押回 番号	器種	法量 (cm)		遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎土	色調	焼成	備考
		口・底・高								
1	盤状杯	16.4 13.5 2.5		3/6	口縁へ体部内外面ヨコナデ 底部ナデ		長石粒多	赤褐色	良好	全面赤彩
2	盤状杯	14.4 10.9 2.6		3/6	口縁へ体部内面ヨコナデ 体部外面粗いヘラミガキ 底部粗いヘラミガキ		スコリア 粒	明褐色	良好	
3	甕	16.8 — 5.3		3/6	口縁部内外面ヨコナデ 体部内面ナデ 体部外面ヘラケズリ後粗いヘラミガキ		砂粒少	暗褐色	良好	
4	杯	13.8 8.6 4.5		3/6	口縁へ体部内外面ヨコナデ 底部回転ヘラケズリ	R	長石粒多 スコリア 粒	赤褐色	良好	全面赤彩
5	高台付杯	— 8.6 (1.7)		3/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転ヘラケズリ	L	砂粒多 雲母粒多	青灰色	良好	須恵
6	甕	— 9.9 (1.7)		3/6	胴部内面ナデ 胴部外面ミガキ		雲母粒多	暗黄褐色	良好	7と同一個体か 木製痕
7	甕	19.6 — (10.4)		3/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内外面ナデ		雲母粒多	暗黄褐色	良好	

GI-020 (第119図・図版40・49)

位置：GI-81に位置する。

遺構：主軸2.60m、横軸2.93mの小形な隅丸方形プランを呈し、主軸方向N-26°-W、北壁にカマドを設ける。壁高は25cm前後、ほぼ垂直に立ち上がるが、上端はやや外方へ膨らむ。床面は平坦でよくしまっている。周溝は全周し、深さ5cm、幅は10~15cmであまり一定しない。柱穴等は床面を精査したが確認できなかった。遺物はほとんどが床面直上から出土し、杯が特に目立った。



第118図 GI-017 出土土器実測図 (1/4)

カマド：北壁中央に位置し、袖部の遺存度は良いが、全体に上部の山砂が流出し基部付近だけが残っている。住居周溝は袖部直下でなくなり、カマド内には延びていない。カマド掘り方は浅い皿状をなし、火床部は小範囲におさまる。煙道部は短くほぼ垂直に立ち上がり壁外にはほとんど突出しない。

遺物：杯8点（7点が墨書）、甕2点が出土している。

1～3・8はやや大きめの底部から直線的に体部が外傾するタイプの杯で、4～7は底部より内湾気味に立ち上がり体部が直線的に外傾するタイプの杯である。底部調整は、回転糸切りの後に体部下端から底部周縁部を手持ちヘラケズリしているものがほとんどである。墨書は、1～3は底部に「東」を1字中央に書いているが字体がそれぞれ異なっている。4は体部に達筆な文字で「種守」、底部には種から発芽したような記号状のもの「 δ 」が描かれている。5は底部に墨の痕跡のようなものがうかがえる。6は体部に「十」、7は体部に「内国」の文字が大きく書かれている。9は口縁部を強くヨコナデして口唇部を摘み出している甕で、胴部は縦方向のヘラケズリがなされる。10は胴部下半の甕の破片である。

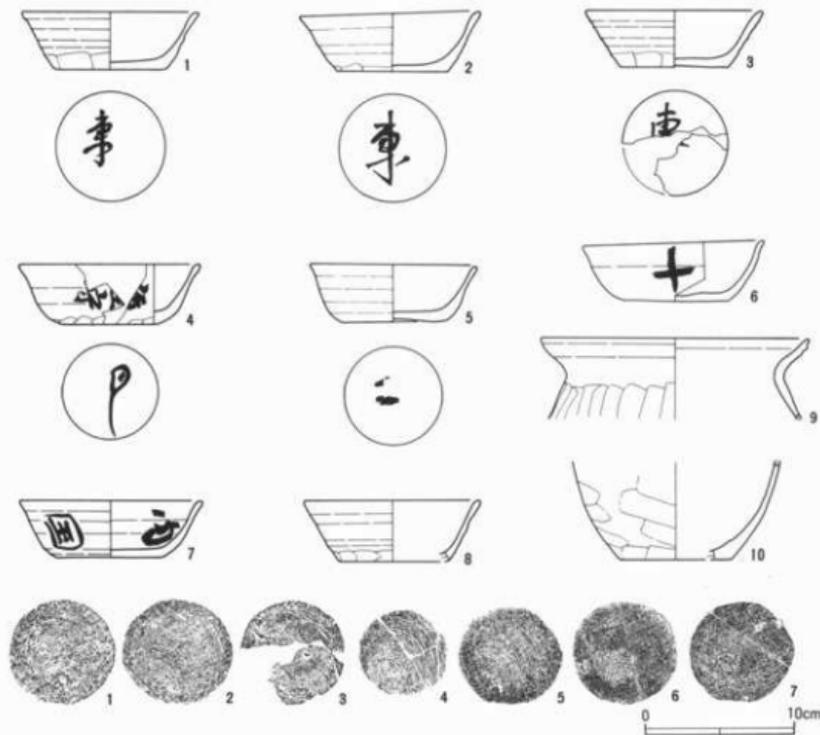
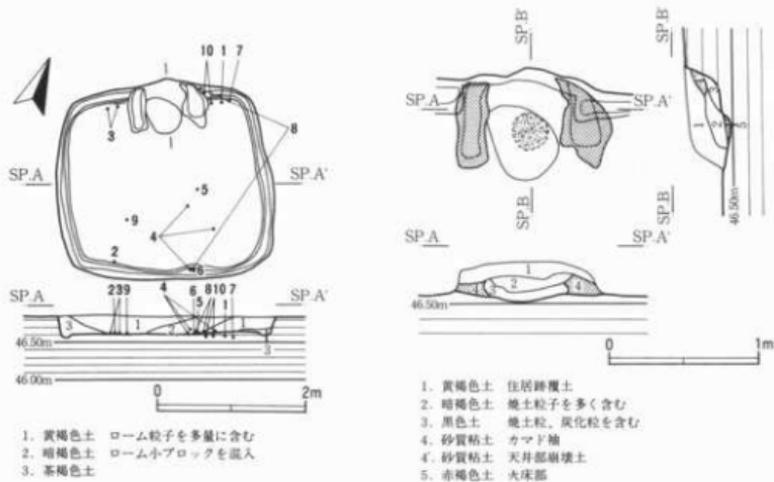
表43 G I-020出土土器観察表

押図番号	器種	法量 (cm)		遺存度	成形・整形手法	回転方向	胎土	色調	焼成	備考
		口・底・高								
1	杯	11.9 7.3 3.9		5/6	口縁～体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り	R	雲母粒少	明茶褐色	良好	墨書「東」
2	杯	12.1 7.3 4.1		5/6	口縁～体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り	R	小砂粒多	暗褐色	良好	墨書「東」 体部内外面に煤付着
3	杯	12.0 7.2 3.9		5/6	口縁～体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	R	雲母粒少	暗褐色	良好	墨書「東」
4	杯	12.3 6.2 4.0		5/6	口縁～体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り	R	砂粒少	明褐色	良好	墨書「種守」 「 δ 」
5	杯	11.3 6.8 3.9		3/6	口縁～体部内外面ヨコナデ 底部周縁手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り	R	小砂粒多	明褐色	良好	墨書不明
6	杯	12.6 7.0 4.0		5/6	口縁～体部内外面ヨコナデ 底部周縁手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り	R	小砂粒多	赤褐色	良好	墨書「十」
7	杯	12.4 7.4 3.8		5/6	口縁～体部内外面ヨコナデ 底部周縁手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り	R	砂粒少	明褐色	良好	墨書「内国」
8	杯	12.0 7.2 (4.1)		3/6	口縁～体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ	R	小砂粒少	明褐色	良好	
9	甕	18.0 — (5.5)		3/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		砂粒多	暗赤褐色	良好	
10	甕	— 7.5 (6.6)		3/6	胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		砂粒多	暗赤褐色	良好	

GI-027 (第120図)

位置：GI-84に位置し、GI-021に切られる。

遺構：主軸2.1m強、横軸2.3mの隅丸方形プランを呈し、主軸方向N-52°-W、北壁にカマドを設ける。住居南東部はGI-021に切られ、南西部は調査区外となる。壁高は約20cmで、床面



第119図 GI-020 平面・カマド・出土土器実測図 (1/80-1/40-1/4)

はさほどしまった部分はないが平坦である。周溝は認められない。遺物は床面より若干浮いた状態で出土したが、復元できるものではない。

カマド：北西壁やや西寄りに位置し、袖部、天井部の遺存度はさほど良くない。袖部は幅広であるが壁から25cmほど張り出すだけで短く、ロームを混入する褐色土の上部に山砂粘土を重ねて構築している。火床部は浅く小範囲にとどまり、赤く焼け多た部分も少なくない。煙道部は短く壁外に15cmほど突出する程度である。

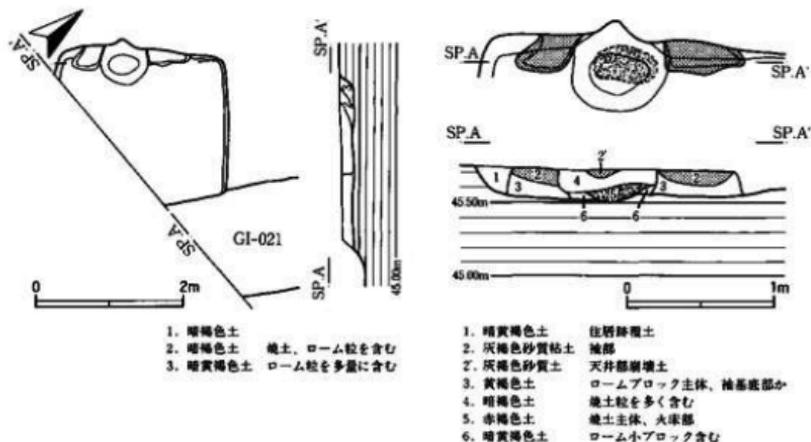
GI-028 (第121図・図版40)

位置：GI-74に位置する。

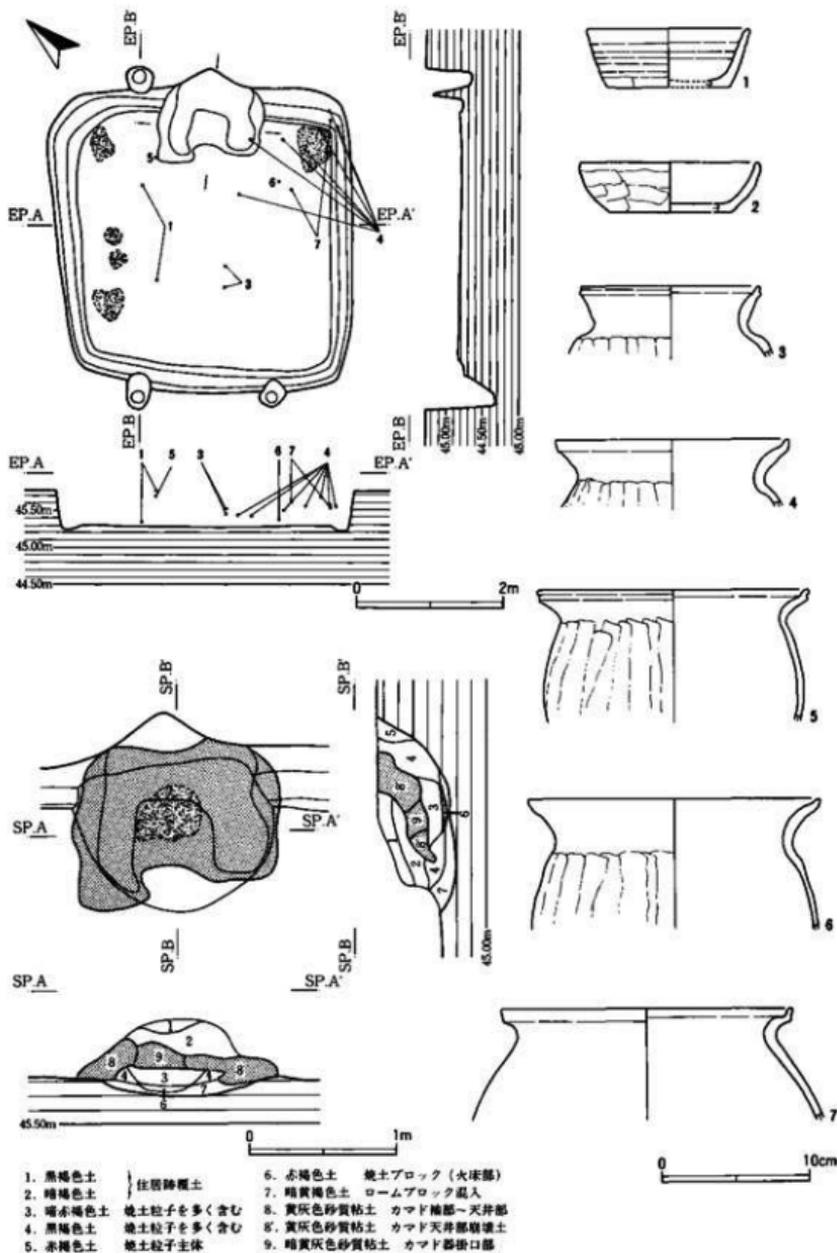
遺構：主軸4.10m、横軸4.10mの隅丸方形プランを呈し、主軸方向N-48°-E、北西壁にカマドを設ける。壁高は40cm前後を計り、立ち上がりは良好である。北西コーナーは他の3コーナーに比べ外方に張り出すため、周溝は全周し、幅は5~6cmである。

東南壁側に2ヶ所、北西壁側に1ヶ所、計3ヶ所のピットを住居掘り方に接して検出したが、偶然の配置とは思えず、住居に関連したピットの可能性が高い。住居床面に主柱穴がないことから壁外柱穴とも考えられる。それぞれの深さは、P₁が61cm、P₂が96cm P₃が78cmと非常に深い。なお、カマド右側にピットは検出できなかった。住居覆土内には多量の焼土が混入し、壁側が特に厚く堆積し焼失住居を思わせた。遺物は床面よりかなり浮いた状態で出土するものが多く、投棄された可能性が高い。

カマド：北東壁中央に位置し、やや天井部がつぶれた状態ではあるが遺存度は良好で、袖部も内弯した状態をとどめている。掘り方は深くはないが幅広で楕円形をなし、一旦ローム混入土で埋め戻してから袖部をつくっている。したがって、火床部もローム混入土内にあり、さほ



第120図 GI-027 平面・カマド実測図 (1/80・1/40)



第121図 GI-028 平面・カマド・出土土器実測図 (1/80・1/40・1/4)

ど広範囲に広がらない。煙道部は急傾斜に立ち上がり、壁外に20cmほど突出する程度である。

遺物：杯2点、壺5点が出土している。

1は箱型に近い形態の杯で、体部下端から底部周縁部にかけてヘラケズリを施している。2は体部全面をヘラケズリする杯である。3から7は壺であるが、口縁部を強くヨコナデして口唇部を摘み出すものが多い。胴部は縦方向のヘラケズリを主体としているが、7については明瞭に残っていない。

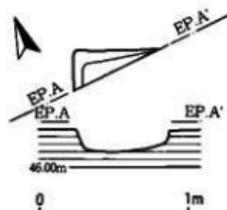
表44 GI-028出土土器観察表

発掘 番号	器種	法量(cm)		遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎土	色調	焼成	備考
		口・底・高								
1	杯	10.9 8.2 4.0		3/4	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁ヘラケズリ 底部回転未切り	R	砂粒多	暗赤褐色	良好	
2	杯	12.0 8.4 3.4		3/4	口縁部内外面ヨコナデ 体部内面ミガキ 体部外面～底部ヘラケズリ		砂粒多	暗赤褐色	良好	
3	壺	12.0 — (4.7)		3/4	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		小砂粒多	暗茶褐色	良好	
4	壺	15.6 — (4.6)		3/4	口縁部内外面ヨコナデ 胴部ナデ 胴部外面ヘラケズリ		小砂粒多	茶褐色	良好	
5	壺	20.0 — (8.8)		3/4	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		小砂粒多	暗赤褐色	良好	
6	壺	20.0 — (7.6)		3/4	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ後ナデ		砂粒多	暗赤褐色	良好	
7	壺	18.2 — (8.8)		3/4	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		小砂粒多	暗赤褐色	良好	

GI-031 (第122図)

位置：GI-82に位置し、大半は調査区外となる。

遺構：ほとんどが調査区外となるため、規模、形状等に不明な点が多いが、方形のコーナーを呈すこと、床面までの深さが30cmほどあり軟弱とはいえほぼ平坦であること、覆土が住居跡のそれと同じであること等から、住居北西コーナー部分である可能性が高い。ただし、遺物は細片しか認められず、時期については不明な点が多いが、奈良、平安時代の時期であろう。



第122図 GI-031 平面図 (1/40)

FI-001 (第123図・図版45)

位置：FI-79、89、GI-70、80に位置する。

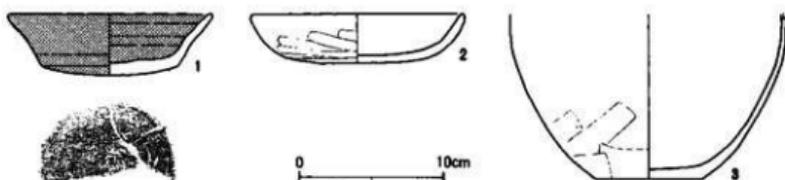
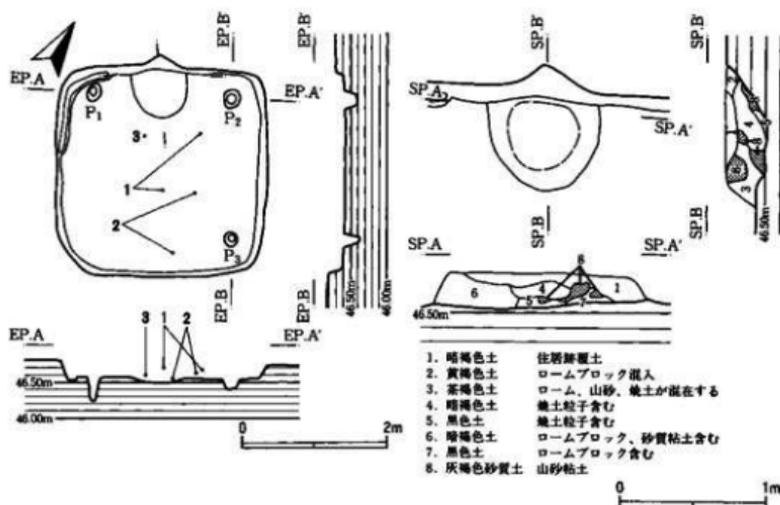
遺構：長軸2.92m、短軸2.88mの隅丸方形プランを呈し、主軸方向N-35°-W、北壁にカマドを設ける。壁高は15～25cmと浅く、立ち上がりも緩い。床面は平坦で全面堅緻、特に中央部が著しい。ピットは3ヶ所あり位置関係から主柱穴と思われるが、南西コーナーでは精査した

が認められなかった。それぞれ径は20cm前後で深さはP₁が32cm、P₂が14cm、P₃が23cmと全般的に浅い。周構は北西コーナーに幅15cm、深さ5cm程度のものが部分的に設けられているだけである。遺物量は少なく、床面付近で1～3を検出したにとどまる。

カマド：北壁中央部に位置し、構築材は流出して袖部、天井部ともほとんど残っていない。また、火床部も不明瞭で、多少焼土混入土の堆積を認める程度である。

遺物：杯2点、壺1点が出土した。

1は外反する口縁部をもつもので、器面全体に赤色塗彩が施こされる。2は浅い体部に短かく内弯する口縁部をもつ杯で、体部下半はヘラケズリされている。底部はやや丸味をもっている。3は壺の胴下半部で胴部下端はヘラケズリされる。器面はガラッとしており、焼土が付着する。



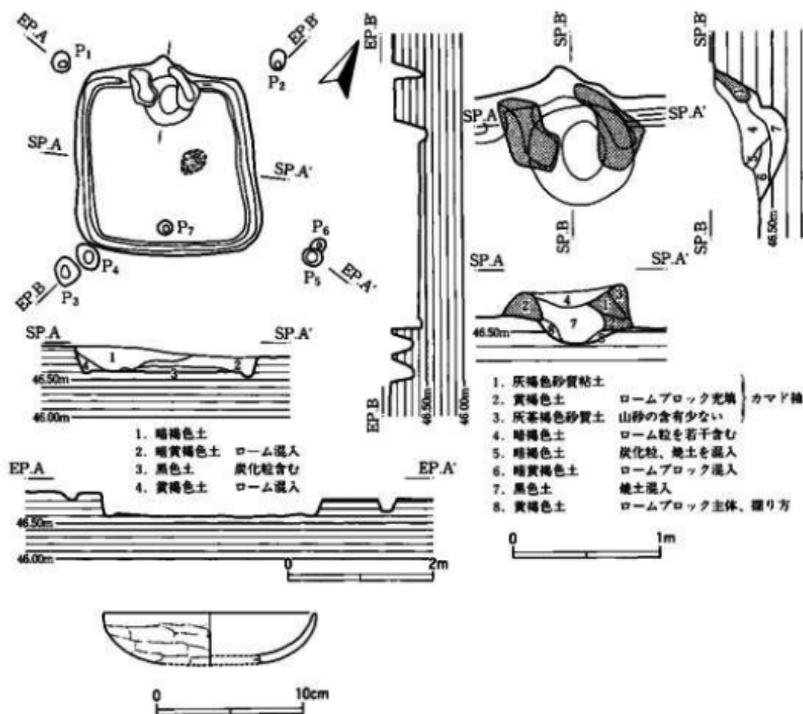
第123図 FI-001 平面・カマド・出土土器実測図 (1/80・1/40・1/4)

FI-005 (第124図)

遺構：FI-89に位置する。

遺構：主軸2.42m、横軸2.56mの隅丸方形プランを呈し、主軸方向N-31°-W、北壁にカマドを設ける。当住居は壁外に柱穴をもつ特殊な例である。壁高は30cm前後を計り、ほぼ垂直に立ち上がる。東南コーナーがやや展らむため、住居プランが若干歪んで見える。床面は平坦でよくしまる。住居各コーナーの対角線延長上壁外には、P₁~P₆がそれぞれ対をなすように位置しており、住居に伴うものと思われる。それぞれの径、深さはP₁が25cm・9cm、P₂が27cm・40cm、P₃が33cm・30cm、P₄が37cm・30cm、P₅が27cm・15cm、P₆が22cm・12cmである。また、南壁側中央には径20cm、深さ15cmのP₇があり、入口部施設と考えられる。周構はカマド左袖部分を除き深さ5~6cm、幅20cm前後で一定に保たれながら全周する。床面付近には多量の焼土と木炭片が散在していることから、焼失住居と考えられるが、遺物は意外に少なく、カマド周辺から1が出土した他はわずかに細片を出土した程度である。

カマド：北壁中央に位置する。構築材は山砂粘土を主体としているが、ロームブロックを混



第124図 FI-005 平面・カマド・出土土器実測図 (1/80・1/40・1/4)

入している部分も多い。カマド掘り方は椀状に20cmほど凹め、一旦整形してその上部に袖部を構築していることが断面観察からわかる。火床部はさほど焼けていない。煙道部は急傾斜に立ち上がり、壁外に30cmほど突出する。

遺物：杯を1点出土する。

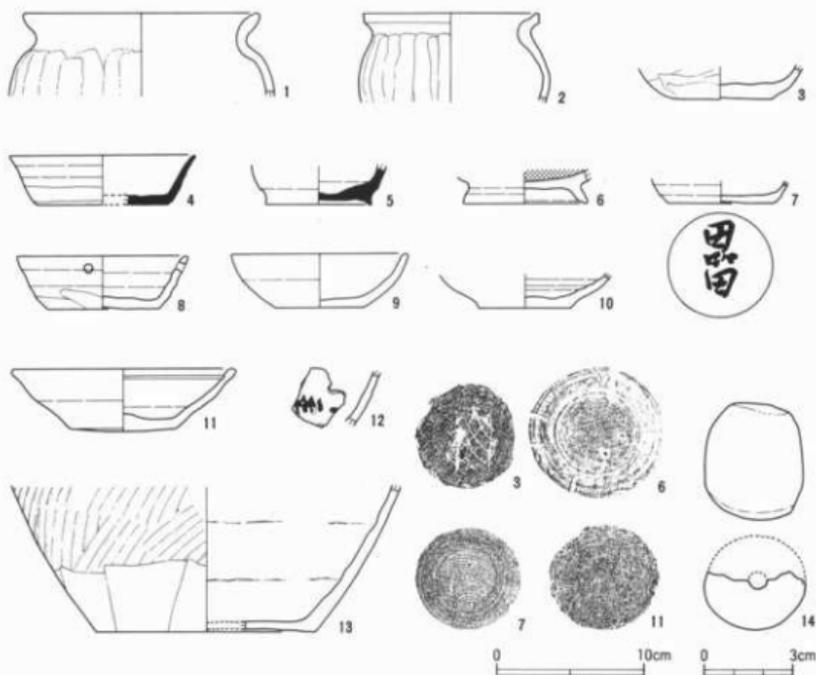
図上復元したもので、浅い体部で口縁部は内湾気味に立ち上がる。

グリッド出土の土器（第125図）

Gグリッドを中心に住居跡と関連の強い土師器が出土している。

1から3は甕で、3は底部に木葉痕が残りさらに細い線刻により「Y」の記号が刻まれている。4は須恵器杯、5は須恵器の高台付杯である。6は内面黒色処理された高台付杯の底部破片、7も杯底部破片である。8はほぼ完形品で、底部径と口縁部径との差がさほどないタイプの杯である。9は底部径に対して口縁部径が大きく、体部が若干内湾気味に立ち上がるタイプの杯である。10、11は底部糸切りの杯で、11は口縁部内面に1状の沈線をめぐらしている。

13は叩き目を残した大形の甕である。その他に、墨書が出土している。7は底部に「田苗」、12は杯体部に「口主」が書かれている。14は中央に1孔のあく土製品である。



第125図 グリッド出土遺物実測図 (1/4)

表45 グリッド出土土器観察表

神田 番号	器 種	流量 (cm)		遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
		口-径	高							
1	甕	15.0 — (5.6)		3/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		砂粒多	茶褐色	良好	
2	甕	11.9 — (6.0)		3/6	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		砂粒多 スクリア 粒少	暗褐色	良好	
3	甕	6.5 (2.3)		3/6	胴部内面ミガキ 胴部外面ヘラケズリ		砂粒多	茶褐色	良好	底部木蓋痕残り周縁 部はヘラケズリ 焼成後「V」の線刻
4	杯	12.4 8.8 3.3		3/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部回転ヘラケズリ		砂粒多	青灰色	良好	須恵
5	高台付杯	— 7.1 (2.6)		3/6	体部内外面～高台部ヨコナデ 底部回転ヘラケズリ		白色粒多	灰黒色	良好	須恵
6	高台付杯	— 8.2 (2.1)		3/6	体部内面ミガキ 体部外面～高台部ヨコナデ 底部ヘラケズリ		緻密	淡褐色	良好	内黒
7	杯	— 7.2 (1.6)		3/6	体部内外面ヨコナデ 表面周縁回転ヘラケズリ 底部回転未切り	R	スクリア 粒少	黄褐色	良好	墨書「田前」
8	杯	11.3 7.4 3.6		3/6	体部内外面ヨコナデ 体部下端～底部周縁手持ちヘラケズリ 底部回転未切り	R	砂粒多 スクリア 粒	暗赤褐色	良好	口縁部直下に1ヶ所 穿孔あり(焼成前)
9	杯	11.7 6.0 3.7		3/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転未切り		砂粒多	明褐色	良好	
10	杯	— 6.2 (2.4)		3/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転未切り	R	砂粒多	赤褐色	良好	
11	杯	15.0 7.2 4.2		3/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転未切り		砂粒多	黄褐色	良好	口縁部内面に沈線
12	杯 (体部)	— — —								墨書「口主」
13	甕	— 14.8 (10.0)		3/6	胴部内面ナデ。輪轆み痕残り 胴部外面タタキ 胴部下端ヘラケズリ		砂粒多	黒灰褐色	良好	
14	土玉	—								

V. その他の遺構

当遺跡では、溝状遺構と土壌が検出されている。

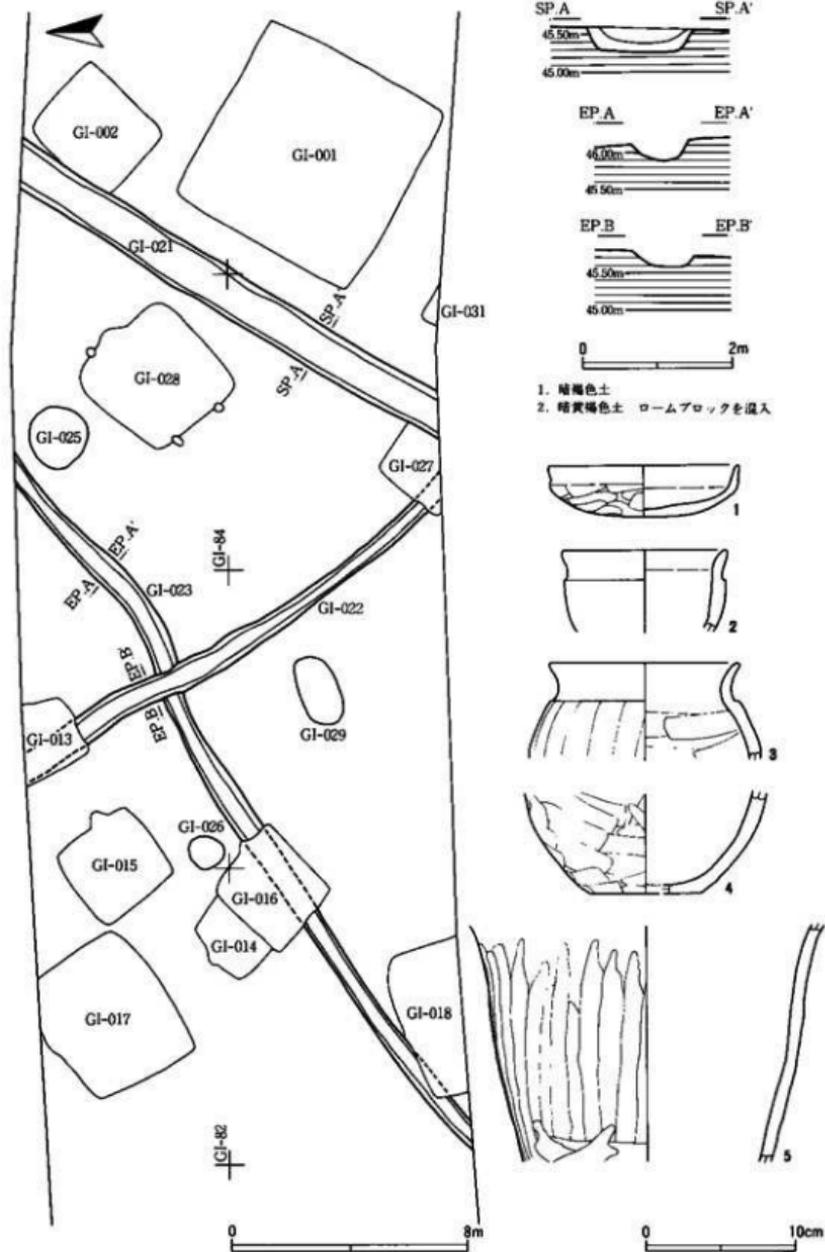
GI-021 (第126図・図版41)

位置：GI-74、75、84、85に位置し、CI-002とGI-027を切る。

遺構：N-32-Eに方位をとる直線的な溝状遺構である。幅1.5m、深さ30cmである。底は平坦で堅くしまり、側壁は直線的傾斜で立ち上がる。覆土は2層に分層できるが、自然没と思われる。遺物は混入品が数点出土した。

遺物：杯1点、甕3点、甕1点が出土している。

1は体部に明瞭な稜線をもち、口縁部が直立する杯である。2は小形甕で、口縁部は強いヨコナデを施して下部に稜線を有する。胴部に張りはない。3・4は甕の胴部上半と下半部である。5は甕胴部破片で、ほぼ直線的に外傾しながら開く。胴部は縦方向に、底部付近は横方向にヘラケズリされる。



第126図 GI-021～023平面・出土遺物実測図 (1/160・1/4)

表46 GI-021出土土器観察表

検出 番号	器 種	法量 (cm) 口・首・高	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
1	杯	12.8 - 3.4	3/4	口縁部内外面ヨコナデ 体部内面ヒガキ 体部外面ヘラケズリ		砂粒多	暗褐色	良好	
2	甕	11.0 - (5.5)	3/4	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ナデ		小砂粒少	明褐色	良好	
3	甕	12.8 - (6.4)	3/4	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ヘラナデ 胴部外面ヘラケズリ		砂粒多	赤褐色	良好	口縁外面に傷付着
4	甕	- 7.4 (6.8)	3/4	胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		砂粒多	赤褐色	良好	
5	甕	- - (15.0)	3/4	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ 胴部外面ヘラケズリ		長石粒多	明褐色	良好	

GI-022 (第126図)

位置：GI-73、83、84に位置し、GI-013、GI-027、GI-023切る。

遺構：N-38°-Wに方位をとり、ほぼ直線的な溝状遺構である。幅は北西側で1 m、南東側で60cmで深さは20~30cm、底面は凹凸が激しく側壁は緩い立ち上がりを示す。遺物はなく時期は不明である。

GI-023 (第126図)

位置：GI-73、74、82~84に位置し、GI-016、GI-018を切り、GI-022に切られる。

遺構：ほぼN-55°-Eに方位をとり、GI-022との切り合う付近でやや南側に彎曲している。幅は70~90cmで一定せず、側壁の立ち上がりは緩く底面の凹凸も目立つ。時期は不明である。

GI-024 (第127図)

位置：GI-70、71、80、FI-89に位置し、FI-007に切られる。

遺構：N-42°-Eに方位をとる直線的な溝状遺構である。幅は80~40cmと一定せずFI-007と切り合う部分では1.6mに広がる。深さはほとんどなく10~20cmと浅い。遺物はなく時期は不明である。

FI-007 (第127図)

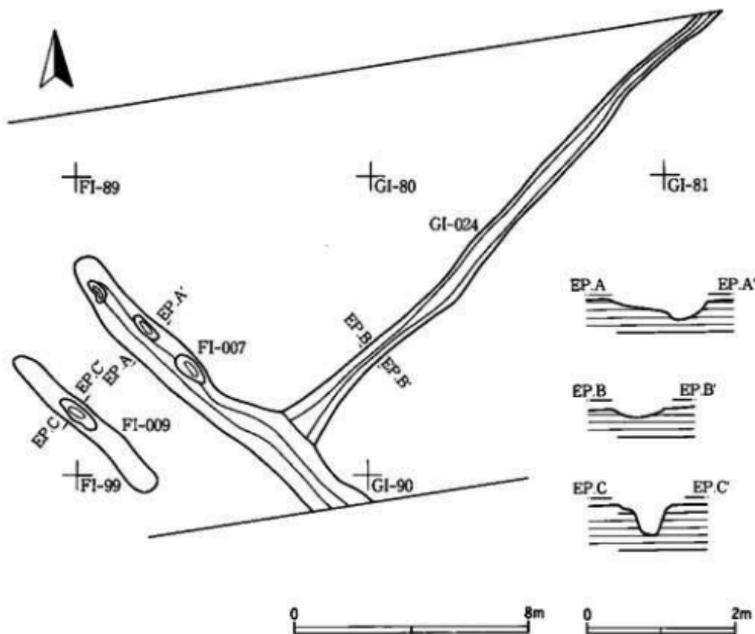
位置：FI-89、99に位置し、GI-024を切る。

遺構：GI-024と直行し、幅1.5m前後を切る。深さは10~20cmと浅く断面は皿状を示す。溝の切れる北西部には楕円形のピットが3ヶ所あるが、当遺構よりも新しい掘り込みである。遺物はなく時期は不明である。

FI-009 (第127図)

位置：FI-88、89、99に位置する。

遺構：N-007に平行する長さ6.5m、幅0.8mの溝状遺構である。きわめて浅い溝で深さは数cmしかない。中央に前者同様楕円形のピットがある。時期は不明である。



第127図 GI-024・FI-007・009 平面図 (1/160)

FI-008 (第128図・図版43)

位置：FI-78、88、97に位置し、FI-002、004を切る。

遺構：調査区を北東方向に横断する溝状遺構で、連続的に土壌状の掘り込みが集合したものである。それぞれの掘り込みは楕円形を呈し、深さはまちまちで2 m前後の間隔がある。植木などの施設によく似ている。覆土の状態から、かなり新しいものと考えて良いであろう。

遺物：高杯が2点出土している。FI-002の遺物の混入の可能性がある。

1は高杯杯部で、体部下端によわい稜線を作しおおきく外傾する口縁部にいたる。2は筒状部分から「く」の字状に屈折して外反する裾部にいたる高杯脚部である。

表47 FI-008出土土器観察表

押出番号	器種	法量 (cm) □・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転方向	胎土	色調	焼成	備考
1	高杯	20.8 — (6.8)	3%	全面ミガキ		砂較少	黄褐色	良好	全面赤彩
2	高杯	— 11.4 (8.8)	4%	器内面ナゲ 器外面ミガキ 器内面ミガキ		小砂較少	黄褐色	良好	全面赤彩

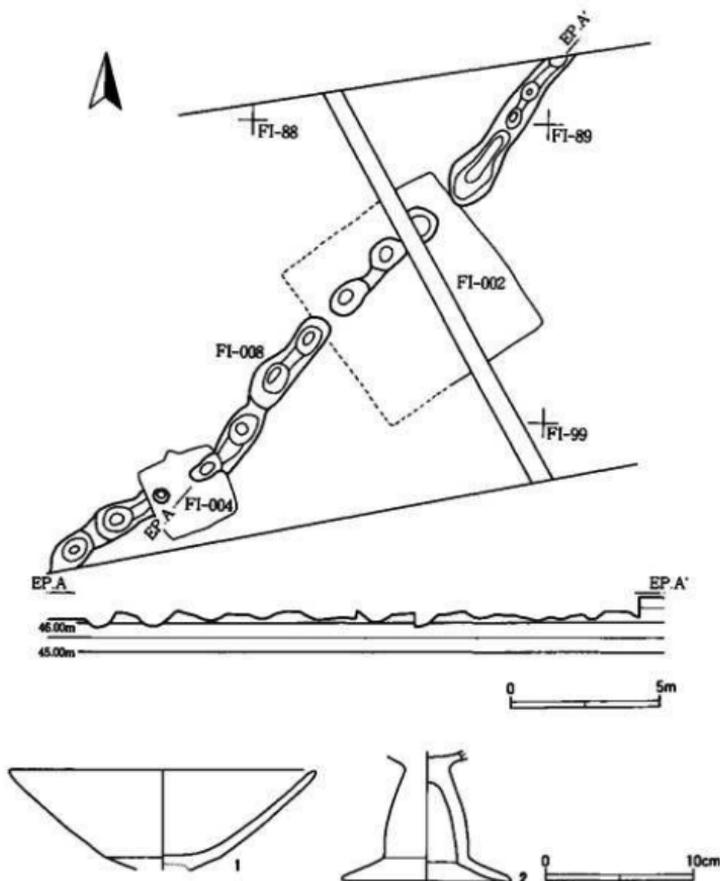
EII-002 (第129図)

位置：EII-19、29、FII-00、10等に位置する。

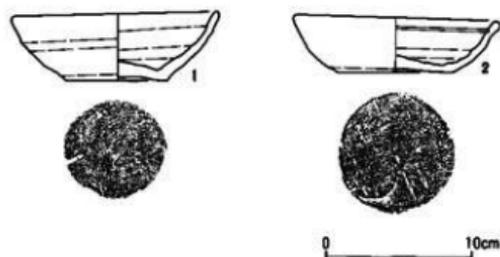
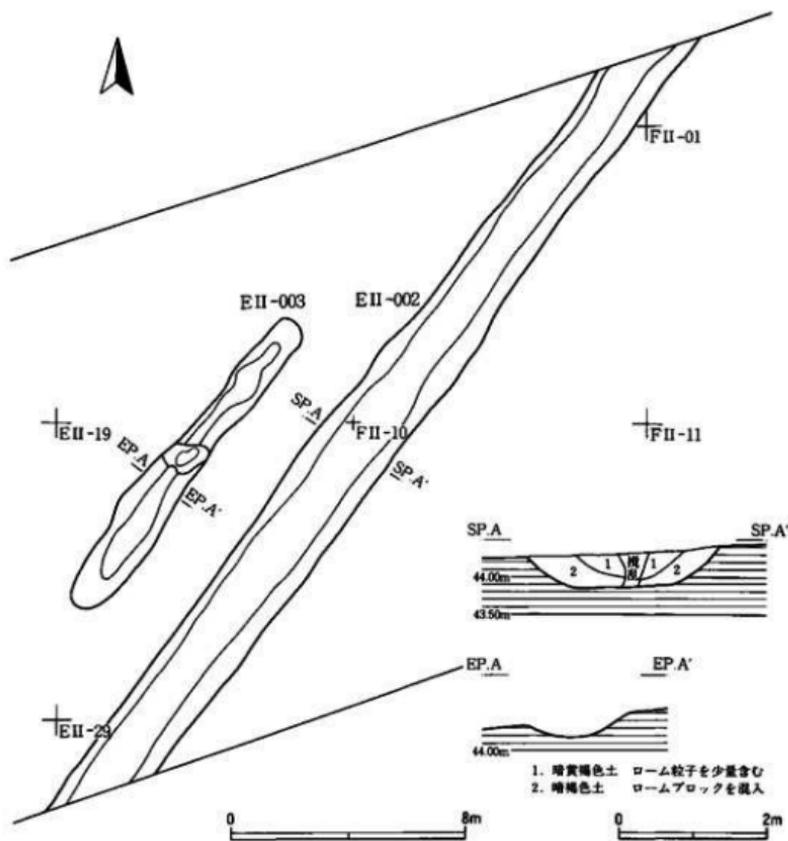
遺構：N-36°-Eに方位をとり、調査区を斜めに横断する直線的な溝状遺構である。幅は広く2~2.5mあり、50cmほどの深さがある。底面は平坦で堅くしまっており、側壁の立ち上がりは緩い。覆土はあまりしまらず、ロームの混入が目立った。遺物は混入品の可能性が高い。

遺物：杯が2点出土している。

ともに底部は回転糸切りのままで、若干中央が凹み上げ底風になる。体部は内弯気味に立ち上がっている。2の口縁部内面には1状の沈線がめぐっている。



第128図 FI-008 平面・出土土器実測図 (1/160・1/4)



第129図 EII-002-003 平面・出土土器実測図 (1/160・1/4)

表48 E II-002出土土器観察表

碑頭 番号	器 種	流量 (cm) 口・底・高	遺存度	成形・整形手法	回転 方向	胎 土	色 調	焼成	備 考
1	杯	14.0 6.9 4.6	5/6	口縁～体部内外面ヨコナデ 底面回転未切り	R	砂粒多	黄褐色	良好	かなりゆがむ
2	杯	13.8 8.0 3.9	5/6	口縁～体部内外面ヨコナデ 底面回転未切り	R	砂粒多	赤褐色	良好	口縁部内面に沈澱 底部に棒状の圧痕が 数条残る

EII-003 (第129図)

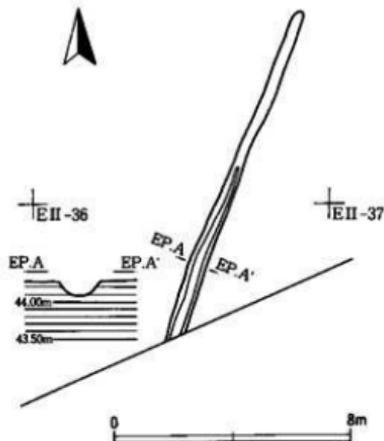
位置：EII-09、19に位置する。

遺構：EII-002に平行し、全長12.2m、幅は広い部分で1.8m、狭い部分で1.1mを計る。断面は浅いU字型を示し、底面の凹凸が目立つ。溝中央部に径1mほどの落ち込みが認められた。EII-002と同時期であろう。

EII-004 (第130図)

位置：EII-26、36に位置する。

遺構：N-20°-Eに方位をとる直線的な溝状遺構である。確認できる部分で12mあり、深さは20cmほどで、北に向かうにつれて浅くなる。遺物はなく時期は不明である。



第130図 EII-004 平面図 (1/160)

EII-005 (第131図)

位置：EII-33、34、44に位置し、EII-006と切り合うようである。

遺構：ほぼ南西に延びる溝状遺構で、2本の溝が平行してしているが、西側は擾乱を受けている。2本のうち北側のそれは、幅1m、深さ30cmで底面はさほど凹凸がないが、南側はかなり凹凸が激しく、深いところで60cmほどある。2本の溝の間は周囲より10cmほど低くなっていることから、両側の平行する溝と合わせ1つの遺構として扱うこととした。また、覆土も第1層を共有する点から妥当と考えられる。全体では2.7mの幅となる。

EII-006 (第131図)

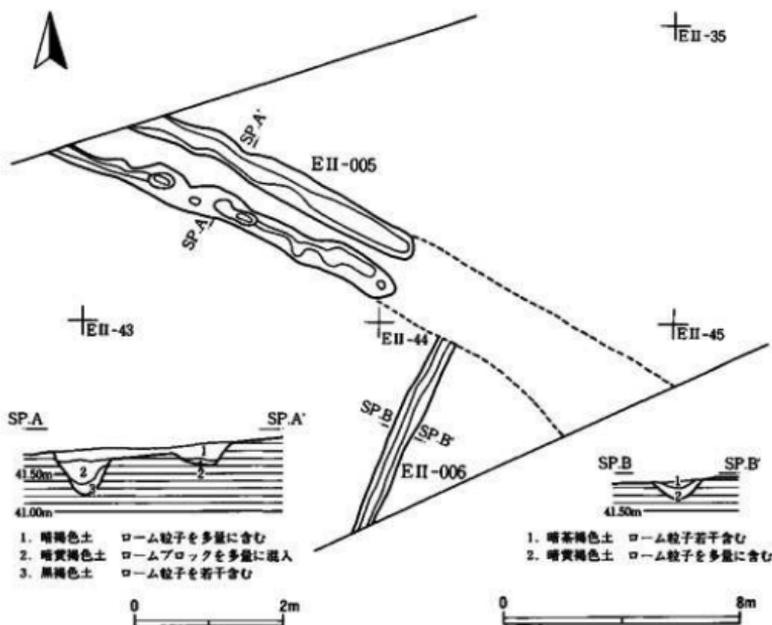
位置：EII-44に位置し、EII-005と切り合うようである。

遺構：EII-005に直行し、幅80cm前後を計る。深さは約30cmで一定している。遺物はなく時期については不明である。

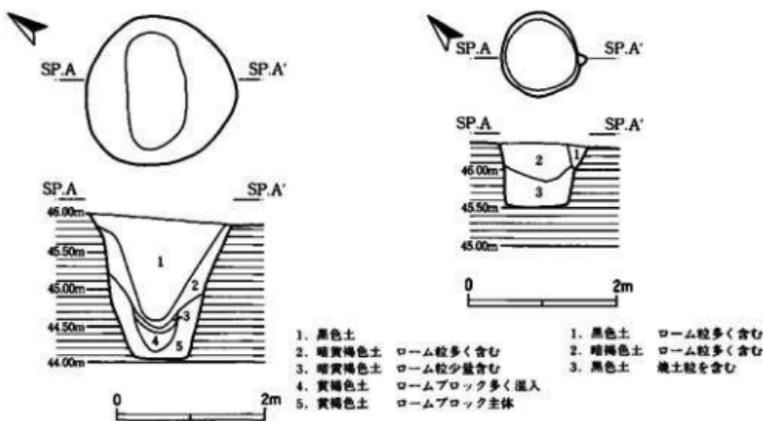
GI-025 (第132図)

位置：GI-74に位置する。

遺構：N-60°-Eに主軸方向をとる陥穴である。長軸、短軸とも2m、深さ2mのほぼ円形



第131図 EII-005・006 平面図 (1/160)



第132図 GI-025・026 平面図 (1/40)

を呈す。底面は隅丸長方形で堅くしまり平坦である。壁面は急傾斜で立ち上がり、やや内湾する部分もある。覆土下部にはロームブロックを多く混入する層があるが、上部は自然埋没である。遺物は出土しなかったが、縄文時代の所産である可能性が高い。

GI-026 (第132図)

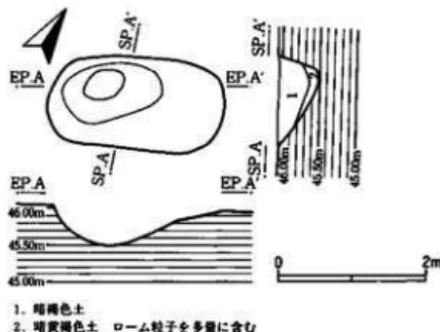
位置：GI-73に位置する。

遺構：径1.1mの円形プランを呈し、深さ90cmを計る土墳である。底面も円形を示し、平坦で堅くしまる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる覆土下部には焼土粒を含む黒色土層が厚く堆積している。

GI-029 (第133図)

位置：GI-83に位置する。

遺構：主軸方向をほぼ東西にとり、主軸2.40m、横軸1.25mの楕円形を呈す土墳である。底面は北西寄りであり、北から西側にかけての壁面の傾斜に比べ南から東側にかけてのそれはかなり緩い傾斜となる。また、底面の形状は椀状となり、あまりしっかりしていない。深さは50cmほどである。時期は不明である。

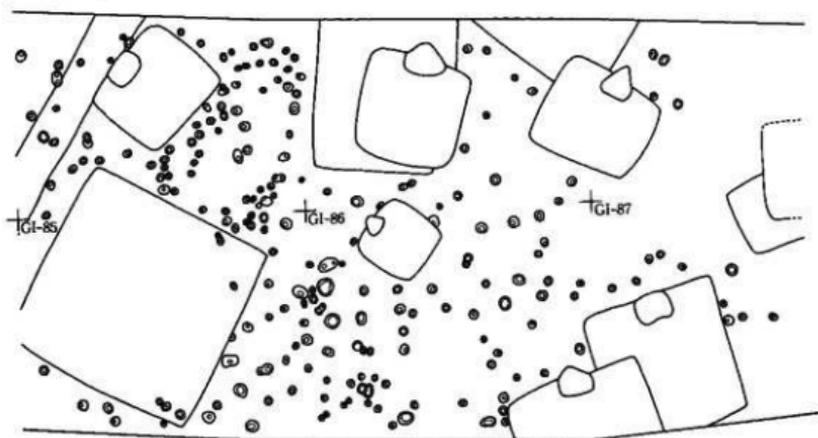
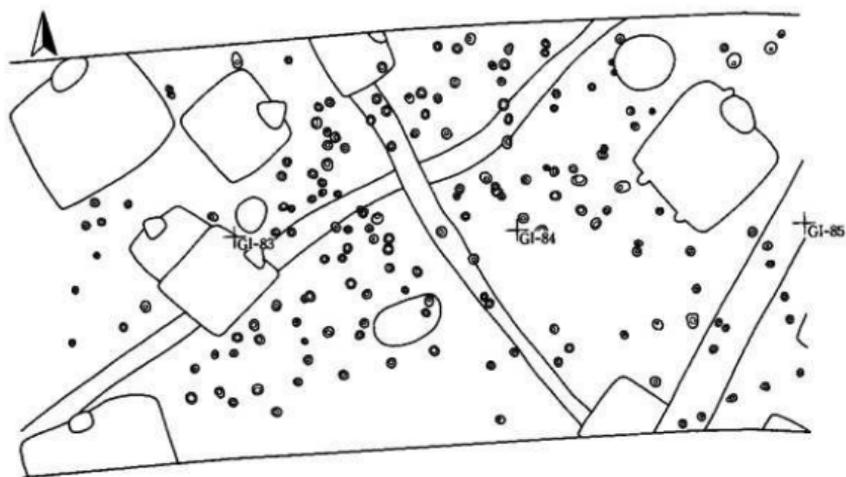


第133図 GI-029 平面図 (1/40)

ピット群 (第134図)

Gグリッドを中心とする台地平坦部には、径が50cm前後のピット群が存在する。深さは30～50cmのものが多く、中には砂質粘土が混入するものもある。遺物の検出されるものはほとんどなく、若干土師器を混入するものが見られることから、中には掘立柱建物跡になるものがあるかもしれない。調査者も所見のなかにその可能性を触れている。しかし、明確に柱列の並びを見せるものはなく、また柵列の可能性も薄いことから、ピット群として扱うこととした。

なお、GI-002、011付近では円形に小ピットが並び、縄文時代の住居の柱穴を思わせるが、その地点において該期の遺物は検出されていない。



第134図 ビット群平面図 (1/160)

第2節 まとめ

清和乙遺跡は、ゆったりとした台地上に展開する遺跡で、旧石器時代から歴史時代にかけての複合遺跡である。その中を通る路線内の調査であるため、集落全体を把握することは困難であるので、限られた範囲内での住居の展開について触れてみたい。

清和乙遺跡は、約30軒の住居が検出できたが、最初に出現するのが5世紀前半である。そこで年代ごとに出土土器による区分をすると以下のとおりとなる。ただし、遺物量が少なく時期決定に消極的にならざるをえない住居については省いている。

5世紀前半

小型丸底土器の底部が小さく上げ底になるものや高杯の杯部下半に張り出しのつくものなどがみられる FI-002が本遺跡で最初になる。

5世紀中ごろ

高杯・手捏ね土器を多量に含み、石製模造品を伴出した包含層の遺物があてられる。須恵器礎はI型式2段階 TK216併行と考えられ、土師器より若干下るかもしれない。芝山町東台遺跡1・3号住居と同じ時期と考えられる。

5世紀後半

赤彩された大振の杯で、底部が平底を呈すものが多く、大形な壺、手捏ね土器、須恵器礎等を伴う GI-011が代表的である。FII-001・EII-001も該期である。さらに、住居形態や主軸方向から GI-019もこの時期に入るものと思われる。

7世紀中～後半

鈍い返りのある小形な杯と大形甕が出土した GI-018および丸底で赤彩の施される杯を出土する GI-004が該当するが、前者のほうが若干遅るものと考えられる。

7世紀末～8世紀初頭

盤状杯に近い形態の杯を伴う住居を該期にあてた。FI-001は赤彩されたやや外反する口縁をもつものと内湾する浅身のものがある。また、図上復元できるものが1点しかないが FI-005も若干下るかもしれないが同時期と考えられる。

8世紀第2四半期

盤状杯を主体とするセットをもつ GI-017・GI-002である。赤彩される杯も多い。

8世紀後半

杯のタイプが体部下端から底部周縁を手持ちへラケズリし、糸切り痕をとどめるものと、や箱型に近い形態をとるものとがみられる。壺は口縁部を摘み出したものが多い。GI-007・GI-016・GI-028が相当するが、GI-007のほうが古い様相を示している。

8世紀末～9世紀第1四半期

体部が底部より若干内弯気味に立ち上がり、直線的に外傾する口縁部の付く杯が主体で、墨書が目立って多くなる時期である。GI-014・GI-020・GI-008などがこの時期に当てはまる。墨書にもGI-020のようにそれぞれの文字に意味のあるものと、GI-008のようにあまり意味の読みとれない記号的なものとの2種類が窺える。

9世紀前半

遺物量が少なく確実な時期は押さえられないが、数少ない土器から判断して、上記の時期とは大差ないが8世紀代には入らないものと思われるものである。GI-003A・GI-013・GI-015などが該期になろう。

このように、5世紀代で集落が継続的に営まれ、6世紀から7世紀前半が空白となり、再び7世紀中ごろより9世紀前半まで継続的に集落が形成されている。空白となる6世紀から7世紀前半の集落は単独で大集落を形成することが多いが継続的な集落が希薄である傾向にある。本調査が路線の調査ではあるが、その傾向をそのままとらえているといえる。また、各時期の住居の主軸方向が時期ごとにほぼ一致していることも1つの傾向としてとらえることができよう。集落全体を発掘することにより、より明確にできるであろうが、路線の調査では推測の域をでないのが残念である。

付 章

伊地山金杉遺跡1号墳出土の
人骨について

伊地山金杉遺跡 1号墳出土人骨

国立科学博物館 馬場 悠 男

本遺跡は千葉県佐原市伊地山字金杉229-2にあり、1989年に千葉県文化財センターによって発掘調査された。1号墳の築造年代は6世紀代と推定される。

人骨の埋葬された石棺内部は盗掘を受けており、歯の一部を残してほとんどの人骨は石棺外部の掘り方上面に散乱した状態で検出されている。

人骨の保存は断片的である。その中では、歯が比較的良く残っており、植立および遊離している歯が21本ある。そこでこれらの歯を形態及び咬耗状態の類似から、3群に分類し、基本的個体(A、B、C)とみなした。その他の破片はこれらの3個体のどれかに属すると仮定して分類してみたが、矛盾はなかった。

個体A (図版1~8)

下表の○印の歯が残っている。歯は小さく、歯根の高さ(長さ)も低い。咬耗は著しく、前歯では歯冠の半分が摩滅している。したがってこの個体の年齢は壮年の中~後期であると考えられる。歯の植立している下顎骨(下表の二重線の部分が残っている)は極めて厚く、頑丈であるが、その割にはオトガイ部の高さが低い。したがって、この個体の顔は低く、四角かったと推定される。顎二腹筋窩は広く明瞭であるので、頸部の筋が強かったと言える。

この個体の性別は、相反する要素があり、容易には決定できない。歯の小さいこと、オトガイの低いことは女性的である。一方、下顎骨の頑丈なこと、顎二腹筋窩の大きいことは男性的である。総合して判断すると、男性の可能性が高い。なお、下顎右第1小臼歯の遠心面歯頸部に虫歯がある。

8 7 ⑥ 5 4 3 2 1		1 2 3 4 5 ⑥ ⑦ 8
<hr/>		
8 7 6 ⑤ ④ ③ ② 1		① 2 ③ 4 5 6 7 8

その他に、あまり大きくない男性と思われる上位頸椎(6)と左寛骨臼(8)の破片がある。両者とも関節面には経年性の骨増殖がかなり見られるので、同一個体のものと考えられる。さらに、尺骨骨体の一部(7)と推定される小片があり、あまり太くないが、骨壁は厚いので、この個体に属する可能性が高い。

個体B (図版9~17)

下表の○印の歯が残っている(9~16)。歯は咬耗がわずかであり象牙質の露出は、切歯・犬歯・第1大臼歯にポイント状あるいはスリット状に認められるだけである。第3大臼歯は崩出しているが、磨耗は認められない。したがって、この個体の年齢は20歳前後と推定される。歯の大

きさは、大臼歯は小さめだが、犬歯と小臼歯は大きい。性別は男性であろう。

8 7 6 ⑤ 4 3 ② 1	1 2 ③ 4 5 6 7 8
⑧ ⑦ ⑥ ⑤ 4 3 ② 1	1 2 ③ 4 5 6 7 8

他に、歯の（死後に）紛失した上顎左歯槽部の破片（12）があるが、左第2小臼歯の歯槽の形は遊離している右第2小臼歯の歯根の形にており、この個体に属すると判断される。なお、上顎左第3大臼歯は欠如している。

また、右鎖骨外側半（17）があるが、経年性の骨増殖は認められず、若い男性のものと考えられるので、この個体に属すると考えられる。

個体C（図版18～20）

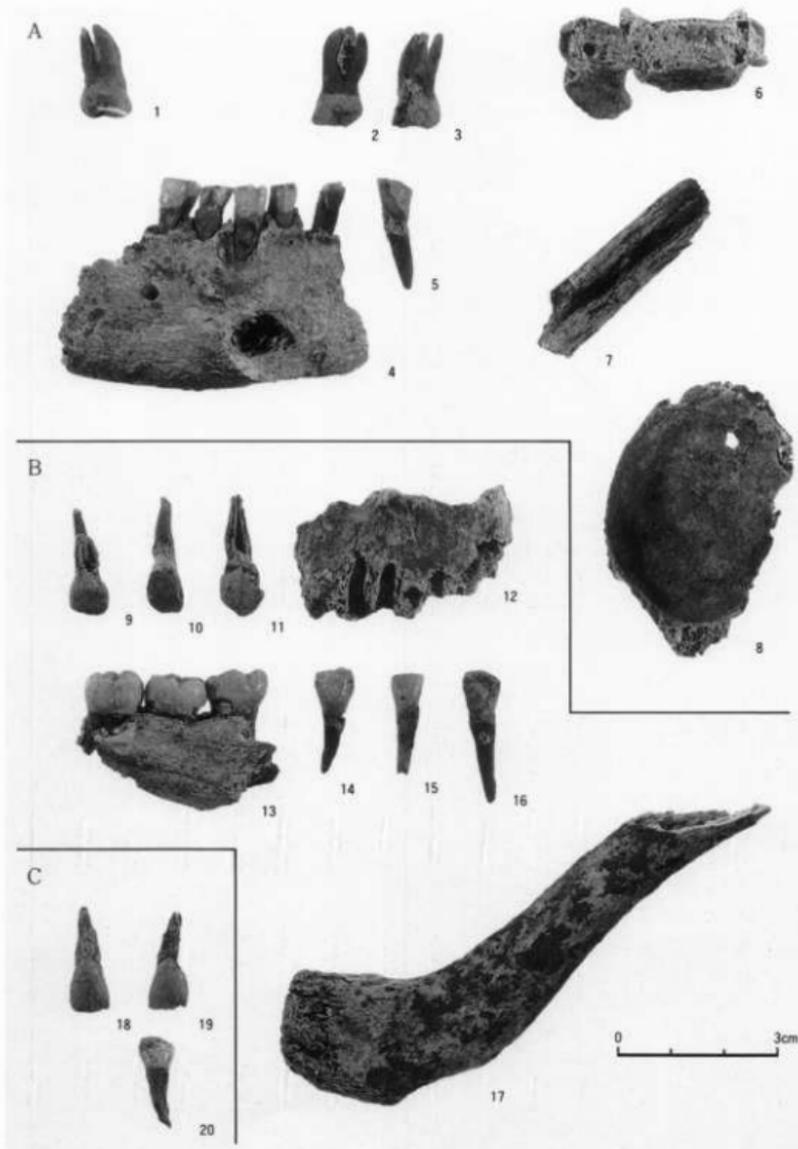
上顎左右中切歯および下顎左第1小臼歯の遊離歯3点のみである（18～20）。歯の大きさは個体Aの歯の大きさと同様に小さい。咬耗は個体Aよりはるかに軽いが、個体Bより進んでいる。この個体は壮年前期の女性の可能性が高い。

一般的特徴

個体Cの上顎切歯は強いショベル形が見られる。唇側面にもわずかにショベル形が見られるのは、典型的モンゴロイドの特徴といえる。個体Aの下顎骨が厚く、丸味を帯びているのは古墳時代人に多い特徴である。咬合は、個体Aが鉗子状であり、個体BとCは缺状である。これも古墳時代人として妥当である。

まとめ

伊地山金杉遺跡1号墳から出土した人骨は、壮年中～後期の男性、若い男性、壮年前期の女性の3個体であると推定される。古墳時代人として矛盾のない特徴を備えている。



伊地山金杉遺跡1号墳出土人骨

個体A：1. 上顎右第1大白歯, 2. 上顎左第1大白歯, 3. 上顎左第2大白歯, 4. 下顎骨の破片、下顎右第2・第1小白歯・大歯・側切歯および下顎左中切歯・大歯(5)が植立している, 6. 上位頸椎, 7. 尺骨骨体の破片, 8. 下寛骨臼の破片

個体B：9. 上顎右第2小白歯, 10. 上顎右側切歯, 11. 上顎左大歯, 12. 上顎骨左歯槽部の破片, 13. 下顎骨右歯槽部の破片、下顎右第1・第2・第3大白歯が植立している, 14. 下顎右第2小白歯, 15. 下顎左側切歯, 16. 下顎左大歯, 17. 右頰骨外側半

個体C：18. 上顎右中切歯, 19. 上顎左中切歯, 20. 下顎左第1小白歯

写 真 图 版



福田藤之沢遺跡近景



旧石器出土状況



001 全景



001 カマド内遺物出土状況



004 全景



003 全景

図版 4



伊地山藤之台遺跡近景



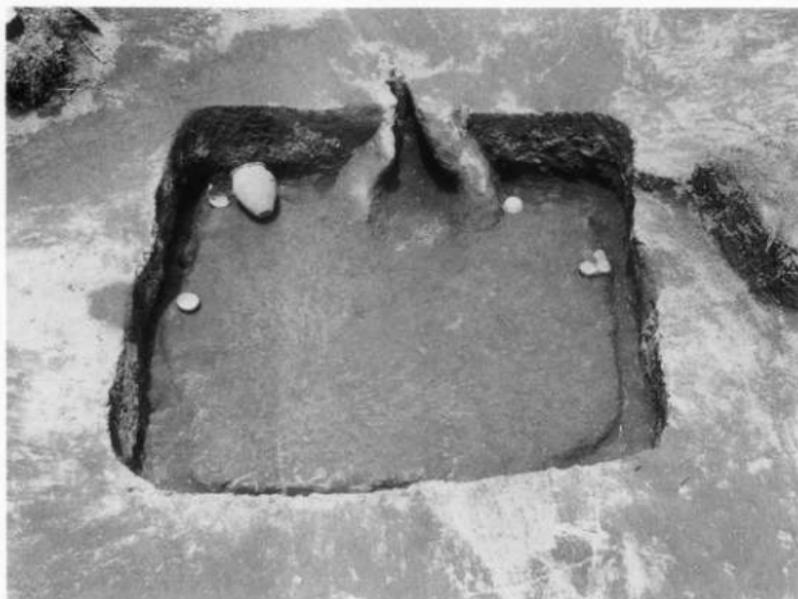
塚1～3近景



塚4 近景



塚1～3周溝掘り上がり



005 全景



009 遺物出土狀況



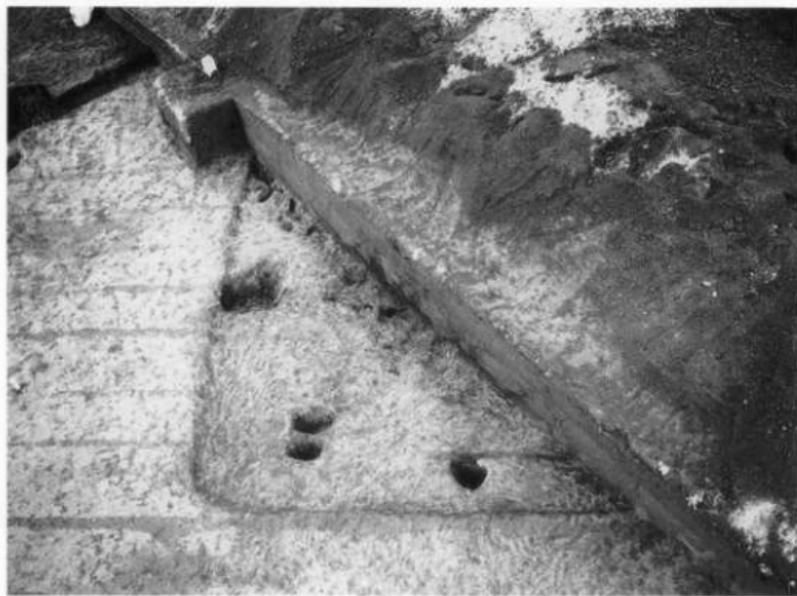
伊地山金杉遺跡近景



先土器出土状況



014 全景



011 全景



008 全景



1号墳近景



石棺検出状況



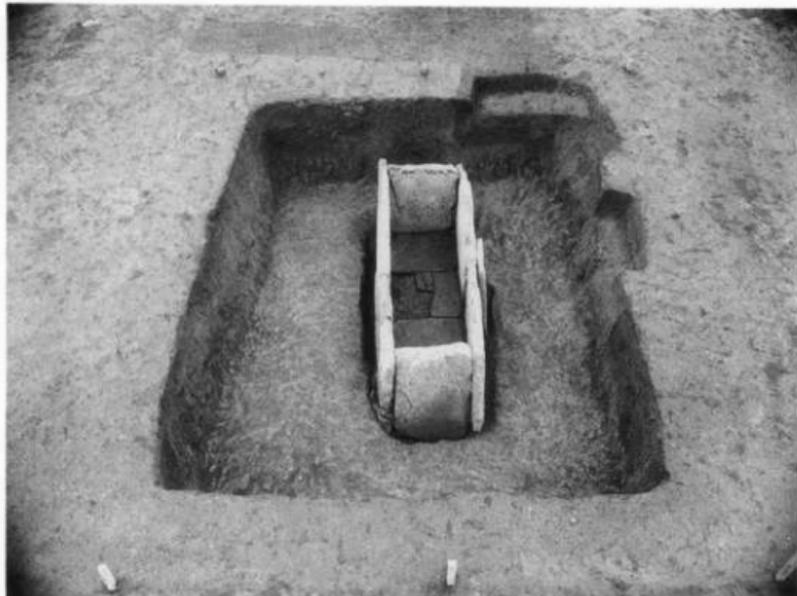
石棺内蓋石崩落状況・石棺掘り上がり



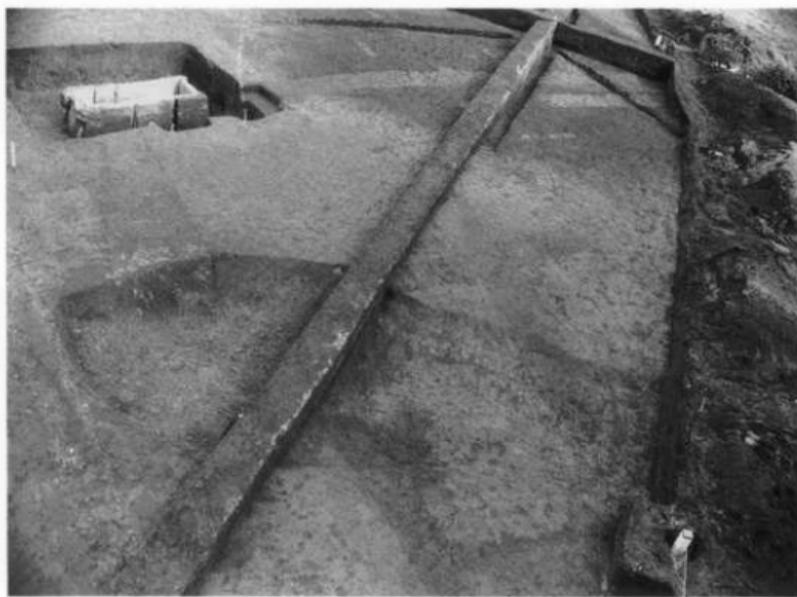
人骨出土状況（石棺外）



人骨出土状況（石棺内）



主体部掘り方



周溝全景



伊地山石塔前遺跡近景



旧石器出土状況（第1ブロック）



田石器出土状況 (第2ブロック)



田石器出土状況 (第3ブロック)



003 全景



004 全景



001 全景



002 全景



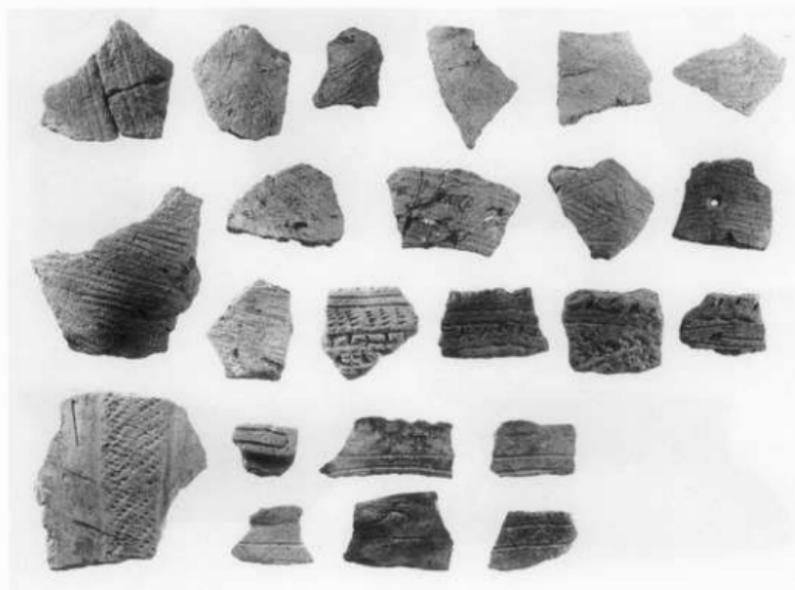
福田森之沢遺跡旧石器



縄文土器



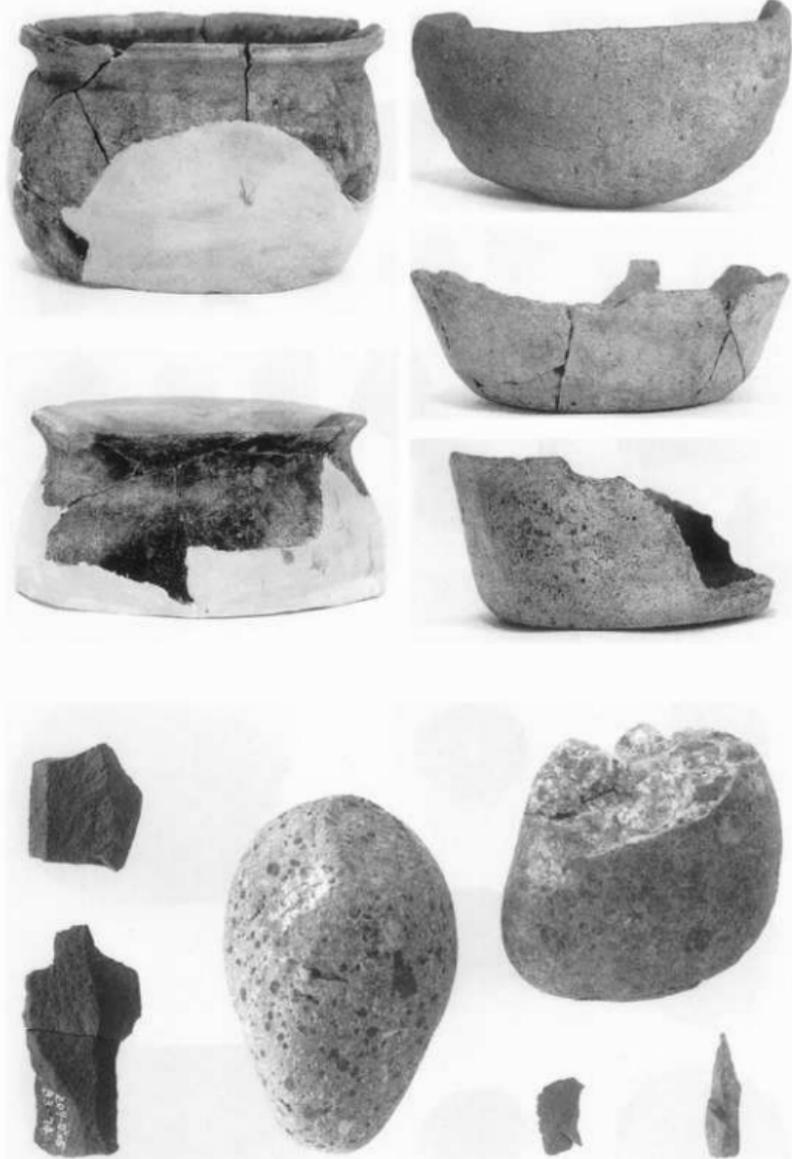
土師器



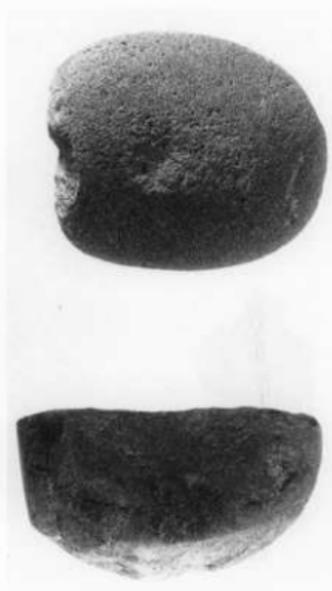
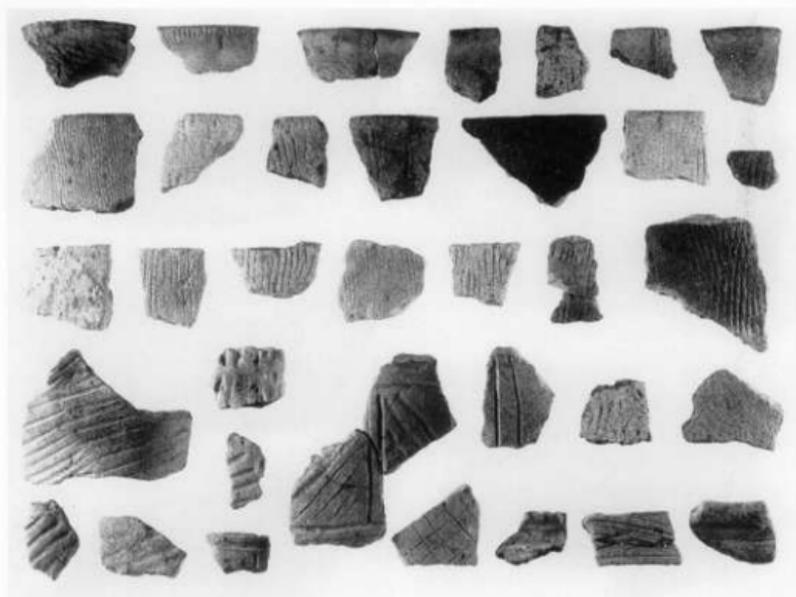
伊地山藤之台遺跡 繩文土器







グリッド出土遺物



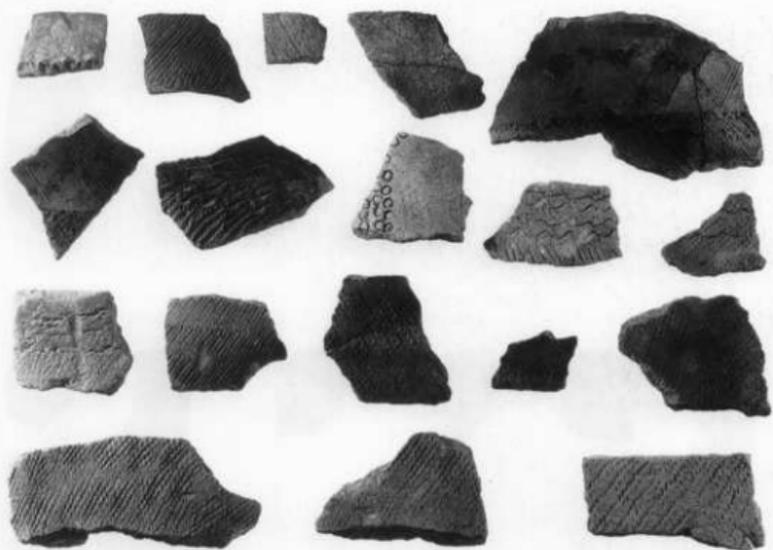
伊地山金杉遺跡 縄文土器・土製品・石器



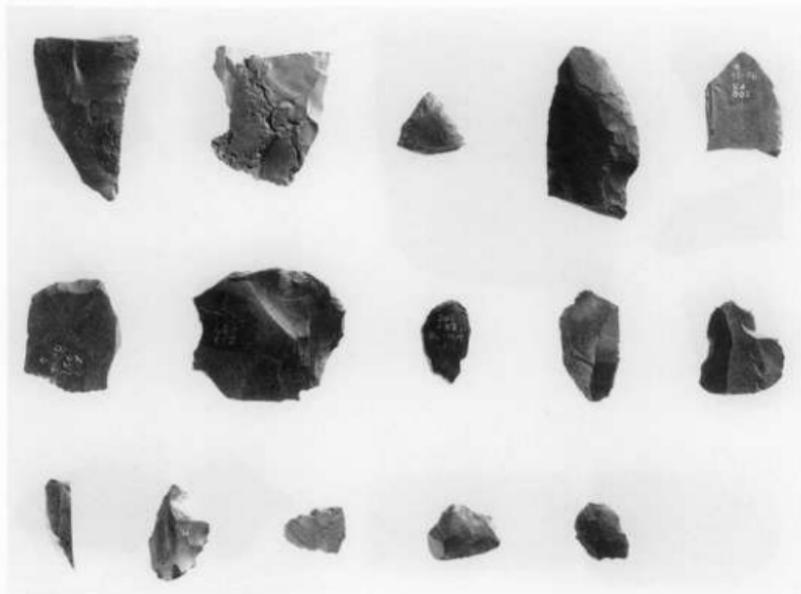
011 出土遺物



012 出土遺物



グリッド出土遺物



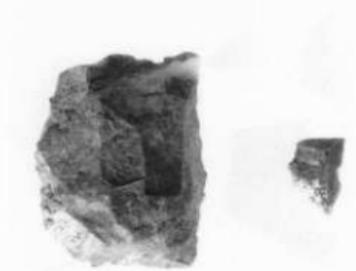
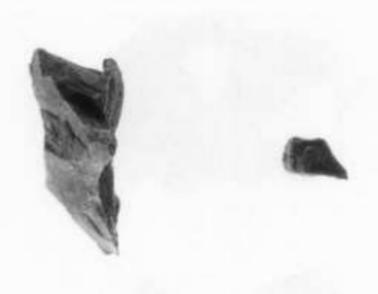
伊地山石塔前遺跡 第1ブロック



伊地山石塔前遺跡 第2(左上)・第3(右上,下)ブロック



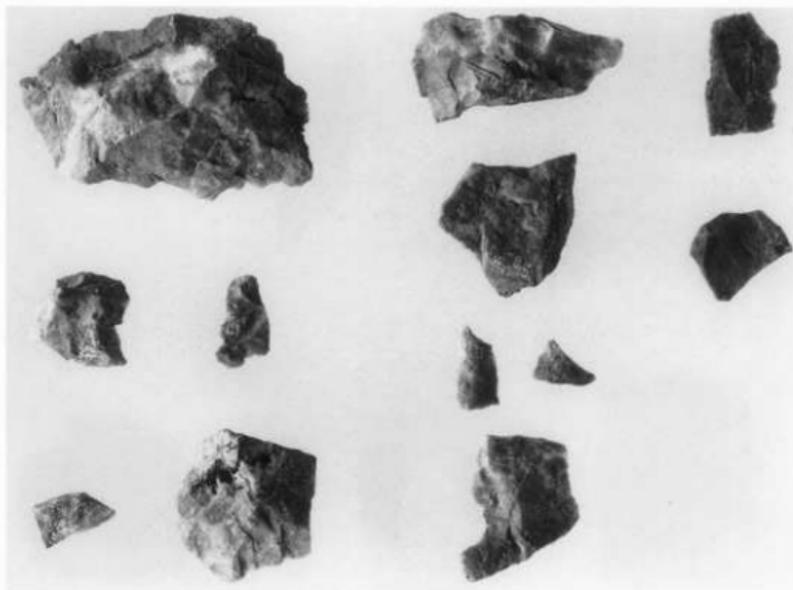
伊地山石塔前遺跡 第4ブロック



伊地山石塔前遺跡 第4ブロック



伊地山石塔前遺跡 第4ブロック



伊地山石塔前遺跡 第4ブロック



伊地山石塔前遺跡 第4ブロック(上)・グリッド(下)



助沢遺跡遠景



M-003 全景



油田牧跡近景



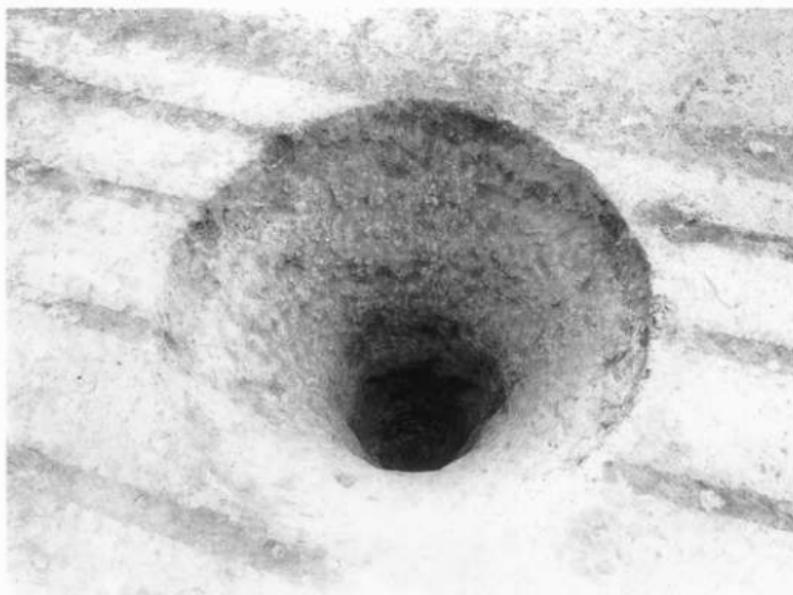
はらV遺跡近景



M-001,002 全景



かにはらI遺跡近景



P-2 全景



かにはらⅡ遺跡 焼土遺構全景



清和乙遺跡航空写真



田石器出土状況 (第1ブロック)



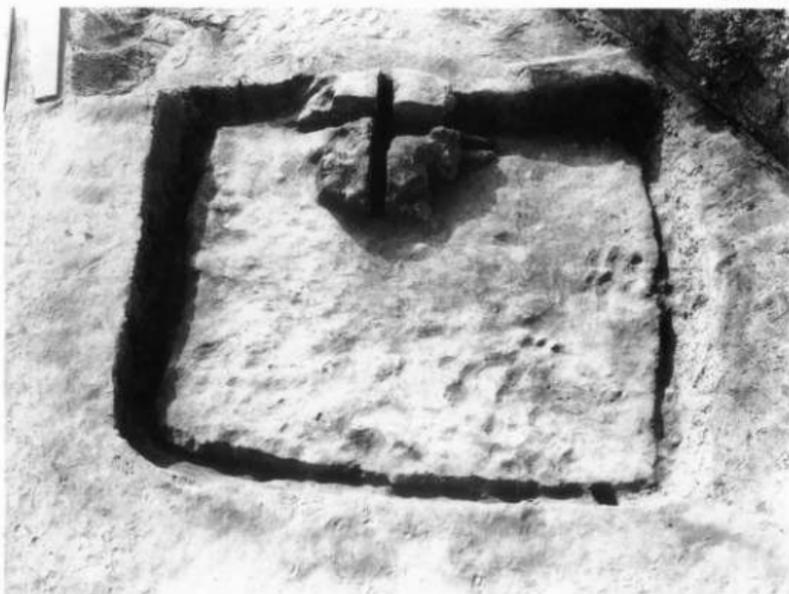
田石器出土状況 (第3ブロック)



EII-001 全景



FII-008・004 全景



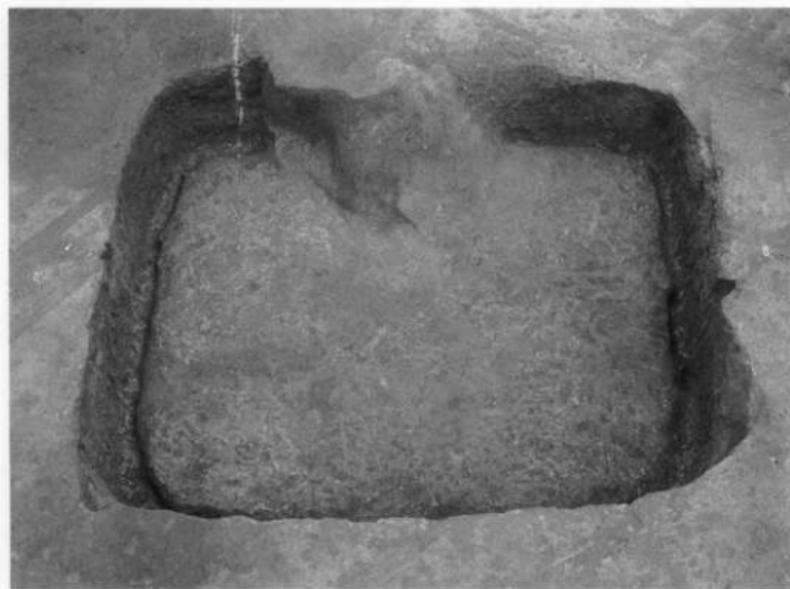
GI-002 全景



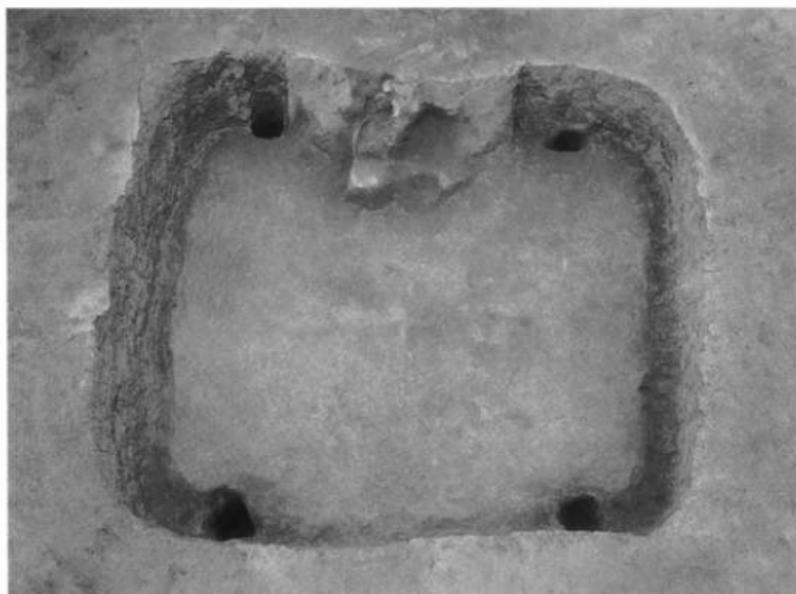
GI-004 全景



GI-005 全景



GI-007 全景



GI-008 全景



GI-008 カマド内遺物出土状況(1)・(2)



GI-011 全景



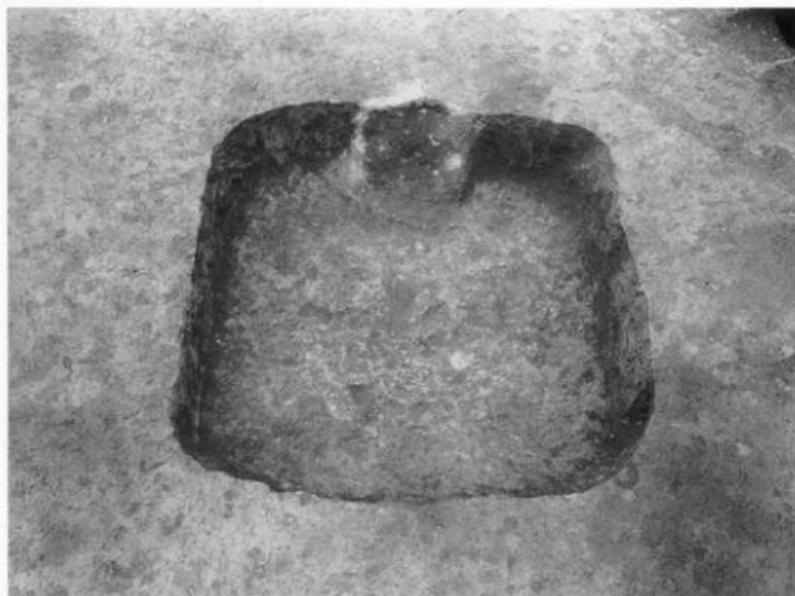
GI-013 全景



GI-015 全景



GI-018 全景



GI-020 全景



GI-028 全景



GI-021 全景



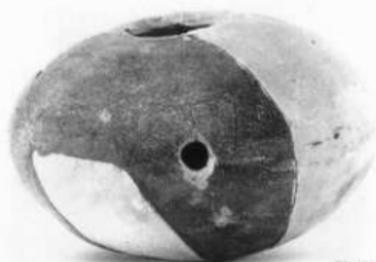
包含層遺物出土状況



EI-001 · FI-002 · GI-011 出土遺物



GI-011



GI-011



GI-011



GI-011



GI-011



GI-011



FI-008



包含層



FI-008



包含層

GI-011・FI-008 包含層出土遺物



包含層出土遺物



GI-004



GI-018



GI-004



GI-018



GI-004



FI-001



GI-004



FI-001

GI-004・GI-018・FI-001 出土遺物



GI-002・GI-017・GI-028・GI-007 出土遺物



GI-016



GI-016



GI-016



GI-016



GI-008

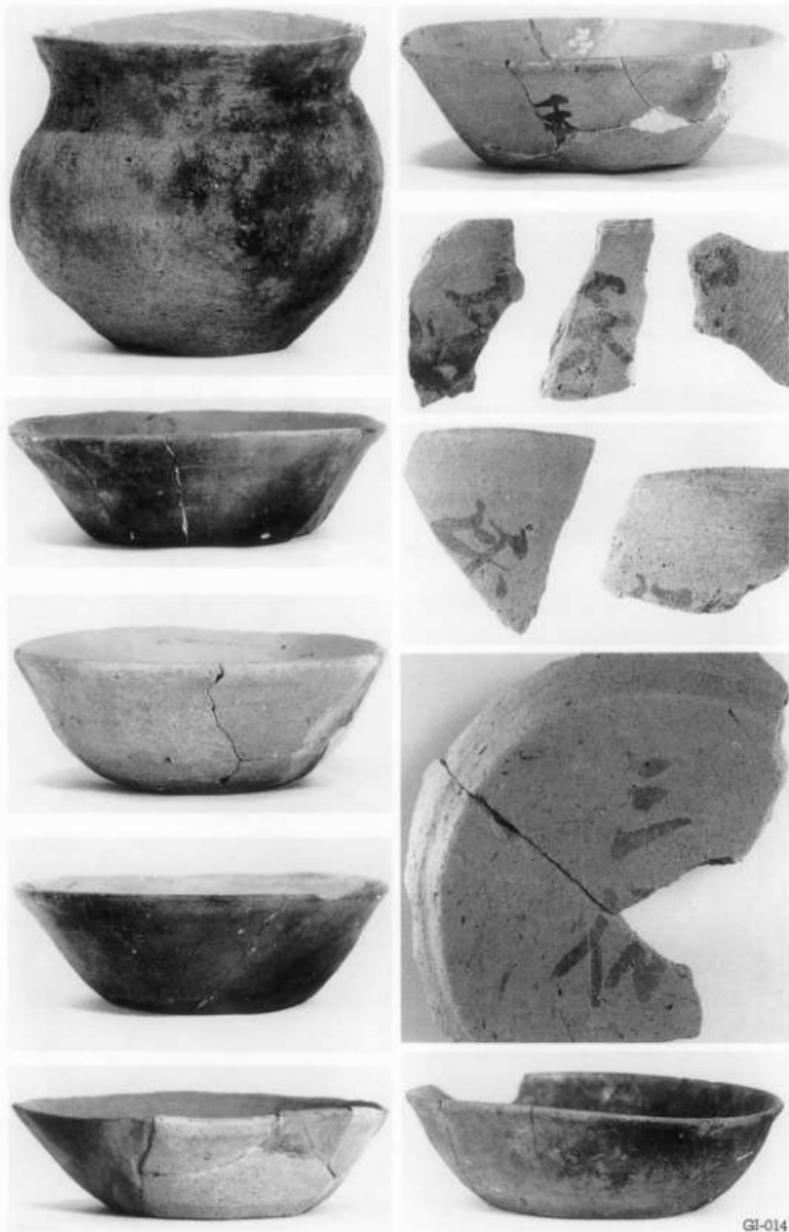


GI-008



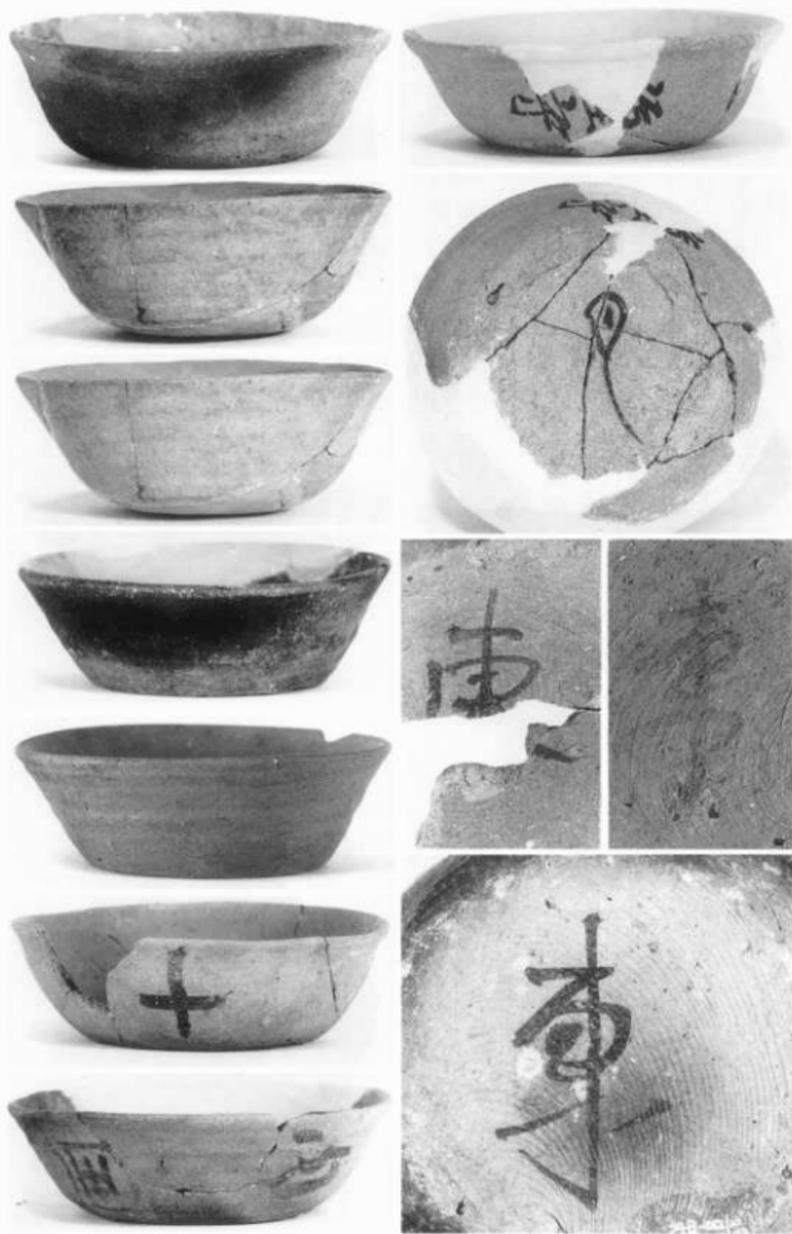
GI-008

GI-016・GI-008 出土遺物



GI-008・GI-014 (右下) 出土遺物

GI-014



G1-020 出土遺物



GI-013



GI-015



GI-013



GI-003A



GI-015

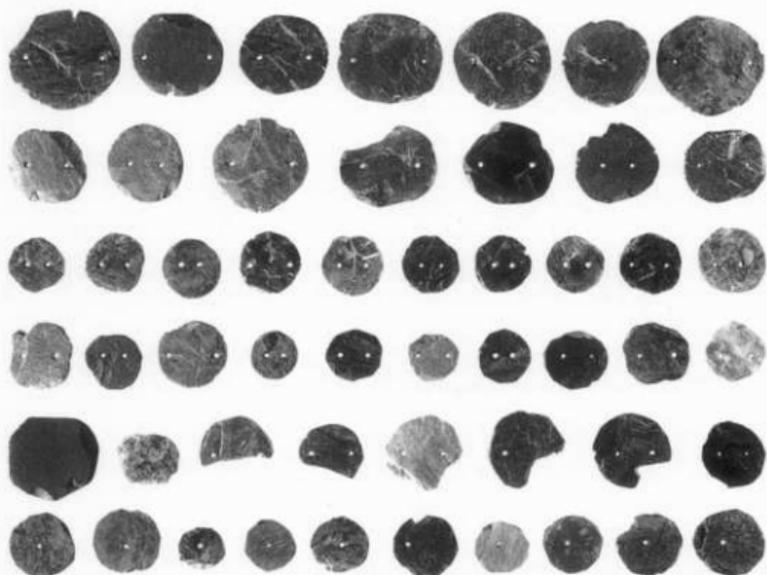


GI-003B

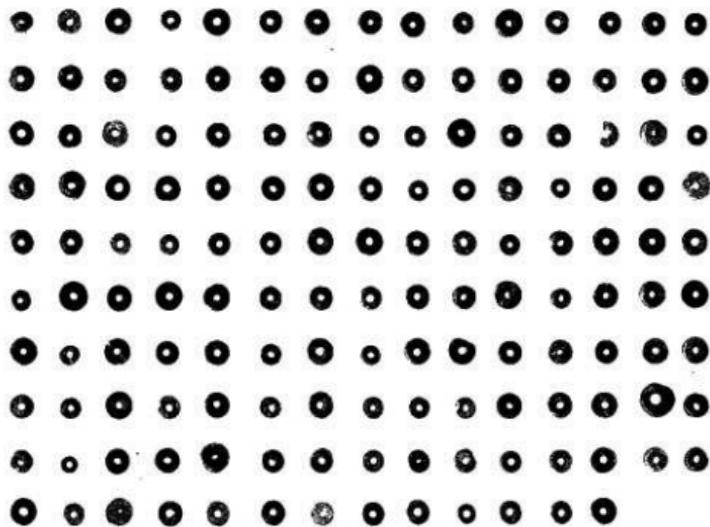
GI-013・GI-015・GI-003A・GI-003B 出土遺物



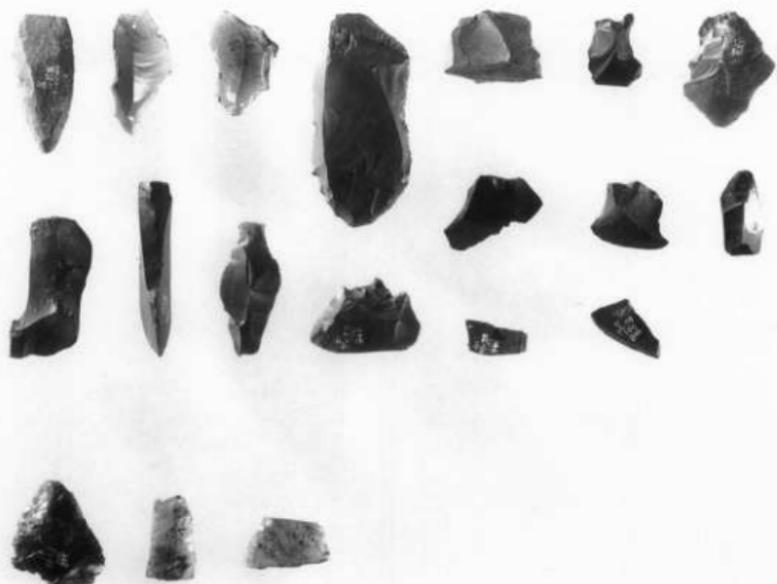
石製模造品（刺形）



石製模造品（円盤形）



白玉



旧石器 (第1ブロック下, 第2ブロック上)



縄文土器・石器

千葉県文化財センター調査報告第179集
大栄栗源干潟線埋蔵文化財調査報告書

平成2年3月25日 印刷

平成2年3月31日 発行

発 行 千 葉 県 土 木 部
千葉市市場町1丁目1番

編 集 財団法人 千葉県文化財センター
千葉市葛城2丁目10番1号

印 刷 有限会社 正 文 社
千葉市都町2丁目5番5号
